
薔薇のマリア
18. 光の中できみが笑う今は遠くて
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


サフィニアは寝台にしがみつくようにしている。
ロム・フォウは何を思っているのか。
トワニングとユリカが、十分に一回、医術式を施す。明らかに彼は生きているのではなくて、
生かされている。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
18.光の中できみが笑う今は遠くて


シャッコーに飛来した邪竜の群れが、岩を落とし始める。当たるかもしれない。しかし、ジョーカーは傲岸不遜に言い放つ。
「己のそばにいれば、あんなもの当たりはせん」
「どういう理屈……!?」


獄の獄（ジェイルネイル）——
贄の園の最奥部、地獄の最辺境。
最悪の危険と、最悪の条件。
それでも、歩みは止めない。

薔薇のマリア

18．光の中できみが笑う今は遠くて

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 18
Light my soul
Ao Jyumonji

First published 2013 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN
design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

18

CONTENTS

C O N T E N T S

A BRAVE HEART OF RED ROSE

18

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Honeymerry
ハニーメリー

脱走機術師。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Fei Yang
飛燕（フェイヤン）

クラン《S＊K（シリアル・キラーズ）》の頭目。



Q'bell-Adrus
きゅー

キューベルアドラス。



SIX
シックス

幽閉者。



Ciro Pancaro
チーロ・パンカロ

エンツォ・パンカロの三男。



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。

and the others

Twaning
トワニング

Beartricea
ベアトリーチェ

Betty
ベティ

Jing Wang
荊王

Rasa
羅叉

and etc.

a scrap 〝グレイバレエブラッド抄〟

A.D.2077

“EDEN-E”/“Eden-P”/“Permanent Haven” in the 1st world

　黄色く濁にごった雲に覆おおいつくされている重苦しい空が、少しだけ青みがかった灰色の海を押し潰つぶそうとしているかのようだ。渦ウズ城キが踏ふみしめている海辺の砂は黒々としていて、砕くだけた白い貝かい殻がらと、赤や紫むらさきや深緑色の海かい藻そう、角かどのとれた硝子ガラス片が入り交じっている。波打ち際ぎわで靴くつを脱ぬごうとしている少女を眺ながめながら、きれいな海だと渦城は思った。硝子片はともかくとして、人工物らしきものがほとんど打ちあげられていない。どうしてこの海は油が浮ういていたり、色とりどりに泡あわ立だっていたりしないのだろう。ひょっとすると、ここらは浄化委員会の縄なわ張ばりなのかもしれない。もしそうだとしたら厄やつ介かいだ。渦城は裸足はだしの少女に近づいていって「だめだ、シヤ。」と声をかけた。少女は振ふり向いて首をかしげた。何を言っているんだろうというよりも、いったい誰だれなんだろうと思っているような顔つきで、この海辺の砂よりも遥はるかに黒い目はどこまでもがらんどうだった。渦城は息をのんで、少女の表情に何らかの変化が訪れるのを待った。待ちくたびれてしまう前に、少女は「なぜ？」と言った。「危ない。」と渦城は答えた。「海の中に何がいるか、何があるかわからない。危険だから、入っちゃだめだ。」丁てい寧ねいにそう説明すると、少女はがっかりしたようにうつむいて、間もなく靴を履はきはじめた。渦城は少女の手をとって支えてやりながら、気づかれないようにそっと小さなため息をついた。渦城は瞬しゅん間かん、恐おそれたのだった。少女が自分のことまで忘れてしまったのではないかと。少女の記き憶おくの巣からは、そうやって少しずつ、いろいろな事こと柄がらがこぼれ落ちていってしまう。今日覚えていることを、明日には忘れているかもしれない。今日あたりまえにできていることが、明日にはできなくなっているかもしれない。かもしれない、じゃない、それは実際に起きたことだし、これからも起こるだろう。少女は草花の名を一つ一つ忘れた。ある日、汚よごれた空に浮かぶ雲を指さして、あれは何だと渦城に尋たずねた。原因などわからない。探さぐりあてるすべもない。とにかく少女は忘れてゆく。きっといつか、すべてを忘れてしまう。そうしたら少女はどうなるのか。渦城には想像もつかない。とにかく、その日がくる前にたどりつきたい。かつて少女はその場所に住んでいたのだという。

灰色の海

鏡張りの部屋で踊おどる女たち（バレエダンサー？）

血のような、あるいは血そのものの赤

少女が記憶にとどめている、しかしそのうち忘れてしまうのだろう手がかりはこの三つしかない。探し歩いて、渦城と少女はこの海を見つけたのだ。靴を履き終えて微笑ほほえむ少女に、渦城は「どうだ、この海は。」と訊きいた。少女は海に視線を投げて目を細め、しばらくのあいだ思案げに黙だまっていた。それから口を開いて「うみ……、」と呟つぶやいた。少女は渦城に顔を向けてまばたきをした。「うみが、どうかしたの。」

「なんでもない。」と渦城はすぐさま首を横に振って言った。笑おうとしたが、唇くちびるの右みぎ端はしと右みぎ頬ほおが引きつっただけだった。胸の底のほうが重く乾かわいている。少女はついに灰色の海のことを忘れてしまったのだ。あと二つの手がかりまで忘れてしまったら、この旅は完全に意味を失うだろう。そのとき自分はどうするのか。渦城は何度となく繰くりかえした自問をこの海に捨ててしまうことにした。少女の手をとった。「こい、シヤ！」

走りだすなり銃じゅう声せいが鳴り響ひびきはじめた。銃じゅう弾だんが砂すな浜はまを、打ちよせる波を叩たたく。どこからの射しゃ撃げきだろう。あっちか。あの岸がん壁ぺきの上からだと砂浜を視界に収めることができそうだ。銃火が見えた。硝しよう煙えんも。撃うち手は二人、いや、三人か。得物はおそらくレバーアクションの猟りよう銃じゆうだ。渦城は岸壁めがけて走る。少女も遅おくれまいとして懸けん命めいについてくる。ごつごつした岸壁に身を寄せると、射撃がやんだ。あの位置からでは狙ねらえなくなったのだろう。何か声が聞こえる。下だ、下に回れ。そんなことを言っている。下りてくるつもりか。やむをえない。渦城は「ここに隠かくれてろ、シヤ。動くな。」と少女に言い聞かせて拳けん銃じゆうを抜ぬいた。岩いわ陰かげから飛びだすともう、渦城は機械のような兵士と化している。渦城は止まらない。敵を感じて敵の挙動を予測して先回りして動く。渦城は考えてなどいない。あえて考えなくても身体からだが勝手に動く。敵はまっすぐ岸壁を下りてくるのではなくて、遠回りしてもっと傾けい斜しやの緩ゆるい斜しや面めんから駆かけ下りてこようとしている。斜面の上に敵てき影えい。渦城は撃つ。二連射。二発目が当たって敵が倒たおれる。もう一人。撃つ。外れた。敵は木々に身を隠しながら斜面を下りてく

る。もう一人はどこだ。渦城は岸壁の上を振り仰あおぐ。いた。三人のうち二人が突とつ撃げき、一人は狙そ撃げきをするために残ったのだ。渦城は岸壁上からこちらに狙いをつけている狙撃手に照準をあわせて、間かん髪はつを容いれず撃つ。三連射。がっ。声が聞こえた。狙撃手はのけぞって倒れた。あと一人。敵は、くそ、と罵ば声せいを発して斜面から撃ってきた。渦城は撃ち返さずに低い姿勢で敵に接近する。銃声が強く鼓こ膜まくを叩く。見える。銃弾が。正確には、敵の銃身、銃口の方向、射撃の動作から、銃弾の軌き道どうが手にとるようにわかる。いつ、どこから弾たまがくるのか。それさえ把は握あくできれば、銃撃など恐るるに足らない。渦城はそのことを知っている。頭で理解しているだけじゃなくて、全身に染しみついている。渦城はだから、微み塵じんもためらわないで敵に肉にく薄はくした。敵の表情が見える距きよ離りで撃った。胸を撃ち抜かれて崩くずれ落ちた敵に歩みより、猟銃を奪うばって「何か言いたいことはあるか。」と尋ねた。敵はまだ息があった。カーキ色の服を着てマスクとゴーグルで顔を隠し、左ひだり腕うでに黄ばんだ腕わん章しようを巻いている。腕章には黒字で、浄じよう化か委員会、と書かれていた。この終わりゆく世界の清せい掃そう員いんにして再建者、善なる意思の体現者、救世主を自任している滑こつ稽けいで傍はた迷めい惑わくな狂きよう信しん者ども。死のうとしている浄化委員はマスクを外して「信じている、」と言った。震ふるえる声で「わたしは、信じている、この世界が、生まれ変わることを、そこでは、わたしたちの、子供たちが、美しい、花園の、駆けまわって、いつまでも、そして……、」と言ったところで、彼女は事切れたようだった。渦城は彼女の装備を探って銃弾と水、携けい帯たい食料を頂ちよう戴だいし、少女のところに戻もどった。渦城が「行こう。」と声をかけると、少女は「どこへ？」と訊いた。渦城は答えることができずに少女の手を引いて歩きだした。なんにせよ、渦城と少女は灰色の海を見つけた。鏡張りの部屋を探そう。少女の母親はバレエダンサーなのかもしれない。今はまだ血のことは考えないことにしよう。この海のそばに街があれば、そこが目的地かもしれない。二人は斜面から岸壁に登った。浄化委員の屍しかばねは無視した。岸壁の上からは灰色の海と、そしてその逆方向には古い、朽くちかけたコンクリートと鉄筋の街並みが見えた。二人は街を目指した。道はアスファルトが砂利じやりみたいになっていて、建物はどれも壊こわれていた。あちこちに立っている金属のポールは枯かれ木のようで、折れ曲がったり、倒れていたりするものもたくさんあった。渦城は浄化委員会がこの街を根城にしているのではないかと思い警けい戒かいしていたのだが、人の気配はない。どうやら、浄化委員会の巡じゆん回かいルートには入っ

ているものの、拠きよ点てんではないらしい。だとしたら、ここには何もないのだ。少なくとも、人は住んでいないだろう。草木が生おい茂しげっていても、口に入れられる作物が育つ環かん境きようではないのかもしれない。それでも渦城は鏡張りの部屋を探し求めた。骨組みしか残っていない建物はどうしようもないが、壁かべのある建物には入ってみた。鏡張りの部屋、もしくは鏡張りの部屋の跡あとや残ざん骸がいらしきものはなかった。鏡の欠片かけらさえ見あたらなかった。その代わりにあちこちで白い粉を目にした。それは浄化委員会が汚お染せん地帯に撒さん布ぷする薬やく剤ざいで、ＰＣＥと呼ばれている。浄化委員はＰＣＥの作用によって次し第だいに環境が正常化されると信じているらしいが、実際はただの毒薬でしかない。人どころか鼠ねずみも、一匹ぴきの虫すらいない死の街を歩きまわる二人の上に、夕ゆう闇やみが迫せまってきた。大量のＰＣＥがぶちまけられている廃はい墟きよで夜は越こせない。海では浄化委員を殺した。二人は海とは反対方向の山へと向かうことにした。暗い森では夜走りや暗黒鳥、闇虫といった獣けものたちを恐れなければならないが、いかれた人間どもよりも敵としてはましだ。二人はあたりが闇に閉ざされて何も見えなくなるまで歩いて、それから野宿の準備をした。少女が寝ね袋ぶくろの中で眠ねむってしまうと、渦城はその傍かたわらで膝ひざを抱かかえて夜の匂においを嗅かぎ、森の音に耳を傾かたむけた。静かな森だった。あまりにも静かすぎた。ここは汚れた森なのか。うとうとして、腰こしを下ろしている土がぐずぐずと腐くさり、みるみるうちに身体が沈しずみこんで溺おぼれる夢を見た。渦城は窒ちつ息そくする寸前に覚かく醒せいし、少女の様子を確かめた。無事だった。安あん堵どして夜明けまで起きていようと心に決めたのに、気がつくとまた寝ねていた。目覚めると薄うす明あかるかった。渦城は「シヤ？」と少女の名を呼んだ。寝袋が空っぽになっていた。どこへ行ったのか。きっと近くにいるはずだ。渦城は寝袋をそのままにして周囲を歩いた。呼びかけて返事を求めた。なしのつぶてだった。まさか、寝ている間に夜走りか暗黒鳥に連れ去られたのか。そんな形けい跡せきはなかった。それに、すぐ隣となりで少女が獣に襲おそわれたら、いくらなんでも目が覚める。少女はたぶんこっそり起きだして、自分の意思でどこかへ行ったのだ。でも、なぜ？　いったい何のために？　わからない。渦城は頭を冷やして足跡をたどってみることにした。もともと渦城は人殺しに特化した兵士だからこんな芸当は得意じゃないが、注意深く慎しん重ちように、根気強く探すと、少女のものらしい足跡を発見することができた。一度見つけてしまえば、あとは追いかけるだけだ。見失ったらまた探せばいい。渦城は這はいつくばうようにしてじりじりと進んだ。太陽が子

午線を通過するころ、少女は自分のもとから逃にげだしたのではないかという疑いが頭をもたげた。打ち消して渦城は少女を追跡した。日が傾きはじめた。森が途と切ぎれて道に出た。コンクリートで舗ほ装そうされている。表面はひび割れているが、しっかりした道路だ。こんな山奥にどうして。足跡は消えた。少女は道路を歩いていったのかもしれない。意を決して、渦城は道路を進むことにした。日にち没ぼつの直前に終着点が見えた。行く手の山やま肌はだに半円形の穴があいている。トンネルだ。道路はそのトンネルの中へとつづいている。トンネルの手前に大型の頑がん丈じようそうなバスが一台停とまっていた。錆さびついた車体に埃ほこりが積もって、ウインドウは曇くもり、タイヤはぺしゃんこに潰れていて、もう動きそうにない。トンネルの中にもバスが連なっている。とくに目を凝こらさなくても、渦城はそれらのバスを視し認にんすることができた。明かりがついているからだ。トンネルの天てん井じようにオレンジ色の照明が設置されていて、ところどころ欠けるように死んでいるが、半分ほどは生きている。渦城は声を張りあげた。
「シヤ！」「いるのか、シヤ！」「シヤ！」「どこだ、シヤ！」

　何度叫さけんでも渦城の声がむなしく反はん響きようするだけで、少女の返事はない。トンネルの中に少女がいるのなら、何か一言くらい返ってくるはずだ。ここにはいないのか。あるいは、少女は渦城のことを忘れてしまったのかもしれない。寝て起きると、すぐそばに見知らぬ男がいたので、危険を感じて逃げた。そしてトンネルに身を隠し、息をひそめている。もしそうだとしたら、渦城がいくら声をかけても少女は答えないだろう。少女は隠れているのだ。捜さがしたって無む駄だだ。渦城の足が重くなった。引き返そう。少女のことは忘れよう。もともと義務でも責任でもない、誰かに頼たのまれたわけでもない、渦城にはただ生きる以外に目的らしい目的はないから、たまたま知りあったいずれ何もかも忘れてしまう少女を故郷に送り届けるのも悪くないと考えた。我ながら酔すい狂きようにもほどがある。もうやめよう。これで終わりだ。トンネルの中を捜そう索さくして、見つからなかったらおしまいにしよう。これはけじめだ。そう決めてしまうと、渦城の足どりはいくぶん軽くなった。周りを観察したり物を考えたりする余よ裕ゆうも出てきた。

　長いトンネルだ。バスは何台あるのか。どのバスもドアがちゃんと閉まっている。乗り捨てられたというよりも、ここが目的地で、バスはここで乗客を降ろした。そんなふうに見える。西せい暦れき二〇五二年十月九日、すべてが一度終わった日の前に、バスはこの

トンネルに到とう着ちやくしたはずだ。何のために？　ただのトンネルじゃないのか。違ちがう。ただのトンネルなら照明が生きているわけがない。なぜ生きている？　電気があるということだ。このトンネルには独立した発電設備がある。

　渦城は一台のバスのドアを開けた。車内に入ってみたが、やはり誰も乗っていない。車外に出て、オレンジ色の光を浴びながらトンネルを歩いた。何だ、ここは。何の跡なのだろう。それとも跡じゃないのか。ここではまだ何かが行われているのか。だから電気が生きているのか。渦城はふたたび「シヤ！」と少女の名を呼んだ。答えてほしい。本音を言えば、少女でなくてもいい、誰だれでもよかった。ここは気味が悪い。いや、気持ち悪い、と言うべきかもしれない。何か不快だ。耐たえられない。たとえば、崖がけから落ちようとしている、縁へりにつかまっていて、この指に力が入らなくなったら落ちてしまう、そんな状じよう況きようにある渦城を、崖の上でにやにや笑いながら何者かが眺ながめている。誰かはわからないが、大勢が。バスに乗っていたのはそういう連中だ。根拠はないが、そんなふうに思えてしょうがない。ひとりでに息が浅く、狭せまくなってきた。足の運びが速くなる。このトンネルはどこに繋つながっているのか。果てがあるのなら、そこまで行きたい。行くしかない。バスの乗客たちはそこにいるのか。まだ生きているのか。そいつらが渦城や浄化委員たちのような生存者なのだとしても、違う。渦城たちは取り残され、見捨てられて、運よく生き残っただけだ。バスの乗客たちはおそらく違う。

　バスの列が途絶えた。トンネルはまだつづいている。天井の照明がなくなった。行く手に光がある。オレンジ色じゃない。赤い光だ。点てん滅めつしている。そこに少女がいた。渦城は少女の名を叫んだ。少女はこっちを見た。遠いので顔つきまではわからない。でも、少女が駆けてくる。渦城も走った。暗闇の中で少女は渦城にしがみつき、渦城は少女を抱だきすくめた。「ごめんなさい、」と少女は涙なみだ声ごえで言った。「ごめんなさい、わたし、」「いいんだ。」と渦城は少女の髪かみの分け目に唇を押しつけるようにして囁ささやいた。「謝らなくていい。無事だった、だからそれでいい。」

　少女が泣き止やむまで、渦城はそのままでいた。それから歩きだした。こんな得体の知れないトンネルからは早く出るべきなのかもしれない。そう思いはしたが、見み極きわめたいという欲求にあらがえなかった。ここはいったい何なのか。答えがあるのなら知りた

い。二人は程ほどなくトンネルの果てにたどりついた。そこには巨きよ大だいな金属の扉とびらがあって、その一部だけが点滅する赤い小さな照明に照らされていた。扉は円く、分厚そうで、どうやっても破は壊かいできそうにないし、開きそうにもない。それでいて、扉以外の何物でもないように見える。扉の真ん中には《Ｅ４》と大きく刻まれていて、その《Ｅ４》を囲むようにして塗と料りようで英文が書かれていた。

International Crisis Management Organization Permanent Haven EDEN

アルファベットくらいなら渦城もわかるが、英語は知らない。なんとなく英文だろうと見当をつけたが、違うかもしれない。「これは何だ。」と呟つぶやきながら渦城は扉に手をふれた。その瞬しゅん間かん、何か音がした。何の音かは不明だが、どこかで何かが動いた。生き物というよりは機械の作動音のようだった。渦城は少女を抱だきよせてあとずさりした。振しん動どう。揺ゆれ動いている。地面じゃない。扉だ。扉の一部が、ちょうど《Ｅ４》の真下の部分が、向こう側に吸いこまれるようにしてへこんでゆく。そう長い時間はかからなかった。扉に縦に長い長方形の穴が口をあけた。少女が渦城にすがりついて「はいる？」と訊きいた。渦城は自分の判断に確信を持てないままうなずいて、穴に近づいていった。もし閉まりだしたらすぐに逃げればいい。そんな言い訳のようなことを考えながら穴に足を踏ふみ入れると、明かりがついた。青白い照明で、驚おどろいて目を細めるほど明るい。床ゆかも壁も天井も滑なめらかな通路を通り抜ぬけ、いくらか広い空間に出たと思ったら、床に赤く光る矢印がずらっと表示された。どうやら矢印の示す方向に進めということらしい。二人を何が、どこへ導こうとしているのか。渦城が「こわいか。」と尋たずねると、少女は首を横に振ふってみせた。おれはこわい、と胸のうちで言いながら、渦城は矢印を一つ一つ踏んでいった。でも、ここは生きている。電源がある。表にバスがあった。人間がいるかもしれない。噂うわさには聞いたことがある。渦城たちのように見捨てられた者たちもいれば、逃げ場所を与あたえられた者たちもいるらしいと。ここがそれなのか。もしそうだったとしても、だから何だというのか。すでに何もかも一度終わった。やりなおすことはできない。取り消すことも。あの日、すべてを失った者は何も取り返せない。少女のように現在進行形で失いつつある者だっている。どうにもならない。何も変わらない。浄化委員会。お笑い種だ。我々が浄化する必要などない。世界は浄化された。生き残った人間は浄化された世界にかろうじてへば

りついているだけだ。なんとか息をして、明日あしたを夢見るゆとりもなく今日を生きている。我々は獣と同じだ。かつては多少違ったみたいだが、今は同じか、ぐだぐだと不平不満を並べ立てる愚おろかさを差し引けば、獣に劣おとる。おれを突つき動かしているものは好こう奇き心しんなのか、と渦城は考える。それもあるだろう。ただ、それだけじゃないような気がする。何度か角を曲がったあとで渦城は振り返る。踏んできたはずの矢印がない。消えてしまったのか。少女がやや不安そうに「どうしたの？」と言う。「どうもしない、」と渦城は即そく座ざに答える、「大丈夫だ。」と。渦城は矢印を追うことにする。矢印を踏んで、通路を進む、ペースを乱さずに進むと、とうとう突きあたる。壁。行き止まりだ。渦城は慌あわてて踵きびすを返そうとして、思いとどまる。壁にふれる。開いた。渦城は目を瞠みはった。鏡張りの部屋だ。いや、違う。そうじゃない。鏡じゃなくて、硝子ガラスだ。一面が硝子張りになっていて、そこに渦城と少女の姿が映っている。薄暗い部屋だ。二人は硝子に歩みよる。硝子の向こうも部屋らしい。かなり広そうだ。その部屋には何か棚たなのようなものが並んでいる。すごい数だ。棚自体ではなくて、棚に載のっている横向きにした筒つつのようなものが、ぼんやりとエメラルドグリーンの光を放っている。棚は何段で、一つの段にその筒がいくつ並べられているのか。とても数えられそうにない。あの筒は何なのか。上半分が透とう明めいで、下半分は不透明だ。中身は液体なのか。それだけじゃない。少女が硝子に人差し指を突きつけて「ひとがいる、」と言った。「あのなかに、ひとが。」と。

Calamitage 003 "deadline"

二巡月十八番日　城塞都市シャッコー

「──それでね……」と話をつづけようとして、言葉が見つからなくなり、顔が引きつった。だって寒いんだよ、この部屋。左手でこわばった頬ほおをもみほぐしながら、右手は彼の手の甲こうをさすりつづけている。乾かわいて、今にもひび割れ、崩くずれてしまいそうな手を。さわらないほうがいいんじゃないのか。そんなふうに思わなくもないけど、ちょっとでもいいからふれていないと不安なんだ。さわっていないとなくなってしまいそうな気がして、こわいんだ。

　サフィニアは彼が身を横たえている寝しん台だいにしがみつくようにしている。寝台のそばに置いた椅い子すに腰かけて目を伏ふせ、ロム・フォウは何を思っているのか。彼女の足あし許もとに座っているアルファがときおり大きな耳を動かす。トワニングとユリカの施せ式しきは一時間おきどころじゃない。数分ごとに彼の容態を確かめて、十分に一回は医術式を施ほどこしている。彼の呼吸は安定しているが、不ふ穏おんなまでに穏おだやかすぎる。明らかに彼は生きているのではなくて、生かされている。そんなことは認めたくないが、認めるしかない。トワニングとユリカが手当てをやめれば、彼はそのうち息をしなくなるだろう。

　せめて目を覚ましてくれたら、と思う。目を開けて、僕を見て、声を聞かせてくれなくてもいいから、軽くでいい、一度でいいから、うなずいてほしい。そうしてほしくて、ずっと話しかけている。離はなればなれだった間の出来事を思いつくままに話して聞かせていれば、何か反応があるんじゃないかって。きみがいきなり瞼まぶたを開けて「む」とかなんとか変な声を出して、「どうした」とか「寝ねてないぞ」とか、そんなことを言ってくれるんじゃないかって。その瞬間を待って、待ち焦こがれて、待ちくたびれてしまったわけじゃない。

「寒いや」と呟いて、他ほかにどうしようもなくて、ちょっとだけ笑ってみた。そうしたらサフィニアがぼんやりと顔を上げて、「マリア……」と言った。「ここには……みんな、いるし……少し休んだらどう……？」

「大丈夫だよ、僕は」マリアローズは相変わらず彼の手の甲をいじりながら、もう一回、そうするしかなくてサフィニアに微笑ほほえみかけた。「疲つかれてるわけじゃないんだ。なんていうかさ、ただ、ほんとに……少し、寒いだけだから」

「それでは、風ふ呂ろにでも入ってきてはどうだ」トワニングがマリアローズの肩かたに大きな手を置いた。「トマトには拙せつ僧そうらがついておる。心配は無用だ」

「心配してるわけじゃないんだよ。髭ひげとユリカのことは、もちろん信しん頼らいしてるし。そうじゃなくて……」マリアローズは首を横に振った。「──ごめん。ありがと。うん。そうだね。お風呂貸してもらって、仮か眠みんとってくる」

　ユリカが何も言わずに背中を撫なでてくれた。ロム・フォウはちらりとマリアローズを見て、かすかに口許をゆるめた。マリアローズは部屋から出てすぐ、懐かい中ちゆう時計で時間を確かめた。二十二時を回ったところだった。廊ろう下かを見まわしてクルルを捜さがしてみたが、いないようだ。どうしてか、クルルはあの部屋に入ろうとしない。結果、あの部屋にいることが多いマリアローズとはすれ違ちがってばかりだ。考えてみると、たぶん丸一日以上、姿を見ていない。

「どっかに行っちゃったのかな……」

　衛兵に挨あい拶さつをして黒旗がはためく司令部をあとにすると、途と端たんに冷たい雪風が吹ふきつけてきた。マリアローズはコートの衿えりをかきあわせて、あてがわれた宿舎に向かおうとした。まさにそのときだった。けたたましく鐘かねが鳴りはじめて、「敵てき襲しゆう！」「敵襲！」と叫さけぶ声が聞こえてきた。

「まあ、ね……」マリアローズはため息をついて駆かけだした。間が悪いといえばそうなのかもしれないが、えてして事態はこういうタイミングで動くものだ。いちいち苛いらついたり気き鬱うつになったりしていたら生きてゆけない。何がなんでも生きてゆかないといけないのだから、パパッと頭を切りかえて対処するしかない。

　シャッコーはツァール峡きよう谷こく北側の斜しや面めんに築かれた階層状の城じよう塞さい都市だ。街のある北側斜面と南側斜面の間は、峡谷底部だと三十メーテルほどしかない。その約三十メーテルの通路を、四本の橋──と称しようされてはいるが、実質的には

四枚の壁かべ。もちろん出入りできないと困るので、門もん扉ぴを備えている──で封ふう鎖さして、モトローリィの地に侵しん攻こうしようとする悪あく魔まどもを防ぐ恰かつ好こうになっている。もしシャッコーが抜かれたら、一年の半分が冬という厳しい気象条件が障害になるとしても、モトローリィは早晩、悪魔とその同盟軍によって蹂じゆう躙りんされてしまうだろう。シャッコーは間違いなくモトローリィ防衛の要かなめだ。その最重要拠きよ点てんを、モトローリィの軍隊じゃなくて、ジャン・ジャック・ド・ジョーカー率いるジョーカー軍が占せん拠きよし、防衛にあたっている。
ジョーカー軍には、もともとシャッコーに配備されていた正規軍の兵士たちに加えて、モトローリィ軍最大の武力集団である武士団まで軍ぐん籍せきを離り脱だつして合流しているとはいえ、いささか奇き妙みような状じよう況きようだ。それでいて現在に至るまで鉄てつ壁ぺきの守りを誇ほこっているあたりは、ジョーカーの手しゆ腕わんのなせるわざなのか。

　マリアローズは個人的にどうしても好きになれないが、たしかに異能の男なのだろう。ジョーカーは月の女神のようなクローディアを伴ともなって、すでに峡谷底を見おろす断だん崖がい城壁上で指揮を執とっていた。といっても、黄金色の霊れい刀とう〝大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウ〟の鞘さや頭がしらを城壁に突き立ててその柄つか頭がしらに手を置き、傲ごう然ぜんと胸をそびやかして突っ立っているだけだ。この己おれが小こ揺ゆるぎもせずに立っていれば我が軍は勝つのだ、と言わんばかりの態度で、なんとも小こ憎にくたらしい。しかも事実、ジョーカーがそこにいるだけで、なんとなく勝てそうな気がする。少なくとも負けはすまいという雰ふん囲い気きが自然と漂ただようのだから、始末に負えない。

「ジョーカー！」とマリアローズが声をかけると、ジョーカーは目だけ動かしてこっちを一いち瞥べつし、ふん、と鼻を鳴らした。
「あの阿あ呆ほうを看み取とってやりたいのなら、わざわざ出てこなくてもよいのだぞ」

　なんでいちいち憎まれ口をたたかないと気がすまないのかなこの男は。ほんっとに頭にきてしょうがないけど、いちいち相手にすると余計に皮肉や悪態に拍はく車しやをかけることになる。ぐっとこらえて「状況は」と尋ねると、ジョーカーは見ればわかるだろうとばかりに顎あごを振って夜空を示してみせた。今夜は雪がちらついているが、晴れている。半月が浮うかぶ星空を横切る影かげ、影、影。邪じや竜りゆうどもだ──と思ったら、第四層のあたりで轟ごう

音おんが響ひびいた。立てつづけに二度、三度。邪竜が抱かかえて飛んできた岩がん塊かいを放ったのだ。断崖城壁上に集つどいつつある兵士たちが怒ど号ごうをあげた。シャッコーには超メガ強カタ弩パルト、高精度ハイパー投石機スリングなどの対空兵器も備え付けられているが、昼間ならともかく夜は命中精度が低すぎて、あまりあてにならない。邪竜どもの空襲、投石攻こう撃げきは、とりあえず耐たえるしかないのだ。わかっていても、街を破は壊かいされて平然としてはいられない。

「どうしようもないことではあるんだけどさ……これって地味にじり貧じゃない？」

「坑こう道どう都市建設の計画は進めている」ジョーカーはわずかに首をかたむけた。「問題はないでもないがな」

「どういう問題？」と訊きいてみたが、ジョーカーは答えない。何か話せない事情でもあるのだろうか。だったらそう言えばいいのに。マリアローズはクローディアの横顔を眺ながめた。こんな男とよくずっと一いつ緒しよにいられるよね。まあ、もしかしたら、クローディアにはやさしいのかもしれないけど。それにしたってさ。

「マァーリアローズィーッ！　ジョッカーッ……！」

　声が飛んできた。飛フエイ燕ヤンだ。ものすごい速度で走ってくる。ピンパーネルとハニーメリー、きゅーも一緒だ。それから、あの禿はげ頭はチーロ・パンカロか。間もなくマリアローズのそばで急停止した飛燕は、天てん真しん爛らん漫まんな子供みたいに目を輝かがやかせていた。

「よォ！　敵だなァ！　テキテキテキッ！　きたんじゃねェーの敵ッ！　オレの出番かよつーかそれっかねェーよなどんな敵だよドンとこいよきちまえよ敵カモーンッ！」

「……うん。そうだね。いるよ。敵は。ほら」マリアローズは空を指さした。「あのへんにいっぱい」

「ンだよォ。カトンボかよォ。ンなのはオレの敵じゃねェーんだよォ。雑ざ魚こじゃんよォ」

「敵かあ!?」とチーロが口を挟はさむだけじゃなくて禿げ頭まで突っこんできた。「な、ジョーカーっち、敵だよな!?　オレどうす

りゃいい!?　どいつぶっ殺す!?　何匹ひきぶっ殺す!?　めんどくせえから全殺しにしてもいい!?　いいよな、な、な、な、な、なッ!?」

　飛燕が横目でチーロをにらみつけた。「テメェー、なんッかうっせェーな」

「ああッ!?　なんだてめえ、このオレに喧けん嘩か売ってやがんのか、おお!?」

「チーロ坊ぼつちゃん」短たん髪ぱつで長身のカルロ・ボッシが後ろからチーロを制した。「頼たのみますからよしてください。そんなことやってる場合じゃねえンです」

「んなこと言ったってよお。先に因いん縁ねんふっかけてきやがったのはこの小こ猿ざるじゃねえかっ」

「カッチーン」飛燕は、にたぁ……と笑った。「小猿っていーやがったな？　このオレ様を小猿呼ばわりして天てん寿じゆを全うできるたァ、まさか思ってやしねェーだろォな？」

「だって小猿じゃねえか。小猿を小猿って呼んで何が悪いんだよ、コ・ザ・ルッ！」

「よォーし、殺すッ！　マジ殺すッ！　指一本で殺したるッ！　殺ォーすッ！」

「やってみやがれ、やれるもんならよ！　てめえは強つええっぽいけど、オレは頑がん丈じようだぜ!?」

「馬ば鹿か・ばっかりdeath……」とピンパーネルが呆あきれ顔というより軽けい蔑べつ顔で呟つぶやくと、ハニーメリーがにこにこ笑いながら「仲よく相あい討うちになっちゃえばいいのにね」と言って、きゅーが世にも愛らしく「くう」とうなずいてみせた。

「てゆうかさ」マリアローズはきゅーのもふもふした真っ白い毛を撫でながら、飛燕とチーロを交こう互ごに見た。「きみたちって、見た目はぜんぜん似てないけど、かぶってるよね。かなりかぶりまくりだよね。キャラが」

「なッ──」「ぐえっ……？」飛燕とチーロは顔を見あわせて、すぐに二人ともそっぽを向いた。お互たがいかなりショックを受けてい

るようだ。

「主様マスター」とクローディアが小声でジョーカーに注意をうながした。ジョーカーは「ああ」と短く答えただけで動かない。何だろう。何か起こったのか。「きゅう！」きゅーが上空を振ふり仰あおいで、ピンパーネルが「きまス……！」と体勢を少し低くした。マリアローズはきゅーの視線の先に目を向けた。邪竜だ。徐じよ々じよに高度を落として、岩を投げようとしている。こっちだ。ここを狙ねらっている。馬鹿飛燕が「ハヒャッ」となぜかやたらと楽しそうに笑い、「ぬおっ！」と叫んだチーロがジョーカーに「うろたえるな」と一いつ喝かつされた。逃にげだそうとしていたマリアローズもつい足を止めたが、いやそりゃあうろたえるのはよくないかもしれないけど、さっさと逃げたほうがいいんじゃないのと思わなくもなかった。だって、邪竜が投石しようとしているわけだし。ここでじっとしていたら、当たるかもしれないし。そうしたら、やっぱり死ぬかもだし。そこのところはどうなのと尋たずねるまでもなく、ジョーカーは傲ごう岸がん不ふ遜そんの体ていでマリアローズの疑問に答えてくれた。

「己おれのそばにいれば、あんなもの当たりはせん」

「どういう理り屈くつ……⁉」

　その問いへの答えはなかった。というより、もう邪竜が岩を放ほうっていた。くる。岩が。飛んでくる。きちゃう。みるみるうちに大きくなる。というか近づいてくる。やばい。どうする。逃げる？　逃げない？　ものすごく難しい問題だが、誰だれも動こうとしない。みんな動けないだけかもしれない。どっちにしても、自分一人だけ動くのはかなり度胸がいる。マリアローズはきゅーにしがみついた。目をつぶって、ギャーと悲鳴をあげそうになったけれど、それはどうにか抑おさえた。風を感じた。背後で音と衝しよう撃げき。僕……生きてる？　目を開けて見まわすと、全員無事だった。「……こわっ」とマリアローズは呟いて、慌あわてて口を押さえた。こわ。こわっ。こわぁーっ。今一いつ瞬しゆん、ジョーカーすごい、とか思っちゃった、こわぁーっ。きっと人はこういうことをきっかけにして道を違たがえるのだ。ただ運がよかっただけなのかもしれないのに、そうに決まっているのに、何この人マジですごいやばすぎるとか思いこんで英えい雄ゆう視しちゃったり崇すう拝はいしちゃったりするのだ。ジョーカーみたいな男は、そういう心理につけこんで他人を手足みたいに使ったりするのだ、たぶん。

「オーオーオォー」飛燕は手で庇ひさしを作って舌なめずりした。「見ろよ見ろよ見ろよさっきの邪竜ッ！　何か乗っちまってんぞウヒャヒャヒャッ！　敵じゃねェーのかアレッ！」

「グホーッ！」チーロは鉄球状の義手で禿とく頭とうをガシガシ叩たたいた。いいけど、痛くないのかな、あれ。叩くたびに鼻血とか出てるし、痛いと思うんだけど。「きたきたきたっ！　ついにきちまったかよグハハハハァーッ！　オレの獲え物ものォーッ！」

「バッカテメェー、あンなんオレの獲物に決まってんだろボケ、ヌッ殺すぞォラ？」

「あんだとこらぁっ！　あれはオレの獲物だよ、そういうことはオレが生まれる前から決まってやがんだって！　ああいうやつはオレの獲物だってのはな！」

「飛んでいきマス！」ピンパーネルの言うとおりだった。何かを、おそらく悪魔を乗せた邪竜は、何度か旋せん回かいしてから第三層か第四層のほうへと向かう。「オッシャッ！」と飛燕が駆けだして、チーロも追いかけようとしたが、キキキッと止まった。「ジョジョジョジョジョーカーっち！　オレ行ってもいいか⁉　あいつぶっ倒たおしに！　なんかヤバげっぽい敵っぽいし！　い、いいよな⁉　いいって言ってくれ頼む、お願い、ございますっ！」

　ジョーカーは冷たくチーロを一瞥してから、なぜかマリアローズを見て、それからまたチーロに顔を向けた。「よかろう。あとはマリアローズ、貴様もきゅーとともに行け」

「えっ」マリアローズはとっさに抗こう議ぎしかけて頭を掻かいた。物わかりのいい自分が心底嫌きらいだ。「……わかったよ。ピンプ、ハニー、クローディア、ここはお願い！」

「はい・わかりまシタ」「あたしとダーリンに任せといて！」「……ダーりん……」「いやだった？　一回言ってみたかったの」「……いえ・べつニ……」

　クローディアは目礼してくれただけだったが、ハニーメリーにダーリンなんて呼び方をされてどぎまぎしているピンパーネルはちょっとおもしろかった。本当に、あの子にはかなわない。たくさんのものを失って、ずっと絶望の泥どろ沼ぬまで足あ掻がいてきたはずなのに、前向きで、明るくて、強くて。それから、とてもきれ

いだ。掛かけ値なしに。ピンパーネルとあの子との関係はいまいちというか、はっきりとはわからないけれど、二人とも子供じゃない、いい大人なわけだし、それ相応に親密な仲だということは間違いないと思う。それがなんだか、変な話かもしれないが、マリアローズはうれしいのだ。トマトクンがあの有様だから、のんきに喜んでなんかいられない、でも、ピンパーネルとあの子とのことは、この世に運命とか巡めぐりあわせとかを司つかさどる者がもしいるなら、心の底から感謝したい。

「きゅー！　悪いけど、乗せて！」「くう！」きゅーは返事をするなりマリアローズを抱えあげ、自分の背に乗っけて全力疾しつ走そうした。すぐにチーロを追い越こして、飛燕の後ろ姿が見えてきた。「くっそ！　ずりいぞ赤毛ちゃん！」とかなんとかチーロが言っている。ちゃん付けは微び妙みように許せないが、負け犬の遠とお吠ぼえだしまあいい。階段を駆かけあがって最下層から第四層へ。飛燕がちらっと振り返って「イヨッシ！　きゅーすけ競走だッ！」と言うと急加速した。呆れるしかない。もっと速く走れるのか。とはいえきゅーだって負けていない。純白のもふ毛が逆立って黄金色に輝きだす。きゅーにつかまっているマリアローズにしてみたら光の中にいるようなもので、きらきらぴかぴかすっごくきれいだし、めちゃくちゃ速い。きゅーと飛燕は抜ぬきつ抜かれつの大接戦を演じながらシャッコー第四層を駆け抜ける。第三層へと上がる階段の手前あたりだった。大きな生き物が建物を突つき崩くずしたり削けずり砕くだいたりしている。邪竜だ。大暴れしまくっている。もっとも、防衛側も手をこまねいて見ているわけじゃない。白い毛皮のコートを身につけた一団が邪竜を遠巻きにし、牽けん制せいしつつ、付近の住民を避ひ難なんさせているようだ。武士団か。彼らはジョーカーの指揮下にありながら、棟とう梁りようウィリアム・タイガーボーンの裁量で動く自由をある程度までは与あたえられている。

「見ィーっけ……ッ！」飛燕がカカカッと笑いながら邪竜めがけて突っ走ってゆく。きゅーも飛燕につづこうとしたが、マリアローズは首筋の毛を引っぱって「待って！」と押しとどめた。「──邪竜に乗ってたやつがいない！　どこに……」

「ドゥゥゥゥゥゥラアアアァァァァァァァ……ッ！」飛燕の飛び蹴げりが邪じや竜りゆうの横っ面に炸さく裂れつした。邪竜の頭がガクンとなるような蹴りをぶっ放してしまえるでたらめな人間は、世界広しといえどもたぶん飛燕とトワニングとユリカくらいのものだ

ろう。飛燕はそのまま邪竜の首に両りよう脚あしを回してしがみついた。振りあげた拳こぶしで、きっと頭をかち割るつもりだ。そうなる寸前に、たぶん近くの建物の屋根からだろう、飛燕に躍おどりかかる者がいた。人、なのか。違ちがう。そんなわけがない。たぶん悪あく魔まだ。そいつは手に細身の剣けんのような物を持っている。剣だと思うが、どういうわけか炎ほのおをまとっている。正直、えっと思ったし、実際、「……え？」と声をもらしてしまった。あれは。あの剣は。まさか。嘘うそだ。でも、この目がしっかりと捉とらえている。悪魔は空中でステップを踏ふむような不思議な身のこなしで飛燕に襲おそいかかり、その剣を突きだした。間一髪だった。「──ツオッ……!?」飛燕は邪竜の首から脚をほどいて、なんとか剣をよけた。「あいつだ！」マリアローズはきゅーの背から飛び降りた。「邪竜に乗ってたやつは！　きゅー、あいつを！」「くう！」きゅーは消えては現れるような独特の歩法で悪魔に迫せまる。飛燕も一度は地面に落下したが、すぐに起きあがった。
「ちったァ楽しませてくれそォーな相手じゃねェーかッ……！」

「いらないんだよ、楽しむとか！」マリアローズは吐はき捨てながら建物の陰かげに移動した。飛燕ときゅーの足を引っぱりたくない。勇ゆう猛もう果か敢かんをもって鳴る武士団でさえ、あの悪魔が相手ではおそらく力不足だ。というか、邪竜なら本来、武士団でもなんとかなる。それなのに武士団が邪竜を片づけられなかったのは、あの悪魔がいたせいだろう。「──武士団は邪竜に集中して！」越えつ権けん行こう為い気味かもしれないと自覚しつつ、マリアローズは指示を飛ばした。「悪魔は飛燕ときゅーに任せていい……！」



「ツオォォォラァッッ！」「ＳＹＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！」飛燕ときゅーが左右から悪魔を挟きよう撃げきする。悪魔は、でも、飛燕ときゅーのパンチを、キックを、ゆらりゆらりとかわしてしまう。やばい。あの悪魔、ほんとにできる。てゆうか──マジ？　前に、といってもかなり前だが、以前会ったときよりずいぶん厚着をしているけれど、やっぱり見覚えがある。燃える細身の剣に、あの

いかにも貴族貴族した恰かつ好こう。武士団が持っている照明器具の光に照らされて、白いというよりも青ざめている相そう貌ぼう。まあ美男子といえば美男子だが、長くのばした眉毛が上に向いて弧を描いているのは、いったいどんな冗談なのか。

「もし」といきなり声をかけられて、びっくりした。声が近かったからだ。見ると、すぐそばに白い毛皮のコートを着た壮そう年ねんの偉い丈じよう夫ふが立っていた。いつからそこにいたのか。ぜんぜん気配がしなかった。マリアローズは思わず「は、はい？」とわりあい丁てい寧ねいに返事をしてしまって、ちょっと恥はずかしかったけれどしょうがない、何かそうさせる雰ふん囲い気きがある男なのだ。それが誰かはわかった。口をきいたことはないものの、有名人だ。遠くから顔を見て、へえあの人がそうなんだというくらいの認にん識しきはあった。ウィリアム・タイガーボーン。名にし負う武士団棟梁の、晴れ渡わたった大空の下に悠ゆう々ゆうとそびえ広がる峻しゆん厳げんな山脈のような面おも差ざしは、明らかに五十かそこらの齢よわいを重ねている男のそれなのに、どういうわけか若々しさを感じさせる。やたらと清せい涼りようなのだ。青い瞳ひとみにも、金色というよりは白に近い頭とう髪はつにも、新しん鮮せんで清潔な生気がみなぎっている。百九十サンチに届こうという大男で、これ以上ないくらい逞たくましい身体からだつきをしているのに、軍人、将しよう帥すいよりも文人を連想させるのはなぜだろう。とにかく見るからに傑けつ物ぶつだ。どこからどう見ても小物以外の何物でもないマリアローズとしては、ひたすら恐きよう縮しゆくするしかない。

「え、と……な、何でしょう……か？」

「其そ処こ許もとはジョーカーどのの同志であろう。マリアローズと申したか。ジョーカーどのより、其処許の言げんは傾けい聴ちようすべしと言い含ふくめられておるのでな」

「あ。そ、そうなん……ですね。まあ、そのへんはあんまり気にしなくてもいいっていうか、や、もちろん、聞いてもらえるなら、それに越したことはないんだ──ですけど」

「其処許の話しやすい話し方で話されよ。拙せつ者しやの口ぶりはいささか堅かた苦くるしいようだ」

「あ、そう？　じゃ、そうしよっかな。タイガーとか呼んじゃっても平気？」

ウィリアム・タイガーボーンは眉まゆをひそめて「むう……」と口をへの字に結んだ。

「あ、う、嘘、嘘。調子に乗っちゃったかも。じゃ、タイガーボーンさんで？」

「いや」ウィリアム・タイガーボーンは重々しく首を横に振ふった。「タイガーでかまわぬ。どうかタイガーと呼んでもらいたい。むしろ、タイガーがよい」

「そ、そお……？」マリアローズは引きつる顔を撫なでた。この人、すごそうだけど、変。あまり関かかわりあいになりたくないけど、そういうわけにもいかないか。一応、味方だし。いや、一応じゃない。味方だ。「……それじゃあ、僕のことはマリアでいいから」

「うむ」とタイガーがうなずいて、万感の思いをこめたように「マリア」と発音した瞬間、寒気がした。そんなに力ちから一いつ杯ぱい呼んでくれなくてもいいから。初対面なのに、事情があって長らく会えなかった親友がようやく再会できたときみたいな呼び方は、はっきり言ってかなり気色悪いからやめてくれない？　そう言いたいんだけど、なんか言えない。

「──で、マリア」

「……はい」と答えながら、マリアローズは両りよう腕うでで自分の身体をひしっと抱だきしめた。また寒気が。このおじさん、地味にハイレベルできもい。悪気はないんだろうけど。

「其処許はいかに思う。拙者はあの悪魔のことを申しておるのだが」

「……まあ、なんていうか、どう言えばいいんだろ……ようするに僕、あいつと前に一度、やりあったことがあるっぽいんだよね。今はなきエルデンのアンダーグラウンドで」

「ふむ。それは興味深い」

「だけど、僕の仲間がやっつけたはずなんだよ。だから生きてるわけがないんだけど。ていっても相手は悪魔だろうし、こんなこともあったりするのかな」

「なんと。悪魔とは死しても蘇よみがえるものなのか」

「や、それはわかんないけどね。そういうやつもいたっておかしくないっていうか」

「悪魔とは、げに摩ま訶か不ふ思し議ぎな生き物なのだな。して、あの悪魔の名は何と申す」

「え？　ああ、名前は、赤のレッド・男ツエペ爵リオン──」「違ぁう」「へ……？」

　心臓が止まるかと思った。

　今の今まで、やつは飛燕、きゅーと激げき烈れつにバトっていたはずだ。それなのに、なんで至近距きょ離りにいるのか。もちろん、ただそばにいるだけじゃない。やつはニッタァ……といやらしく笑って、炎えん熱ねつをまとった細身の剣でマリアローズを串くし刺ざしにしようとしている。やめてよそんなことされたら焼き鳥になっちゃうっていや鳥じゃないから焼き鳥にはならないか──とかセルフボケツッコミをかましている場合じゃない。マリアローズは慌あわてて大急ぎでよけようとする。そうしたいのは山々だが、とても間に合いそうにない。死ぬ。ああ。死んだ。あきらめたわけじゃない。でも、状じよう況きよう的に受け容いれるしかなかった。それなのに、あれ？　なんで？　どうして僕、生きてるの？　もしかして、タイガーのおかげか。きっとそうだ。いつの間にやらタイガーが刀を抜いている。どうやらその刀が燃える細身の剣を打ち払はらってくれたらしい。

「疾はやい、な……」タイガーは呟つぶやきながら赤の男爵に斬きりかかった──のだと思う、それこそ速すぎてマリアローズにはよく見えないけれど、赤の男爵がスッ、スッと下がって逃にげているから、タイガーはたぶん刀を繰くりだしているのだろう。赤の男爵は、だが、急に足を止めた。打ちあうつもりか。マリアローズがそう思ったときにはもう始まっていた。カカカカカカンッ。赤の男爵とタイガーは円を描えがくように動きまわって、火花と炎を撒まき散らす。──と、不意に二人の動きがとどこおった。わからないが、どちらかがわざとタイミングを狂くるわせて、その結果、嚙みあわなくなったのかもしれない。仕掛けたのはおそらく、タイガーだ。その証しよう拠こに、タイガーが赤の男爵にドンンッと体当たりを見み舞まった。赤の男爵があれをよけられなかったということは、意表を衝つかれたということだろう。吹ふっ飛とんだ赤の男爵に、

飛燕ときゅーが襲いかかる。「──テメッ、いっきなし逃げてンじゃねェーッ！」「ＫＹＳＹＡＡＡＨＨＨＨＨＨ……！」「ぬうッ！」赤の男爵は斜ななめに身体をのびあがらせて飛燕の飛び蹴りをよけてから地面を蹴り、くるくる横回転してきゅーの足払いをかわした。空中の赤の男爵にタイガーが斬りつけると、炎が舞い散った。燃える細身の剣で防いだのか。赤の男爵はすかさず着地して、剣先を地面に突き立てた。「我がバーニングレイピア〝劫ごう火か〟の力、とくと見るがいい！　炎熱バーニン地獄グヘル……！」

「退避……！」マリアローズはとっさに叫さけびながら建物の陰に身を隠かくした。そのあとで指示なんか出した自分が恥ずかしくなった。僕ごときが口出しできるようなレベルの戦いじゃないのにさ。それにしても、バーニングレイピア。焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア〝劫火〟。双そう生せい児じ魔導王ニオ・キオが地じ獄ごくの侯爵ラデオンメリカイン・ザックに作らせた姉妹剣の片割れ。ひょっとして、あれが本物の劫火なのか。「──てゆうか、熱っ……」モトローリィはまだまだ凍いてつく真冬なのに、焼けるほど、焦こげそうなほど熱い。すごい熱風だ。きゅーは大丈夫だろうか。ついでに飛燕とかタイガーは。あと武士団の人たちは。おそるおそる顔を出して様子をうかがってみたら、陽炎かげろうの中でタイガーと赤の男爵が対たい峙じしていた。

「ほう……」赤の男爵は半身に構えて、劫火をヒュンヒュン振った。「我が劫火の炎熱を斬り裂さいてみせるとはな。人間のわりにはやるようだ」

「然さ程ほどでもない」タイガーは刀を八双に構え、じりじりと赤の男爵との距離を縮めにかかっている。「拙者、非才未熟ゆえいまだ修しゅ行ぎょう中の身。一いつ介かいの地を這はう虫にすぎぬ」

「……や、度を越こした謙けん遜そんはかえって嫌いや味みだけどね？」思わず小声でツッコミを入れてしまった。だって、明らかに非才でも未熟でもないじゃないか。炎熱を斬り裂くとか、もう基本的に意味がわからない。普ふ通つうできないっていうか、普通じゃなくてもできないし。さすがは武士団棟とう梁りよう。妙みように控ひかえめなところもふくめて、それなりにというか、そうとう異常だ。味方だからまあいいけど。そうだ。味方なんだから、その赤の男爵っぽい悪魔、さっさと殺やっちゃってくれない？　早く早く可か及きゆう的てき速すみやかに急いでほら──

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オォォォォォォォォォォォォーッ……！」

　ほらね？　さっさと殺っちゃわないから、きちゃったよ。馬ば鹿かが。馬鹿以下の馬鹿が、鉄球みたいな義手、ハンマーパンチ壱いち號ごうを振りまわしながら赤の男爵めがけて突っこんでゆく。言うまでもなく、遅おくれてやってきたチーロ・パンカロだ。「うおおあったけえ！　オレっち夏男だし絶好調だぜコンチキショウ！　死にくされ悪魔ァーッッッッ……！」

　威い勢せいだけはかなりよかったのだが、赤の男爵が「どけ」と劫火を軽く振っただけで、馬鹿夏男は「あぢいいっ!?」と飛びのいた。何やってるんだよ……。

「クッソッ！」飛燕はそのへんの建物の屋根の上にいた。服とか髪かみとかちょっと焦げているが、なんとか退避したらしい。それはいいのだけれど、なぜかきゅーにおんぶしてもらっている。「テメッ悪魔野や郎ろうッ！　武器なんかに頼たよってンじゃねェーぞォラッ！」「くう、くう！　きゅう！」きゅーもかなりご立腹の様子だ。それはいいんだけど、なんで飛燕をおんぶなんかしているのか。マリアローズとしては微び妙みようにむかつかないでもない。いいけどさ、べつに。おんぶくらい。僕はもっといろいろしてもらってるし。

「くだらんことを」赤の男爵はフンッと鼻先でせせら笑って劫火の切っ先をヒュンヒュンユラユラ動かし、少しずつ接近しようとしているタイガーを牽けん制せいした。「戦いはな。勝てばいいのだ。勝てば正義、負ければポンコツ。いつでもどこでも、これは真理だ。俺は手段を選ばず戦いに勝って、勝って、勝ちまくって、伯爵テリオンまでのぼりつめた。この大戦でさらに柄がらを立て、侯爵ラデオンに、そして公ヴエ爵リオンに、ゆくゆくは大ハイ公ヴエ爵リオンになる。赤のレツド・大ハイ公ヴエ爵リオン。いい響ひびきだろうが……？」

「……伯爵テリオン」マリアローズは唇くちびるの端はしを噛かんだ。男ツエペ爵リオンじゃない。出世したってことか。よくわからないが、赤のレツド・伯爵テリオンなんだ。そして、本物の劫火を持っている。アンダーグラウンドＤ１の閉へい鎖さ魔ま宮きゆうにいた赤の男爵、やつが持っていた劫火は、ただ品質がいいだけの剣けんで、ようは偽にせ物ものだった。ということは？　どういうこと？　頭がこんがらかりそうだが、もしかして──あの赤の男爵も偽物だった、とか。赤の男爵だけに、真っ赤な偽物……いや。マリア

ローズは頭をぶるんぶるん振った。いやいや。よくない。今のダジャレは本当によくなかった。どこぞの半魚人じゃないんだから。口に出さなくてよかった。

　とにかく、あの赤の伯爵と劫火はモノホンの本物で、難敵だ。どうする？　どうしようもない。マリアローズには。あづあづ叫んで走りまわっている馬鹿チーロはともかく、飛燕ときゅーでさえ、とりあえず距離をとって様子見をしているようなふざけた強敵だ。

「勝てばよい、か……」

　ウィリアム・タイガーボーン。今のところはあの男に期待するしかない。北方の雄ゆうモトローリィ随ずいーいちの武人、武士の中の武士は──なんか、怒おこってない……？

「違ちがう。それは違うぞ、赤のレッド・伯爵テリオンとやら。其処許は断じて！　間違っておる……！」

「だったらどうする」赤の伯爵の弧こを描いている眉がピクピク震ふるえた。「糞くそ虫むし」

「拙者は一介の地を這う虫であって、糞虫ではない。其処許はまたもや間違えておる！」

　今のは間違いとかじゃなくて単なる罵ののしり言葉だと思うよ──と説明しても理解してもらえるかどうか。タイガーは総身から凜りん々りんとして凄せい烈れつな闘とう気きを発し、その名のとおり虎とらのごとく轟ごうと吼ほえた。「勝負とは！　正々堂々、互たがいの磨みがきあげし技わざと練りあげし力、魂たましいと精神の輝かがやきを競いあうもの！　勝てばよい、打ち負かせばよい、殺せばよい、かくのごとき浅せん慮りよは武士もののふたる者の誇ほこりを汚けがし、面目を潰つぶし、野や獣じゆうと堕ださしめるのだ！　其処許、それほどの技量を持ちながら、なぜそれがわからぬ……！」

「わからんな。そもそも俺は、そのモノノフとやらじゃない」

「これはしたり」タイガーは律りち儀ぎに頭を下げた。「成る程ほど、其処許は武士か否いなか以前に、人ですらなく悪魔であった。武士の理ことわりが通じずともやむをえぬ」

「……まあ」赤の伯爵はやや鼻白んでいるようだ。「そういうこと

だ」

「しかし、拙せつ者しゃは一介の武士。武士は武士らしく、武士として尋じん常じょうに勝負いたす所存。いざ、参る……！」

　どうもへんちきりんな男だが、実力のほうは正真正しょう銘めい、モノホンの本物だ。タイガーは劫火をカッと払いのけて、赤の伯爵の懐ふところに入りこもうとした。もちろん赤の伯爵は、そうはさせまいと下がる。真後ろに下がる。斜めに下がる。いったいどうやって体重移動をしているのかさっぱり見当がつかない、人間の目には非現実的にさえ見える、ものすごい足捌さばきだ。でも、タイガーはついてゆく。両者の距離は狭せばまらないが、広がることもない。しかも瞠どう目もくすべき点は、タイガーの姿勢がまったく乱れないことだ。背筋をのばしてまっすぐ前を向き、まるで規則的に、あらかじめ決められたとおりに足を運んでいるかのようだが、相手がいるのだからそんなわけはない。マリアローズなら━比べるのも馬鹿馬鹿しいが━必死になって食らいつこうとしても、赤の伯爵についてゆくことなんてとうていできないだろう。タイガーはそれを余よ裕ゆう綽しゃく々しゃくでこなしている。少なくとも、そう見える。これ、なんかいけそうな流れじゃない？

「奮フン……ッ」と、タイガーが力強く踏ふみこんで、刀を振りあげた。「メン！　メン！　メェエン……！」そして、立てつづけに刀を打ちおろす━のはいいんだけど、メンってもしかして面？　顔ってこと？　てことはもしかして、わざわざ顔面、ようするに頭めがけて打ちこみますよって宣言して打ちこんじゃったりしてる……？

「メェエン！　ドウッ！　コテェイッ！　ドウッ！　メン！　コテッ！　メェエン！」

　もしかして、じゃない。メンは面、ドウは胴どうで、コテは小手だろう。タイガーは間違いなく、次は頭ですよ、それから次は脇わき腹ばらです、その次は腕うでにいきますよと教えてやりながら刀を振ふっている。「馬鹿じゃないの……」マリアローズがそう呟いたのとほぼ同時に、赤の伯爵が「俺を馬鹿にしてるのかッ！」と怒ど鳴なった。やつが怒る気持ちもわからなくはない。どれだけ強烈な斬ざん撃げきでも、狙ねらいどころがわかれば防ぎようはある。あれじゃあうまくよけろと言っているようなものだ。稽けい古こでもつけているつもりなのか。

「コテッ！　メン、ドウッ！　コテコテコテェッ！　メェェェン！　メンメェエンッ！」

「──だからッ！　ええい……！」赤の伯爵が空気をかき混ぜるように劫火の切っ先を踊おどらせると、紅ぐ蓮れんの炎ほのおが生じて渦うず巻まいた。「食らえ、炎熱バーニン地獄グヘル……！」

　だが、タイガーは動じず揺ゆらがず、炎を見すえて刀を縦横に振るった。「断ッ！」

　正真正銘の馬鹿者だけれど、やっぱりすごいことはすごい。刀で斬り裂かれてしまう炎というものを、マリアローズは生まれて初めて見た気がする。

　タイガーは刀を握にぎりなおし、ふう、と一つ息をついた。「其そ処こ許もとの言い様ざま、理解しかねる。拙者はただ、武士の誇りにかけて、尋常に勝負いたしておるのみ」

「どこが尋常だ。貴様がやってることは明らかに異常だ！」

「あな嘆なげかわしや。其処許は知らぬのだ。武士の清せい廉れん潔白な戦い方というものを」

「それが真実、モノノフとやらの一いつ般ぱん的な戦い方だとしたら、そのモノノフとやらは阿あ呆ほうの集団だ！　己おのれの低能ぶりをさらけだして喜ぶ露ろ出しゆつ狂きよう同然の恥はじさらしだ！」

「なんと、武士を愚ぐ弄ろうするとは不届き千せん万ばん！　許せぬ！　メンメンメェェーン……！」

「……あ、頭が……」くらくらしてきた。マリアローズはため息をつきながら、左右のこめかみをぐりぐり揉もんだ。眩暈めまいだけじゃない。頭痛がする。

　ウィリアム・タイガーボーンは変人だ。これは確定した。それから、間ま抜ぬけだ。これも否定しえない事実だと思う。だってタイガーは、あの清廉潔白なモノノフの戦い方とやらで赤の伯爵と互ご角かくに渡わたりあっている。ということは、もしあんな馬鹿げたことをしないで普通に戦えば、赤の伯爵を追いこめるかもしれない。勝ててしまうかもしれない。誇りだか小鳥だか面目だか綿棒だか知らないが、そんなくだらないものにこだわってそうしないのだ

から、間が抜けているとしか言いようがない。だんだん腹が立ってきた。

「くう！」と、きゅーが飛燕を背負ったまま屋根から飛んで、マリアローズのすぐ隣となりに降りたった。飛燕はウヒャヒャヒャ笑って、「おもッしれェーなァ、アイツ、ゲロ強ェーじゃんか！　まッたくよォ、いるよなァ、強ェーヤツってのはそこらじューによォ！」

「……馬鹿も多いよね。てゆうか、なぜか強いやつにかぎって馬鹿だよね」

「マリアローズィ。テメェーはロマンってモンがわッかんねェーのかよ」

「うん。これっぽっちもわかんない」

「わかれよ、ソコは。わかっとけよ。アイツはよォーするにアレだよ、あァーやって自分の選せん択たく肢しを狭めてよォ、そンで自分の可能性を試ためしてンじゃねェーか」

「僕には可能性を狭めてるようにしか見えないけどね。てゆうかとりあえず、勝てるならさっさと勝っちゃってほしいんだけど。遊びじゃないんだからさ」

「遊びゴコロは大事だぜェ？　真剣勝負ン中でもよォ、そォーゆー気持ちがねェーとな」

「くう、くう」きゅーが、なるほどなるほど、という感じでうなずいた。

「つゥーかアイツ、マジでケッコーすげェーぜ？」飛燕は無む駄だに目をキラッキラと輝かせている。「見てみ。な？　わかンだろ？　アイツァ特別なコトはなんッもしてねェー。必殺技とかよォ、そォーゆンも出してねェーだろ。ただ刀を振ってるだけだ。まるで練習してるみてェーに。ソレが難しィーんだよな。敵と向きあってるわけだからよォ。平常心を保つってのは、そォー簡単じゃねェーよ」

「……そんなのマジでクリティカルにどうでもいいし、一対一であの感じならきみが手を貸せば勝てそうなんで、助すけ太だ刀ちしてやってくれない？　てゆうか今すぐして？」

「バッカ、ンなことできるワキャねェーだろ。あーゆゥー勝負にはよォ、ゼッテー割りこんじゃなんねェーってのは、太古の昔からガッツリ決まりまくってンだよ」

「くう！」

「あっそ……」

　ついていけない。ついていかなくてもいいと思う。というか、ついていっちゃだめだ。馬鹿が感う染つる。馬鹿になってしまうと、ああいう無残な醜しゆう態たいをさらす羽目になるのだ。

「今だッ！　うおおおおおおおぉぉぉぉぉりゃああああああああああああ……ッ！」

　一応たぶん絶好の機会をうかがっていたつもりなのだろう、チーロの馬鹿が背後から赤の伯爵に躍おどりかかった──が、赤の伯爵は振り返りもせずにあっさりとチーロをよけた。チーロは「おっ……!?」とたたらを踏んで、あやうくタイガーにぶつかるところだった。まったく、何やってるんだか。「──わ、悪ぃ、棟梁！　オレとしたことが！」「其処許に棟梁と呼ばれるいわれはないのだが……」「そんな堅かたいこと言うなって！　仲間だろ、ガハハハハハッ！」「むう……」

「つまらん寸劇コントだ……！」赤の伯爵が劫ごう火かをビュンビュン振りまわしてタイガーとチーロに迫せまる。「おわわっ！」と右往左往するチーロが、明らかにタイガーを邪じゃ魔ましている。本当にひどい寸劇コントだ。ちっとも笑えない。しかも、タイガーはチーロに妨ぼう害がいされながらも劫火をよけて、ときにはチーロを劫火から守ってさえいるのだから、笑えないどころか頭にくる。マリアローズは唇を嚙んだ。「……いいかげんにしろっての」

　もう我が慢まんできない。マリアローズは駆かけだした。「くう……!?」きゅーに制止されたが、かまわず全力疾しつ走そうして、タイガーの背中というより尻しりを蹴けりあげた。「この馬ば鹿かっ！」

「ぬっ……!?」タイガーは振り向こうとしてやめ、襲おそいかかってきた劫火を弾はじいた。「な、何をいたす、マリアローズどの!?　乱心したか……!?」

「乱心なんかしてないよ僕はまともだよ正常だよおかしいのはきみなんだよ！」マリアローズは赤の伯爵をギンッとにらみつけた。「きみだって正直そう思ってるだろ!?」

「……お」赤の伯爵はカクカクッとうなずいた。「おう。ま、まあ……」

「ほら！　だいたい何なんだよモノノフだかモフモフだか持ちつ持たれつだか知らないけど、そういう戦い方ってむしろ相手を小馬鹿にしてるから！　きみがどう思ってようと相手はそう感じるから！　戦いってのはさ、そんな甘いもんじゃないんだよ生きるか死ぬかなんだよ一いつ瞬しゆんで決まっちゃうんだよ死んだら終わりなんだよだからみんな一生懸けん命めいなんだよ悪魔だってそうなんだよ違う!?　赤のレツド・伯爵テリオン、きみだって真剣だろ!?」

「お、おう」

「ほら！　それなのに何なんだよ舐なめきったような態度できみは真ま面じ目めにやってるつもりなのかもしれないけど真面目と真しん剣けんって似てるようで違うんだよ大違いなんだよ！　真剣にやれ！　きみが持ってるものぜんぶ出せ！　負けても言い訳できないくらい言い訳なんかしようがないくらい全力で戦え！　ありとあらゆる手段を使って相手を倒たおせ！　それが真剣勝負だろ！　それができないなら腹でも何でも切って死んじゃえ、馬鹿っ！」

「いや、しかし、マリアローズどの――」

「しかしもお菓か子しもモカシンもない！　きみがちんたらやってる間に、きみの部下は傷ついて死んでるんじゃないの!?　市民にだって犠ぎ牲せいが出てるかもしれないじゃないか！　きみはきみの美学を貫つらぬいて、それで満足なのかもしれないけど、力を持ってるんだったらその力にふさわしい義務と責任を果たせ！　できないんだったら――」マリアローズはタイガーの胸むな倉ぐらをつかんだ。「僕だって……僕にできるんだったら、僕に力があれば、やってるんだよ！　やりたいよ！　できないから言ってるんだよ！　きみにできることがあるなら、それをやってほしいんだよ！　つべこべ言わずに、やれ……！」

「成る程」タイガーは神しん妙みような顔つきで、重々しくうなずいた。「マリアローズどの。ジョーカーどのが其処許の言を傾けい

聴ちようせよとおっしゃられたその意味、得心がいった」

「え？　あ……そう？」

「思えば、一族郎ろう党とうにせよ、かつての主君にせよ、誰だれも拙者に意見しなかった」

「それってあれじゃないの、きみが聞く耳持たない頑がん固こ者だって、みんな骨身に染しみてわかってたからじゃないの……」

　だいたい、あのジョーカーでさえ武士団にはけっこう好き勝手にやらせている。未み曽ぞ有うの国難に、まあ国難だからこそだと本人は言うかもしれないが、国軍から離り脱だつしてジョーカーに与くみしてしまうような男だ。独立独歩といえば聞こえはいいけれど、まともな組織人じゃない。頑がん迷めいなほどにかたくなで、めっぽう強くて、動かしがたい、とことん扱あつかいづらい、この男に──ひょっとしてジョーカーは、マリアローズをぶつけるつもりだったのか。この七しち面めん倒どうくさい男に手た綱づなをつける厄やつ介かいな役回りを、マリアローズに任せるつもりだった、とか。ありえない、うがちすぎだ、とは言いきれない。何しろ、あのジョーカーだ。

「おかげで目が覚めたぞ、マリアロースどの」タイガーは赤の伯爵に向きなおって、不敵で不気味な笑えみを浮うかべた。「今こそあえて我が身に課していた禁を破り、全身全ぜん霊れいを捧ささげ、お相手いたす」

「全身全霊えぇ……？」赤の伯爵はぺろりと唇くちびるを舐めて、半身に構えた。「何が変わるとも思えんがな。やってみろ。ちょっとだけなら遊んでやる」

「秘刀……！」タイガーは猛もう然ぜんと踏みこんで、刀を斜ななめに振りあげた──が、遠い。あれでは当たらない。実際、空振りだった。それだけじゃない。刀がスポンッとタイガーの手から抜けてすっ飛んだ。「……は？」マリアローズはあんぐりと口を開けた。赤の伯爵もきょとんとしている。その隙すきにタイガーは赤の伯爵に組みついた。正面から、と見せかけて、素す早ばやく背後をとる。両りよう脚あしを胴に回して動きを封ふうじ、左右の腕で首と両腕をがっちり極きめた。「──ぐっ！」赤の伯爵はたぶん、あえて後ろに倒れかかった。タイガーを押し潰つぶす気だ。タイガーはそれを読んでいたのか。パッと飛び離はなれて、赤の伯爵は一人で

仰あお向むけに倒れる恰かつ好こうになった。なんと、そこにタイガーの手からすっぽ抜けた刀が振ってきたのだ。刀は狙い定めたように赤の伯爵の胸に突つき刺さった。「おごっ……」

「秘刀、雨滴コールド無情レイン」タイガーが刀の柄つかに手をかけようとすると、赤の伯爵はその前に跳とび起きながら刀を引き抜いて放ほうり投げ、「手品師に早変わりか……！　だが！」と獅し子しのように吼ほえてタイガーに斬きりかかる。タイガーは腰こしに差していた脇わき差ざしでこれを受け止め、受け流す。下がる。下がる。下がる。下がりつつ、何かを溜めている。なんとなくだが、そんな感じがして──マリアローズは気づいた。「え……？」見み間ま違ちがいじゃない。タイガーは左手で脇差を使っている。どうして？　左利ききではないと思う。タイガーは右手の指をのばして揃そろえた。手刀だ。「我が爪そう牙が、鋼はがねのみにあらず……！　無刀！」

　赤の伯爵が「ぬおっ……!?」とのけぞって、飛びすさった。タイガーは右手を突きだしただけなのに。まさか、そこまで。

　ウィリアム・タイガーボーンはそこまで到とう達たつしているのか。

　言わば、人外。人間の域を超こえたその領域まで。

「無刀、空刃ハンド百斬レツド」タイガーは右手を振ふりまわす。何も持っていない右手を。素手なのに、その延長線上に不可視の刃やいばがのびているかのように、赤の伯爵は飛びのき、横っ跳びして、よける。「──ッ！　ッ！　ッ……！」そしておそらく、そのとおりなのだ。

　かつてマリアローズは立ちあった。バーニング・バラッドが、刀を持たず、無手で人を斬る現場に。剣聖の弟で子しを自じ称しようし、剣聖に斃たおされた男は、一種の、いや、完全な異常人で、その剣術は魔ま術じゆつのようだった。

　タイガーはあのバーニング・バラッドに匹ひつ敵てきするのか。わからない。マリアローズには判断がつかない。雲を衝つくような巨きよ人じんが二人並んでいたとして、どっちの背が高いかなんて、その足あし許もとから彼らを見上げる人間には測りようがない。でも、とにかく同種だ。同じカテゴリーの変態野郎どもだ。

「二刀、狂いマツド咲きブルーム」タイガーは右手と脇差を縦横無む尽じんに振るいだした。二刀流だ。二刀じゃないのに二刀流になってしまっている。赤の伯爵は顔をゆがめて「──クッ、ムオッ、ヌッ、ツッ……！」と呻うめきながら、防戦一方どころか防戦すらままならない。腕うでが、肩かたが、脚が浅く斬り裂さかれ、傷は刻一刻と増える。タイガーは赤の伯爵を追いつめつつある。

「ああ、もうめんどくせえ……！」赤の伯爵が突とつ然ぜん、下品になった。いや、それだけじゃない。変へん貌ぼうする。全身が一回り、いや、二回りほども大きくなって、着ている衣服がはち切れ、額が狭せばまって鼻び梁りようが盛りあがり、顎あごがせり出して犬歯がのび、双そう眼がんが血走って爛らん々らんと光りだした。長い眉まゆ毛げは上向きの弧こを描えがいたままだが、その顔は猿さると犬を足して二で割って凶きよう悪あくにしたような感じだ。「丸焼きにして食ってやる……！」

「やばっ……」マリアローズは踵きびすを返した。「逃にげっ！　たぶんやばいのが……っ！」

　タイガーはどうしただろう。確かく認にんする余よ裕ゆうはない。マリアローズは建物の陰かげに飛びこんだ。きゅーがいる。まだ飛燕をおんぶしていた。マリアローズはきゅーに突っこむ形になった。「──ぶっ……！」その直後だった。赤の伯爵の「大Ｇ級極熱バーニン地獄グヘル……！」という下げ卑びたわめき声はすぐに爆ばく音おんでかき消され、空まで届くような巨大な火柱が立った。きゅーは飛燕とマリアローズもろとも吹ふっ飛ばされた。きゅーが筋力と柔じゆう軟なん性ともふ毛を駆く使ししてとっさに受け身をとってくれなかったら、飛燕はともかくマリアローズは大おお怪け我がをしていたかもしれない。

「……うう……」「きゅう……」「つうッ……だァッ！」最初に跳び起きたのは飛燕で、それからきゅーがマリアローズを抱だき起こしてくれた。火柱はまだ消えていないどころか、かえって勢いを増そうとしている。熱い。熱風が、火の粉がどんどん押しよせてくる。マリアローズはあとずさりした。「……たしか、偽物も変身してパワーアップした。そこまで一いつ緒しよなんだ……」

　飛燕も顔の前に手をかざして下がった。「さすがに死んだかァ？　モノノッフィー」

「何だよ、モノノッフィーって……まあ、でも、いくら何でもこれ

はね……」

「チッ。おっ死ちぬンなら、オレとバトッてからにしろっつーの。ふざけやがってよォ」

「くう！」

「いや、あのね？　モノノッフィーじゃなくてタイガーがやられちゃったら、あの化物の相手をしなきゃならないのは僕らっていうか、僕はこれっぽっちもお役に立てないんで、きみたちなんだからね？　わかってる、そのへん？　もっと危機感持とうよ？」

「そんトキはそんトキだろ？　つゥーか、そもそもオレはやる気マンマンだけど？」

「ぬふう……！」と、火柱の中からタイガーが飛びだしてきた。生きていたのか。でも、火だるまだ。つづいてチーロも。「ウワヂャヂャヂャヂャヂャ……ッ！　死ぬッ！」

　タイガーは着ていたコートを自ら脱ぬぎ捨ててけっこう平気そうだが、転げまわっているチーロはそうとうやばそうだ。「もう……！」しょうがない。マリアローズは外がい套とうを外してチーロにかぶせた。「酸素がなくなれば火は消えるから！　熱いだろうけど、剝はがさないで……！」「ヅアヅァヅァヅァッ！　ムリムリムリッ！　アヂアヂアヂッ……！」

「逃がさねえぞ……！」赤の伯爵だ。猛火の中をゆっくりと歩いてくる。なんでやつは燃えないのか。特異体質なのか。それとも、手にしている焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟の力なのか。どっちにしても、まずい。非常にまずい。飛燕はやるつもりらしい。ただのどつきあいなら、飛燕はそのへんの悪魔どころか、高位の悪魔にもおそらくひけをとらないだろう。しかし相あい性しようというものがある。飛燕は認めないかもしれないが、どっちが強いとか弱いとか、そんな単純な問題ではないのだ。飛燕は、劫火を持った赤の伯爵には勝てない。もちろん、きゅーだって同じだ。

「……逃げるよ」マリアローズは飛燕の袖そでを引っぱって囁ささやいた。「いったん退ひいて、態勢を立てなおそう」

「冗じよう談だんはヨシムネくんだぜ」飛燕はヘッと短く笑った。

「ヤツはこのオレがやる。そしたら、とりあえずモノノッフィーよっかはオレのほォーが強ェーってことだからな」

「いいから！」「──グヘェッ」マリアローズは飛燕の襟えり首くびをつかんで、きゅーの腕を握にぎりしめた。「きみには死んでもらっちゃ困るんだ！　ユリカがいるんだから……！」

　走りだそうとしたら、赤の伯爵が劫火をヒョイッと振った。それだけで炎ほのおの旋せん風ぷうが巻き起こされ、吹きつけてきた。「──むん！　断……！」間かん一いつ髪ぱつ、タイガーが右手と脇差で炎を斬り裂いてくれたので助かったが、あれ以上の炎がきたら防ぎきれないかもしれない。というか、赤の伯爵はもうすぐそこまで迫せまっている。だめだ。逃げられない。やるしかないのか。やって勝てるのか。無理だと思う。どう考えたって勝算がない。ということは、え？　もしかして、詰つんじゃってる……？

「マリア……！」

　打つ手は皆かい無むだった。彼女が飛んできてくれなければ、まず間違いなく、とくにマリアローズは命を落としていただろう。

　それにしても、比ひ喩ゆでも何でもなく文字どおり飛んできてしまうのだから、恐おそれ入るしかない。彼女は流星のごとくマリアローズたちの頭上まで飛ひ翔しようしてきて急停止すると、右腕を振りかぶって、振りおろした。「っ……！」

「ぬぁに……ッ!?」赤の伯爵が劫火を振りあげる。攻こう撃げきじゃない。防ぼう御ぎょだ。炎を巻きあげて、上空から押しよせる冷気の波は濤とうを防ごうとした。でも、受け止めきれない。炎が押される。かき消される。赤の伯爵は飛びさがって、なんとか冷気から逃のがれた。「──ニンゲンの魔術士か……!?　だが、なんでだ……!?」

　彼女は「ふぅっ……！」と息を吸いこんでから、赤の伯爵に向けて力強く両手を突きだした。詠唱アリア放棄レナンス。たったそれだけで、彼女は、サフィニアは、魔術を発動させてしまう。今度は雷かみなりだった。猛たけ々だけしい光の瀑ばく布ふのような雷らい霆ていが、轟ごう音おんを鳴り響ひびかせて赤の伯爵に降りそそぐ。「がっ……！」赤の伯爵はなすすべなく稲いな妻ずまに打たれて弾はじき飛ばされた。やったか。いや。すぐに起きあがった。赤の伯爵は「くそったれ……！」と罵ば声せいを発しながら劫火を地

面に突き立てた。「大Ｇ級極熱バーニン地獄グヘル……！」

「はぁぁっ……！」サフィニアは右腕で空を薙ないで、また冷気を呼び起こした。噴ふきあがりかけた火柱は見る間に衰おとろえ、吹き飛ばされた。そのときには、でも、赤の伯爵は行ゆく方えをくらましていた。マリアローズはあたりを見まわした。「逃げた!?　どこに……!?」

「逃がすかよォッ！」さっそく飛燕が駆かけだした。タイガーも脇差を高々と掲かかげ、振りまわした。「武士団！　悪魔を捜そう索さくせよ……！」

　飛燕についてゆこうとしたきゅーの前に、サフィニアが降りたった。「待って！　二人に伝えないといけないことが……！」

「きゅう？」きゅーは首をかしげた。

　サフィニアは変に目を見開いている。翡ひ翠すい色の瞳ひとみに宿る無数の輝かがやきが、何か大変なことがあったのだと示し唆さしていた。大変なこと……？

　マリアローズは胸を押さえた。息が苦しい。大変。大変なことって。やだ。やめてよ。そんな。頭を振る。唇を噛かむ。顎が震ふるえている。歯を食いしばって、息をついた。マリアローズは無理やり声をしぼりだす。「何……？」

　サフィニアは一度、思いきるようにうなずいた。それから、マリアローズの両腕をつかんだ。強く、握りしめた。「トマトクンが、目を覚ましたの」

半年前　荒れ果てた地上で

　ねえおしえて。だれかおしえてほしいの。あたしはどうしてここにいるの。おしえて。どうしてだれもこたえてくれないの。どうして。あたしはそれがしりたいだけなの。それだけなの。あたしはなんなの。いったい何なの。何をしているの。あたしは気がつくと何かを食べていたりするの。死んだ生き物の肉をむさぼり喰くっているの。気がつくと泥どろ水みずをすすっているの。ときおりあたし

は思うの。ああ、あたしはおなかがすいてるんだ。あたしは喉のどが渇かわいてるんだって。だからあたしは食べられそうなものを食べて、水を飲むの。あたしはべつにそうしたいわけじゃないけど、もう一人のあたしが勝手にそれをするの。あたしを生かそうとするの。死ぬことをあたしに許さないの。

　そう。

　あたしは生きているの。ただ生きているの。生きているだけなの。どうして。

　なぜあたしは生きているの？　生きる意味なんてないでしょう……？

　あたしは捨てられた。あたしは選ばれなかった。あたしは思いだせる。あの戦いを。あの悪魔とお姉様との激げき烈れつで果ての見えないおぞましい戦いを。あたしたちはお姉様を置いて一度は逃げた。白はく髪はつ、白い肌はだ、赤い目、やせっぽちで、生気のない若者のようにも、見た目だけ年をとっていない老人のようにも見える、呪われカーシー・大ハイ公ヴエ爵リオンジャリコ・カスパーロウ。あの死なない、いや、死ねない悪魔とお姉様の戦いから目をそむけて、あたしたちは逃げだした。でも、あたしたちは感じていた。お姉様はまだ戦っている。たった一人で戦っている。あたしたちは逃げて、ろくすっぽ魔術を使えなくなった身体からだを休めながら、ひしひしと感じていた。お姉様が戦っている。あの傲ごう慢まんで、気分屋で、わがままで、衝しよう動どう的で、陰いん謀ぼう家で、支し離り滅めつ裂れつで、揺ゆるがなくて、人を人とも思わない、孤こ高こうの、でも、本当は人一倍寂さびしがり屋のお姉様が、一人きりで、ひとりぼっちで。放っておくことなんかできないでしょう？　できるわけ、ないでしょう？　だからあたしたちは、誰だれからともなくお姉様のもとに戻もどったの。それは呪のろいだと、知っていた。お姉様はあたしたちに呪いをかけた。一生解けない、愛と憎にくしみの不純で純じゆん粋すいな美しい、覚めることのない夢のような呪い。一度その呪いにかかってしまったら、決して抜ぬけだせない。あたしたちはお姉様を求めて、見つけた。その姿を目にした瞬しゆん間かん、あたしたちは悲鳴をあげた。ああ、お姉様、ああ、ああ、なんてこと、お姉様、腕が、右みぎ腕うでが、あたしの、あたしだけのお姉様、その右腕が失われていた。右腕を失い、その裸ら身しんを血で染めて、お姉様はジャリコ・カスパーロウと戦いつづけていた。それは人じん智ちの及およばない戦いだった。人間も悪あく魔まもない、この世界もあの世界

もどの世界もない、あらゆる世界の天地のことわりから外れたところで二人は戦っていた。その証しよう拠こに、お姉様とジャリコの周りには、命あるものは誰も、何も存在していなかった。大地はえぐられていた。空は見たことのない色をしていた。大気の組成が変わっていた。お姉様は片腕をなくして血みどろになっても可か憐れんで麗うるわしいお姉様のままだったけれど、ジャリコは違ちがった。ジャリコはぶにょぶにょぶるぶるしたいびつで巨大な白い肉の塊かたまりと成り果てていた。肉につ塊かいから数十本の手足のようなものが生えて、ほとんど原形をとどめていない頭が突つきだしていた。死ねないジャリコは、お姉様の魔術で何度も何度も何度も滅ほろぼされかけ、再生しているうちに何かがおかしくなってそんな有様になったのだろうと思われた。あたしたちが見つけたその瞬間にも、お姉様はジャリコにまばゆい白光を浴びせていた。ジャリコは斬きり裂かれ、融ゆう解かいした。そして頭が消し飛んだ途と端たん、肉塊が膨ぼう張ちようし、変形して、さっき頭があったところとは別の場所から新しい頭がにゅっと現れた。ジャリコはけら笑いながら手足をギュギュギュギュギュンとのばし、ウォルンウォルン振ふりまわして、お姉様をつかまえようとした。お姉様はそれらの手足を光で焼き払はらいながら突とつ進しんした。そうしてジャリコの頭をわしづかみにして白魔術を発動させた。地平線の果てまで白一色で塗ぬりつぶされる大きな魔術だった。やがて白によるきわめて暴力的な支配が終わり、どこまでも荒こう廃はいしきった世界が戻ってくると、お姉様と人間に似た姿のジャリコがそこで静かに対たい峙じしていた。本当に死ねないのね、と満面に笑えみをたたえてお姉様は言った。すばらしいのだわ。あなたもなかなかすばらしいですよ、とジャリコは答えた。私をここまでして殺そうとしてくれたのはあなたが初めてです。あなたはすてきだな。あなたとやりたい。あなたの小さな身体に私の×××ピーをぶちこんで中からめちゃくちゃにしたぁーい。こんなにやりたいと思ったのは初めてですよ、とジャリコは舌をれろれろさせて言った。もしかしたら私はあなたを愛しはじめているのかもしれないですね。あなたが欲しい。できることならやってやってやり尽つくしたあと、あなたを食べてしまいたい。あたしたちはその言葉を聞いてキレた。あたしのお姉様になんてことを。あたしたちはジャリコに襲おそいかかった。あたしたちの魔術を叩たたきこんだ。死ねない呪い。そんなものがあるはずない。絶対に何か秘密がある。何か鍵かぎがある。あたしたちはあたしたちの魔術を駆く使ししてそれを探さぐりあてようとした。あのお姉様でも解き明かせなかった謎なぞを、あたしたちごときが解明でき

るわけがない。そんなことは考えなかった。あたしたちは怒おこっていたのだ。ジャリコの不ふ遜そんな態度に、下げ劣れつな口のきき方に。そして何より、あたしたちが逃にげて身を隠かくして回復を図はかって、それから戻ってくるまでの間、ジャリコはお姉様を独どく占せんしていた、そのことに。

それからのことはよく覚えていない。

思いだしたくないだけなのかもしれない。

とにかくジャリコは封ふうじられた。殺すことは、滅ぼすことはとうとうできなかった。ただ、致ち命めい傷しようを負った途端、瞬間的に再生するジャリコに、ジャリコ以外の物を混ぜこむ、という方法をあの子が思いついた。魔術でそれをするためには、その一瞬しかないチャンスをとらえるためには、詠えい唱しようが障害になった。あの子はその問題をクリアした。ジャリコは再生するたびにありとあらゆる物を混ぜこまれて、肥大化し、動きが鈍どん重じゆうになった。ついにはあまりにも雑多な物でできた山のような状態になった。ジャリコは沈ちん黙もくして、微び動どうだにしなくなった。お姉様がその足場を崩くずすというよりも消失させ、大きな穴をあけた。山となったジャリコはその穴に落ちて、無力化された。ほら。覚えていないなんて、嘘うそ。しっかりと覚えている。ただ思いだしたくないだけ。思いだしたくなかった。

すべてが終わってからお姉様が、決めたのだわ、と百億の星を宿した瞳をあの子に向けて宣言した。今日このとき、今この瞬間から、あなたはわたくしの右腕になりなさいな、と。あなたはわたくしに選ばれたのよ。このわたくしがあなたを選んだのよ。

そのあとのことは、本当に覚えていない。あたしは泣いたのかもしれない。叫さけんだのかもしれない。お姉様にとりすがろうとしたかもしれない。あの子に呪じゆ詛その言葉を、下品な罵ののしり言葉を叩きつけたかもしれない。わからないけれど、何をしたとしてもおかしくない。だって、あたしは何よりも大切なものをなくしてしまった。あたしはこの魂たましいが滅ぶまでお姉様の呪いから解き放たれることはないはずだった。それなのに呪いは唐とう突とつに去った。あたしは選ばれなかった。お姉様に選んでもらえなかった。選ばれたのはあの子だった。これからはあの子がお姉様の呪いと愛を一身に受ける。あたしは一いつ顧こだにしてもらえない。そんな人生は考えられなかった。そんな人生は無に等しい。あの女はどうだったのだろう。トモヨは。わからない。あたしにはわ

からない。何もわからない。どうでもいい。どうなったっていい。何もかも無意味だ。あたしには価値がない。生きていたってしょうがない。それなのに、あたしは生きているの。どうして生きているのかわからないのに、生きているの。ただ生きているの。あたしはあたしが殺した悪魔の腹を切り裂いて、とりだした肝きもをくちゃくちゃと咀そ嚼しやくしてのみくだし、あーああーあーと雨に歌っているの。あーああーあーあーあー。あたしはそうして笑うの。母親の腹の中でむやみに笑顔を作る赤子みたいに笑うの。へらへら笑っているの。そこに意味はないの。あたしの存在に意味がないんだから、あたしが笑うことにも意味なんかないの。あーうあーああーうあーあーああーあー。誰か教えてほしい。あたしはどうして生きているの。なんでもう一人のあたしはあたしを生かそうとしているの。なぜあたしを死なせてくれないの。放っておいてくれたらあたしは死ねるのに。あたしはもう一人のあたしに、あたしの中にいるあたしに尋たずねるの。でも返事をしてくれないの。あたしはもう一人きりなのかもしれない。第三サード脳ブレインに住んでいるはずのもう一人のあたしはどこ行っちゃったんだろう。あたしを見放して、消えたのかな。そうかもしれない。まあいいか。どうだっていい。あたしは地べたに座って、顔を上向けて、雨に歌う。あーうあーああーうあーあーああーうあーあー。

「おまえが〝獣けもの〟か」

　誰かの声がした。あたしはかまわず歌っている。オマエガケモノカ。ケモノカ。オマエガ。ケモノ。あーうあーああーうあー。ふふっ。あたしは笑う。誰かが近づいてくる。あたしは感じている。その誰かはあたしの隣となりにしゃがむ。あーあーあうあーああーあー。

「おまえが〝獣〟だな、ニンゲン。わざわざ遊びにきてやったぞ」

　あたしはあがさがｄがｄｙｇまｄｇｍぁｄぎあおｇなｈｋｇまｍかｌさがｍがｐｊんがｂぐだがだｓｒｆまｓｌｑがｄｇかｄｇなｄｋｌｇだｋ気がつくとそいつにのしかかって両手で首を絞しめている。あたしの口から、いひひ、いひひひひひ、と声がもれる。何だろうこいつはとあたしは思っている。チャコールグレーの肌。ライラック色の毛もう髪はつ。マゼンタの瞳ひとみ。コバルトグリーンのツナギみたいな服を着ている。顔だちは男とも女ともつかない。口からのぞく歯はノコギリみたいにギザギザだ。何だろうこいつは。わからないけれど、どうでもいい。あたしは大きく口を開けてはっきりと発音する。ば・め・ら。するとそこらじゅうから稲いな

妻ずまがわきおこる。拍はく手しゆみたいに。無数の稲妻があたしが首を絞めている誰か知らないやつを取り囲んで一気に襲いかかる。あたしはそいつの首を絞めているからあたしもびりびりする。だけどあたしは平気。こんなの何ともない。やつは、いへぇうひぇあはおほはへぇ、とか変な声を出してガタガタブルンブルンしている。それからあたしはそいつの右目に左手の親指を、左目に右手の親指を突っこんで体重をかけて引っかきまわす。ふひ、ふひひひ、ふひっ。ひひひっ。いひひひひっ。ふひひいひっ。

「ばっ、やめっ、おあっ、これっ、ぐあっ、あごっ……なんてな？」

　やつは急に暴れるのをやめてあたしの両手首をがっちりと握にぎりしめる。あたしは発音する。め・え・く・ど・じぇ・ど。途端にやつが燃えだす。あたしはやつの手を振りほどいて飛び離はなれる。いひひっ。ひひっ。やつは起きあがって、上体を倒たおして、自分の身体をきつく抱だきしめる。火がみるみるうちに消えてゆく。やつはそれから両方の眼がん窩かに指を突っこんで、直すような仕し種ぐさをする。そして目を開く。マゼンタの瞳があたしを見つめる。やつは薄うす笑わらいを浮うかべている。

「荒野をうろつき、悪魔たち我々が近づくと殺して食らう。やはりおまえが〝獣〟だ」

「ころして……くらう……」あたしは、あはっ、と笑う。「くらう……ころして、くらう。ふふふっ。あはははっ。ころして、くらう。あたしが、あんたたちを？　ふふっ……」

「何がおかしい、〝獣〟」

「おかしくは、ない」あたしはやつに掌てのひらを向けて「ば・め・ら」と発音する。稲妻が飛ぶ。幾いく条もの稲妻がやつめがけて飛んでゆく。あたしは目を細めて「きれい」と呟つぶやく。やつは身体を丸めて防ぼう御ぎよ姿勢をとる。稲妻に打ちすえられる。「くっ……！」と低く呻うめく。でもそれだけだ。あたしは「うふふふ」と笑う。あたしはどうしてここにいるの。あたしは何をしているの。あたしは何をしたの。魔術を使った。魔術。触しよく媒ばいもなく、ちゃんと呪文も唱えずに。そんなこと、どうやって。わからない。だけどあたしはたしかにそれをやった。でも、だから何だっていうの。あの子は詠唱アリア放棄レナンスができた。あたしはただ呪文を短くしただけ。呪文を縮めて詠唱する。言ってみれ

ば、高速エリプ詠唱テイカ。「何これ」とあたしは笑いながら言う。「何これ？　何なの？　何これ？　くくくくく。あははははは」と大笑いしながら、あたしは考えようとする。どうしてこんなことができるの。いつできるようになったの。わからない。記き憶おくにない。いつの間にかできるようになっていた。悪魔を殺して食べていた？　あたしが？　そんなことを？　たしかにしていたかもしれない。どうやって悪魔を殺していたのか。魔術だ。それ以外にない。でも触媒は有限だ。触媒。さっきあたしは触媒を使わなかった。触媒なしで、呪文を縮めて、魔術を発動させた。「それが……成果といえば、成果……」と呟いて、あたしは笑う。「くくく……ふふふふふ……」

「おまえのように話が通じないニンゲンは初めてだぞ〝獣〟。常じよう軌きを逸いつしているのか」

「悪魔に言われるなんてね」あたしは両手で顔をこする。ずいぶん汚よごれている。手だって汚きたないから、どうにもならない。「そうね。ちょっと頭がイカれてたみたい。でも、もう平気よ。目が覚めたから。で？　あんたは何者？　名乗るような名前はあるのかしら？」

「おれはヴェルドゥレ。ヴェルドゥレ・グォン・カッツァール」ヴェルドゥレという名らしい悪魔は顎あごのあたりで両手を組みあわせて首をかたむけた。「〝悪運のワオラツク・大ハイ公ヴエ爵リオン〟だ」

「ハイヴェリオン……」あたしは噴ふきだしそうになる。だって、笑うしかないでしょう。正気に返って出くわした悪魔が、よりにもよってあのジャリコ・カスパーロウと同じ、地じ獄ごくの大公爵だなんて。あたしはまだ、正気じゃないのかも。なんだかうれしくてしょうがない。「会えて光栄だわ、ヴェルドゥレ。で？　あなたはいったい何をしにきたの」

「ニンゲンのおまえは知るまいがな」ヴェルドゥレは両手を組みあわせたまま、二本の人差し指を立てた。「おれたち大公爵は帝てい王おう陛下を仰あおぎ見る王のようなものだ。陛下の勅ちよく命めいにそむきさえしなければ、何をしてもいいし、何もしなくたっていい」

「答えになってないわね」

「一言でいえば、物見遊ゆ山さんだ」ヴェルドゥレが右手を高々とあげると、遠くで喚かん声せいが起こった。見れば前後左右、全方位で無数の旗が掲かかげられている。悪あく魔またちだ。きっとヴェルドゥレの部下なのだろう。あたしはすっかり包囲されている。おかしくてたまらない。ヴェルドゥレは手を下ろした。「地獄の新たなる辺境を見物して回っている。おまえの噂うわさを聞きつけて、わざわざ探しにきてやったのだ、〝獣〟」

「あたしを〝獣〟なんて呼ばないで。あなたにヴェルドゥレっていう名前があるのと同じで、あたしにも名があるのよ。あたしのことはベティって呼びなさい」

「よかろう、ベティ。おれの遊びにつきあってもらうぞ」

「そうね」あたしは寸刻考える。もう一人のあたしと相談する。ついさっきまでは感じられなかった第三脳。そこにいるもう一人のあたし。どう？　あたしはもっとできると思う。あたしもそう思う。あたしも。あたしも。たとえばこんなふうに。あたしは腰こしから魔術士の剣けんグリギュエンルを抜ぬいて切っ先をヴェルドゥレに向ける。「吼ほえよ雷らい獅じ子し……！」

　今のあたしはありありとイメージできる。天を割って百万の雷かみなりが落ちる。ヴェルドゥレを打ちのめす。そして可能だと信じればイメージは実現する。それが魔術。超ちよう轟ごう音おん。ヴェルドゥレは稲妻の束に貫つらぬかれて「ぶげっ……！」と四し肢しを変な角度に曲げる。倒れる。黒くろ焦こげになって煙けむりをあげている。悪魔たちが騒さわぎだす。知ったことじゃないのよ。あたしはひび割れた唇くちびるを舐なめる。「焼き尽つくせ藍あい色いろ炎えん上じよう……！」と唱えた言葉はあたしの意思を体現してイメージを補助するものでしかない。ヴェルドゥレはたちまち藍色の炎ほのおに包まれて燃えあがる。何だっていいのよね、とあたしは思う。触媒も、言葉もいらない。魔術は自由なんだ。あたしは目を閉じて、開く。あたしは視みる。虚こ空くうに素す裸はだかのあたしが浮かんでいる。世界には際限がなくて、あたしはこんなにも自由なんだ。世界はあたしを拒きよ絶ぜつすることも受け容いれることもない。ただ世界はそこにあって、あたしはここにいる。あたしはこんなにも一人なんだ。なんて圧あつ倒とう的なの。ようやくわかった。お姉様やクルオはこれを視ていたんだ。ありとあらゆるものが存在するのに、あまりにも自分とは無関係な世界。なんて孤こ独どくなの。だけどここには自由がある。



　あたしは思い至る。あたしはお姉様に捨てられた。そのおかげで解き放たれたのかもしれない。あたしは認める。所しよ詮せん、あたしはお姉様の付属物にすぎなかった。お姉様のもとにいても、お姉様から離れても、あたしは結局、お姉様のために生きていた。お姉様から逃げようとして、考えていないふりをして、忘れているふりをして、いつもお姉様のことを気にかけていた。あたしはお姉様

の影かげの中にいた。あたしは一人じゃなかった。あたしはずっとお姉様に抱かれていた。

　あたしはやっと一人になったんだ。

　この寂さびしくて厳しくて悲しい世界と一人で向きあう覚かく悟ごがようやくできたんだ。

　あたしは子供だった。それどころか赤子だった。

「行くわよ」とあたしは自分に声をかけて、グリギュエンルの切っ先で荒あれ果てた地面を示す。裂けよ。爆はぜろ。変化が起こらない。あたしは舌打ちをする。あたしは一つ一つ呪じゆ縛ばくを解いてゆかないといけない。もどかしいけれど、あたしは「大地爆ばく裂れつ無情」と呟いてあたしの魔術を具現化する。すぐに地面がぼこぼこと隆りゆう起きしたり陥かん没ぼつしたりしはじめる。土つち埃ぼこりが噴きあがる。それから炎が。あたしは飛ぶ。だって、あたしは飛べるもの。あたしの身体からだは浮きあがって、落ちない。上じよう昇しようする。あたしは見おろしている。ヴェルドゥレを中心として、蜘く蛛もの巣みたいにひび割れて崩ほう壊かいしてゆく大地を。破壊はどんどん拡大して加速する。ヴェルドゥレが土と炎にのみこまれる。悪魔たちが巻きこまれてはたまらないと後退する。あたしは数える。「五……四……三」とカウントダウンする。「二……」あたしにはわかる。そうなるだろうと思っているし、期待してさえいる。「一……ゼロ」

　その瞬しゆん間かん、ヴェルドゥレが炎と岩土をぐつぐつ煮にこんだスープみたいな様相を呈ていしている地面から這はいだしてくる。ヴェルドゥレの腰から八本の真っ黒い脚あしが生えている。背には乳白色の翅はねもある。ヴェルドゥレは翅を動かして飛ぶ。飛んでくる。

「それがあなたの本当の姿なわけ？」

「本当も嘘うそもない」ヴェルドゥレの面めん貌ぼうは黒い外骨格のようなものに半ば侵しん食しよくされて、昆こん虫ちゆう人間とでも呼ぶべき有様に変わり果てている。「おれはおれだ、ベティ」

「そうね、ヴェルドゥレ。千変万化はこの世の真理だわ」

「おれと賭かけをしないか、ベティ。ニンゲンの女よ」

「何を賭けるっていうのよ」

「すべてさ」ヴェルドゥレはあたしのほうに差しむけた右手を開いてみせる。掌の上には硬こう貨かがのっている。五百ダラー銀貨だ。「これはおまえたちが使っていた貨か幣へいだろう。今、上を向いているほうが表だな。さあ、まずは互たがいの右手の薬指を賭けよう。おまえはどっちがいい。表か裏か」

「いいわ」あたしは笑う。こんな馬ば鹿かげた勝負に乗るなんてあたしらしくない。あたしはこんなことをしない。でも、そのあたしって何？　あたしはあたしを笑い飛ばす。あたしはもっと高く飛びたい。あれもしたい。これもしたい。負けたらたぶん、何もかもを失うか、奪うばわれる。上等じゃない。「じゃあ、表」

「おれは裏だ」ヴェルドゥレは五百ダラー銀貨を親指で弾はじいて真上に飛ばす。落ちてくる。握らずに、右手の甲こうで受け止めた。その直後だった。あたしは「あっ……」と声をもらして左手で右手を握る。ない。薬指が。なくなった。消えた。何らかの力で切断されたのか。でも出血は少ない。断面はきれいだ。きれいすぎる。痛みらしい痛みはない。あたしはヴェルドゥレを見る。あった。ヴェルドゥレが口を開けて、舌を出す。その先だ。ヴェルドゥレの舌の先に、あたしの薬指がぶら下がっている。くねくねと、動いている。まるで舌の一部になったかのように。

「もらったぞ」とヴェルドゥレは発音しづらそうに言う。「おまえの薬指」

「まさか、これで終わりじゃないでしょうね？」

「おまえが欲ほつするのなら、おれがおまえのすべてをいただくまで賭けをつづけよう」ヴェルドゥレが、にやぁ、と笑みを浮かべる。するとその額に耳が生えた。そのすぐ脇わきに鼻らしきものが生えた。触しよつ角かくのようなものが目の上から突つきだした。首から毛むくじゃらの腕うでが飛びだした。ヴェルドゥレはあっという間にさまざまな生き物のいろいろな部位パーツに埋うもれた。ヴェルドゥレの顔はもはや見えないけれど、くぐもった声が聞こえてくる。「まだまだある。ぜんぶ賭けに勝って手に入れた。おまえもおれのものになるんだ、ベティ」

「それはどうかしらね」

「次は右手の小指を賭けよう」

「当然、あなたはあなたの小指を賭けるんでしょうね」

「むろんだ」

「いいわよ。硬貨をちょうだい。今度はあたしが投げるわ」

　いろいろな腕やら脚やらの中からヴェルドゥレの右手が出てきて、あたしに向かって硬貨を投げる。あたしはそれを左手で受けとる。ただの五百ダラー銀貨だ。ヴェルドゥレは強運の持ち主なのか。いかさま師なのか。これは勝ち目のない勝負なのか。勝機を見いだせる可能性はあるのか。わからない。でもあたしは決めている。あたしは挑いどむ。挑んで必ず打ち破ってみせる。あたしにはできる。それを成し遂とげて、あたしはまた一段上る。一段一段上ってゆく。

　待ってなさい、ダリエロ。

　なぜか最初にあの男の名前が浮かんで、あたしは苦く笑しようする。好きでもなんでもない、ゆがみまくった男の顔がちらつく。あいつじゃなくてあんたっていうのは、正直、我ながら意外だわ。あたしは硬貨を握にぎりしめる。あたしはこの世界で一人きり。お姉様に捨てられて、自由になって、一人になった。だけど、あんたたちがいるのね。別れてから、もうどれくらい時間がたったのかもわからないけど、まさかくたばったりはしてないでしょう。胸が一瞬、ざわつく。何なのかしらね、あたしにとって、あんたたちは。ただ会いたい。会いたい。会いたい。会いたい。会わなくたって平気だけど、会いたい。

　あたしはヴェルドゥレに笑いかける。「あたしは、表。あなたは裏でいいでしょ？」

再び　城塞都市シャッコー

　階段を駆かけ下りて第四層から最下層へと向かっている途と中ちゆうだった。大きな黒い目のリスみたいな子こ猫ねこのような生き物が、きゅーの背につかまっているマリアローズの肩かたに飛び

のってきた。「──クルル!?　どこに行ってたんだよ、ほら中に入って……！」コートの中にクルルを突っこむ間も、きゅーは駆けている。階段を下りきって、黒旗が掲げられている司令部を目指して、シャッコーの入り組んだ街路をひた走る。サフィニアはすでに空を飛んで司令部に戻もどっているはずだ。司令部が見えてきた。
きゅーが「くう！」と叫さけんで速度を上げる。マリアローズはきゅーのもふ毛に顔をうずめて、ぎゅっとつかまった。きゅーは一気に司令部に駆けこんだ。奥の部屋へと突っこむ。その寸前だった。クルルがもぞもぞとマリアローズのコートの中から出てきて、廊ろう下かに飛び降りた。そんなにこの部屋に入るのがいやなのか。不思議だけれど、今はそれどころじゃない。部屋にはシャッコーにいないカタリ、ジョーカーとクローディアをのぞくＺＯＯの面々が勢ぞろいして、寝しん台だいを取り囲んでいた。トワニングとユリカは一心に医術式を施ほどこしているみたいだ。サフィニアとロム・フォウ、アルファ、ピンパーネルとハニーメリーが一いつ斉せいにこっちを見た。マリアローズは一瞬、みんなの視線を受け止めた。一瞬だけだった。マリアローズはきゅーと一いつ緒しよに寝台にかじりついた。トマトクンは目を半分くらい開けていた。頭は動かさなかった。目だけ動かした。口が開いて、細い息がもれた。途絶えそうな息が声に変わった。

「マリア……きゅー……」

　きゅーは「くう！」と答えて何度もうなずいた。マリアローズは何も言えなかった。唇をぎゅっと引き結んで耐たえた。身体中に力をこめていないと、ぐちゃぐちゃに、ばらばらになってしまいそうだ。黄玉トパーズの瞳ひとみをじっと見つめ、ありとあらゆるものを抑おさえつけて、落ちつけ落ちつけと頭の中で繰くりかえし念じた。そうこうしているうちに、トマトクンが右手を持ちあげようとした。マリアローズはとっさに「いいから！」と制止して、ため息をついた。やっと笑えそうな気がする。マリアローズはトマトクンに笑いかけた。

「おかえり、トマト」と言うと、すぐに「ああ」と返事があった。思いのほか力強い声で、胸がいっぱいになった。

「ずいぶん寝ねぼすけだね」

「すまんな」

「ほんとだよ。いくらなんでも、寝すぎだから。いいけど。……も

う、いいんだけど」

「そうか」

「うん」

「カタリはいないんだな」

「南のほうに行ったよ。たぶん今ごろ、秩ちつ序じよの番人とかモリーやリーチェたちと合流してるんじゃないかな。絶対、無事だと思うよ。だって、カタリだしさ」

「あいつのことだからな」

「だから、心配しないで」

「ああ」

　トマトクンが目をつぶって、マリアローズは息をのんだ。最悪の事態が脳のう裏りをよぎっただけじゃない、マリアローズの全身をまたたく間に支配した。もしそうなったら、生きていられなかったかもしれない。さいわいそんなことは起こらなかった。トマトクンはひっそりと言った。「ジョーカーがきたら、起こしてくれ」

　それからおそらく一時間くらい、誰だれも、一言もしゃべらず、トワニングとユリカをのぞけば身動きもほとんどしなかった。全神経を集中してトマトクンの様子をうかがいながら、ジョーカーとクローディアを待った。ようやく扉とびらが開いて、二人が入ってきた。マリアローズはトマトクンに声をかけようとした。その前にジョーカーはいまいましげに舌打ちをして「起きろ、阿あ呆ほう」と唾つばを吐はきかけるように言った。トマトクンは「む……」と低く唸うなって、ゆっくりと目を開けた。「きたか。ジョーカー」

「貴様が目を覚ましたというから、わざわざきてやったのだ。感謝しているのなら、せめて辞世でも詠よんでみせろ。いや、よせ。貴様の下手な詩うたは聞くに堪たえん」

「まだ死ぬつもりはない」

「どこからどう見ても貴様はただのくたばりぞこないで、今にもくたばりそうだがな」

「たしかに」トマトクンはほんの少しだけ頭を動かした。うなずいたのか。「この身体はだめだ。もう保もたん」

「で、どうするつもりなのだ。何か手でもあるのか」

「なくもない」

「ほう」ジョーカーはマリアローズを押しのけると、手をのばしてトマトクンの顎あごをつまんだ。「ためしに言ってみろ。聞いてやらんでもない」

「ソオル」とトマトクンは、たぶん虚こ空くうに向かって呼びかけた。その名をマリアローズは知っていた。その姿を見たこともある。もう何年も前だ。マリアローズは振ふり返った。そこに、唐とう突とつに、無から生まれるように出現したとしか思えない。彼は扉の前に立っていた。純白の布を頭から被かぶっていて、顔はよくわからない。このクソ寒いのに、ずいぶん薄うす着ぎだ。でも、そんなことはどうでもいい。彼の右腕は左腕のようで、左腕は右腕のようだった。逆さまの腕を持つ、おそらくソオルという名なのだろうその男を、マリアローズは知っている。あのときもそうだった。一いつ瞬しゅん前にはいなかったはずなのに、そこにいた。神ロシュとなった血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの団長アロンズ・ニードルスピアとの決戦、その最終局面で、ソオルは現れて、きっとトマトクンに手を貸した。恩人、と言っていいのだろうか。恩人。いや、違ちがう。恩人じゃない。人のはずがない。

「やあ、友よ」ソオルは少しだけ身をかがめて一礼した。「呼びよせてもらえて光栄だよ。でも、もっと早く呼んでくれてもよかったという思いは禁じえないね。君はもうぼろぼろじゃないか」

「汚けがらわしい気配だ」ジョーカーはソオルをにらみつけて佩はい刀とうに手をかけ、「貴様、人ではないな。悪あく魔までもない。かの人じん竜りゅうにいくらか似ている。そうか」と呟つぶやくように言って、獰どう猛もうな笑えみを口くち許もとに刻んだ。「ソオル。彷ワ徨ンえダるリ星ン神グソオル。──貴様、神か」

「残念ながら、正解ではないね」ソオルは左手のような右手と右手のような左手を広げてみせた。「僕はかつて君たちが神と呼ぶものだったこともあるけれど、今はそうじゃない。ざっくばらんに話そう。僕はこの世界の管理者を自任している神の力をある程度は有している。でも、神の権能はない。僕は限定的な存在なのだよ、ジャ

ン・ジャック・ド・ジョーカー。世界のありようを規定することも、行き先を設定することも、僕にはできない。それは僕の手にあまる。僕は管理者でも導き手でもない。堕おちた神と呼ばれることもある。堕だ神しんと。僕はあらゆる事象、全次元、全平面の狭はざ間まにいるもので、その意味ではどこにでもいるし、どこにもいない」

「神ごときが、偉えらそうに人お間れたちの言葉をもてあそぶな」

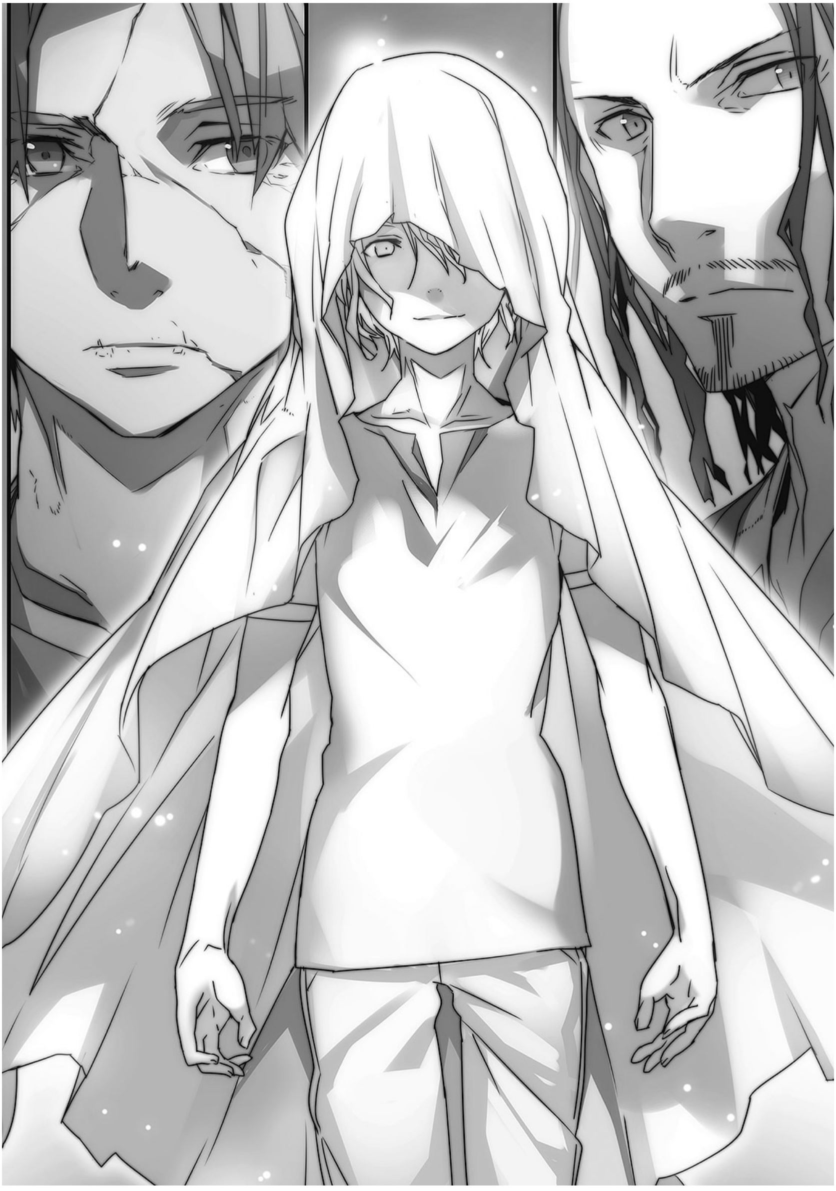
「そんなつもりはないのだけれどね。存在自体が曖あい昧まいな僕には、居場所が用意されていないのかもしれない。僕はどこへ行っても招かれざる客だ」

「わかっているのなら、出張ってくるな。己おれたちのことは己おれたちがどうにかする。貴様らの出る幕ではない。消え失うせろ」

「とはいえ、僕は友に呼ばれたからきたのだよ。めずらしいことにね」

「そう。貴様も貴様だ、阿呆め」ジョーカーはトマトクンを一いち瞥べつした。その手はまだ刀の柄つかを握ったままだ。いつ抜ぬいてもおかしくない。「くたばりかけているからといって、神なんぞに頼たよろうというのか。貴様には矜きよう恃じというものがないのか。生々流る転てんは世の常だ。生き物は生まれて死ぬものだ。死なねばならんのなら死ね。どうせ死ぬのなら、美しく死んでみせろ。そのくらいの気き概がいすらないのか、貴様には」

「ジョーカー」トマトクンは喘あえぐような息を二、三度した。「まだだ。俺はまだ死ねん」



「主人公気どりか。だがな、貴様が死んでも世界は回る。どうしても未練が断ちきれんのなら、いっそ今ここで己おれが息の根を止めてやってもいいのだぞ」

「だめだ。やることがある」

「それが貴様にしかできんとでも？　思いあがるなよ、下げ郎ろう。たとえ貴様が、貴様らが特別だとしても、それが何だ、いったいどうしたのだと言い放ち、億万の犠ぎ牲せいを払はらってでも、我らは進む。人はそうして歩んできたのだ。貴様が死のうと、己おれが死のうと、世界はつづくし、人が歩みを止めることはない。生きて死するに、何を恐おそれることがある。何を惜おしむことがある。この期ごに及およんで何をじたばたすることがある。恥はじを知れ」

「恥も外聞もあるものか」トマトクンは歯は噛がみした。「死ぬわけにはいかん。俺は死にたくないんだ、ジョーカー。嗤わらいたいなら嗤え。痛くも痒かゆくもない」

「そうまでして」ジョーカーは刀の柄から手を離はなして、目を伏ふせた。「──そうまでして、貴様は生き恥をさらしたいわけだな」

「まあ、そうだ」

「ならば、何も言わん。己おれの関知するところではない。好きにしろ」ジョーカーは身をひるがえした。「行くぞ、クローディア」

「はい、主様マスター」

「え、ちょっ──」マリアローズが止めようとしたときにはもう、ソオルが二人に道をゆずっていた。二人は部屋から出ていって、扉が閉とざされた。何だよ、あの態度。呆あきれて物も言えない。だって、仲間じゃないか。友だちなんじゃないの？　それなのに、もう死にかけてるんだからそのままおとなしく死ねみたいな、そんな言い方をするなんて。ひどいっていうか、わけがわからない。意味不明だよ。何なんだよ、あの男。

　嗤ったりしない。嗤うわけがない。マリアローズはトマトクンを見た。トマトクンは顔を少し横に倒たおして、ジョーカーとクローディアが出ていった扉のほうに目をやっている。いいよ、何もしなくたって。いいんだよ。そんなことより、死んでほしくない。とにかく生きていてほしい。

「トマト」トワニングが静かに語りかけた。「おぬしの申すとおり、拙せつ僧そうとユリカの見立てでも、おぬしの肉体はそう長くは維い持じできぬ。というより──徐じよ々じよに死し滅めつしつつあるのを、医術式でなんとか食い止めておるというのが実情なの

だ」

「ああ」トマトクンはかすかにうなずいた。「だろうな。わかってる」

「はっきり言うわ」ユリカは皆みなを見まわした。「このままだと、もって十日。しょれ以上は、わたしとトワニングには保証できない」

「十日……」サフィニアはうつむいて、ふらついた。放っておいたら倒れてしまう。マリアローズは慌あわててサフィニアを支えた。ロム・フォウはトマトクンをエメラルドグリーンの瞳で見すえて、何を思っているのか。アルファはロム・フォウを心配そうに見上げている。ピンパーネルがこらえかねたように、はぁ……と息をついて、ハニーメリーがその腕うでをつかんだ。

　十日。十日間。一日が二十四時間だから、二百四十時間。一時間は六十分なので、一万四千四百分。長いのか、短いのか。長いわけがない。でも、よくわからない。

「決めたのだね、友よ」ソオルはゆったりとした足どりで寝台に近づいた。「君が僕を呼んだということは、そう思っていいのだろうね」

「他ほかに方法がないみたいだ」トマトクンは咳せきをしようとしたが、胸がわずかに上下しただけだった。「結局、お前の目もく論ろ見みどおりなんだろうな、ソオル」

「それは誤解であり、曲解だね。僕には目論見などないよ、大量のデイ死のオ上にロツ立つ者ト。そもそも、君に手を貸して、僕に何かいいことがあると思うかい」

「じゃあ、何のためだ」

「そうだな。しいて言えば、君がどうするのか見たい」ソオルは左手のような右手の指先をトマトクンの頰ほおにそっとふれさせた。「ああ。ひどいな。ここまでひどいとは。いずれにしても、僕は危険を冒おかすことになるし、君たちもそれは同じだ」

「君たち……？」トマトクンは目をすがめた。

「手順を説明しよう」ソオルはマリアロアーズたちに視線をめぐら

せた。「単純だ。これから僕が、そこまでの道を作る。あとは君たちが彼をそこまで連れてゆく──というよりも、運ぶといったほうがいいかな」

「そこ？」マリアローズは唇くちびるの端はしを軽く噛んだ。「そこって……どこだよ？」

「彼が囚とらわれている場所だよ」

「囚われてるって……でも、トマトはここにいるじゃないか」

「これは彼の身体からだじゃない。僕があつらえてあげたものだ。彼の身体とそっくり、いや、ほぼ同じと言ってもいいかもしれない、でも、決定的なものが足りない」ソオルは頭から被っていた布を外した。何だろう、この男は。マリアローズは目を瞠みはった。おかしい。この顔。変だ。どう表現すればいいのか。一定じゃない。見るたびに、見なおすたびに、印象だけじゃない、目鼻立ちが変わる。男を特とく徴ちようづけるものは、逆さまの腕と、服装くらいだ。ソオルは誰かのような、誰でもないような顔を微笑ほほえませた。「君たちにしてみれば、大昔ということになるだろうね。彼は神を殺した。その後、神を殺した者はいくらかいるけれど、最初の神殺しは彼だ。彼に斃たおされた神の名は〝無限のダイアデルタ〟。しかし、彼も瀕ひん死しの重傷を負って、その命は尽つきようとしていた。一方、ダイアデルタはいずれ蘇よみがえっただろう。何しろ、その名のとおり、ダイアデルタは無限の力を持つ神だったからね。でも、そうはならなかった。ディオロット、僕はこの話をしてもいいのかな」

「かまわん」トマトクンは目をつぶった。「──いずれ話すつもりだった。ただ……どう話せばいいか、わからなかったんだ」

「じゃあ、つづけよう。──彼は、ダイアデルタの心臓を喰くらったのだよ。無限の心臓を。そして彼は、永遠に尽き果てることのない命を手に入れた」

「永遠に……」サフィニアは震ふるえだして、マリアローズにしがみついた。不死性イモータリテイの獲かく得とく。それは魔術士にとって、究極的な目標の一つだという。魔導王たちでさえ到とう達たつできなかったその高い、高すぎる頂を目指して、サフィニアをふくめた現代の魔術士は自分の限界に挑ちよう戦せんしつづけている。トマトクンはずいぶん前からその場所にいたのだ。

予想どおり、とまではいわない。でも、ひょっとするとそうなのかもしれない、くらいには考えていた。だって、「俺はだいぶ長く生きてきた」と、自分で言っていたし。「でもな。生きてるって実感は正直、なかったんだ」って。「今は違う。お前たちのためなら、死んだっていい。お前たちがいるから、死にたくないとも思う。俺は生きてる」。それだけじゃない。「お前たちのおかげで、俺は何もかも手に入れた」とも言っていた。「俺にとっての世界ってものが何なのか、ようやくわかったんだ」って。気が遠くなるほど長い時間を生きてきたはずなのに。それはきみにとって、いったいどういう時間だったのかな。きみの前にはきっと、数えきれないほどの敵が立ちはだかって、きみはそのたびに打ち負かしてきたに違いないけれど、近しい人だってやっぱりいたはずで、でも、彼ら、彼女らは永遠の命なんて持っていなかっただろうから、そのうち全員、きみを残して去っていった。あまりにも多くのものを失いながら、きみは生きてきた。その果てに僕らと出会った。理由なんてわからないけれど、その出会いはきみにとって特別だった。何もかも手に入れた、ときみが実感するほどに。もちろん僕はそんなたいそうなものじゃない、だけどうれしいよ。うれしくてたまらないよ。きみに会えてよかったよ。あのとき、鉄てつ鎖さの憩いこい場で、馬ば鹿かに変なことをされそうになって、きみが「おい」と声をかけてくれた。とんでもなく派手な恰かつ好こうをしていて、手には木製の看板を持っていた。きみの姿を、はっきりと覚えている。あの偶ぐう然ぜんがなかったら、僕は今、ここにいないかもしれないなんて、考えただけで身体が砕くだけ散ってしまいそうになるよ。きみのおかげなんだよ。大切な仲間ができて、大好きな友だちができた。きみがいたから、僕はここまでこられたんだよ。きみはいつか言ったよね。「お前が他のやつを大事に思うように、他のやつもお前を大事に思ってる。自分の命だけ安いなんて考えるな」って。そうだよね。そのとおりだよ。僕は僕が好きな人には死んでほしくないし、僕だって死にたくない。だけど僕は、僕たちは、きみを置いてゆくことになるのかもしれない。きみはまた一人になるのかもしれない。やだよ。死にたくない。きみを一人にしたくない。ねえ、トマト、きみはずっと、その予感を自分一人で抱かかえて生きてきたの？　これまで繰くりかえしてきた無数の出会いと別れがその予感を確信にして、きみをじわじわとむしばんできたんじゃないの？　僕らのことを大事に思うたびに、きみは寂さびしくなかった？　つらくなかった？　それでもきみは「守らんとな」と言った。「守ってみせるさ。何があろうと、な」って。そして、そのために、僕らを守るために、壊こわれそうな仮かり初そめの身体をどうにかしようとしている。

「馬鹿だよ」

　マリアローズは笑った。

　笑うしかないじゃないか。

「馬鹿だよ、トマト。きみってやつは……大馬鹿野郎だよ」

　トマトクンはマリアローズを見つめかえして、唇の片端をつりあげてみせた。

「だろうな」

「ふむ」ソオルはよくもあれで腕を組めるものだと思わざるをえないような奇き怪かいきわまりない腕の組み方をした。「なるほど。もしかすると、その大馬鹿野郎と君が呼ばれるようなところに、僕も興味を引かれているのかもしれないね」

「……あの」サフィニアが冷気を放って鋭えい利りすぎる眼まな差ざしをソオルに送った。「……あなたには、トマトクンのことを大馬鹿者呼ばわりしてもらいたくないんですが……」

「これは失敬。でも、彼のすることはなかなかにでたらめだよ。たとえば━今から、どれくらい前になるのかな。君たちの尺度でいうと、そう、千年ほど昔、ということになるのだろうね。簡単に言えば、今回と同じようなことが起こったのだ」

「今回……？」とトワニングが髭ひげを震わせると、ユリカが愛らしい眉まゆをひそめた。「しょれって━エルデンが浮ふ上じようしたり、異界生物フリークしゆがあふれ出てきたり……？」

「当時はエルデンという街は存在しなかったね。あの場所には剝むきだしの大穴ギガボロスがあった。今回はどうやら違ちがうみたいだけれど、前回は偶ぐう発はつ的に魂限界アニマオーバー突破フローが発生して、この世界と地じ獄ごくとがいわば霊的に接近した。そして、両者の接せつ触しよく面が拡張し、君たちが悪あく魔まと呼んでいるものたちが、この世界に大挙して押しよせてきたのだよ」

「千年前に、そんなことが……？」マリアローズは親指を軽く嚙んだ。「でも、そんなの、僕らは知らない。僕が無知だからとか、そういうことじゃないよね？」

「うん」ハニーメリーがうなずいた。「専門じゃないけど、歴史はあたし、人並み以上に学んでるはず。だけどその出来事は、あたしも知らない。聞いたこともない。魔導王時代が終わったときに、何かがあったんだろうってことは言われてるし、遊戯戦争ランプウオーがそれなんじゃないかっていう説が有力だけど、決め手がないから。とくに魔導王時代末期からオーメネイジが始まるまでの間は、史料がすっぽり抜ぬけてる。魔導王たちが互たがいの魔術と軍勢を競いあわせたっていう遊戯戦争ランプウオーにしても、正確なことはほとんどわかってない」

「魂限界アニマオーバー突破フロー」トワニングが唸うなるように言った。「……もしや、蘇そ生せい式が機能しなくなったことと、何か関係が？」

「そのあたりは、僕にはよくわからないね」ソオルは少しだけ首をかしげ、左手のような右手で顎あごをつまんだ。「マグニデアは神しん竜りゅうたちの領分だから。僕らはマグニデアの領域を神竜の長たる祖竜に与あたえただけで、その設計から構築に至るまで彼らが行った。神といえども、マグニデアに入りこむことはできない。僕らは魂アニマを持たないしね。──ともかく、それはかつて起こり、今も起こっている」

「わたしたち、人間は……」ユリカが呟つぶやくように言った。「千しえん年前にも、地獄の悪魔たちと、戦争しえんしようをした……？」

「そう。君らが魔導王と呼ぶ人間の王たちが中心となって、悪魔や、彼らと同盟を結んだ異界生物フリークスたちによる侵しん攻こうを防ぐべく、戦った」

　ピンパーネルが小さな息をもらして、彼の腕をつかんでいるハニーメリーの指の上に手を置いた。ロム・フォウは相変わらずトマトクンをじっと見すえている。きゅーが「きゅう……」と心細そうな声を出し、アルファがぶるるっと大きな身体を震わせた。

　ソオルはトマトクンを見おろして、目を細めた。「当然、彼もね」

千年前　大穴ギガボロス前

「お心は変わりませんか」と女は男の背に向かって言った。ともすると声が、身体中が細かく揺ゆれだしそうだが、彼女は女王だ。タナソア王国の貫つらぬく矛ほこにして磐ばん石じやくの盾たてであったタナソア聖騎き士し団はあまたの聖騎士を失い、もはや形けい骸がいすらとどめていない。王国はすなわち彼女であるといっても過言ではなく、彼女が常に凜りんとしていなければ国はまたたく間に倒たおれる。だが、国？　国土は陵りよう辱じよくされるかのように踏ふみにじられ、民たみは虐ぎやく殺さつされ、離り散さんした。わずかな兵のみが彼女に付き従い、また、ごく少数の生き残った聖騎士たちが他国の軍に参加して、血を燃やし、命を費ついやして、王国いまだ健在なりと証明しようとしている。彼女は彼の後ろ姿の向こうへと目をやった。払ふつ暁ぎよう前の濃こい紫むらさき色いろに染まった曇くもり空と地平線の間が黄色く燃えている。蠢うごめく無数の影かげは悪魔ら異界生物フリークスだ。見み渡わたすかぎり櫓やぐらや柵さく、天幕や簡素な建物が立ちならんでいる。本当に王国が形を保っていたら、こうして女王みずから敵の目を盗ぬすんで大穴ギガボロスに接近することなどできようはずがない。彼女はなるほど無責任きわまりない愚ぐ行こうを演じている。しかし、責任の重量自体が軽くなっているのだ。さもなくば、いくらなんでも彼を送りだすためにこんな場所までくることなどできない。したくてもしなかったはずだ。すでに王国は滅ほろんだ。彼女はその残ざん滓しでしかない。

「いいかげん引き返せ」と彼はこちらを見ずに言った。乾かわききってひび割れた彼の声はいつも彼女の胸を打つのだ。彼女は彼に歩みよる。むろん自制しようとしたが、抑おさえきれなかった。彼女は彼の背にすがりつき、茫ぼう々ぼうと渦うず巻まく頭とう髪はつに顔をうずめた。「どうか思いとどまってください、サー・ディオロット。いかに貴方あなた様といえど、お一人では危険です。お命を無む駄だになさらないでください。妾しようには、いえ、我らには貴方様が必要です」

「命か」彼はもしかすると笑ったのかもしれない。彼が笑うところなど見たこともないが、そのように感じられた。「どうだっていい。俺は征ゆく。どけ、ジブリール」

「いやです」

「邪じや魔まだ」彼は彼女を突つき飛ばした。彼女が尻しり餅もち

をつくと、供の者たちが駆かけよってきて彼に抗こう議ぎしようとしたが、皆みな、一いつ斉せいに全身を硬こう直ちよくさせた。彼が顔を半分振ふり向かせて供の者たちをねめつけたのだ。その黄玉トパーズの瞳ひとみに見つめられて怯ひるまぬ者はいない。彼女とて恐おそろしい。恐きよう怖ふが彼女の汚けがれを知らない身体からだを貫いて、全神経を痺しびれさせ、涙るい腺せんを刺し激げきする。彼女は必死に涙なみだをこらえた。熱い。この身の底が、芯しんが。彼女は右みぎ腕うでで胸を締しめつけ、左手を腹部に押しつける。強くきつく。彼はかまわず前を向いた。そして歩きだす。彼の手が大懺滅刀カタストロフアーの柄つかにかかった。その刀身は竜玉や逆げき鱗りん、竜骨や竜の腱けんを素材とした七百七十七枚の鱗りん牙がと骨組みによって構成され、信じがたいほどの長さまで伸しん長ちようする。それは彼にしか扱あつかえない、彼のために製造された最悪最さい凶きようの兵器だ。彼女は叫さけびたい。いっそ妾をその剣けんで斬きり捨ててくださいまし。貴方様の剣で斬り裂さかれるのなら本望でございます。斬っていただけないのなら、置いてゆかないで。連れていって。だが彼は、彼女が這はいつくばって懇こん願がんしても聞き入れまい。彼は進む。一歩ごとに空気がびりびりと震え、地面が揺れる。一キルメーテル先からでも感じられそうな殺気だ。果たして、大穴ギガボロス前の地獄連合軍後方陣じん地ちに動きがあった。敵だ。あふれて、こちらに向かってくる。有う象ぞう無象の中からのっそりと起きあがったあの巨きよ大だいな悪魔は、身みの丈たけ十五メーテル超ちようのドアンガルだろう。一体ではない。何体も、何十体もいる。ドアンガルたちが押しよせてきても、彼は止まらない。彼女は「ああ……！」と悲鳴をあげた。このままでは踏み潰つぶされてしまう。その寸前だった。大懺滅刀カタストロフアーが唸りをあげる。さながら黒竜だ。黒竜が猛もう威いをふるい、一体のドアンガルを一刀両断し、別のドアンガルの両りよう脚あしを真っ二つにして、さらに別のドアンガルを斜ななめに断ち斬った。彼が走りだす。彼に殺さつ到とうしようとしていた敵の大軍が動どう揺ようし、足並みを乱した。彼はそこに斬りこんで大懺滅刀カタストロフアーを旋せん回かいさせた。叩たたき斬られ、ちぎれ飛び、撒まき散らされる血肉と骨、金属が、旋風となって夜明け前の空を舞まい、大地に降りそそぐ。彼は息をするように、いや、息をするよりもたやすく敵を殺す。皆殺しにする。彼女はいつの間にか荒あらい呼吸をしている。熱い。さっきよりもっと熱い。彼が手当たり次し第だいに敵を殺す。その光景が彼女を昂たかぶらせている。さっきこらえた涙がこぼれて彼女の白くやわらかな頰ほおを伝う。彼女は駆けだす。供の者たちの制止を振りきって彼を追いかける。サー・ディオロット。サー・

ディオロット。サー・ディオロット！　サー・ディオロット……！　彼女は彼の名を呼ぶ。彼は振り向かない。二人の距きょ離りは縮まらない。やがて彼が討うちもらしたというより彼から逃のがれた敵が彼女を見つける。敵が彼女に襲おそいかかってくる。敵など彼女の眼中にない。ただの障害物でしかない。単なる障害物のくせに、汚れを知らない彼女にふれようとする。赦ゆるせない。赦せない。赦せない。赦せない！　赦せない……！

彼女が「腐れ落ちアインロなさいツタール」と呪のろいの言葉を発して彼女の魔術を発動させると、敵はみるみるうちに黒ずみ、腐ふ敗はいして、崩くずれ落ちてゆく。

人は彼女を〝恵めぐみと慰なぐさめのジヴリール〟と呼ぶ。人は彼女に仁じん恵けいと慰い藉しやを求める。彼女は惜おしみなくそれを人々に与える。彼女は生まれながらの女王だからだ。

しかし彼女の才能は、彼女の資質は、彼女の魔術は、それとは相反する性質を持つ。

彼女の魔術は呪いに他ほかならない。彼女の魔術は腐敗と腐食をもたらす。

彼女は呪いを振りまいて彼のあとを追う。もう彼の姿が見えない。彼は遠くにいる。

我々は、人間は、劣れつ勢せいだ。それも、戦せん況きようは圧あつ倒とう的に不利だ。

人間の領土は蹂じゆう躙りんされ、人間は殺さつ戮りくされ、人間の軍は敗退に敗退を重ねている。

彼だけだ。ただ一人、彼だけが、逆ぎやく襲しゆうに転じようとしている。彼は単身、たった一人で敵軍を切り裂き、大穴ギガボロスから地獄に攻せめ入ろうとしているのだ。

当然、彼女は押しとどめようとした。ここまでついてきたのも、彼を見送りたかったのではない、最後の最後まで彼を説得するためだった。喉のどが破れてもいい、声をかぎりに彼の名を呼ばわりながら、彼女は痛切に思っていた。行かせてはいけなかったのだ。何がなんでも行かせるべきではなかった。彼とはもう二度と会えない。これは予感などではない。彼女にはわかる。きっと彼は帰って

こない。彼女にはわかるのだ。ようやくわかったのだ。女王として、王国の象しよう徴ちようとして、あまねく民の敬けい慕ぼと親愛を一身に集める者として、彼女は生しよう涯がい誰だれとも交わらないことを誓ちかい、これをおのれに課した。彼女は恋こいもしなかった。しなかったのだ。初めてだった。最初で最後の恋だった。彼女は絶ぜつ叫きようする。「サー・ディオロット、妾は、妾は、ずっと貴方様をお慕したい申しあげておりました……！」

　彼に抱だかれたかった。

　一度でいいから、その腕で抱きしめて、その胸に抱いてほしかった。

　ああ、でも、彼女がのばした手は彼には届かない。彼は遥はるか彼方かなたにいる。彼女の足がもつれる。彼女は地面に膝ひざを、手をつく。彼女は泣き濡ぬれた顔を上げる。彼女にできることは何だろう。彼のために、何ができるだろう。彼女は胸の前で両手を組みあわせる。

　人は彼女を〝恵みと慰めのジヴリール〟と呼ぶ。だが彼女の慈いつくしみと慰い撫ぶは彼女の天性ではない。女王となるべくして生まれ、女王にふさわしいものとして作られ、作りあげてきた。彼女の本質は腐くさらせ、朽くちさせる呪いだ。彼女は深い闇やみを覆おおい隠かくさんがためにまばゆい光をまとった。しかしこの暗い時代を照らすほどの光ではない。彼女の光に包まれ、くつろぎ、安らいでいた者たちの大半は死んだ。彼女を信じて大勢が死んだ。彼女の光はもう何の役にも立たない。彼女は祈いのり願い愛し救う者〝恵みと慰めのジヴリール〟などではない。

　ああ、ただただ呪いあれ。

　彼女は光を脱ぬぎ捨てる。本来の彼女がその下から現れる。

　彼女は闇の女、彼女は魔導王〝呪いと傷いたみのジヴリール〟だ。

「腐敗しウラ腐乱しルバ腐食しス・朽ちロツテル果てよツイア」

　彼女は呪じゆ詛その言葉とともにすべての魔ま力りよくを解き放つ。彼女に近づこうとしていた敵だけではない。草花が、土が、岩までもが腐りはじめる。呪いは同心円状に広がってゆく。急速に。

彼女は自分の指先が青く、次第に黒く変色しているのを認める。彼女のたぐいまれな呪いの魔術が彼女にまで影えい響きようを及およぼしていることを知る。彼女のきらめくほどに美しかった爪つめが、指が、手の甲こうが、腕が、ぐずぐずに腐って悪あく臭しゅうを放っている。血管も筋肉も骨までも腐敗しつつある。もう二度と彼に会うことが叶かなわぬのならば、それもいいと彼女は思う。この身を呪いと化そう。ああ、呪いあれ。呪われよ。何もかも呪われてしまえ。それが彼女の恋だった。彼女の恋は腐って朽ちた。

城塞都市シャッコー

「──こうして彼は単身、地じ獄ごくに攻めこんだ。それは不意打ちだった。地獄の帝てい王おうが在まします地獄の中心を目指して突き進む彼を止めるべく、悪魔たちは次々と兵力を投入した。でも、彼は止まらなかった。地獄の軍勢は乱れた。これさいわいと魔導王たちが反はん撃げきに打って出て、ここを死地と定めて奮戦すると、悪魔たち異界生物フリークスの連合軍は押され、各地で敗走し、戦線が崩ほう壊かい、人間も、悪魔も、それ以外の異界生物フリークスも、すり鉢ばちに放りこまれて挽ひき潰されるように死んだ。死の上に累るい々るいと死を重ねて、人間は悪魔と異界生物フリークスを少しずつ押しかえしていった。とどめはある魔導王の魔術だった。魔導王は九く頭ず竜りゅうを駆り、大穴ギガボロスをふさいでしまったのだ。それは神竜になる寸前の大いなる竜、つまり九頭竜の肉体と、それからおびただしい命を用いた、異様なまでに巨大な魔術だった」

　サフィニアは青白い顔で下した唇くちびるを噛かんだ。「古代九頭竜の呪い……ですね……」

「そう」ソオルはうなずいた。「退路を断たれた異界生物フリークスたちは浮うき足立ち、各個撃破の憂うき目に遭あって、ついに滅ぼされた。人間は勝った。しかし、彼は帰らなかった。地獄の深い、深い場所まで攻めこんだ彼には引き返す方法などなかったし、新たな、広大な領土の獲かく得とくに失敗した悪魔たちにしてみれば、大敗北の元凶とすらいえる彼を逃にがすわけにはいかなかった。彼は悪魔の標的となった」

千年前　地獄

　歩く。ひたすら歩く。行く手に立ちふさがるものがあれば、大殲滅刀カタストロフアーを打ち振るう。ときに矢や槍やり、礫つぶてが降りしきる。いちいち払はらいのけてなどいられない。この身に突き刺さり、貫つらぬくのに任せて、彼は歩く。痛みは忘れた。無限の心臓は流れたぶんだけの血を即そく座ざに生成する。手足がちぎれ飛んでも、またたく間に修復してしまう。敵。敵。敵。俺は敵を求めているのか。彼にはわからない。彼の見る風景には色がない。無限の心臓が脈打つ彼の胸はほとんど波立たない。俺は何をやってるんだ。浮かんだ問いには重さも質感もない。ただこの手に武器を握にぎっているという実感だけはある。生きるために喰くらうために竜を殺した。あのときからだろうか。彼は同じことを繰くりかえしている。習慣。彼は考えない。何も考えない。めんどうくさくてやめてしまったのか。いつか彼は狂きよう気きを求めた。破壊に取り憑つかれたいと彼は願った。狂気なんてそんなだいそれたものの種は彼の中のどこを探しても見つからなかった。それでも目の前に敵がいれば彼はそれを壊こわそうとする。ほとんど自動的に。習慣。習性。彼には意思なんてない。彼には心がない。無限の心臓。彼を生かすもの。彼は無限の心臓そのものなのかもしれない。無限の心臓が血を流すことを望んでいる。自分と他者の血を。血を流して血を生産しつづける。それが彼の本能なのかもしれない。彼は歩く。左ひだり脚あしを引きずって歩く。歩きづらい。左膝に剣がぶちこまれている。彼はそれを抜ぬいて捨てる。歩く。歩く。もう血は止まっている。傷きず跡あとさえない。影かげ法ぼう師しよりもあやふやな敵が彼の前進を妨さまたげようとする。彼はやつらが放つ矢や弾だまをよけもしないで大殲滅刀カタストロフアーを振るう。やつらを殺す。右目に刺さった矢だけは抜いておく。すぐ見えるようになる。彼は歩く。歩いて、すれ違ちがう。──すれ……違う？

　彼はそのあとで足を止める。彼は今、誰だれかとすれ違った。振り向く。相手は少し遅おくれて振り返った。まるで人間のようだ。十五かそこらの、成長しきっていない、やや中性的な、妙みように容姿が整っていて、清潔なのに不潔きわまりない、少年とも青年とも言いがたい男が、にじむような黒々とした瞳でこちらを見ている。髪かみも漆しつ黒こくだ。身にまとう黒と紫むらさきの衣ころ

もにはところどころ切れこみが入っていて、なめらかな肌はだがのぞいている。どう見ても尋じん常じようじゃない。それなのに、すれ違った。ここは地獄だ。敵のはずだ。わかりきっている。彼はなぜ大懺滅刀カタストロフアーで斬りつけなかったのか。あいつは何者だ……？

「初めまして」と男は言った。微笑ほほえみながら。「私はアーマン。悪魔大公グランヴエリオンアーマン。帝王の息むす子こだ。端たん的てきに言って、私は地獄で二番目に偉えらい」

「帝王の、息子」彼は一いつ瞬しゆんで切りかえる。大懺滅刀カタストロフアーを繰りだす。「それがどうした」

「どうもしない」アーマンは大懺滅刀カタストロフアーの餌え食じきとなった。たしかに大懺滅刀カタストロフアーはアーマンをとらえたのだ。斬り裂かれたはずのアーマンが、しかし、小こ揺ゆるぎもしないで立っている。悠ゆう然ぜんと。「私はただ挨あい拶さつをしただけだ」

「まやかしか」彼は大懺滅刀カタストロフアーを引きよせて振ふりかぶる。七百七十七枚の鱗りん牙がが瞬時にアーマンを取り巻く。押し潰そうとする。今度は、アーマンは逃げた。真上に跳とびあがって右手を横に突つきだすと、その先に黒い炎ほのおの柱のような、剣けんのようなものが現れた。アーマンはそれを握りしめて「私の力を見せよう」と言ったときにはもう、彼の目と鼻の先に迫せまっていた。頭から、いや、顔から突っこんでくる。少し首をかたむけ、ニタニタ笑って。彼はとっさに大懺滅刀カタストロフアーを引き戻もどした。大懺滅刀カタストロフアーで防ごうとしたのだ。できなかった。黒こく炎えんの剣と大懺滅刀カタストロフアーとは衝しよう突とつした。そのはずなのに、すり抜けた。黒炎が轟ごうと唸うなって彼をのみこんだ。味わったことのない衝撃だった。ともあれ炎などではない。彼は打ちのめされ、刺し貫かれて、叩き潰され、熱せられて、冷れい却きやくされ、木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだかれた。いや、粉ふん砕さいされる寸前のところで、彼は持ちこたえた。粉々になりかけた彼を、無限の心臓が繋つなぎ止め、もとどおりにしたのだ。彼は転がって後退した。

「さすがだ」アーマンは黒炎の剣でゆったりと空を薙ないだ。「さすが二十九の公ヴエ爵リオンと三十四の侯爵ラデオン、二百二十一の伯爵テリオン、子爵アーロン、男ツエペ爵リオン、准男爵ツエペリア、二千三百あまりの毒どく竜りゆう殺さつ勲くん爵しやく士、

飛竜殺勲爵士、地竜殺勲爵士、血けつ涙るい一等、二等、三等勲爵士、十四裂れつ、八裂、四裂勲爵士、串くし刺ざし勲爵士、磔はりつけ勲爵士、首切勲爵士の各士爵デビルをたった一人で殺あやめただけのことはある。私の〝暗くら刈がり〟をその身に受けて生きていたものはかつていない。名を訊きこう」

「ない」彼は突っこんだ。「俺には名などない」

「そうか」アーマンが黒炎の剣〝暗刈〟を鞭むちのようにしなわせる。音がしない。無音でのびてくる。彼はかわす。防げないのなら、よければいい。暗刈が彼の頬を、肩かたをかすめる。たったそれだけで、その部分が破は裂れつした。問題はない。無限の心臓が治ち癒ゆしてしまう。彼は踏ふみこむ。至近距きょ離りで大懺滅刀カタストロフアーを解放し、アーマンを押し包んで、決して逃がさない、滅めつ殺さつする。大懺滅刀カタストロフアーによる包囲は一瞬で完成した。アーマンは全方位から猛もう然ぜんと攻めよせる大懺滅刀カタストロフアーの鱗牙に斬きり刻まれ、圧あつ搾さくされた。黒い、巨きょ大だいなかたまりと化した大懺滅刀カタストロフアーが地じ響ひびきを立てる。鱗牙の隙すき間まから、赤黒い液体がにじみだしている。悪魔大公グランヴエリオンとやらの血も赤いのか。球形化した大懺滅刀カタストロフアーをほどくか、ほどくまいか。束の間、彼は迷った。鱗牙と鱗牙の合間から、白い指が突きだした。

　一本、二本、三本。

　人差し指と中指、薬指だ。

　ん……く……く……くく……くくく……くくくく……くくくくく……んくくくく……。

　これは声か。アーマンの声だ。彼は飛びすさりながら大懺滅刀カタストロフアーをほどこうとしたが、抵抗された。何かが内側から鱗牙を押さえている。彼の操作を受けつけなくさせている。何か。考えるまでもない。アーマンの仕し業わざだ。

　彼は大懺滅刀カタストロフアーを手放した。途と端たんに大懺滅刀カタストロフアーがほどけた。アーマンは原形をとどめていない。手足や頭部の一部や残ざん骸がいのようなものが鱗牙にこびりついているだけだ。そんな有様になってもアーマンは死んでいない。生きている。しかも、大懺滅刀カタストロフアーを操あやつる

ことができるようだ。鱗牙が襲おそいかかってくる。彼はそれを右手でつかみ止めた。鱗牙は皮ひ膚ふを破り肉に食いこんで骨を削けずった。指が半ば切断されかけている。彼は大殲滅刀カタストロファアーを引っぱろうとした。取り戻そうとしたのだ。だが、さらに別の鱗牙がきた。彼はそれを左手でわしづかみにした。その直後、さらに別の鱗牙が彼の腹を貫き通した。「わあ」声が「わああた」声が「わあたし」声が「わああわわあたしは」声が「ああまん」声が「ぐぐぐぐらんヴぇヴぇヴぇヴぇりおおん」声が「あああまあん」声があふれる。あちこちから。そこらじゅうから。彼は見た。鱗牙にこびりついている、鱗牙からしたたっている、アーマンの欠片かけらのようなもの、アーマンの体液のようなもの、それらがゆがんで、裂さけ目ができて、そこから声がもれている。鱗牙を伝って、それらが彼に近づいてくる。侵入する気だと彼は悟さとった。アーマンは彼の中に入りこむつもりだ。彼は両手に握っている鱗牙を押し離はなし、腹にぶっ刺さっている鱗牙を抜いた。下がろうとしたら、十以上の鱗牙が殺さつ到とうしてきた。すべての鱗牙にアーマンが宿っている。彼は身をかがめる。身体からだを後ろに倒たおす。斜ななめに転がる。立ちあがって走る。「わああ」「たあああしはあああ」「ああああまん」「わた」「わたああしいい」「はああああまあああん」声が、鱗牙が追いすがってくる。引き離せない。彼は振り返って鱗牙を殴なぐり飛ばす。その拍ひよう子しに拳こぶしが裂ける。そこから瞬時にアーマンが入りこんでくる。わあたああしいはあああまあああん。ただちに血が沸ふつ騰とうする。無限の心臓が送りだす血がアーマンを拒きよ絶ぜつする。アーマンは排はい出しゆつされる。どうやらアーマンの目もく論ろ見みどおりにはなりそうにないことを知って、彼は鱗牙を手で、足で払いのける。そのたびに彼の手足が傷つく。アーマンが入りこもうとして、血がたぎる。拒こばみ、体外へと押しだす。無む駄だだ、無駄だ、無駄だ。無駄なのに、鱗牙は執しつ拗ように斬りつけてくる。きりがない。彼は大きく飛び下がる。

　息を吸いこんで、吼ほえた。

　大殲滅刀カタストロファアーの動きが止まった。

　彼は咆ほう吼こうしながら拳を突きだす。突く。大殲滅刀カタストロファアーを殴る。殴る。殴る。地面が割れる。空気が引き裂かれ、悲鳴をあげる。たじろいだ大殲滅刀カタストロファアーをつかまえ、抱かかえこんで、一回転し、投げる。数百メーテル先まで投げ飛ばす。周りで息をひそめていた悪魔どもが押しよせてくる。彼は

羽虫をはたき落とすように、蟻ありを踏み潰つぶすように、悪魔どもを殺す。彼が腕うでを、脚を一振りするごとに、何匹ひきもの、何十匹もの悪魔が死ぬ。彼はふたたび前進しはじめる。悪魔どもを撲ぼく殺さつしながら前へ前へと進む。夜がきて、朝がくる。彼は進む。一度も足を止めずに進む。悪魔どもを踏み殺しながら進む。彼が進んだ道には悪魔どもの血肉が敷しきつめられている。屍しかばねで舗ほ装そうされている。彼はふと見上げてようやく立ち止まる。右手に暗刈を、そして左手に大懺滅刀カタストロフアーを持ったアーマンが頭上にいる。彼を見おろして薄うす笑わらいを浮かべている。アーマンは「準備をしてきたよ」と言う。何をだと問うかわりに彼は拳を突きあげる。むろん拳自体はアーマンに届かない。だが拳の威い力りよくがアーマンを吹ふき飛ばす。空中で体勢を崩くずしながら「準備をしてきたと言っただろう」とアーマンは言う。彼は気づく。いつの間にか彼は取り囲まれている。漆黒の、長い棒だ。先が尖とがっている。先端を彼に向けて、無数の黒い棒が、槍のようなものが、浮かんでいる。

それらが一いつ斉せいに動きだす。

彼を串くし刺ざしにする。

瞬しゆん間かん、気が遠くなる。彼は棘とげだらけのウニみたいなひどい有様になっている。

アーマンが降下してくる。頭を下にして降りてくる。彼の顔の前にアーマンの顔がある。逆さまの顔が。アーマンは「特別の準備をしてきたよ」とニタニタ笑いながら彼に言う。数十、数百の黒い槍が全身を貫いている。彼は身動きがとれない。すぐには。彼はなんとか身じろぎしようとする。身体をよじって、一本でも二本でもいい、黒い槍を抜こうとする。抜けなくても、ずれればいい。少しずつずらしてゆけば、いつか抜ける。だがアーマンはそのための時間を彼に与あたえない。「死なないのか？」と言いながら暗刈を彼の胸の真ん中あたりに突き入れる。彼は〇・一秒に満たない間、死ぬ。しかし無限の心臓が死を彼に許さない。彼は戻ってくる。「死なないのか？」とアーマンは言う。言いながらふたたび暗刈を彼の胸に突き刺す。彼は死に、蘇よみがえる。「死なないのか？」死、蘇そ生せい。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。「死

なないのか？」死、蘇生。「死なないのか？」死、蘇生。アーマンは「死なないのか」とつまらなそうに言う。「いいだろう。ならば閉じこめておくまでだ。心当たりがある。あの場所なら牢ろう獄ごくにちょうどいい。そこに閉じこめておこう。そうしよう」アーマンはそう言うと大懺滅刀カタストロフアーを展開させて彼を緊きん縛ばくする。彼は数百の黒い槍やりに貫つらぬかれたうえ、大懺滅刀カタストロフアーでがんじがらめにされて、引きずられてゆく。彼はあらがおうとする。手足を動かそうとする。そのたびにアーマンが暗刈で彼を刺し殺して彼は蘇り刹せつ那なの死が彼の何かを削りとる。次し第だい次第に彼は削られて瘦やせ細る。彼は引きずられてゆく。光は闇やみとなり、闇は光となる。彼は引きずられてゆく。黒い光。白い闇。終着点。アーマンが彼の瞳ひとみをのぞきこむ。
「さあついた。ここが牢獄だ。獄の獄ジエイルネイルだ」

城塞都市シャッコー

「──彼はその場所で幾いく星せい霜そうを過ごした」ソオルは左手のような右手で空をつかむ仕し種ぐさをして、つかまえた何かを解き放とうとするみたいに手を開いた。「僕が彼を助けだすまでね。彼は一人だった。そして彼の身体はまだそこにある。無限の心臓を持つがゆえに滅ほろびることのない、かつて二十九の公ヴエ爵リオンと三十四の侯爵ラデオン、二百二十一の伯爵テリオン、子爵アーロン、男ツエペ爵リオン、准男爵ツエペリア、二千三百あまりの士爵デビルをたった一人で殺し、地じ獄ごく帝てい王おうの息むす子こ、分身といってもいいかもしれない悪魔大公グランヴエリオンアーマンですら息の根を止めることができなかった彼の身体は、今

もまだ獄の獄ジエイルネイルにある」

「ジェイルネイル……」サフィニアは射い貫ぬくような目でソオルを見た。「それは……異界ですか……？」

「正確を期せば、異界と異界が交差する場所、ということになるね。ある反逆者がつくりあげた地獄と、錯さく誤ごと欠けつ陥かんの集積地である贄にえの園そのとが交わるところに、それは自然発生的に生まれた。ジェイルネイル。獄の獄は、贄の園の最さい奥おう部であり、地獄の最辺境でもある。この世界とも異界の扉とびらで結ばれてはいるけれど、その扉はとても小さく、また、他ほかの扉のようにひとところに留とどまってはいない。移動しつづけている」

「なんか……」マリアローズは眉まゆをひそめて首をかしげた。「わかるような、わからないような……や、大筋は理解できるんだけど、枝葉の情報がちんぷんかんぷんで、わけわかんないみたいな気分になっちゃうっていうか。でも、ようするに──」

「そこに行けば……」サフィニアの眼光は鋭するどさを増す一方だ。「そこに、行けば……トマトクンは、自分の身体をとりもどせるんですね……？」

「彼一人の力では不可能だろう。魔ま導どう王〝黄金の指〟ユピクラトムと〝機関王エンジンタイクン〟マハリク・ゴンドラゴナが共同で設計し、〝鍛冶鬼マツドスミス〟シニ・イデルによって製造された最高の兵器、大懺滅刀カタストロフアーが、彼の肉体を拘こう束そくしている。彼をあの軛くびきから解き放つには、大懺滅刀カタストロフアーを、少なくともその一部を破は壊かいしないといけない」

「あなたには、できないんですか……？　神、なのに」

「僕はあくまで限定的な存在なのだよ、魔術士の娘むすめ。たとえば、僕が彼に譲ゆずり渡わたした聖断罪の剣けん、ホーリー・コンビクショナー、〝打ちThe 破る者Breaker〟は、もともと僕のものだった」

「ふむ」トワニングが部屋の隅すみにちらりと視線を投げた。そこにはトマトクンの剣身波打つ琥こ珀はく色の大剣が立てかけられ、そばには炎模様フアイヤーパターンの全身鎧よろいも掛かけてあ

る。

「でも、僕はもう使えない。僕が聖断罪の剣を振ふるおうとすれば、即そく座ざに制裁系統が作動して、僕はさらなる制限を加えられ、最悪、消しよう滅めつしてしまうかもしれない。こうしている間も、僕は僕を隠いん匿とくしている。僕は匿ア名ノの二存マ在スであるために最大限の注意を払はらい、努力しているのだ。以前、ロシュを滅ぼしたときのような真ま似ねは、そうそうできない。あれも、ロシュが受肉し、我々の大原則を破ることになったからこそ、いわばお目こぼしいただいたようなものなのだからね」

「サフィニア」トマトクンが喘あえぐような声で言った。「そいつの話を、真に受けるな」

「……はい」

「ひどいな、友よ」ソオルは肩かたをすくめてみせた。「僕ほど君に便べん宜ぎを図はかってきた者はいないはずだよ。そしておそらく、これが最後の機会となる」

「最後？」マリアローズはサフィニアを抱だきしめた。「最後って、どういう意味？」

「確かく認にんしておきたい」ソオルはマリアローズの問いには答えず、大勢の誰だれかに似ているような平へい凡ぼんにして非凡な瞳でトマトクンを見おろした。「友よ、君は君の身体をとりもどしたい。そのために、僕の助力を欲ほつしているのだね」

　トマトクンはソオルの目を見て、ゆっくりと首を縦に動かした。「ああ、そうだ」

「結論から言おう」ソオルは作り物めいた笑えみを浮うかべた。「僕は君を、いや、君たちを、と言ったほうがいいかもしれないね。手助けすることはできる。ただし、仮に僕が手伝ったとしても、君の身体が囚とらわれているその場所までたどりつくだけでも容易ではないだろうし、大懺滅刀カタストロフアーを破壊するのも一ひと筋すじ縄なわではいかない」

「不可能ではないのね」ユリカが力強く言った。「やりましょう。わたしからもお願いしゅるわ。手を貸して、ソしよオル」

「気が早いね。まだ説明は終わっていないよ」

「でも」ハニーメリーの声こわ音ねは、それから表情も、いつもどおりだ。「他に手があるわけじゃないんだし、どういう条件でもやるしかないでしょ？　あたしたちの──」と思ったら、目を伏ふせて、彼女らしくなくちょっと口ごもった。「園長マスター……なわけだし？」

　もしかして、照れているのだろうか。どうも、そうらしい。ピンパーネルがほんの少し口くち許もとをゆるめて、ハニーメリーの頭を撫なでた。そんな場面を目もく撃げきしてしまって、マリアローズとしては微び妙みように衝しよう撃げきを受けたし、なんだかこっちが恥はずかしい、いや、恥ずかしがることはないのかもしれないけれど、そのあとでピンパーネルと目があったら、違ちがいマス・これワ・そうじゃナクて──とでも言いたげな、慌あわてたような表情を浮かべたのでおもしろかったし、やっぱり照れくさかった。なんか、見ちゃいけないもの見ちゃったなあ、みたいな。ともあれ、ハニーメリーの言うとおりだ。

「で？」マリアローズはソオルを見すえた。本人の見解を尊重すれば、元神か。すごいことになってきた、というか、ものすごく、めちゃくちゃすごいことになっているのに、こわくはないし、昂たかぶってもいない。僕は冷静だ。落ちついて、必ず成功させないといけない。そうしないと、僕らは園長マスターを失う。「終わってない説明ってやつ、聞かせてよ」

「端たん的てきに言って、この試みには危険が伴ともなう」ソオルは皆みなを見まわした。「まず、獄の獄へと至る異界の扉は、先ほど言ったように不変不動ではない。今は近くにはないから、そこまで行く余よ裕ゆうはないだろう。僕が獄の獄へと通じる扉を開けることになる」

「……そんなことが」サフィニアは呆ぼう然ぜんとしたように言った。

「できなくはないけれど、間違いなく管理者に感知される。管理者というよりも探知系統に引っかかるというべきかな。位置を特定されて、排はい除じよ系統が動きだす」

「あのー」マリアローズは咳せき払ばらいをした。「ぜんぜん意味がわからないんだけど」

「ようは妨ぼう害がいされるということだ。その一部は僕が引き受

けられるだろう。でも、すべてとはいかないかもしれない。目的地に直接、扉を開けられればいいのだけれど、贄の園と獄の獄では膨ぼう大だいな錯誤と欠陥によって位置情報も攪かく乱らんされる。どこに出るかは運次第だ。彼の現在の身体からだが崩ほう壊かいしてしまう前に、そこから目的地にたどりつかなければならない。時間の制限があるうえに、君たちは彼をそこまで運んでゆかなければならない。獄の獄の環かん境きようも過か酷こくだ。はっきり言おう。僕が手を貸さなければ、この試み自体が成立しない。しかし、僕が手を貸したとしても、成功するとはかぎらない。成算があるともないとも、僕には断言できない。君たち次第だ」

「わかったよ」ずっと黙だまってトマトクンを見つめていたロム・フォウが、ソオルに視線を向けた。静かな眼まな差ざしだった。でも、一点の曇くもりもない、どこまでも透すきとおった、明確な、純じゆん粋すいな、何があっても折れない、曲がらない意志がこめられている。「あたしたちがうまくやればトマトは助かる。そのことはわかった。それだけで充じゆう分ぶんだよ」

「ワタシも」ピンパーネルはハニーメリーと一いつ瞬しゆん、目を見あわせてから、ゆっくりとうなずいた。「ロム・フォウと同じ気持ちデス」

「トマトは拙せつ僧そうが運ぼう」トワニングは右みぎ腕うでを曲げて、フンッ、と力をこめ、おぞましいほどに筋肉を隆りゆう起きさせてみせた。服の上からでも、ほんときもい。「何、人間の一人や二人や三人や四人、拙僧の筋肉にかかれば赤子も同然」

「大憾滅刀カタストロフアーは」サフィニアが言いきった。「わたしが壊こわします。わたしにできなければ、誰にもできない。そして……わたしにはできます。やります。絶対に」

「くう……！」きゅーが拳こぶしを振りあげると、負けまいとするかのようにアルファがうぉおおおおおんと吠ほえた。

「友よ、あるいは納なつ得とくがいかないかもしれない」ソオルはトマトクンに向かって左手のような右手をのばした。「大切な仲間の手を煩わずらわせたくはないだろうし、君には不本意かもしれないけれどね。これが僕の精せい一いつ杯ぱいなのだよ」

「ああ」トマトクンは右手を持ちあげて、ソオルの手を払った。身体を動かして大丈夫なのか。心配になったが、決して弱々しい動作

ではなかった。まるで今まで死んだふりをして力を蓄たくわえていたかのように、そうはいってもさっきまでの状態と比べての話ではあるけれど、トマトクンは目に見えて生気をとりもどしていた。
「たしかに本意じゃない。お前の手を借りるのは、な」

　マリアローズはきゅっと口を引き結んだ。それって、つまり──ソオルの力はできれば借りたくなかった、でも、僕らに関していえばそうじゃない、僕らのことは信じてくれる、僕らに任せてくれる──っていうこと……？

　いつだって結局、何でもかんでも最後は自分が背負いこんで、自分でなんとかしようとしてきたトマトが、僕らを頼たよってくれている。

　僕らに賭かけてくれようとしている。

　トマトクンはソオルをのぞいた皆を見まわして、マリアローズに目をとめた。そしてかすかに微笑ほほえみ、短く「頼たのむ」とだけ言った。

　こんな日がくるなんて、正直、思ってもみなかったよ。僕がきみに助けてもらうんじゃなくて、僕がきみを助けるなんてさ。変な気分だよ。

　だって、きみが僕の前に立ってくれているときは、僕はきみに守られていて、きみについてゆけば僕は道を見失わずにすんだし、きみが後ろにいてくれるときは、僕は振り返らないで、何も気にせずに進むことができた。きみが僕の横にいてくれたら、なんだかあったかくって、もちろん心強くて、僕は肩の力を抜ぬいて笑うことができた。きみがいてこその僕で、僕らＺＯＯだった。

　だけど僕に何ができるのだろう。僕以外のみんなはそれぞれすごいけど、僕は違う。僕は弱かったし、今も弱い。そりゃあいくらか進歩はしている。昔のままじゃない。でも、みんなとは比べ物にならない、自分のことだからよくわかっている、僕は使えないやつだ。そんな僕にいったい何ができるだろう。いつまでそんなこと言ってるんだって笑われるかもしれないけど、僕はそこからは逃にげられない。自分自身の能力の低さからは。どんなにがんばっても、どこまでいっても、僕は使えない。本当のことを言うと、少し剣を操あやつれるようになるたびに、飛び道具の扱あつかいに慣れるごとに、実感するんだ。僕が階段を一段上れば、当然、みんなも

一段上がっていて、その一段の高さが違う。僕の一段はみんなの一段よりも低い。僕が必死になって今より一サンチ高く跳とべるようになるころには、みんなは十サンチ、一メーテル高く跳べるようになっている。僕は追いつけない。この差は縮まらない。僕は使えないままだ。みんなと肩を並べて戦うことは、僕にはできない。一生、できない。使えない僕にできることは、ますます限定されてゆく。

　僕にできることはごくごくかぎられているし、僕は貧弱だからみんなに迷めい惑わくをかけちゃうんじゃないかって不安でしょうがないし、こんな自分が恥ずかしいし、悲しいし、悔くやしくてたまらない。だけど僕は決めている。一つだけ、心に決めていることがある。

　僕はここにいる。仲間たちのそばに。二度と離はなれない。僕にできることはとても少ないけど、僕は不幸でも不運でもない。こんなに恥じ入るしかない自分自身にも、たった一つだけ、誇ほこれることがある。

　僕には仲間が、友だちがいる。

　彼らの、彼女らのためなら、何だってする、何もかも犠ぎ牲せいにできる、ためらいなくそう思える。彼らが、彼女らがいてくれるから、僕は生きてこられたし、生きてゆける。

　だから僕は、僕らの園長マスターに、僕の友だちに向かって、不敵な笑みを浮かべてみせる。

「任せて」

「しょれじゃあ、善じえんは急いしよげ、ね」

　ユリカはすでに準備万ばん端たん整っているかのような顔をしている。なんだかおかしくて、マリアローズたちはちょっとだけ笑い、ユリカは「何よ？」と口を尖とがらせて、その表情や口調があまりにもかわいらしかったものだから、また笑いが起こった。でも実際、全員、心の準備はできている。何もこわくない、なんて言わないし、マリアローズはそんなふうに思ってはいけないのだ。臆おく病びようなほど慎しん重ちように、それでいてときに大だい胆たんに、僕は使えないやつだから、せめてみんなを上手に使ってみせる。さあ、行こう。

獄の獄ジエイルネイルへ。

二巡月十九番日　北ワールオック山麓

「──チェイストォォ……ッ！」漢おとこは大湾わん刀とう〝血吸いのブラドキ斬馬刀ユラトス〟の一振りで蜥蜴とかげ人をぶった斬きり、返す刀で別の蜥蜴人を斬り伏せた。ええ案配や、と悦えつに入りながら、漢はさらに斬ざん馬ば刀とうを振りまわす。「ドオッ！」と斬る。「ショオァッ！」と斬る。「フォォオオルゥォヤァァ……ッ！」と斬りまくる。

　絶ッ！　好ッッ！　調ッッッ！　絶好調や……ッ！

　漢は斬馬刀をクルクルッとかっこよく回転させ、離れ気味の目をカッと見開いた。「このわしに勝てるっちゅうんなら、かかってこいやあッ！　無理やと思うけどもなッ！」

　やや怯ひるんでいた（と漢の目には映っていた）蜥蜴人どもは、一いつ斉せいにＳｙｙｙｙｙｙＳｙａａａａａｈｈｈｈｈと耳みみ障ざわりな雄お叫たけびをあげながら漢に殺さつ到とうしてきた。ちょちょちょッ。漢はほんのちょっとだけ慌てて、詰つめよせてくる蜥蜴人を斬馬刀で薙なぎ倒たおす。「そんなんあれやろが言葉のアヤっちゅうヤツやろが、わかるやろフツー！　そんくらいはわからんとあかんでホンマに！　蜥蜴かッ！」とボケをかまし、「って、蜥蜴やん⁉」と自分でツッコミを入れて回収し、「クオッ！」と斬る。「ヌハッ！」と斬る。「ヅオリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャァァァァアアアァァァアアァァァァ……ッッ！」

「突つっこめ……！」鋭するどい号令が響ひびいた。いったん散り散りになって逃げた龍りゅう州しゅう連合の騎き馬ば隊が、態勢を立てなおして引き返してきたのだ。漢は斬馬刀で目の前の蜥蜴人をぶった斬りつつ「よっしゃッ！」と快かい哉さいを叫さけんだ。「ナァーイス・タイミニングや荊王ジンワンッ！　いやタイミニングやのうてタイミングやがなガハハハハ……ッ！」笑いながら敵を突き崩くずす。後背から騎馬の群れに突とつ撃げきされて、蜥蜴人どもは完全にうろたえている。「よいぞよいぞ行け行くのだみんなッ！」という威い勢せいのいい馬ば鹿か陛下の声が聞こえてきた。こうなると、新生太陽王国軍は強い──とは正直、もともと烏う

合ごうの衆しゅうにも程ほどがある集団なので、ちょっと言いがたいところではあるが、調子に乗ったとき（だけ）はそれなりの力を発揮する。馬鹿陛下が「あ、それッ！」と掛かけ声をかけて新生太陽王国国歌を歌いだし、武器を振ふるいながら唱和する者、血みどろになりながらも笑え顔がおになる者まで現れはじめると、なんとなく勝ちパターンっぽい雰ふん囲い気きになってきた。あくまでなんとなくで、まだ押しきれそうな情勢ではぜんぜんないのだが、間違いなく完全に流れが変わった。漢は「ていていていていていてい……ッ！」と蜥蜴人どもを斬馬刀で撫なで斬りにしながら、ちゅうたってモチのロンでやで、と思う。流れを変えたのは、四散しかけた騎馬隊をとりまとめて反はん撃げきに転じさせた荊王と、それから、単身突出してあえて敵中に孤こ立りつ、孤軍奮ふん闘とう、蜥蜴人どもを引きつけて時間稼かせぎをしてみせた、漢一匹ぴきその名はカタリ──であるはずなのに、どうも馬鹿陛下のおかげっぽくなってしまっている。右往左往している蜥蜴人どもを「ほれほれほれほれほれェィッ！」と追いたて、斬り倒して、漢は、ちゅうかな、と考える。当然、軍師ジャン・スタンバックが適当なころあいを見計らって馬鹿陛下に声出し、旗振りをさせているはずだ。蜥蜴人どもに襲しゅう撃げきされて狼ろう狽ばいしていた騎馬隊に一時散開を命じたのも、カタリに命令というか発破をかけて突出させたのもやはり軍師なので、ようはすべて軍師の手て柄がらなのだが、この「やっぱり馬鹿陛下だよな」感は何なのか。「馬鹿陛下ってとりあえず運だけはいいよな」「やばいときも馬鹿陛下が大丈夫だとけっこう大丈夫だったりするよな」「馬鹿陛下はずっと大丈夫なわけだから、俺たちもまあ大丈夫だよな」という具合に、はっきりとではないかもしれないがみんな思っていて、その根源的な楽観がこういった逆転劇に繫つながってしまうのだとしたら、ぜんぶやっぱり馬鹿陛下のおかげということになってしまいかねない。これでええんか。ええんかな？　ま、ええか。

「ムハハハハッ！」漢は斬馬刀を地面に突き刺さして、腰こしに吊つるしてあった二本の変形斧おのハノサンとホノゴを抜くと、逃げてゆく蜥蜴人どもの背中めがけて投とう擲てきした。変形斧はシュパパパパッと飛んでいって、ズドンッと命中し、二体の蜥蜴人がボハッと倒れた。漢は「ドヤァッ！」と握にぎり拳を突きあげた。
「イエス、イエス、イエスやッ！　完勝とはいかへんけど、勝ちは勝ちやろ！」

「深追いはするな！」と軍師どのが指示を出している。蜥蜴人どもは退いてゆく。荊王率いる騎馬隊は、敵を追撃するというよりも追

い散らそうとしているようだ。

　それから三十分もしないうちに戦闘は終息した。馬鹿陛下が音頭をとって勝かち鬨どきをあげると、そのあとには陰いん鬱うつだが大事な作業が待っている。被ひ害がいの確かく認にんと死者の弔とむらいだ。そこでも活かつ躍やくするのは馬鹿陛下だったりする。馬鹿陛下が号泣しながら「キッ、キミタチのッ、キミタチの死は無む駄だにしないッ！　決してッ！　何がなんでもするものかァッ！　我々はキミタチを忘れず、キミタチが生きて死んだ証あかしとなるにふさわしい、すばらしい国をつくることをはばかりながらこの私、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトがみんなを代表して誓ちかうッ！　新生太陽王国バンザーイッ！」と弔ちよう辞じを述べると、鼻はな汁じるやらよだれやら様々な液体にまみれたその顔はひどく滑こつ稽けいなのだが、いや滑稽なだけに、涙なみだとそれから一いち抹まつの笑いを誘さそうのだ。そして悲しみが去ったあとには妙みようにすっきりし、簡素ではあるもののいい葬そう式しきをあげてやったような気分になってしまう。ふんふんふんと小刻みにうなずきながら、こういうリーダーっちゅうのんもアリっちゅうたらアリなんかなあ、と漢は思う。わしとしてはやっぱり、自分にとってのリーダーっちゅうたら、トマトクンなんやけども。元気やろか。元気に決まっとるがな。みんな、誰だれも彼も、元気に決まっとんのやないか。心配なんかしとらんっちゅうねん。これっぽっちも気にしてへんわ。

　しばらく前に、サフィニアが閃せん光こうの魔ま女じよと一いつ緒しよにピューッと飛んできて（あれはびっくらこいたわ）、漢の話を聞き、北へと向かった。サフィニアは無事、マリアローズたちと合流できただろうか。できたはずだ。漢は疑っていない。何もかもうまくゆく。あの馬鹿陛下には勝てないかもしれないが、漢はポジティブだ。漢たるもの、常時ポジティブ全開バリバリゴーゴーでなければいけない。そういうものなのだ。

「……寂さびしくなんか、ないわい」と小声で呟つぶやいて、苦く笑しようする。漢は斬馬刀を担かついで、分厚い刃やいばの背で肩かたをゴリゴリこすった。ここにＺＯＯはわし一人や。それがどないやねん。新生太陽王国の連中とも一緒に修しゆ羅ら場をくぐってきたわけだし、平気だ──と思っていた。ところがどうだ。漢の中の漢としたことが、どうも物足りない。もちろん、ほんのちょびっとだけだ。とくに問題はない。何しろ漢なのだ。みんなに会いたいのうなんて、思ったりすることはない。めったにない。ほぼない。な

いはずだ。ないだろう。ないんちゃうかな。寂しがっとる暇ひまなんか、そもそもないわけやしな。「そやろが、なあ……？」

　漢は斬馬刀を肩から下ろして、あたりを見まわす。うなじがチリチリする。この感覚は漢に危機を知らせるサインだ。だがその正体がわからない。

　荊王が馬を寄せてきた。「どうした」

「さっさと移動したほうがええのかもしらんな。イヤァーな感じがしてしゃあないんや」

「勘かんか」

「まあ、せやな。勘っちゅうたら──」漢は視界の隅すみに何かをとらえたように思った。それは荊王のあとにつづく騎馬隊の間を素す早ばやく動いていた。間というよりも、下というべきかもしれない。それは小さかった。獣けものか。いや、そんなわけがない。漢が「ぉおいッ、注意せい……ッ！」と声をあげたその直後だった。一騎の騎馬が「うわっ」と悲鳴をあげて身をよじった。次の瞬しゅん間かんには落馬していた。荊王が「警けい戒かい！」と叫んだのと二人目が犠牲になったのとは、ほぼ同時だった。「馬から下りるんじゃ！」漢はとっさの判断でそう命じて斬馬刀を放ほうり投げ、変形斧を構えた。小さな相手に小回りがきかない斬馬刀では不利だ。それにしても、どんな敵なのか。「ヌノノノノノノノ……ッ!?」奇き声せいを発している馬鹿陛下をよそに、軍師が「うろたえるな！　隊形を整えろ！　非戦闘員を守れ！」と呼ばわっている。そのときだった。下馬しようとしていた龍州人に何か小さい生き物が躍おどりかかるのを、漢眼ガンがバッチリとらえた。犬か、とまず思った。もちろん犬のわけがない。でも、小型犬くらいのサイズだ。身体からだつきも四本脚あしで犬っぽい。犬っぽい何かは、あっという間に龍州人を引きずり下ろして──殺したのか。龍州人はすぐに動かなくなって、犬っぽい何かは馬と馬の間に紛まぎれこんでしまった。「犬じゃッ！　犬みたいなヤツに気ィーつけぃッ！」漢は大声で言いながら、殺やられた龍州人のほうへと駆かけた。あちこちで悲鳴があがりはじめた。一いつ匹ぴきではないのか。龍州連合の何人かが馬に乗ったまま逃げだした。荊王が龍州語で何か怒ど鳴なっている。「あかん……！」漢は舌打ちをした。新生太陽王国軍の兵士たちも動どう揺ようしている。一時は隊列らしきものができかけていたが、乱れに乱れてばらばらだ。「まままままま待ちたまえキミタチィ……ッ！」馬鹿陛下が引き止める

のも聞かず、一部の兵士が方々に走りだした。「女子供ォ守らなあかんのに──」漢は言いかけて飛びのき、変形斧を振りまわした。犬だ。やばかった。もう少しで咬かみつかれるところだった。犬はタッタッタッと後退して、ブルルルンッと唸うなった。犬。だから違ちがう、犬じゃない、それは──何だろう。体形は小型犬。尻しつ尾ぽはない。毛は生えておらず、ピンク色の肌はだが変に生々しい。皺しわだらけだ。頭は、毛のない犬のようでも、老ろう婆ばのようでもある。顎あごは逞たくましい。爪つめも鋭そうだ。グロきもい。異界生物フリークスであることは間違いないと思う。漢は唇くちびるを舐なめて身構えた。「……なんやねんこいつ。悪あく魔まなんか」

「そうであーる」とそのちっさいのはしゃがれた声で答えた。人間の言葉をしゃべる。ということは、下等な悪魔じゃない。爵しやく位い持ちだ。「我が名はゾーゾー。ゾーゾー・ギボンヌ。ゾーゾーは地じ獄ごくの公ヴエ爵リオンなんであーる。偉えらいのであーる」

　漢は下唇をいったん嚙かんでから「ヴェ……ッ」と発音した。「ヴェリオンやて!?　こんなちっこい小型犬みたいなのんが!?　悪魔は見かけによらんっちゅうわけかい！」

「そう。悪ヒ魔トは見かけによらんのであーる」ゾーゾーが無造作に突進してきた。このわしも見くびられたもんやないか。「我流ッ！」漢は変形斧を変へん幻げん自在に操あやつってゾーゾーを叩たたき落とした。「──滅めつ多た打、ち……!?」

　手て応ごたえがおかしかった。いや、手応えだけじゃない。ゾーゾーはボムッと弾はずんで、平然と着地した。傷がない。斬ったはずなのに。違う。斬れなかったのだ。まるでゴムのかたまりを殴なぐったような手応えだった。「……けったいな身体ァしとんのやんか、ジブン」

「ゾーゾーと十四人の手下は無敵なのであーる」ゾーゾーは赤い舌でぺろっと口の周りを舐めた。「よってゾーゾーはゾーゾーと十四人の手下を、ゾーゾーと十四人のマブダチは無敵なんであーる部隊、略してゾー部隊と呼んでいるんであーる」

「ええ略し方とは──」漢おとこは駆けよって、ゾーゾーを思いっきり蹴けっ飛ばした。「思われへんけどな……ッ！」

　ゾーゾーは「おーぅ、おーぅ、うぉーぅ……」とか言ってくるくるくるくる回転しながら、ヒューッと飛んでゆく。むろんダメージは皆かい無むだろう。そんなことはわかっている。これはあくまで時間稼ぎでしかない。漢は叫ぶ。「──あかん！　みんな、今すぐ逃にげるんや！　相手は公ヴエ爵リオン！　まともにやりおうて、勝てる相手やない……！」

「退ひくぞ！」すぐさま軍師が指図した。「敵にかまうな！　陛下！　音おん頭どを……！」

「ムホォッ!?　お、おうッ、合点承知ッ！　よしみんな、レッツラゴーッ！　我々は逃げるのではないッ、明日に向かってひた走るのだァーッ！　ヒューヒューゥッ……！」

　漢も斬ざん馬ば刀とうを拾いあげて駆けだした。しかし逃げるっちゅうてもな。逃げきれるやろか。漢は頭を振る。あかんあかん。弱気になってどないすんねん。だが正直に言って、漢は自分の判断に自信があるわけではなかった。自分一人ならどうにでもなるし、なんとかしてみせる。しかしこれだけの人数が、しかも能力も体力も何もかもが不ぞろいな集団が、ある状じよう況きようでどうするのが最善か。漢にはわからないのだ。ようやっとったな、マリアローズはホンマに。わしには無理かもしれん。向き不向きっちゅうのがあるやろやっぱ。とはいえ軍師も退たい却きやくを決断したわけだし、今はとにかく逃げるしかないだろう。公爵級の悪魔と足を止めて戦ったりしたら、最悪、全滅しかねない。それはまずい。

「おい！」荊王が近づいてきて、馬を漢と並走させた。「乗れ！　俺たちの馬は頑がん丈じようだから、大人の男でも二人くらいは問題ない！」「そうしたいのは山々やけどな……！」漢は振り向きざまに斬馬刀を一閃させる。ゾーゾーだ。追いすがってきて、漢に飛びかかってきた。そこを斬馬刀で一刀両断しようとしたのだが──重くなった。斬馬刀が。「なッ、何やとォ……!?」ゾーゾーが斬馬刀にしがみついている。漢は即座に斬馬刀を手放したが、遅おそかった。ゾーゾーは斬馬刀から漢に飛び移る。漢は押し倒された。老婆みたいな顔が迫せまってくる。「ふお……ッ！」漢は右手でゾーゾーの下顎を、左手で額を押さえた。ゾーゾーは「よいではないかよいではないか」と言いながら少しずつ顔を近づけてくる。漢は必死に「ええことあらへんがなええことあらへんがな」と抗議しながら押し戻そうとするが、やばい、やばいでえ。小型犬サイズのくせに、ゾーゾーのパワーはすごい。それに加えて、鼻が曲がりそうだ。「く、口がッ！　口が臭くさいっちゅうねん！　臭すぎやろ

がッ！」「ひどいのであーる。乙女おとめに向かって口が臭いはないのであーる。ハーッ。ハーッ」「くくく臭ッ。臭ッ臭ッ臭ッ臭ッ！　ちゅうか、乙女て！　乙女なんかいッ！」「冗談であーる。ゾーゾーは立派な熟女なのであーる。ハーッ。ハーッ」「うぉおおおおおお鼻がッ、鼻だけやない、目ェがァッ！　目ェまで痛いて、どんな臭さやねん……!?」「ハーッ。熟女パワーなのであーる。ハーッ。ハーッハーッハーッ」「うひいぃぃぃぃぃぃぃ……」

　あかん。あかんて。息だけじゃない。だらだら落ちてくる唾だ液えきがまた、とんでもなく臭い。臭さで気を失ってしまいそうだ。しまいそうというか、もう失う。これ以上は意識を繋つなぎ止められない。もう──もう無理や。すまん。……アーニャちゃん。

「ハッ……！」

　あかん。あかんあかんあかんあかんでえ。こんなトコで死んでたまるかいな。アーニャちゃんに会わなあかんのや。「……アーニャちゃん！　わしに力を……！ふぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぁぁぁぁぁぁぁあああああああああ……ッ！」

「ぬぅっ」

　漢は一気に三十サンチばかりもゾーゾーを押し返した。少し臭さがやわらいで、呼吸が楽になった。「百人力や……！」漢がゾーゾーを突つき放そうとしたら、突とつ然ぜんだった。ゾーゾーの両眼がピカアッと不気味な光を放った。「うっ……」今度こそあかん、と漢は思った。きっとゾーゾーの目から何か出るのだ。それが漢を貫つらぬくか何かするのだ。終わった。やられてもうた。アーニャちゃん、せめて一目会いたかったで。もちろんＺＯＯのみんなにもな。ジャン・モーロウのオッサンは生きとんのやろか。どうなんやろな。ちゅうか、なんでわし、まだ生きとんのや。ピンッピンしとるやないか。うぉろろろろ……？

「──って、ただ目ェがピカァーなっただけかい！」

「すごいのであーる。ゾーゾーの目は自在に光るのであーる。すばらしいのであーる」

「アホかっ！」漢は目がピカァーッと光っているゾーゾーを投げ飛ばして跳はね起きた。たまにこういうふざけた悪魔に出くわすこと

がある。公爵というのも嘘うそかもしれない。退却を提案したのは間違いだったか。ゾーゾーは目を光らせたまま起きあがった。

「怒おこったのであーる。ゾーゾーの光る目を馬ば鹿かにする者には死あるのみなのであーる」

　そして、ゆらり、ゆらりと近づいてくる。

「ゾーゾーは死ぬまでおまえにつきまとうのであーる。ずっとずっとおまえにつきまとって離はなれないのであーる。ゾー部隊は無敵なので、おまえは一生苦しむのであーる」

「むしろストーカーやんっ!?」

「乗れ！」荊王が馬を駆って鞍あん上じようから手をのばした。漢はその手をつかんで、荊王の後ろに飛びのった。荊王が「ハイッ！」と馬を煽あおる。馬が加速する。後ろのほうでピィィィィィィィィィィィィィィィィ……というような音がした。振ふり返ると、ゾーゾーが走りながら口笛を吹ふいているようだった。やがてゾーゾー似の生き物がそこかしこから集まってきた。一、二、三……十一、十二、十三、十四匹。これでゾー部隊ことゾーゾーと十四人のマブダチは無敵なんであーる部隊が勢ぞろいしたことになる。漢がゾー部隊をおびきよせたおかげで、味方の混乱は収まった。漢は、フッ……とほくそ笑む。「まさにッ！　狙ねらいどォーりッ！　さっすがわしや……！」

「まあ……」荊王は軽く肩をすくめた。「狙いどおりかはさておき、状況は整理された」

「せやろせやろ！　結果オーライや！　いやいや？　こうなる思とったっちゅうか、こういう流れに持ちこむつもりやったからな！　最初ッから、わしとしてはな！」

「問題は」荊王はちらりと後ろを振り返った。「図はからずも囮おとりになった俺たちが、あいつらから逃げきれるかどうかだ」

「せ、せやな……」漢も振り向いてみた。ゾーゾーどもは犬みたいに舌を出してハッハッハッハッ荒あらい息をしながら追いかけてくる。距きょ離りは、どうだろう。十メーテルくらいか。もうちょっとあるだろうか。いや、今、グンッと数メーテル縮まった。漢がビクッとして荊王の背中にすがりつくと、また何メーテルかグイッと

狭せばまった。「──な、なんやあいつら……もしかして、その気になったら追いつけるんちゃうか……!?」

「ゾーゾーはハッハッハッ、怒ったのであーるハッハッハッ、怒っているのであーる、もっとハッハッハッ、おまえを苦しめないとハッハッハッ、気がすまんのであーる」

「魚ぎよほぉっ……」

「厄やつ介かいなことになったな。とりあえず」荊王は漢に肘ひじ鉄てつを食くらわせた。「離れろ」

「あ魚うおんっ。いけずっ！」

「次に気色の悪い声を出したら振り落とす」

「すまんかった！　わしが悪かったわ！　お、落とさんといてくれ、頼たのむ……ッ！　ちゅ、ちゅうか、だんだん仲間から離れてないか!?　わしの気のせいなんかな!?」

「いや。このままあいつらを引きつけて、他ほかの連中を逃がす」荊王はまた、ハイッ、と馬の腹を蹴った。「番人の拠きよ点てんはそう遠くない。俺がいなくてもたどりつけるだろう」

　漢は息をのんだ。そういう覚かく悟ごか。マリアローズたちと別れて以来、行動をともにしてきて、荊王が責任感の強い、そつのない男だということはわかっている。飛燕のように派手なカリスマ性はないが、有能な統とう率そつ者だ。ただ、どうも自分を軽んじているようなところがある。そんなふうにも感じていた。たとえば、味方百人の命を救うために自分の命が必要だとしたら、この男は微み塵じんもためらわずに我が身を捨てるだろう。漢としては理解できる。漢的見地からみると決して悪くない死に方だが、大勢の命を預かっている者としては──どうなんかのう。それはそれでええんちゃうか、とは必ずしも言われへん気もするな。だいたいやな。命知らずはわしの専売特許やで。「せやろが、なあ……？」

　漢は周囲に視線をめぐらす。もう味方の姿は見あたらない。左手には切り立った崖がけがそびえていて、その下に川が流れている。右手は森だ。馬は荊王と男を乗せて森と川に挟はさまれた河か原わらを走っている。漢は「よっしゃ」と気合いを入れて、笑う。荊王が振り返った。漢はその肩かたを、ぽん、と叩いた。「そろそろえ

えやろ。荊王、ジブンは仲間と合流せえ。ここはわしに任せたったらえええねん。ほな、さいなら！」「なっ──」

「ウヒョーッ！」漢は叫さけびながら跳とんだ。後方へ。空中で変形斧おのを抜ぬいて一回転、そのままゾーゾーに斬きりかかる。「──ぼっ……」ゾーゾーの眉み間けんに漢の変形斧がめりこんだ。でも、それだけだった。へこんでも、傷はつかない。へこんだところもすぐ戻もどってしまう。でたらめな身体からだやで。わかっとるっちゅうねん。漢は着地して二本の変形斧をクルルンパッと回した。「わしがまとめて相手したるわ！　かかってこんかいドゥラァッ！」

「そうするのであーる、かかるのであーる！」ゾーゾーが命じると、十四匹ひきのゾーゾーもどきが一いつ斉せいに襲おそいかかってきた。四方八方からだ。どうする？　どうするもこうするもない。漢ならばやるのみだ。「いっくでえ、我流……ッ」漢は側転しながら変形斧を振りまわす。「漢盛ざかり！　ドゥラドゥラドゥラドゥラドゥラドゥラドゥラドゥラァァッ！」すぐに目が回ってきたが、それがどうした。漢は側転をやめない。気合いと根性で側転しつづける。休まず変形斧を振りまわして、ゾーゾーもどきどもを寄せつけない。荊王が遠くで何か言った。馬鹿なやつだ、とかなんとか。せやな。わしは馬鹿かもしれん。せやけどな。ここぞっちゅうときに立派な馬鹿になれるのんが、漢っちゅうもんや。とはいえ、やな。若じやつ干かん馬鹿になりすぎたかもしれへんな？　目が回りすぎて──気持ち悪っ。



漢はやむなく側転をやめて、四つん這ばいになった。「おえっ……」

「今なのであーる！」ゾーゾーどもが押しよせてくる。ピンチやで。否いな。否や！　漢は吐はき気けをこらえてゾーゾーどもを迎むかえ撃うつ。どいつもこいつもゾーゾーに似ているので、どれが

ゾーゾーでどれがゾーゾーじゃないのか、オスなのかメスなのか、そもそもオスメスの区別があるのかさえわからないが、先頭を切って突っこんでくるゾーゾーっぽいのを変形斧でぶっ叩たたいてはねのけ、次のゾーゾーっぽいのを蹴っ飛ばしたら、別のゾーゾーっぽいのに尻しりをガブッと咬かまれた。「あいだだだっ……！」

　ここで死ぬ気などさらさらない。きっと起死回生の策が思いついたり、とんでもない必殺技わざを閃ひらめいたりして大逆転できるはずだと漢は信じていた。生き抜くつもりだ。結果がどうなるかは重要ではない。自分自身がどうするかだ。それが問題だ。だから漢は懸けん命めいに尻を振ってゾーゾーっぽいのを振りほどこうとしながら、変形斧でゾーゾーっぽいのをぶん殴なぐって、殴って、殴りながら「ぶおえらあああぁぁぁぁ！」と雄お叫たけびをあげた。別のゾーゾーっぽいのが漢の左ひだり脚あしに咬みついて引き倒たおそうとした。踏ふんばってこらえようとしたら、右脚も咬まれた。「──魚ぎよおうッ！」漢は引きずり倒され、右みぎ腕うでを、左腕を立てつづけに咬まれて変形斧を取り落としたが、あきらめない。あきらめてたまるか。漢はカッと目を見開いて、漢の顔面を咬もうとしていたゾーゾーっぽいやつに頭突きをかまして怯ひるませると、すかさず口の中に右手を突っこんだ。ズボッと入った。喉のどの奥を突かれたゾーゾーっぽいやつが「うえっ」となって嘔おう吐とし、吐と瀉しゃ物が漢の顔に降りそそぐ。猛もう烈れつに臭すぎて、漢は失神しかけた。

　これはもう、だめかもわからん──なんて、思ったりしなかった。

　漢おとこが終わりを覚悟する前に、漢にのしかかっているゾーゾーっぽいやつの上に何かが落ちてきて、ゾーゾーっぽいやつは「ぐへっ」と、漢も「たわぼっ」と呻うめいた。

「なんだかやけに臭においますね」金きん髪ぱつの男がゾーゾーっぽいやつを、それからその下にいる漢を踏みつけている。知っている顔だ。それに、あの服。秩序モラルの・キ番人ーパーズの平服だ。金髪の男は跳びあがって、「シュッ……」と、モトロール刀を──振りおろしたのか。見えなかった。まったく。速い。速すぎる。ホンマかいな。

　漢の変形斧ではかすり傷すら負わせることができなかったのに、ゾーゾーっぽいやつが真っ二つになって粘ねん度どの高い汚お物ぶつのような内容物をぶちまけた。漢の上で。当然、漢は内容物にまみれることになった。もちろん信じられないほど臭い。「……きっ

くぅ……」

「一万三百四十七」金髪の男はぶつぶつ呟つぶやいた。「だいぶ思いどおりに斬れるようになってきましたけど、まだまだだな。まだ神しん剣けんを名乗れるレベルじゃない。道は遠いな。でもまあ、さいわい相手には事欠きませんからね。いい時代になったな」

「き、貴様、何者なのであーる!?」ゾーゾーっぽいの、というか、たぶんあれはゾーゾーだろう。本物のゾーゾーが叫んだ。「ゾーゾーの手下は無敵のはずなのであーる！　そんな剣みたいなチャチなもので斬れるはずがないのであーる！　おかしいのであーる！」

「そんなこと言ったって、私に斬れないものなんかないんだからしょうがないでしょう。ああ、それから何者かと訊きましたね」金髪の男は首をかたむけて、目をすがめた。なんて目だ。果たしてあれは人間の目なのかと漢は疑った。さながら腐ふ敗はいした泥どろが堆たい積せきしている沼ぬま地ちのような瞳ひとみだ。見つめていたらのみこまれてしまいそうな気がして、漢は目をそらし、切り立った崖の上に視線を向けた。思わず「おお……」と声がもれた。

　銀色の鎧よろい兜かぶとを身につけた一団が崖の上に並んでいる。

　銀の軍団ザ・シルバリイ。

　秩序の番人の一隊だ。

　おそらく金髪の男もさっきまでそこにいたのだろう。そこから飛び降りて、ゾーゾーっぽいやつと漢の上に着地したのだろうが、そんなことはどうでもいい。いや、どうでもよくはないのだが、漢の目は一人の小こ柄がらな番人に釘くぎ付づけになっていた。彼女は──そう、彼女は兜を脱ぬいだ。ブルネットのお下げ髪がみ。間ま違ちがいない。でも、これは夢だと漢は思った。夢に違いない。

　だって、何度も夢に見たのだ。彼女とふたたび会う夢を、漢は何回も何回も、数えきれないほど見て、その名を呼んだ途と端たん、目が覚め、夢は夢でしかないと思い知らされた。おかげで漢は、今も彼女の名前を口にすることができずにいた。彼女も崖から身を乗りだして漢を見おろすばかりだった。

「私はシャット・グレヒャといいます」金髪の男がいきなり動いた。その一いつ瞬しゅん後にはゾーゾーっぽいのが一匹、両断されて、内容物を撒まき散らしていた。「──一万三百四十八。まだまだだな」

城塞都市シャッコー

　出発の準備はもう終わりかけていて、あとはトマトクンに鎧を着せるだけだったから、マリアローズは部屋の外に出ようとしていた。その矢先に鐘かねが鳴りはじめた。朝に襲しゅう撃げきとはめずらしい。今さらマリアローズが出張ってもしょうがないが、やっぱり気になるのでクルルを肩にのせて司令部を飛びだした。空を仰あおぐと、邪じや竜りゆうの編隊らしき影かげが遠くに見えた。遠くといっても邪竜は速い。みるみるうちに近づいてくる。

「マリアローズ！」呼ばれて振り返ると、ピンパーネルとハニーメリーだった。マリアローズは軽くうなずいてみせ、二人と連れだって断だん崖がい城じよう壁へきへと向かった。ジョーカーはすでにクローディアを伴ともなって断崖城壁上で指揮をとっていた。一番目立つ場所に悠ゆう々ゆう堂々と立って戦場を見み渡わたし、敵を挑ちよう発はつあるいは威い圧あつして、味方を鼓こ舞ぶしながら次々と指示を出すのがジョーカーのスタイルらしい。危険を顧かえりみないどころか、自分に危険が及およぶことなど絶対ないと信じてさえいるように見受けられる。すごいとは思うよ。誰だれにでも真ま似ねできることじゃない。それどころか、誰にも真似できないといっても言いすぎじゃないかもしれない。ジョーカーはきっと、死ぬまでジョーカーのままだろう。何があっても、怯おびえたり、こわがったり、無様に、みじめにあがいたりすることはないのだろう。ひょっとしたら、強がっているだけなのかもしれない。でも、ジョーカーは最後の最後まで強がりを貫つらぬいてみせるだろう。僕にはできないよ。つらかったらつらいって、やっぱり言いたくなるし。我が慢まんしても、顔や態度に出ちゃうし。

　ジョーカーとトマトクンは少し似ている。性格はぜんぜん違うけれど、弱みを見せない、弱音を吐かない、どんなにひどい運命にも平然と立ち向かって、どれだけ重い荷物を背負っていても平気な顔をしている。僕にはよくわからないけどさ。友だちなんだろうなっ

て思うよ。そんなに仲がいいようには見えないし、いつも一いつ緒しよにいるわけじゃないけど、友だちなんだろうなって。トマトが死んじゃうかもしれない、ジョーカーはその事実を誰よりも冷静に受け止めているふりをしている。でも、本当は違うんじゃないかって。じつは僕らと同じくらい、動どう揺ようしてるんじゃないかって。

「ジョーカー」声をかけても、ジョーカーはこっちを見ない。クルルがマリアローズの外がい套とうの中にもぐりこむ。チーロ・パンカロがパンカロ・ファミリーの連中を引き連れてやってきた。
「ジョーカーっちジョーカーっちジョーカーっち！　オレ何すればいい、なあ、何でもするけど何すればいい、なあ!?」昨夜の襲撃で全身に火傷やけどを負って、ある程度は医術士の治ち療りようを受けたみたいだが、まだ顔中に湿しつ布ぷを貼はりまくっている。完治したわけじゃないだろうに、ずいぶん元気そうだ。どれだけタフなんだよ。ジョーカーは、しかし、チーロにもつれなくて、一いち瞥べつもくれずに「とりあえず黙だまっていろ」と命じただけだった。

　そう離はなれていない場所に邪竜が投げた岩が命中して、チーロが「うへっ」と悲鳴をあげ、パンカロ・ファミリーの男たちやジョーカー軍の兵士たちが騒そう然ぜんとなった。飛燕が「ゥオイッスゥーッ！」とか言いながら駆かけつけてきた。「まァーた敵かよォ！　邪竜ばっかじゃァーつッまんねェーなァ。オッ、マリアローズィじゃん。なんッか知ンねェーけど、テメェーらどっか行くんだよな？　ユリィも行くっぽいし、オレもトーゼンついてっからよォ。そこんトコよろしく元気っつゥーカンジでひとつ頼まァ」

「えぇー。きみもくるの……」

「ンだよ感謝しろよテメェー。オレがいりゃァー万人力だぜェ？」

「一人でも多いほうがイイ」ピンパーネルは凪ないだ砂色の瞳で飛燕を見つめた。「彼は間違いナク・戦力になりマス」

「ウァーオゥ。さッすがわかってンなァ、ミスタ・ピンパァー。オレの力をよォ」

「……まあ、たしかに助かるっていったら助かるんだけどね。うるさくなければね……」

「にぎやかでいいんじゃない？」ハニーメリーはのんきだ。彼女はマイペースだから、飛燕みたいなやかましい人間がそばにいても、さして気にならないのかもしれない。それとも、僕の心が狭せまいのかな。うるさい、か。

　うるさいといえば、カタリはどうしているだろう。アーニャ・クルチバに会えたかな。モリーとリーチェは元気でやっているだろうか。大丈夫だとは思うけど。

　会いたいな。いつ会えるだろう。

　会いたい人が大勢いる。

　でも、まずは行って、目的を果たして全員無事に帰ってきて、それからだ。

　また岩石が飛んできて、断崖城壁近くの建物を半はん壊かいさせた。投石を終えた邪竜どもが降下してくる。

「ジョーカー」

　もう一度、声をかけてみた。

　ジョーカーはやはり振ふり向かない。こっちを見ることもしないで「ここに貴様らの仕事はない」と低い声で言った。「行け。行って、欲ほつするところをなすがいい」

　クローディアが金色とも銀色ともつかない髪をかきあげて顔を振り返らせ、同じ色の瞳でマリアローズとピンパーネル、ハニーメリーを見た。「幸運を」

　ピンパーネルが「はイ」と静かに答え、ハニーメリーは笑え顔がおで「うん」とうなずいた。

「帰ってくるよ」マリアローズはあえてクローディアではなく、ジョーカーに向かって言いきった。「何があっても、ちゃんとみんなで帰ってくるから」

　ジョーカーの肩かたがわずかに揺ゆれた。笑ったのかもしれない。

「おおうっ!?」チーロが叫さけんだ。邪竜が迫せまってくる。その

背に何か乗っている。マリアローズは「うわっ……」と首をすくめた。邪竜の上で「げえへへへへはははははぁ……！」とか下品な笑い声をあげているあれは、見間違えようがない、赤のレッド・伯爵テリオンだ。しかも、すでに変身しちゃってる。マリアローズはあとずさった。「やばい、あいつ劫ごう火かを……！」

「ずぉらあああぁぁぁぁ……！」赤の伯爵が邪竜の背から飛び降りて劫火を鞘さやから抜ぬいた。ジョーカーが舌打ちをした。「──クローディア！」「はい、主様マスター」クローディアが前に出る。その全身から黒い靄もやのようなものが噴ふきだして、またたく間に彼女の手の中で巨きよ大だいな鎌かまと化した。赤の伯爵が劫火を振りおろす。「喰くらえぃ！　大Ｇ級極熱バーニン地獄グヘル……！」

「〝障壁BARRIER〟……！」クローディアの大鎌グリムサイズがバアアァァァアァァッと拡ひろがって黒い膜まくを作るのが少しでも遅おそかったら、焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア〝劫火〟が巻き起こした爆ばく炎えんでみんな焼け死んでいたかもしれない。

「うえへへへぁ……！」赤の伯爵の声がした。「生意気にも防ぎやがったか……！」

　炎ほのおが引く。

　クローディアが何かを手て許もとに引きよせる動作をすると、その手に黒い膜が吸いこまれて一瞬でグリムサイズの形をとりもどした。

「……オレ、あいつ苦手かも」チーロが弱気なことを言っている。さんざん火傷をして、さすがに懲こりたのかもしれない。

「ジョーカーどの……！」白い毛皮のコートをまとった一団が向こうから走ってくる。武士団。先頭は棟とう梁りようウィリアム・タイガーボーンだ。「その者の相手はどうか拙せつ者しやにお任せあれ！　先だっては取り逃にがしたが、今度こそは決着をつけてみせようぞ……！」

　ジョーカーが顎あごを振ってみせた。「早く行け」

　もちろん、マリアローズたちに言っているのだ。

「行こう」マリアローズは踵きびすを返した。ピンパーネルとハニーメリー、飛燕もついてくる。すぐに背後で爆発音が轟とどろいた。でも、足を止めない。後ろを見ない。前を向いて走る。仲間を信じて走る。仲間が、ジョーカーとクローディアが、僕らを行かせてくれる。心配なんかしなくていい。僕らは旅立って、帰ってくる。人の居場所が極きよく端たんに少なくなったこの世界で、帰ってこられる場所があるのはすごいことなんだ。

　司令部に戻もどって部屋に駆けこむと、トマトクンは全身鎧を着て、驚おどろいたことに寝しん台だいに腰こしかけていた。いつもはどうしてかこの部屋に入りたがらないクルルが、まだ外套の中にいる。一緒に行くつもりなのかもしれない。

「外はどうだ」とトワニングに訊かれて、マリアローズは軽くうなずいてみせた。

「用意はできたわ」ユリカは飛燕を見とがめた。「……きてくれるの、飛燕？」

「あったりめェーのコンコンチキだろ」飛燕は、ヘッ、と鼻を鳴らした。「ゆっとっけどな。オレァもォー離れねェーぜ。いつでもユリィをだっこできるトコにいるって決めたんだよ。だから、ユリィもオレから離れンじゃねェーぞ」

　ユリカは目を伏ふせた。「……はい」

　すっごく赤くなっているけれど、見ているこっちも恥はずかしくてしょうがない。でも、正直、今の「はい」は、ただでさえかわいすぎるユリカを何千倍もかわいらしく見せるとてつもない効果を持つとんでもない「はい」だった。飛燕じゃなくたってだっこしたくなるって、それは。でも──どうなんだろ。マリアローズはトワニングをちらっと見た。トワニングはユリカのほうには顔を向けていない。飛燕をにらみつけているわけでもない。無関心を装よそおっているのかもしれないが、眉まゆがひそめられているし、こめかみのあたりや逞たくましく盛りあがった肩がピクピクしている。マリアローズはユリカに近づき、トワニングを視線で示して耳打ちをした。「……そういえば、どうなの？　説明した？」

「じちゅは、話したんだけど──」ユリカはマリアローズの耳に唇くちびるを寄せた。「しょうか、とだけ。しょれ以外は、とくに何も」

「へえ……」マリアローズはもう一度、トワニングの様子をうかがった。気のせいだろうか。なんとなく荒あらぶる神経を無理やり鎮しずめようとしているみたいに見える。トワニングなりにいろいろ考えて、気持ちに整理をつけようとしていたりするのか。だけれどトワニングにしてみれば唐とう突とつだろうし、マリアローズでさえいまだにうーんとか思ってしまったりするくらいなので、かなりきついものがあるはずだ。まあ、もちろん今はそれどころじゃないんだけどさ。

「トマトクン……」サフィニアはトマトクンの足許にひざまずいて、潤うるんだ目で彼を見上げている。「大丈夫、ですか……？いえ……大丈夫なわけ、ないんですけど……」

　トマトクンはかすかに唇の片かた端はしをつりあげてみせた。「わりと大丈夫だ」

　ロム・フォウはトマトクンを見つめながらアルファの頭を撫なでている。もともとおしゃべりなほうではないが、それにしても口数が少ない。ロム・フォウは傍はたから見るよりもずっとショックを受けていて、落ちこんでいるのかもしれない。マリアローズはきゅーのもふ毛をひと撫でしてからロム・フォウに近づいて、背中に手をふれた。ロム・フォウはちょっとだけびくっとしてマリアローズを見ると、まばたきをして「ああ……」と短く息をついた。「どうしたんだい、マリア」

　それはこっちの台詞せりふだよと思わなくもなかった。やっぱりロム・フォウはおかしい。深刻な事態には陥おちいらないと思うけれど、念のため注意を払はらっておいたほうがよさそうだ。マリアローズはロム・フォウに微笑ほほえみかけた。「どうもしないよ」

「そろそろよさそうだな」トマトクンが、ソオル、と名を呼ぶと、部屋の中に足音が響ひびいた。きっと彼はわざと音を立てたのだろう。足音がしたほうに目を向けると、一人の男が立っていた。男は真っ白い布を頭から被かぶっている。その右みぎ腕うでは左腕のようで、左腕は右腕のようだ。

　ソオルは一同を見まわした。「それじゃあ、扉を開けるとしよう。ちなみに、僕がこれから開ける扉とびらはあくまで一時的なものだ。すぐに消えてしまう。そこは心しておいてもらいたい。いいかな」

「やってくれ」とトマトクンにうながされて、ソオルは左手のような右手を持ちあげた。

　人差し指で、空中に線を引く。

　まずはソオルの頭よりずっと高い位置に、水平の直線を。それから、その直線の端から垂直に線を引き下ろす。マリアローズは目を瞠みはった。見える。線が。たとえばマリアローズが今、目にしている部屋の景色が、実物と見分けがつかない精せい巧こうな絵だとする。ソオルの指先に剃刀かみそりか何か仕込まれていて、その絵を切り裂さいている。そんなふうに見える。もちろん、そんなはずがない。でも事実、ソオルの指は空間に切れ目を入れている。水平の線、垂直の線の次に、もう一本、垂直の線を──水平線の両端から下ろされた二本の垂直線は、あと少しで床ゆかに届きそうだ。ソオルはそれらの垂直線の下端と下端とを結んで、できあがった縦長の長方形を掌てのひらで押した。押しだされて、向こう側に倒れた。

　光だ。

　それが扉なのか。たぶんそうなのだろう。その扉から光が射さしこんでくる。あるいは、闇やみと呼ぶべきなのか。いや、違ちがう。闇はある場所からある場所に入ってきたりしない。そもそも、光がない状態を指して闇という。だから、いくら扉の向こうが深い暗闇に閉ざされていたとしても、その闇がこの部屋に入りこんでくるなんていうことは起こりえない。だとしたら、それは光なのだろう。

　黒い光だ。

　じつは、マリアローズはそれを見たことがある。召しよう喚かん魔ま術じゆつだ。贄にえの園の住人が呼びだされる際、この世界には存在しない黒い光が観測される。

「扉の向こうは獄の獄ジエイルネイルだよ」ソオルは扉の前からどいた。「さあ、急いで」

「ユリカ、飛燕、サフィニア、先行して」マリアローズが指示すると、三人はそれぞれ短く返事をして扉をくぐった。飛燕が「なんじゃこりゃァッ」とかなんとか言っている。その声がやけに遠く、くぐもって聞こえた。マリアローズはピンパーネルとハニーメリーを行かせてから、トワニングにうなずいてみせる。トワニングがト

マトクンを背負うと、ロム・フォウが大たい剣けんを持った。ロム・フォウ、アルファ、トマトクンを背負ったトワニング、きゅー、ソオル、最後にマリアローズが扉を通り抜ける。

　暗い。

　でも、真っ暗じゃない。こんなにも暗いのに、見える。

　見えるということは、暗いわけじゃないのか。

　踏ふみしめるこの感かん触しょくは、おそらく砂だ。砂さ漠ばくなのか。どこまでも砂さ丘きゅうがつづいている。風を感じる。なまぬるい風だ。空はほんの少し緑色がかった濃こい灰色で、ぽっかりと黒い穴があいている。穴じゃなくて、あれは太陽なのかもしれない。黒い太陽。振り向くと、もう扉は消失していた。足あし許もとに影かげが落ちている。白い影が。

「なんだか息苦しいね」とロム・フォウが言った。やっぱりくぐもって聞こえる。耳が詰つまっているみたいに。耳だけじゃない。鼻や喉のども詰まっているように感じる。黒い光のせいか。それとも空気が違うのだろうか。マリアローズはアルファを見た。環かん境きょうに対する感覚は、たぶん人間よりも数段鋭するどいだろう。アルファはハッハッと少し浅い息をしているけれど、それ以外、とくに変わった様子はない。ちらっとマリアローズと目をあわせて、気安く見るな、とでも言わんばかりにそっぽを向く態度も、いつもどおりだ。きゅーはどうだろう。そう思って視線を投げると、きゅーは「きゅう？」と首をかしげてマリアローズの肩をぽむぽむと叩たたいた。どうやら逆に心配されてしまったみたいだ。ユリカ、飛燕、サフィニア、ピンパーネル、ハニーメリーがいて、トワニングはしっかりとトマトクンを背負っている。光が当たっているところが黒く見えて、当たっていない場所は白く見えないというのはそうとう奇き妙みょうで、それだけでもかなり気持ち悪いが、とにもかくにもみんなそろっている。

「そう悪くない場所に出たようだ」ソオルは右手のような左手をマリアローズに差しだした。何か握にぎっている。懐かい中ちゅう時計のようなものだ。「目的地に印をつけておいた。この羅針計の針が示す方向に進めば、たぶん五日ほどでたどりつけるだろう」

　マリアローズは羅針計とやらを受けとって蓋ふたを開けた。中は時計ではなく方位磁石そっくりで、赤い針が揺れながらある方向を

指している。そっちに顔を向けて目を凝こらしてみた。何があるわけでもない。砂丘、砂丘、ひたすら砂丘だ。それ以外のものは一いつ切さい見あたらない。マリアローズは蓋を閉めた。「わかった。五日なら、たしかに悪くないね」

「さて」ソオルは振ふり仰あおいだ。「案の定、探知され、排はい除じよ系統が動きだしたようだ」

　つられてマリアローズも深い灰かい緑りよく色の空を見上げた。何かいる。

　浮ういている。

　そいつは頭ず巾きん付きのたっぷりした丈たけの長い衣ころもを身にまとっている。その下に鎧よろいのような防具も着こんでいるようだ。手には槍やりみたいな武器を持っている。人間に似ているけれど、絶対に違う。だって、羽が生えている。鳥のような、でも、三対六枚もの羽を背負って、そいつは飛んでいる。そいつ？いや、そいつらだ。遥はるか上空から、そいつらは次々と舞まい降りてくる。

　目視できるかぎりでは、六人も。

──ハハハ排ハハァアアァアア排排排除排除排排排除ハァアアァアァァアア排除スル──

　マリアローズは顔をしかめて、とっさに耳を押さえた。やつらの声なのか。まるで硝子ガラスを引っかいた音を組みあわせて音声に仕立てあげたような声だ。

「いきなり熾セ天使ラどもフとは」ソオルの手にはいつの間にか長弓が握られている。「加減というものを知らないね。ああ、紹しよう介かいしよう。彼らは天使。管理者たちの手足だ」

「天使……」サフィニアが呆ぼう然ぜんとつぶやいたのとほぼ同時に、ソオルが引き絞しぼった弓ゆ弦づるから指を離はなした。矢をつがえていたわけでもないのに、何かが飛んでゆく。というか、飛んだと思ったときにはもう、それは一人の天使をとらえていた。天使の顔面に、白い闇じゃない、区別するのは難しいけれど、あれはきっと光だ、白い光を放つ矢のようなものが突つき刺さって、天使はすぐさまそれを引き抜ぬこうとしたが、ふれた手がどろどろと

けだした。顔面も融ゆう解かいしている。とけたものがだらだらと降ってくる。ソオルは二射、三射して、さらに二人の天使の顔に矢のようなものを命中させた。射られた天使はどんどんとけてゆく。残りの天使は三人。急降下してくる天使の一人をソオルの矢が射い貫ぬいた。「逃げて」

「走れ……！」マリアローズは即そく座ざに指示して、自分も駆かけだした。ぜんぶソオルがやっつけてくれればいいのに。できそうなのに。でも、ソオルが逃にげろというからには、そうしたほうがいい理由があるのだ。それはすぐに判明した。

「うへ……ッ！」飛燕が変な声を出し、トワニングが「ぬぬ……！」と唸うなって、マリアローズは、冗じよう談だんでしょ、と思った。冗談だったらどんなにいいか。しょっぱなからこれはないんじゃない？　やめてよもう。六人だけじゃないなんてさ。

──ハァアアァァ排排排排除排ジョジョジョハアァアアァアアァァ排除排除排除排除──

──排除スススススハァァァァ排排排排排排排排排除スルルルルハァアァァ排除ハァ──

──アアァァアアァアァァ排除スルルルスススハァアアァァアァ排除排除排除スルル──

──排除ススススル排除排除スル排除排除スルルルルル排除スル排除スル排除ススル──

　天使はどんどん降りてくる。空からわくように、ぞくぞくと。六枚羽の天使だけじゃない。四枚羽の天使も、二枚羽の天使もいる。数は十か二十か三十か。いや、もっとだ。数十どころか、桁けたが一つ上かもしれない。とんでもない数だ。ソオルがいくら射溶とかしても減らない。減ったようには見えない。やばいんじゃないのこれ。どう考えてもやばすぎなんだけど。砂に足をとられる。走りづらくて思うように速度が出ない。他ほかの天使より小こ柄がらな二枚羽の天使たちが迫せまってくる。銃じゆう声せい。ハニーメリーが拳けん銃じゆうリトルジョニーをぶっ放したのだ。でも、当たったのかどうか。「──ユリカ、飛燕！　迎げい撃げきして！」マリアローズが叫さけぶと、ユリカは「覇はっ……！」と極限クライマックス九手棍ナインポールで天使を一人叩き落とし、飛燕は「ドォ

リャァァッ！」と別の天使に飛び蹴げりをぶちかました。「疾しっ……！」ユリカはさらに天使をぶちのめそうとする。が、天使どもは急きゅう上じよう昇しよう。マリアローズたちの頭上を飛び越こしていって急転回し、正面から突っこんでくる。どうしよう。どうすれば。考えている暇ひまなんてない。勘かんに頼たよるしかない。マリアローズは声を張りあげる。「きゅーピンプロム・フォウ、前……！」即座にまずピンパーネルが天使の群れに突とつ撃げきして雌し雄ゆう一対ついの短剣で一人斬きり刻み、向かってきた天使をきゅーが掌しよう底ていで吹ふっ飛ばして、ロム・フォウはトマトクンの大剣で一人ぶった斬る。ピンパーネルがもう一人バラすと、正面に回った二枚羽の天使どもは一いつ掃そうされた。だけどまだくる。わかっている。マリアローズはサフィニアを見てうなずいてみせた。うなずき返して、サフィニアが舞いあがる。「っ……！」と両手を突きだしたら、あふれた純白の光が黒い光を音もなく切り裂いて天使どもを撃うち抜いた。光は拡大する。そして、増える。最初はサフィニアの掌からだけ発せられていたのに、真っ白い光は彼女の肩かたから、腰こしのあたりから、背中からも放たれて、黒い光に包まれた世界を白く貪どん欲よくに侵おかしてゆく。光にのみこまれた天使は消え失せ、光にふれた天使はその部分がぶつぶつ泡あわ立だって、ぷちぷち弾はじける。ぼろぼろ崩くずれ、ばらばらと落ちる。大きい、かなり大きな魔術だ。いける。サフィニアの魔術は天使にも十分通用する。ただし━マリアローズは地面に転がっている天使の残ざん骸がいを見て、楽観はできないと判断した。

うごめいている。

ぶるぶるぷるぷる震ふるえて、出っぱったり引っこんだりしながら形を変え、短い触手みたいなものを生やして、それをさかんにくねらせ、動いている。どうやら寄り集まろうとしているみたいだ。寄り集まって、どうするのか。くっつくのか。くっついて、もとどおりになるのか。まあ、おそらくそんなところだろう。驚おどろきはしない。きもいし、超最低ＳＵＣＫな気分ではあるけど、これくらいで驚いてたらやってられないって。

「走って！」マリアローズは羅針計の蓋を開けて、方向を確かく認にんした。よし。こっちでいい。蓋を閉めて、羅針計をしまう。
「走れ！　走れ！　走れ……！」

駆けながら振り返ると、逆方向に移動しながら天使どもを射溶かしているソオルの姿が遠くに見えた。天使はまだどこからか飛んで

くる。ざっと見たところでは、そのうちの九割はソオルを追いかけている。だいぶ引きつけてくれているが、そうはいってもマリアローズたちだって依い然ぜんとして数十人の天使に付け狙ねらわれている。目的地まで、五日。最短で五日と考えたほうがいいだろう。トワニングが巨きょ体たいを揺ゆらして駆けながら「むむう」と唸っている。背負われているトマトクンが「すまんな」と言った。トワニングはすぐに「なんの」と答えたけれど、きっと戦えないので筋肉がうずうずしているのだろう。まあ筋肉事情は別としても、トワニングを戦力として計算に入れられないのは正直、痛い。かといって、身長百九十サンチのトマトクンを一人で運んで、いざとなったら身体からだを張って守ることもできるとなったら、やっぱりトワニングだ。医術式のこともあるし。そうだ。なんとか休める時間を作って医術式を施ほどこさないと、トマトクンが保もたない。

　またハニーメリーが拳けん銃じゆうを撃った。四枚羽の天使と二枚羽の天使の一団がマリアローズたちに肉にく薄はくしようとしている。対応しないと。そう思いながら一いつ瞬しゆん、前を見て、天使の一団を振り仰ぎ、それからまた前方を見なおした。「えっ……」と声がもれた。何かいる。でかい。巨人だ。獄の獄は、贄の園の最奥部であり、地じ獄ごくの最辺境でもある、とソオルが言っていた。贄の園というよりも贄の園の住人のことは、召喚魔術やらアンダーグラウンドやらの絡からみで、お馴な染じみというほどではないにしても、そこそこ知っている。いるんだよね。ああいうのが。贄の園には。めっちゃくちゃでっかくて、えっらい気持ち悪くって、あからさまに危険な暴あばれん坊ぼうが。しかも、こっちにくるし。大おお股またで、今のところ走ってはいないものの、歩いてくる。

　後ろからは天使ども。前には贄の園の住人。誰だれも死なせるわけにはいかない。黒い太陽。白い闇。いつ果てるとも知れない砂漠。最短五日間。あれこれ考えていたプランなんか、現地にきてみたらぜんぶ吹っ飛んだ。僕に何ができる？　僕なんかに、いったい何ができるっていうんだよ？　歯がゆい。自じ嘲ちよう。苦しい。でも、絶望は、しない。何があっても。マリアローズは笑う。無理やり笑う。「──上等じゃないか！　やってやる……！」

二巡月二十番日　ワールオック山中

「キミもしつこいネ……！」黒こく翼よくを羽ばたかせて、彼は翔かける。青い肌はだの悪あく魔まが鷹たかのような目を爛らん々らんと赤く輝かがやかせて、細かく編んだ長い黒くろ髪かみを振り乱し、有翼の人面山や羊ぎを駆って追いすがってくる。その背には剣けんが二本、それから、両手に一本ずつ。すべて魔剣だ。魔剣使い。〝地獄のヘルズ・惨殺マーダー芸術家アルテイスト〟。口くち髭ひげと顎あご髭ひげを短く整え、精せい悍かんな顔にいつもどこか皮肉っぽい表情を浮かべている。剣舞のメンチド・大ハイ公ヴエ爵リオン。タイダル・クライシズ。もともとは七本の魔剣を所有して自在に操っていたが、今は有翼人面山羊と化している魔剣をふくめて、五本。あとの二本は失われた。二本の魔剣は彼に斃たおされたのだ。クライシズが左手に持った褐かつ色しよくの魔剣を放った。「ガシュテ・ダンドルボログ」

褐色の魔剣が多頭有ゆう尾びで蟷螂かまきりのような前ぜん肢しを持つコオロギを生んで消えた。コオロギといっても体長は五メーテル以上ありそうだし、翅はねがやけに発達している。魔虫ダンドルボログ。ああいった凶きよう暴ぼうきわまりない異形の生き物を剣に封ふうじこめ、剣そのものと同化させることで、魔剣は造られるのだという。彼は幾いく度どにも及およぶクライシズとの戦いの中で二体の魔ま獣じゆうを殺し、すなわち二本の魔剣を破は壊かいした。ダンドルボログがすさまじい勢いで飛んでくる。「──アルカーディア」彼がひっそりと名を呼ぶと、右みぎ腕うでがほどけて無数の黒い管の束となり、濁だく流りゆうのごとくダンドルボログに襲おそいかかった。ダンドルボログは鋭えい利りな前肢で何本かの管を斬り払はらったが、その程度でアルカーディアを防ぐことはできない。アルカーディアはダンドルボログを貫つらぬこうとする。翅は穴だらけになったものの、硬かたい外骨格はアルカーディアを弾き返した。「ならば……！」彼が命じると、アルカーディアはダンドルボログを包みこんでとらえた。黒翼で空を叩たたいて、ダンドルボログを思いっきり振りまわす。その先にクライシズがいる。ぶつかる前に、アルカーディアはダンドルボログを放した。ダンドルボログがクライシズめがけて飛んでゆく。「──ええい……！」クライシズは右手で持っていた濃のう緑りよく色の魔剣を両手持ちし、剣の平でダンドルボログを打ち払った。クライシズを乗せた有翼人面山羊がガクッと高度を下げる。その隙すきをついて、彼はクライシズの頭上をとった。「ジャシュギシュ……！」彼が名を呼ぶと、左腕が膨ふくれあがって黒こく鱗りんに覆おおわ

れ、腕とは似ても似つかないものへと変じる。巨大な黒い蛇へび
か、あるいは、やたらと首が長い黒こく竜りゅうの頭部のようなも
のに。ジャシュギシュがクライシズに食くらいつこうとする。この
凶暴な顎あぎとから逃げられるものなら逃げてみろ。追うぞ、ジャ
シュギシュは。どこまでも追う。「……ぬう！」クライシズは間も
なく逃げるのをやめて、濃緑色の魔剣をジャシュギシュめがけて投
げた。「ガシュテ・ヌェニチェゴラ！」魔剣はたちまち全長十メー
テル以上ありそうな濃こい緑と黒の斑まだらの蚯蚓みみずみたいな
生き物ヌェニチェゴラを生んで消えた。ジャシュギシュがヌェニ
チェゴラにかぶりつく。噛かみちぎろうとしたが、牙きばを食いこ
ませたところから粘ねん液えきとともに青みがかった気ガ体スが噴
ふきだした。あれはやばいものだ。彼はとっさにジャシュギシュを
引き戻もどして、急上昇しながらすでにアルカーディアの面おも影
かげがない彼の右手で泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜い
た。ジャシュギシュから戻る途中の左手に持ちかえて、右の掌ての
ひらに短剣を突き刺す。短剣の柄つかに浮うきでているいくつもの
顔がゆがんだ。ＧＹＯＯＯＯＯＯＯＨＹＵＵＵＵＵＵＵＨとおぞま
しい声をもらして、彼の血を啜すする。そして泣き叫ぶ短剣は、短
剣とは呼びえないものへと━まがまがしい深紅色クリムゾンの刃や
いばは何節にも分かれて、節ごとで自在に折れ曲がり、また、伸し
ん縮しゆくさえする、剣というよりは鞭むちのような、しかし、鞭
にしてはごつすぎる凶器へと形を変える。「━断末デスク魔のラ
イ・剣ソード……！」彼は断末魔の剣をしなわせる。急降下。クラ
イシズは新たな魔剣を抜ぬいた。赤い魔剣。それは知っている。
「ガシュテ・リヴィディリュフ……！」魔剣が真っ赤に燃える無頭
四翼の巨鳥リヴィディリュフを生んで消えた。リヴィディリュフが
彼めがけて突つっこんでくる。彼はかわさない。向かってゆく。彼
の口くち許もとに自然と笑えみが浮かんでいる。もうすぐだ。あと
少し。激突する。その寸前、彼はほんの少しだけ黒翼の角度を変え
る。彼とリヴィディリュフはぎりぎりすれ違ちがう。リヴィディ
リュフの炎えん翼よくが彼の身を焦こがしたが、かまわない。すれ
違いざまに、断末魔の剣がリヴィディリュフを真っ二つにしてい
る。リヴィディリュフは両断されても、すぐにくっついてしまう。
だが、その間に彼はクライシズに肉薄している。彼が断末魔の剣を
繰くりだすと、クライシズは「ラティハ・ボルクスフォル」と唱え
て有翼人面山羊ボルクスフォルを葡ぶ萄どう色いろの魔剣に戻し
た。魔剣を手にして、クライシズは落下する。落ちながら、断末魔
の剣をかろうじて弾きかえす。クライシズはさらにもう一本、鈍に
び色いろの魔剣を抜く。双そう剣けんを振ふるって、襲いくる断末
魔の剣を防ぐ。防ぐ。防ぐ。守れ。さあ、守ってみせろ。どこまで

守れるか、やってみるといい。着地。降り積もった雪が巻き上げられ、地面が陥かん没ぼつする。衝しよう撃げきをものともせずクライシズは飛びのく。彼は黒翼を畳たたみ、雪ゆき煙けむりを上げて地を駆け、跳とんで、断末魔の剣を舞まわせる。二本の魔剣と断末魔の剣がまばたきの間に何度もぶつかりあう。不意に魔虫ダンドルボログが、大蚯蚓ヌェニチェゴラが躍おどりかかってくる。彼はダンドルボログの突進をよけ、うねり寄るヌェニチェゴラをかいくぐって、クライシズを追撃する。クライシズは魔剣で断末魔の剣を打ち返して下がる。打ち払って下がる。下がって間をとろうとするが、彼は疾はやく、断末魔の剣はのびる。彼は正面から攻せめかかっているのに、断末魔の剣はクライシズの背後を突く。さしものクライシズもこれは回かい避ひしきれない。「──くっ……！」肩を深くえぐられ、クライシズは横っ跳びする。彼はその動きを読んでいる。ほとんど瞬時に移動して、彼はそこにいる。

「つかまえたヨ……！」

　断末魔の剣が蛇みたいにクライシズに巻きついて輪切りにするところを想像するだけでいい。そのとおりに断末魔の剣は動く。彼はそうしようとしたがやめて、クライシズを蹴け飛とばした。巨鳥リヴィディリュフが飛びかかってくる。「ジャシュギシュ！」彼は瞬時に左腕を黒竜のごときジャシュギシュへと変化させて、リヴィディリュフを叩き落とした。間かん髪はつを容いれず、断末魔の剣で斬る、斬る、滅めつ多た斬りにすると、それが現れた。リヴィディリュフの身体の真ん中、ちょっと左寄りのあたりに、それは隠かくされていたらしい。一ひと抱かかえほどもある真しん珠じゆのような物体だ。「フフッ……！」彼は短く冷たく笑い、ジャシュギシュがその物体を嚙み砕くだく。途と端たんにリヴィディリュフの全身を包んでいた炎ほのおの勢いが衰おとろえて、クライシズが双剣で打ちこんでくる、彼は断末魔の剣でやすやすと撥はね返す、ジャシュギシュがクライシズを薙なぎ払う、クライシズは吹っ飛んで、葡萄色の魔剣から有翼人面山羊ボルクスフォルが生まれ、クライシズはボルクスフォルの角につかまる、ボルクスフォルが駆かけだす、速い、飛びたつ、速い、追うか、追うまいか──彼は軽く頭を振る。ダンドルボログとヌェニチェゴラの姿は見あたらないが、リヴィディリュフは始末した。これで魔剣使いタイダル・クライシズが持っていた七本の魔剣のうち、三本を破壊したことになる。あと四本。彼は、フッ……と笑ってつぶやく。「楽しみはとっておくサ」

「どうやら──」木こ陰かげから白い息を吐はきながらダリエロが出てきて、つまらなそうにあたりを見まわした。「お楽しみは終わったみてぇだな」

「まあネ」彼は前髪を指先で払った。「みんなは無事かい」

　ダリエロはゆがんだ顔をさらにゆがめ、肩をすくめてみせただけで、何も言わなかった。何がそんなに気にくわないのか知らないが、大丈夫だということだろう。

「これ以上、犠ぎ牲せいを出すわけにはいかないからネ……」彼は断末魔の剣をちぢめて、左手を柄にかけた。引き抜くと、短剣の剣身には一いつ滴てきの血もついていない。

「おい」ダリエロが近づいてきて、彼の肩を小突いた。「てめぇ、何を考えてやがる」

「何も」彼は少しだけ笑った。「何も考えてないヨ」

「だったら、痛ぇ顔くらいしやがれ」

「痛くないからネ」彼は泣き叫さけぶ短剣の切っ先を左の掌に押しあてた。皮ひ膚ふを突き破る。血がにじむ。紛まがい物もの同然なのに、痛みはある。でも、痛くはない。

「よせ」ダリエロは彼の手から泣き叫ぶ短剣を奪うばいとった。「俺が言ってんのはそういうことじゃねぇ。頭の中身が残念なレベルだからわからねぇのかよ、この塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが」

「悪かった」彼は手を握にぎって、開いた。もう傷はふさがっている。どの傷きず跡あとも、こんなふうに消えてしまえばいい。「ヨナ樹海からの撤てつ退たい戦で、毛モウが死んだ。寂ジヤク星セイも、リョーヨルカも、アルバートも、シュトレーハウゼンも死んだ。いや、死んだんじゃない。死なせたんだ。ボクが五人も死なせてしまった。もうたくさんだヨ」

「だから、何だってんだ」ダリエロは彼の胸むな倉ぐらをつかんだ。「だから何だってんだよ。ああ？　言ってみろ、アジアン」

「何を」アジアンは目を伏ふせた。「何を言えばいいのサ」

「てめぇの糞くそ頭で何を考えくさってやがるのか、今すぐ言わな

きゃぶっ殺してやる」

「物ぶつ騒そうだネ」

「知らねぇのか。俺はこういう人間だぜ。気にくわねぇやつは誰だろうと目の前に立たせちゃおかねぇ。どうした。言えねぇのか。だったら俺が言ってやる」ダリエロは首をかたむけて、アジアンに顔を近づけた。ダリエロの青い右目と黒い左目は、まったく別々の感情を、思考を宿しているかのようだ。色だけじゃない。形も、目つきも違う。そもそも顔全体がそうだ。猛たけ々だけしくて、冷静で、粗そ野やで、繊せん細さいで、冷れい酷こくで、熱い。「──どういうわけか、あのタイダル・クライシズとかって厄やつ介かいな糞悪魔野郎は、てめぇに目をつけてやがる。てめぇはだから、自分は俺らやババアの軍団から離はなれたほうがいいんじゃねぇかと考えてやがるんだろ。逃にげるつもりか。とんずらかますつもりかよ、ふざけるな」

「逃げる、なんて、そんなつもりは毛頭ないヨ、ボクはただ──」

「ただ、何だ。仲間の安全のためにってか？　おためごかしをぬかすんじゃねぇ。てめぇは参ってるだけだ。仲間を守りながら戦うのに限界を感じてる。このままだともっと死ぬんじゃねぇかと恐おそれてる。てめぇは何だ？　アジアン、てめぇは何様のつもりだ？」

「ボクは──何様でもない、ボクは……」

「勘かん違ちがいするんじゃねぇぞ」ダリエロはアジアンの額に人差し指を突きつけて、歯をガチガチ鳴らした。「俺らは虫けらじゃねぇ。いいか、アジアン。たしかにてめぇは強ぇ。てめぇが何物だろうと、そんなことはどうだっていい。生き物として、てめぇは強ぇ。だがな。それが何だ？　俺らがてめぇより弱ぇから、それがどうした？　俺らは強いてめぇに庇ひ護ごされなきゃならねぇのか？　てめぇは俺ら大量の雛ひな鳥どりを抱かかえた親鳥かよ？　勝手に世話してる気になってんじゃねぇぞコラ。俺らだってな、矢が飛んでくりゃあよけるし、殴なぐりかかってくるやつがいたら殴り返すんだ。能なしだろうと餓が鬼きだろうとへし折れそうな女だろうと、戦やるときは戦るしかねぇ。俺らは実際、そうしてる。安全圏けんなんかどこにもねぇんだ。死ぬときは死ぬ。あたりまえのことだ。思いあがるなよ、アジアン。てめぇの命はてめぇのものだし、俺の命は俺のものだ。誰だれも、誰かの人生を背負ったりできねぇ。背負った気になって安酒をがぶ飲みしたみてぇに酔よっ払ぱ

らうのは、誰にだってできるけどな。見てみろよ、くそったれ。目を覚まして、てめぇの背中をよぉく見てみろ。そこに何かあるか？　ねぇよ。何もねぇ。てめぇは一人だ。そばに仲間がいたって、くたばるときは一人なんだよ。てめぇも、俺も、誰だってそうだ。生きて、戦って、最後は一人で死ぬ。みんな同じなんだ。空を飛べるからって、俺らを見おろすんじゃねぇ。死んだやつから、これから死んでいくやつから、てめぇごときが誇ほこりを奪うな。そいつらはてめぇの装そう飾しよく品じゃねぇんだ。てめぇが俺らを守るだと？　笑わせるんじゃねぇ。余計なお世話だ。いいか、アジアン、逃げるな。失うことから、逃げるんじゃねぇ」



「……わかった」アジアンはダリエロの人差し指をゆっくりと押しのけた。「わかったヨ、ダリエロ。ボクは逃げない。これから誰が死んでも、たとえそれがボクのせいでも、逃げたりしない」

「当然だ」ダリエロはアジアンの胸倉から手を離して、地面に唾つばを吐いた。「ババアのところに戻るぞ。さっさとこい」

「ああ」

　アジアンは泣き叫ぶ短剣を鞘さやに納めた。ダリエロが踵きびすを返す。その背中を追いかけて、踏ふみだしかけた足が止まる。

　ダリエロが振り向いて、唇くちびるをひん曲げた。「どうした」

「いや」

　喉のどまで出かかった名前をのみこんで、アジアンは歩きはじめる。キミは今どこにいるだろう。何をしているだろう。そんなことは考えたくない。考えないようにしている。考えてもわかるはずがない。知るすべがないからだ。ボクはここから離れられない。離れたくないのかどうかは、でも、わからない。さっき迷ったのだって、もしかしたらキミを捜さがしに行きたかったのかもしれない。何もかもかなぐり捨てて、キミを捜しに行く。見つけだして、どこかに連れ去ってしまいたい。苦い笑いがこみあげてきた。キミは絶対に無事だと信じているけれど──連れ去る？　馬ば鹿かなことを。だって、キミが納なつ得とくするわけがない。キミが納得しないようなことは、ボクにはできない。

　ようするに、ダリエロの言うとおりだ。逃とう避ひ。ボクは逃げだしたかった。仲間を死なせてしまって、それなのに誰もボクを責めたりしない、ボクについてきてくれる、ボクと一いつ緒しよにいてくれる、ありがたい話なのに、涙なみだを流して感謝するべきなのに、重いんだ。重くてしょうがないんだ。

　ボクは成長していない、これじゃいけないとわかっているのに、ちっとも進歩していない。情けない。恥はじを知れ。キミにあわせる顔がない。キミに会いたい、会いたくてたまらないけれど、会えない。ため息をついた。

「ベティはどうしているだろうネ」

　ダリエロは肩かたというか右半身をぴくっと震ふるわせるというか引きつらせた。「あぁ？　知らねぇよ、あんな女のことは。まぁ……」

　それから何か言うのかと思ったら、一向に口を開こうとしない。

　二人はしばらく無言で歩いた。

　突とつ然ぜん、ダリエロが思いだしたように「まぁ」と言いなおして、髪かみの毛を引っかきまわしながら鼻で笑った。「どっかで野垂れ死にでもしてるんじゃねぇのか」

　本当にそう思っているのかと訊きくのは無ぶ粋すいだろう。野や暮ぼ天てん扱あつかいされているアジアンにも、その程度のことはなんとなくわかる。

「ベティは生きてるサ」

「どうだかな」

「ボクらの魔術士だ。そうだろう」

「てめぇ、まさか俺を慰なぐさめてるつもりじゃねぇだろうな。……俺も焼きが回ったか」

「そんなことを言うようじゃあ、たしかに焼きが回っているのかもしれないネ」

「黙だまれ、塵屑」ダリエロは手で口の周りをこすった。「あいつがそう簡単にくたばるわけねぇだろ」

　ダリエロに追いついて、背中を叩こうとしたら、手を振ふりはらわれた。

　アジアンは白い尾お根ねを見上げた。まだ雪解けまでは間がありそうだが、ワールオックの山々を越こえれば、旧ファー・セルジナ王国領方面へと一気に抜けられる。旧ファー・セルジナのチャイカの野では龍りゅう州しゅう連合が活動していると、鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイのロドリゴ・ファルコーネから聞いた。秩序の番人もいるという。もしかしたら、と考えてしまいそうになって、頭を振る。今は考えまい。新天地を見つける。何もかもそれからだ。

麼禱埜マトウーヤ霊れい国こく　纏聞テンムン湿地

　姫ひめは小さな花びらのような唇をすぼめて「にゅふふふふ

ふー」とふくみ笑いをしながら、華きや奢しやな素す足あしをばたばたさせた。

　だいぶ高くなった。

　姫を肩にのせている鳥ウ大ダイ男ナンは、かつて身長二メーテル三十七サンチ、体重二百五十キルグラハムくらいだったが、今は身の丈たけ八メーテル超ちよう、重さのほうは量っていないのでわからないが、たぶん五千キルグラハム以上ある。姫は赤や黄、青であでやかに縁ふちどられた目を細め、鳥大男の醜しゆう悪あくな顔を撫なでた。数百の眼球を縫ぬいあわせてつくった白はく濁だくした両眼も、金属で覆おおいをつけた鼻び孔こうも、縫い跡あとだらけの頬ほおも、姫の小さな手ほどもありそうな黄色い牙きばがずらっと並ぶ歯は茎ぐきが剝むきだしになっている口も、髪の毛の代わりに鉄てつ鋲びようが埋うめこまれた頭部も、なんて醜みにくいのだろう。本当に、頭のてっぺんから足の先まで、二目と見られないほど醜い。

「きもちわるいきもちわるいきもちわるい。きゅふふふふふ……」姫は鳥大男の閉じることのない瞼まぶたに口づけをした。鳥大男が「ぐぶぅぅぅご……」と低く呻うめき、気色の悪い目を動かして姫を見つめる。その視線を浴びせられて、ぞっとしない者はいないだろう。もちろん姫も鳥とり肌はだが立つ。怖おぞ気けをふるいながら、感動せずにはいられない。

「ぜーんぶわらわがつくったんだからの。すごいすごい。わらわはわらわがすごいということなんかとっくにもちろん知っておったけど、それにしてもすごいすごいすごーい。わらわはすごいなー。なー鳥大男。汝うぬもそう思わんか」

「ぶごぉぉぉ……」

「ばーか」姫は鳥大男の鼻をぺちりと平手打ちした。「しゃべろうとするな、ばーかばーか。どうせ汝はしゃべれんのだ。そんなふうにはつくってないのだからの。しゃべれんでいいのだ。ぴーちくぱーちくわめかれると、うるっさくってかなわんからの。しゃべるのはわらわだけでいいのだ。うーん。それにしてもすごいすごいすごーい」

　今は冬だが夏でも春でも秋でも湿しめっぽくて、いつもどんよりと曇くもっているか霧きりが立ちこめているか雨がしとしと降って

いるか霙みぞれが降りそそいでいる、そこらじゅう泥どろ深くて陰いん気きで辛しん気き臭くさくて獣けものもあまり寄りつかない、姫にとっては嫌きらいで嫌いでしょうがなくて憎にくらしくてたまらない纏聞テンムン湿しつ地ちの懐なつかしくて胸くそが悪い沼ぬま地ちのあちこちで、姫が手ずからつくった総勢三百二十三人の無む命みよう衛え士じたちが見苦しく蠢うごめいている。それから、姫の命令に従って現世をうろつくだけの死体、無様で不ぶ恰かつ好こうな自じ動どう骸むくろが、だいたい七万人くらい。薄うすく靄もやがかかった纏聞湿地は、動く死体と死体を材料にしてつくられた姫の芸術品でほとんど埋めつくされようとしている。そのすばらしい眺ながめを、姫は自らの最高傑けつ作さく、烏大男の肩の上から見おろしている。すごいすごいすごいすごいすごいすごーい。

「ぱちぱちぱちぱちぱちぱち」姫は拍はく手しゆする代わりにそう言って、六本の角みたいな形に黒髪を結ゆいあげてあるこぢんまりした頭を左右に揺ゆらす。「やっぱり悪魔とか贄にえの園の住人とかは最高だの。人間だの何だのの屍かばねでは、ハメーテル級の無命衛士はとうていつくれなんだ。素材として貧弱すぎるからの。まあ、そもそもせいぜい二メーテルくらいの個体しかおらんのだから、そう大きい身体からだに仕上げるのは無理というものなのだ。その点、悪魔とか贄の園の住人とかはいい。変なやつがいっぱいいるからの。あいつらが死ねば死ぬほど、あいつらを殺せば殺すほど、いろんな部品が手に入っていい。クソにゃんこの話に乗ってやったのは正解だったの。わらわは賢かしこい。さすがわらわだの」

「ごもぉぉ……」

「だから、しゃべるなと言っておろうが、ぼけっ」姫はまた烏大男の鼻を叩たたいて、愛らしい顔を上げる。目を凝こらしても、麼禱埜マトウーヤ霊国の中心、霊れい峰ほう衆シユ烙ラク山サンの影かげはぼんやりとしか見えない。その周辺にへばりつくようにして暮らしている民たみどもは、今も古びて朽くちかけた因習に縛しばられ、すがって、死者よりもみじめでみすぼらしい暮らしを送っているだろう。この険しくて陰気臭い不毛の地には悪魔も攻せめよせてこない。それも霊国が深遠なる霊力に守られているからだと、阿あ呆ほうな民どもは信じこんでいることだろう。

　姫はふと考えてみた。わらわはあやつらを憎ぞう悪おしておるのか？　わらわを生みだして、わらわを利用しようとして、わらわが強くかわいらしく残ざん酷こくに育って殺しまくってやったら、霊

国の常識によれば死は終わりではなく死者はいつまでも決して死なないことになっているのに掌てのひらを返して、わらわを追いだそうとした故郷が、わらわは嫌いなのか？

「そんなことはないぞ」姫はにっこり笑う。「わらわは愛しておるぞ。あの何もない貧しい悲しいだけの故ふる里さとを、死ぬことくらいしか楽しみを見いだせない寂さびしい土地を、愛しておる。わらわはずっといつか帰るつもりでおった。あたりまえではないか。わらわは史上最高の霊れい姫き、巫女神シビリリス、その名も阿ア麼マ李リという。そも、わらわを生んだ麼禱埜は、わらわのものなのだ。わらわの一等大好きなもので満たされるべきなのだ。──死によって」

「がぁぁ……」

「ばかっ、しゃべるなというにっ」

「ごぉ……」

「……むー。もうよい」姫は霊峰衆烙山を指さした。「行け、烏大男！　わらわの国を無数の甘い死で丁てい寧ねいにラッピングして、わらわへのすてきな贈おくり物ものとするのだ……！」

？？？

......forced sleep mode is canceled.

process of awakening............

OK.

ready.

「……テスト」彼女は声を出す。「あ。あ。い。う。え。お。あ。あー。あ」ちゃんと聞こえる。問題ない。良好だ。目を開ける。視界が開ける。暗い。明度を調整。見えるようになった。見慣れた密閉槽そう内の景色だ。指を動かしてみる。滑なめらかに動く。止める。大丈夫だ。引っかかりも、遅ち延えんも認められない。彼女は

操作盤コンソールを操作する。密閉槽の蓋ふたが開く。前頭顔部装そう甲こうを開放。息を吸う。吐はく。嗅きゆう覚かくも異常なし。彼女は起きあがる。違い和わ感がある。前と違ちがうせいだ。かなり手を加えた。両りよう腕うで、両りよう脚あしともに軽量化しつつ強度を落とさない、可動性も損そこねない、限界の設計に挑ちよう戦せんしたため、形状がさらに人間型から逸いつ脱だつした。だが人間らしい動きにこだわっていては、これ以上の性能向上を見込めない。もっと人間から離はなれる必要があった。彼女は各関節の可動域を思いきり広げることにした。もう肘ひじや膝ひざ、手首や足首はどの方向にも曲がる。肩、腰こし、首も同様だ。腕は関節の数を増やし、足部は三本の長い指と二本の短い指で体重を支え、急激な変化に対応しやすい形状を選せん択たくした。武装も追加。彼女は密閉槽から出て歩いてみる。なるほど新しん鮮せんな感覚だ。不安定感があって、気持ち悪い。慣れないといけない。慣れてしまいさえすれば、強化を実感できるはずだ。実感。人間的な感覚など消えてしまえばいいのにと彼女は思う。機械マシンのように反応して機械のように判断して機械のように動くことができれば、きっと負けたりしなかった。負けた。そう。彼女は敗北したのだ。アーマン。悪魔大公グランヴエリオン。歯が立たなかった。彼女は黒こく炎えんの剣けんで両腕を断たれ、右脚も壊こわされた。粒りゆう子し加速砲ほうをぶちこんでもアーマンは平然としていた。彼女は逃にげたのだ。このままではやつに勝てない。彼女は改造を決意した。全身をつくりかえるほど大規模な改造を決行しなければ、やつにふれることさえできないだろう。その作業が終わった。

　彼女は隠かくれ家の中を歩きまわった。そこは彼女しか知らない彼女だけの隠れ家だ。最初の隠れ家を捨てたあと、遺跡からかき集めた遺物と彼女自身が製造したものとでつくりあげた。それは地中にあって、いつでも即そく座ざに閉へい鎖さ可能な六箇か所しよの出入口を備えている。彼女を調整し、整備し、修理し、改良し、改造するための施し設せつだ。各種自動装置に補ほ佐させて、彼女はそれらのすべてを自分自身で行ってきた。

　あえて無理な動きをしてみる。たとえば右膝を外側に曲げて右足だけでバランスをとる。左足を接地させて左膝を内側に曲げる。肘を外に曲げる。手首を三百六十度回転させる。前までの彼女には不可能でも、現在の彼女にはできる。ただし、まだ頭で考えてからでないとできない。自分の身体がどうなったのか、情報としては把は握あくしているが、実感が伴ともなっていない。やはり実感だ。慣れるしかない。一刻も早く慣れなければいけない。

　彼女は加速する。彼女の頭脳に今現在の自分自身を刻みこむのだ。次し第だいに考えるまでもなく身体が反応するようになる。限界と最適が明確化されてゆく。しかし本当に慣れるためには実戦が必ひつ須すだ。彼女が彼女を研とぎ澄すますために、敵が必要だ。しかも、ただ彼女に殺されるだけの家か畜ちく同然の雑ざ魚こでは意味がない。彼女に立ち向かってくる敵だ。彼女を脅おびやかす敵だ。挑いどんでも、挑んでも、撥はね返される。そんな敵がいい。彼女のすべてをぶつけても乗り越えられない壁かべが欲しい。その壁にぶつかって、ぶつかって、ぶつかっている間だけ、彼女は満たされる。そのことを彼女は知っている。彼女には敵が必要だ。敵だけいればいい。

　前頭顔部装甲を閉へい塞そく。彼女は隠れ家をあとにして敵を探すことにした。全自動装置を休止状態に。隔かく壁へきを一つずつ閉じてゆく。ぜんぶ閉じたら、六つある通路のうちの一つを通って隠れ家の外へ。この四番出入口は深い洞どう穴けつの縦穴の中ほどにある。彼女は縦穴をよじ登り、地上を目指して歩く。自分の足音を聞いて、まだ足の運び方に改善の余地がありそうだと彼女は思う。間もなく洞穴が果てる。地上だ。

　陽光を浴びて、彼女は前頭顔部装甲を開放する。標高七百十二メーテル。まだ雪がある。彼女は硬かたい雪の上を歩く。二十六メーテル前進したところで足を止めて振ふり返る。彼女が出てきた洞穴の脇わきに人影を認める。いや、人などではない。白と赤と黒のジャケット、細身のズボン、フリルをあしらったブラウス。頭とう髪はつはかぎりなく白に近い金きん髪ぱつ。尖とがった顎あご。高い鼻。両りよう端たんがつりあがっている薄い唇くちびる。切れ長で刻々と色が変化する目。岩肌の出っ張りに腰かけ、脚を組んでいる。手には金色の鞘さやに納められたサーベルを持っている。右手で柄つかを握にぎって、鞘で左の掌を軽く何度も叩いている。あれは人ではない。

「りりぃ」と名を呼ばれた。彼女の身体にその機能はないが、総毛立つような感覚が彼女を襲おそう。彼女はそれが何か理解している。嫌けん悪おだ。

「りりぃ。愛いとしい花はな嫁よめ。捜さがしたのだよ。あなたをさらいにきたよ、りりぃ」

「アウトルマ・ファッルーカ」

「ああ、りりぃ。かわいいあなたに私の名を呼んでもらえて光栄だ。こんなに長く生きてきた甲か斐いがあったというものだよ、りりぃ」

「最悪だ」と彼女が呟つぶやいて前頭顔部装甲を閉塞すると、ファッルーカが「ああ」と大おお袈げ裟さに嘆なげいてみせる。「あなたのかわいい顔をいつまでも見ていたかったのに。残念だよ、りりぃ。だが、素す顔がおを隠すその仮面もすてきだよ。身体をいじったのだね。だいぶ印象が変わったね。しかしあなたの美しさは少しも損なわれていないよ、りりぃ。なぜならあなたはあなたを貫つらぬいているからね。外見がどれほど変わったとしても、それはあなたの内面の正確な反映であり、あなたは揺らいでなどいないのだからね。あなたはとてもかわいらしいよ、りりぃ」

「黙だまれ、ファッルーカ」

「あなたが黙れと私に向かって言うのなら、私は向こう一億年この口を閉とざしていよう」

「あたしは明確に、貴様に向かって黙れと言っている」

「だが、あなたを賛美する言葉は勝手にあふれるのだ。ひどく悲しいときの涙なみだのように」「どうやら腕ずくで黙らせるしかないようだな」

「お望みならばそうするといいよ、りりぃ」ファッルーカは立ちあがってサーベルの鞘を払はらった。刃やいばも黄金色だ。悪あく趣しゅ味みきわまりない。「あなたの愛は壊れている。私はあなたに言ったね。いつかあなたは私を殺そうとするだろう、と。それこそがあなたの愛の形だ。そのときこそ、あなたは真に私を愛するのだ、と。ついにやってきたのだよ、りりぃ。あなたが私を愛するときがね」

「愛など知らない」彼女は右足を前に出して、左足を引いた。右膝を外側にたわませ、左膝を内側に絞しぼって、腰を沈しずめる。両りよう肩かたを落とし、首を前に垂らして顔を上げた。「言ったはずだ。あたしより弱ければ貴様は滅ほろびる。それだけのことだ、と」

「それがあなたの愛し方だろう、りりぃ」

「違う。あたしが求めるもの、それは戦いだ」

「戦うことこそがあなたの壊れた愛の表現だろう、りりぃ」

「貴様は何もわかってない」

「これからより深く理解するのだ、りりぃ。私を滅ぼしてごらん。それが可能なら」

「むろん、可能だ」

　彼女は駆かけだす。

　敵。敵。敵。敵だ。敵がいる。彼女に必要な敵が。

　彼女は沸わき立っている。彼女はもう何も考えない。かつて彼女の目の前に高い、高すぎる壁がそびえ立ち、子供扱あつかいされても、足あし蹴げにされても、何度退けられても、飽あくことなく挑んだときのように。闘とう争そうはいつでも忘れさせてくれる。

　たとえば、彼女の壊れた愛のことを。

大穴ギガボロスの上

　穴。大地に穿うがたれた巨きよ大だいな穴。こうして上空から見おろすと、それはまさしく穴なのだとわかる。小型模型ミニチユアのような入り組んだ地形が、ちっぽけな、あるいは立派な、陳ちん腐ぷな、厳おごそかな、奇き妙みような、雑多な建物が、橋きよう梁りようが、迷宮が、森が、洞どう窟くつがめちゃくちゃに、無む秩ちつ序じよにひしめいている、すり鉢ばち状の穴。大穴ギガボロス。壊れゆく、壊された世界の中心。その象徴シンボル。女は空の上から手をのばして、すくおうとする。女の指先には、でも当然、何もふれない。女は笑う。「くく……くくく……くく……」おかしくて、笑う。「ふふ……ふふふふ……あははは……はははは……」女は笑う。唐とう突とつに笑い声がやむ。女は絹のごとき光こう沢たくを帯びた髪かみの毛をかきあげて、凍いてついた瞳ひとみで大穴ギガボロスをにらみつける。「つまらない」と女の艶つややかな唇が低い声をつむぐ。「つまらないわ。つまらない。つまらない。

つまらないわ。こんなものなの。この程度なの。あたくしはもっと壊してほしいのです。もっともっと壊してほしい。もっともっともっと壊れてほしいのです。立っているものはすべて倒たおれてくれないといやだわ。横たわってもそこにあるままだと醜みにくいわ。形あるものは粉々に砕くだけてくれないと美しくないわ。結局、つくるのね。つくろうとするのね。築きあげるのね。そのために壊す。それだけなのね。居場所を求めるのね。最終的には秩序、維い持じ、安定、それが欲しいのね。つまらないわ。そこには何もないというのに。ああつまらない。あたくしが壊すべきなのはこれなのかもしれない。大穴ギガボロス。大袈裟なだけで空くう虚きょな大穴ギガボロス。あたくしがこれを壊す。ふふ。そうね。あたくしはそうするべきなのかもしれないわ」女は大穴ギガボロスの外がい縁えんを指さす。「あそこに」指を動かす。「そしてあそこに」さらに指を動かす。「あそこに、あそこに、あそこに、あそこに、あそこ、あそこ、あそこ、あそこ、あそこ、そこにも、あそこにも、それからあそこ、あそこ、あそこ。くくっ」女は喉のどを鳴らして笑う。「打ちこんでゆくのです。杭くいを打つのです。杭。どんな杭がいいかしら。まずそれを考えなくてはいけないわ。そうでしょう。そうだわ。やっぱりそうなのね。あたくしが壊すしかないのです。あたくしが。あたくしが壊してあげる。何もかも。壊す。壊す。壊す。壊す。壊す。ふふ……」

「物ぶつ騒そうだね」

　声がして、その瞬しゅん間かん、女は野原に立ちつくしている。空の上ではなく。穏おだやかな風が女の頬ほおを、髪を撫なでる。夏の初めごろの青い匂においがする。薄うすい青の空。雲はゆったりと流れている。風よりもゆっくりと。女は地面に目を落とす。生おい茂しげる草を踏ふみしめる。しっかりとした感かん触しょくがある。女は顔を上げる。そこに男がいる。男は水玉模様のスカーフを首に巻いている。上はぴったりしていて、下はゆったりした、やはり水玉模様の服を着ている。男は顔をうつむけている。ふわふわした綿わた菓が子しのような金髪から角が突つきでている。雄お羊ひつじのそれのような、二本の角が。

「── 〝踊り羊ダンシングシープ〟」

「クルオと呼んでよ、紫しのヴェロニカ。できればリルコと呼ばせてもらいたいんだけど、クルオがきみをそう呼ぶと、きみは怒おこるだろう」

「あたくしはあなたのような好き者が嫌きらいなだけです」

「好き者なんて、ひどいな。クルオは強くて賢かしこい子に興味があるだけだよ」

「ともにいつまでも生きてゆく者を探しているのね」女は目を細める。「くだらないわ。子供なのね。魔ま術じゆつばかりうまくなって、ちっとも成長できないのね。どうしても幼児性が抜ぬけないのね。ひとりだちできないくせに、我わが儘ままで気ままだからひとりでいるしかないのね。あなた、哀あわれだわ」

「クルオを怒らせようとしても無む駄だだよ、ヴェロニカ」

「あたくしは思ったことをそのまま言葉にしているだけ。あなたが腹を立てようと喜ぼうとどうでもいいわ。あたくしには関係ありません」

「でも、きみはここにいるじゃないか、ヴェロニカ。いくらなんでも気づいているだろうけど、ここはクルオの中だよ。きみには弱点があるんだよ、大きな弱点が。そのせいで、きみはクルオやマチルダやモーグがいるところまで上がってこられない。きみはクルオたちとは違ちがうね、ヴェロニカ。きみは次第に年老いる。衰おとろえて、いつか死んでしまう」

　女はふと自分の右手を見る。肌はだに張りがない。薄い染しみがある。あちこちに。血管が浮うきでている。青い、太い血管が。皺しわだらけだ。どんどん皺が増えてゆく。深くなる。染みが濃こくなる。肉が落ちてゆく。女は左手で右手を握る。その左手も同じように皺だらけだ。手首も、腕うでも。胸むな元もとも。女は目を見開く。息をのむ。視野が狭せまい。ぼやけている。息苦しい。立っているのがつらい。女はしゃがみこむ。女は両手を持ちあげる。重い。ひどく重い。なんとか顔をさわる。指先の感覚は鈍にぶいが、わかる。感じる。かさかさしていて、溝みぞが刻まれている。浅い皺が、深い皺が、無数の皺が。「これはちがう」としゃがれた声で女は言う。「これはちがう、あたくしじゃない、ちがう、これは、

あたくしじゃない」と聞きとりづらいほどかすれた声で。「それはどうかな？」とクルオが耳みみ許もとで囁ささやく。女にはもう草原の風景は見えていない。すべてがはっきりしない。形も色も曖あい昧まいだ。ここはどこだろう。

　女は落ちはじめる。落下している。

　身体からだがばらばらになりそうだ。

　女は悲鳴をあげそうになる。代わりに「ちがう」と女は言う。「ちがう、ちがう、ちがう、ちがう……！」

　女は止まる。汗あせをかいている。全身に、びっしょりと。大穴ギガボロスは目前。正確には女の爪つま先さきのすぐ先。高い空の上からここまで落下したのだ。女はあえて自分の両手を見ない。あれはクルオ・バーミチェット・アンダリュースの詐さ術じゅつだ。女はむろん、年老いてなどいない。隙すきに付け入るのがうまい踊り羊は女の頭上にいる。薄笑いを浮かべて女を見おろしている。踏みつけるようにして。

「やだなあ。そんなにこわい顔をしないでよ、ヴェロニカ。ちょっとからかっただけじゃないか。これは退たい屈くつしのぎの遊びだよ。クルオたちはいつもこうやって暇ひまがあると遊んできたじゃないか。クルオたちと遊べる者はそう多くないからね。でも、きみはクルオの遊び相手としては力不足だね」

「あたくしが……力不足ですって？」

「そうだよ。正直に言うとね。きみと遊んでも、クルオはあまり楽しくないんだ。マチルダやモーグならもっと楽しめる。マチルダのことは好きじゃないけどね。阿ア麼マ李リ姫ひめも、あれはあれで特異な才能の持ち主だ。じつに独特な一点突とつ破ぱ型の最たるものだね。下の世代にもいい素材がいるよ。モーグの娘むすめ、エヴァンジェリンはすばらしい。あの子は天才だ。それから、マチルダの妹たちソロレルはいい。三者三様だけど、それぞれにものすごい可能性を秘ひめているし、すでに突き抜けちゃってる子もいる。クルオはこう思うんだ。もう結果は出たんじゃないかなってね」

「結果」

「そう。結果だよ。クルオたちは一流で、ヴェロニカ、きみは二流なんだ。もう差がついちゃったんだよ。この差は埋うめられないと思うな」

「埋められない」女は笑う。そして歯を食いしばり、目を剝むく。「得意顔で……！」

　クルオが引きよせられる。女は魔術士であり超越者オーバリストでもある。女の力がクルオを引きずり下ろそうとしている。女は呪じゆ文もんを口ずさもうとする。

　その途と端たん、クルオが割れる。破は裂れつして、クルオが分裂する。小さなクルオがたくさん浮いている。

　クルオたちが笑う。甲かん高だかい声で大笑いする。女は自分がまだ、あるいはまた、クルオの術中に陥おちいっていることを知り、自らの胸に手をあてて力を送りこむ。息が止まりそうになる。心臓まで。しかしその衝しよう撃げきで女は覚める。我に返ると、邪じや竜りゆうが眼前に迫せまっていた。邪竜が女を喰くらおうとしている。女は急きゆう上じよう昇しようして、邪竜をかわす。別の邪竜が突っこんでくる。邪竜とは違う、羽を生やした悪魔もいる。鳥人ジャドーの一群も近づいてくる。

「嘘うそだよ、ヴェロニカ」クルオがずっと上のほうで笑っている。「冗談だよ。たまになら、きみと遊ぶのも楽しいよ。きみには欠点もあるけど、すごいところもあるしね」

「あなたを壊こわしたいわ」女はそう言いながら邪竜をよける。「ＥＬＭ」両手を組みあわせて、掲かかげる。「ＮＩＢＬＥＨＥＭ」ただちに女の全身から紫むらさき色いろの炎ほのおがにじみ出て揺ゆらめく。女は超越者オーバリストの力でその炎をちぎってジャドーたちに投げつける。紫し炎えんを浴びたジャドーはもがきながら墜つい落らくしてゆく。ジャドーを次々と撃うち落としながら、女はクルオを捜さがす。もうクルオはどこにもいない。「つまらないわ」と女はつぶやく。「つまらない」

二巡月二十一番日　獄の獄ジエイルネイル

黒い光がまぶしい。黒い太陽。白い影かげ。あべこべの陰いん影えい。少しだけ緑色がかった濃い灰色の空。重くてなんだか苦い空気。砂。どこまで行っても砂。起き伏ふくはある。ありすぎるほどに。大きくうねって、ときに深く、深く、沈しずみこむ。谷がある。谷間には細い川が流れている。白い川。水をすくう。匂いを嗅かぐ。何の匂いもしない。アルファが平気で舐なめる。ロム・フォウはアルファを信じてその水を飲む。マリアローズたちも飲むことにする。飲み水は貴重だ。減ったぶんは補給したい。すぐに谷から出ることはできない。マリアローズたちは逃にげてきたのだ。天使どもから、そして、贄にえの園の住人たちから。ついさっきも天使が二人、空をよぎっていった。一人は四枚羽で、もう一人は二枚羽だった。マリアローズたちは身を隠かくしている。岩みたいに固まった砂の陰かげで、トワニングとユリカがトマトクンを寝ねかせて医術式を施ほどこしている。マリアローズたちは黒い光と白い闇やみの中で息を殺している。誰だれも口を開かない。座るかしゃがむかしている。立っている者は一人もいない。疲つかれている。ただの疲ひ労ろうじゃない。身体的な疲労はたいした問題じゃない。みんなタフだ。こう見えて、マリアローズだってそんなにやわじゃない。でも、この疲れは違う。まるで身体が鉄でできていて、急速に錆さびついている。そんなふうに感じられる。獄の獄に足を踏み入れてから三十三時間。まだ三十三時間。とても信じられない。その十倍の時間を過ごしたような気がする。もう千キルメーテルは歩いたような気がする。マリアローズは羅針計の蓋ふたを開ける。針を確かく認にんする。マリアローズたちはおおむね針が示す方向へと進んでいる。だけれど最短ルートをとることはできない。天使がいる。天使どもは二人か三人、ときには四人、それ以上で編隊を組んで獄の獄の空を飛びまわっている。マリアローズたちを、それからたぶん、マリアローズたちとは別行動をとっているソオルを捜そう索さくしている。マリアローズたちを見つけると、あいつらは即そく座ざに襲おそいかかってくる。天使はいやらしい敵だ。人間みたいな姿をしているけど、人間とは似ても似つかない。生き物ですらないのかもしれない。連中は人間のような顔をしている。でも、表情がない。眼がん窩かに塡はめこまれている底光りする眼球には黒目も白目もない。やつらは細切れにされても寄り集まってもとどおりになる。サフィニアの魔術で焼き払はらわれたり吹ふき飛ばされたりすると、消える。そう見えるだけで、やっぱり時間が経たつともとどおりになるのかもしれない。でっけェー大ゴ脂ツ羽キ蟲ーみてェーだなァ、と何時間か前に飛フエイ燕ヤンが言った。本当にそんな感じだ。四人までなら、それほどこわくはない。ただし、さっさと片づけないと仲間を呼ぶし、厄やつ介かいだ。鬱うつ陶と

うしい。それから、贄の園の住人たち。彼ら彼女らは天使以上に面めん倒どうな相手だ。何しろ行動パターンが読めない。あからさまにやばそうな外見なのにこっちの姿を目にしただけで逃げだすやつがいたと思えば、小動物みたいなやつがやたらと素す早ばやくてしつこく食いさがってきたりする。もちろんいかにもやばそうなやつは基本的にやばいのだが、とにかくまあ個体差がありすぎる。やるしかないのか。やりすごせるか。遠回りしてでも逃げるか。判断が難しい。どれだけ難しい判断を積み重ねても、次の判断のための材料にならないのも痛い。ようは臨機応変。それしかない。マリアローズはため息をつく。何百回目か何千回目かのため息が白い砂に落ちる。クルルが外がい套とうの中から出てきて、喉のどをくるると鳴らす。マリアローズはクルルに炒いり豆まめをやる。炒り豆を口にふくむと、クルルは外套の中に戻もどってゆく。どう、とマリアローズはトワニングに訊きく。トワニングは、うむ、とうなずいて、どうだ、とトマトクンに尋たずねる。ああ、とトマトクンがうなずいてみせる。トワニングがトマトクンを背負う。マリアローズとユリカ、サフィニア、きゅーがそれを手伝う。少し離はなれた場所で警けい戒かいにあたっていたロム・フォウとアルファが戻ってくる。出発するのかい、とロム・フォウがマリアローズに訊く。大丈夫だよね、とマリアローズは確認する。今は大丈夫だと思う、とロム・フォウは答える。行こう、とマリアローズはみんなに声をかける。ピンパーネルとハニーメリー、きゅーが先行する。ロム・フォウ、アルファ、トマトクンを背負ったトワニング、サフィニア、マリアローズがひとかたまりになってつづいて、ユリカと飛燕が後ろにつく。マリアローズたちは谷から出る。マリアローズはもう一度、羅針計の針を確かめる。こっちでいい。間違っていない。黒い砂さ漠ばくをマリアローズたちは歩く。けっこう風が強い。足あし跡あとはすぐに消えてしまう。それだけはありがたい。黒い太陽から降りそそぐ黒い光はそれほど熱くはない。じりじりとマリアローズたちを焼いたりはしない。ただべったりとマリアローズたちにまとわりつく。マリアローズたちの足を、感覚を鈍らせる。マリアローズはそれを知っている。だからマリアローズはときおり声を出す。仲間の名前を呼ぶだけでもいい。ピンパーネル。はイ。ハニーメリー。どうかした？　きゅー。くう。ロム・フォウ。うん。アルファ。うぉん。髭ひげ。うむ。トマト。ああ。サフィニア。……はい……。ユリカ。ええ。飛燕。おォ。名を呼べば、みんな返事をする。ぼうっとしていれば、はっとする。それだけでもいい。マリアローズは歩きながらあたりを見まわす。でも、マリアローズは特別目がいいわけでも勘かんが鋭するどいわけでもない。マリアローズは仲間たちをサポートする。気を配る。マリアローズたちは

歩く。マリアローズたちの体力を、精神力を少しずつ吸いとってゆくような砂の上をひたすら歩く。マリアローズの身体は軽いはずだ。マリアローズには取とり柄えらしい取り柄がないから、せめて身軽でいようと心がけている。体重が増えやすい体質でもない。むしろ身体を動かしていると痩やせてしまう。それなのに重い。こんなに自分の身体を重たく感じたことはない。マリアローズたちは歩く。止まったら砂に沈んでしまいそうだ。この砂漠は平らじゃない。たまに平へい坦たんでも、たいてい百メーテルとつづかない。ほとんど常に、勾こう配ばいがある。上りでは、前に体重をかける。下りでは、重心を後ろに持ってゆく。膝ひざにくる。腿ももも膨ふくら脛はぎもぱんぱんだ。マリアローズは羅針計を見る。頻ひん繁ぱんに見る。気がつくと十分に一回、いや、五分に一回くらいは見ている。見すぎだと思う。マリアローズはわざと肩かたをすくめる。自分を笑う。できるだけ冷静に、客観的に自分自身を見ようとする。マリアローズは疲労の度合いを把は握あくしようとする。自分と、それから仲間の。無理をしちゃいけない。歩きはじめて三時間と少し。たまに砂が固まっているのか、砂になる前なのか、砂をかぶった岩山みたいなものがある。マリアローズは左前方にそれを見つけて、みんなに休きゆう憩けいを提案する。誰も反対しない。マリアローズたちは岩山に近づいてゆく。待って、とロム・フォウが言う。何か変だ。アルファが足を止めて唸うなっている。マリアローズが何か言う前に岩山が隆りゆう起きする。砂の中から、そいつは出てくる。のっぺりした、腕うでが九本もある巨きよ大だいな男が、身の丈たけ二十メーテルほどありそうな、目も鼻も耳もない、口だけしかない男が、岩がん塊かいを背負っている。出やがったッ、と飛燕が飛びだそうとする。そのとき九本腕が岩塊を投げつけてくる。散開、とマリアローズが指示を出すまでもない。みんな駆かけ散っている。マリアローズも走る。走って転がる。岩塊は弧こを描えがいて、マリアローズたちがさっきまでいた場所に落下する。マリアローズは口の中に入った砂を吐はきだしながら、九本腕を見る。九本腕に動きはない。飛燕がまた突進すると、九本腕が身体の向きを変えた。威い嚇かくするように、九本の腕を持ちあげる。マリアローズは叫さけぶ、飛燕、戻って。飛燕は不満そうな顔をして振ふり向く。ユリカがすかさず、戻りなしゃい、と口くち添ぞえしてくれる。飛燕がしぶしぶ引き返してくると、九本腕は腕を下ろした。やっぱりそうか。九本腕はたぶん一定の空間を確保しようとしていて、そこに入ってきた者を脅おどす。脅してだめなら、攻こう撃げきする。何のために。知らない。よくわからないが、贄の園の住人の中にはそういうやつもいることは経験的に知っている。正確に言えば、そんなふうに推測しうる行動をとるやつに

出くわしたことがある。だけれどその経験があてになるかどうかはわからない。どうしよう。やったほうがいいのか。でも、九本腕は大物だ。でかすぎる。確実にやるとしたら、サフィニアの魔ま術じゅつということになるだろう。余計な戦いで消しよう耗もうさせたくない。戦っている間に天使がきたら。そういう懸け念ねんもある。マリアローズは決断する。さけられる戦いはさける。後退、とマリアローズが言うと、飛燕があからさまに反はん抗こう的な態度をとったが、無視だ、無視。マリアローズたちは九本腕を視界に収めたまま下がる。九本腕は動かない。さらに下がると、九本腕はゆっくりと前進しはじめた。くるのか。飛燕が言う。ほらなァ？マリアローズは答えない。引きつづきみんなを下がらせる。マリアローズも下がる。マリアローズはある仮説を立てている。危険だとは思う。仮説なんか立てて、それに基づいて行動して、間ま違ちがっていたらどうする。責任をとれるのか。おなかが、胃のあたりが、ぎりりぎりり痛む。喉がきゅうっと締しまる。でも、そのくらい平気だ。少なくとも、平気なふりをすることはできる。どのみち、リスクを一いつ切さいとらない、そんなことはできない。何をするにせよ、何を選せん択たくするにせよ、必ずリスクはある。メリットがあれば、デメリットもある。それらを比ひ較かくして、どっちがよりましかを考えて選ぶ。百パーセントの正解はない。結果的に百パーセントの正解に見えることはあったとしても。マリアローズたちは後退しながら、九本腕の動向をうかがう。九本腕は自ら投げた岩塊のそばにまでくると、しゃがんだ。岩塊に手をかける。その後の数秒が一番緊きん張ちようした。九本腕は岩塊を持ちあげる。投げてくるか。投げないか。マリアローズはすでに投げないほうに賭かけているが、投げてきたら投げてきたで、すぐにそれに応じた行動をとらないといけない。心の準備はしてある。マリアローズは息をつく。賭けに勝った。九本腕は岩塊を持ったまま、じりじりとあとずさりしはじめた。休憩は中止だ。マリアローズはまた羅針計を見る。マリアローズたちは針が示す方向へと進む。九本腕が見えなくなったところで、いったん立ち止まる。トワニングがトマトクンを背負ったまま、ユリカが医術式を施す。トマトクンの状態は悪くはないらしい。シャッコーにいたころよりはよほどいいようだ。それで医術式を施す間かん隔かくも数時間おきですんでいる。マリアローズたちはまた歩きだす。黒い砂の上を、黒い太陽に見おろされて。砂さ丘きゆうを上る。砂の谷に下りる。マリアローズたちは歩く。歩く。歩きながら、マリアローズはいろいろなことを考えてしまう。追い払おうとしても、浮うかんでくる。だいたいは悪いことだ。これから起こるだろう、起こるかもしれない、起こってもおかしくない悪いことの数々が、頭の中を占せん領りよう

しようとする。この軍勢はことのほか手て強ごわい。マリアローズは必死に戦う。防ごうとする。だけれどマリアローズが築いた防ぼう壁へきはたやすく突つき崩くずされる。乗り越こえられてしまう。マリアローズは仲間を一人失うところを想像してしまう。二人死ぬところを想像してしまう。三人いなくなるところを想像してしまう。四人死ぬ。五人死ぬ。みんな死ぬ。繰くりかえし想像する。順番はいろいろだ。あるときはピンパーネルが殺されてユリカが殺されてきゅーが殺される。またあるときはトワニングが死んでロム・フォウが殺されてハニーメリーが死んでピンパーネルが殺される。でもマリアローズはいつも最後まで生き残る。自分だけが生き残る。マリアローズはすべてを失う。そうした想像は一気に押しよせてくる。ほとんど止めようがない。想像の中でマリアローズはミスをする。あらゆるミスを犯おかす。マリアローズが失敗して、誰かが死ぬ。悪いことばかり考えながらマリアローズは歩く。悪い想像をかきわけるようにして、仲間の名を呼ぶ。顔を確認する。ときおり周囲を見まわす。空を見上げる。緑色がかった濃こい灰色の空を。しばらくこないね、天使、とハニーメリーが呟く。そういえば……そうですね……とサフィニアが応じる。マリアローズはさっきからロム・フォウを何度も見ている。ロム・フォウは伏ふし目がちで、少し先の砂を見つめているみたいだ。マリアローズは、ロム・フォウ、と呼びかける。返事があるまで、間がある。少ししてからロム・フォウは、ん、とマリアローズのほうを向く。きっと悪いことを考えているんだとマリアローズは思う。ふだんのロム・フォウはそうじゃない。あるがままを受け容いれる。いいことも悪いことも。悲しみも喜びも。でもおそらく、たった一つだけロム・フォウにも受け容れられないものがあるのだろう。トマトクンだ。トマトがいなくなってしまったら、どうしよう。たとえば逆に、いいことだけ受け容れて、悪いことは拒きょ否ひする、考えまいとする人なら、そんなことは起こらないと自分に言い聞かせて、信じようとして、ずっとは無理でも、当面はその可能性に目をつぶることができるかもしれない。だけれどロム・フォウは何でも受け容れる。だからその可能性にも正面から向きあわざるをえない。たぶん、ロム・フォウは今まで考えたことがなかったんじゃないかと思う。トマトが死んでしまうなんて。誰だれが死んでもトマトだけは死なないと、ごく自然に思っていたんじゃないだろうか。マリアローズはそうだったし、ロム・フォウも同じだったんじゃないかと、なんとなく思う。そのせいで余計にこたえているんじゃないだろうか。マリアローズはロム・フォウに笑いかける。ロム・フォウもほんの少しだけ笑ってくれた。トマトはつらいだろうな、と思う。僕らにこんな思いをさせて、たまらないだろうな。それに比べ

れば、どんな思いをしたってたいしたことはない。マリアローズたちは歩く。歩いてゆく。マリアローズたちは砂丘を上る。高い砂丘だ。傾けい斜しやがきつい。マリアローズは羅針計を確かく認にんする。こっちが針の示す方向だ。マリアローズたちは目的地に向かってまっすぐ進んでいる。でもこの砂丘は高い。ちょっと高すぎる。迂う回かいするべきだったかもしれない。マリアローズは後こう悔かいしている。だけれど何も言わない。今さら失敗だったなんて言えない。戻ろうなんて言いだせない。引き返したらかなり遠回りすることになるし。マリアローズは自分に言い訳をする。登るのも大変だけど、下りるのだってきついし。妙みようだとも思っている。こんなに高い砂丘だとは思わなかった。そうは見えなかった。見るからに高い砂丘だったら、さすがにさけようとしたはずだ。何かおかしなことが起こっているのかもしれない。それとも、気づかないくらい徐じよ々じよに、少しずつ勾配がきつくなってきて、そのせいでわからなかったのかもしれない。マリアローズはついに手をつく。砂に手をついて進む。四つん這ばいにならないと登れないわけじゃない。ただ、こうしたほうが楽だ。そのくらい急な斜面だ。こんなふうになっても、まだ誰も口を開かない。内心ではきっと、何だよこれ、と思っているはずなのに。なんでこんな必死に登らないといけないんだよ。おかしいじゃないか。変だよ。きっと、みんなそう思っている。マリアローズのせいだ。マリアローズが羅針計を持っていて、進む方向を決めているのだから。マリアローズはみんなの顔を見ることができない。こわくて、こわくて、とても見られない。マリアローズはじっと黒い砂を見ている。はあはあはあはあ荒あらい息をしながら砂丘を登る。手で、足で、砂を掻かいて登る。風に運ばれて吹ふきつける砂に目を細めて登る。口に入った砂を噛かみ、吐き捨てて登る。マリアローズは登ることに集中している。いけない、と思う。だめだ。やるべきことをやらないと。……ごめん、と言ってしまいそうになって、マリアローズは歯を食いしばる。謝るな。謝ったって何にもならないし、許してもらって楽になりたいだけの薄うす汚ぎたない謝罪を口にしている暇ひまがあったら、ちゃんと自分の仕事をしろ。砂丘を登りながら、マリアローズはみんなの顔を見る。順々に見てゆく。目をあわせてくれる人もいれば、マリアローズの視線に気づかない人もいる。空に目をやる。天使の姿は見あたらない。贄にえの園の住人らしき影かげもない。マリアローズが見た範はん囲いでは。それから羅針計を確かめる。たしかにマリアローズたちは針が示す方向へと直進している。少なくとも方角は間違ってない。進めなくなってからだ。そうしたら過あやまちを認めて、そのときこそみんなに謝る。今は進もう。がんばって、とマリアローズはみんなに声をかける。すぐに言

わないほうがよかったかなと思う。すごく気まずい。でもユリカが、ええ、と答えて、みんながんばりましょう、と言ってくれる。ユリカがマリアローズを救ってくれた。この黒い光の中じゃなかったら、マリアローズの顔が真っ赤に染まっていることがばれてしまったに違いない。マリアローズは砂丘を登る。恥はじとか、外聞とか、面目とか、体てい裁さいとか、ぜんぶ捨ててしまおうと思いながら登る。だって、マリアローズにはそんなものよりも大切なものがある。そのために目的地を目指している。マリアローズたちは砂丘を登ってゆく。唐とう突とつにそれは訪れる。どこまでも、いつまでも登ったところで、この黒い砂丘は終わらない。そんな気がしていたのに、いきなり視界が開ける。マリアローズは深く深く息を吸って、吐きだす。どうやらマリアローズたちは砂丘のてっぺんまできたらしい。その先は下りだ。急な下り勾こう配ばい。谷だ。大きな谷。盆ぼん地ちと言ってもいいかもしれない。マリアローズたちが見おろしている盆地には贄の園の住人がひしめいている。数百、数千、ひょっとしたらそれ以上。大きいやつもいれば、小さいやつもいる。肉のかたまりみたいなやつ。内臓のかたまりみたいなやつ。一応人間みたいな姿をしているやつ。腕がたくさんあるやつ。脚あしが三本だったり五本だったりするやつ。頭がいくつもあるやつ。むしろ頭だらけのやつ。巨大な赤子みたいなやつ。数十人の人間がくっついて百足むかでみたいな形になってしまっているやつ。脳みそから脚がいっぱい生えていて、蜘く蛛もみたいに見えなくもないやつ。じつにいろんなやつがいる。そんなやつらが、殴なぐりあったり、蹴けりあったり、押しのけあったりしている。潰つぶしあっている。こそこそ隠かくれているやつもいる。逃にげまわっているやつもいる。やつらの上をひゅるんひゅるん飛びまわっている細長い布みたいなやつも贄の園の住人なのか。鳥みたいなやつも飛んでいる。鳥。よく見ると人面鳥だ。人面鳥のほうもこっちに顔を向ける。見つかった。人面鳥がごぅぁあぁああえぇぁあ
あぁぁあえぇぇぇぁぁぁあぁぁああぁぁと鳴く。盆地でやりあっていたやつらが動きを止める。ぴたりと争いがやむ。次の瞬しゆん間かん、やつらが一いつ斉せいにこっちを向く。やばっ、とマリアローズは言う。逃げっ。マリアローズは身を翻ひるがえす。途と端たんに転がり落ちる。嘘うそ、嘘、嘘、と思いながらマリアローズは落ちてゆく。止まらない。砂だ。止めようがない。すがろうとしても砂は崩れるだけだ。ぐるぐるぐるぐるマリアローズは回る。どうしよう。どうしようもない。自分では。不意にマリアローズは抱だきとめられる。ピンパーネルだ。ピンパーネルはマリアローズを抱きしめたまま砂を蹴って勢いを止めようとする。うおらァッ。飛燕が跳とんできて、ピンパーネルの腕うでを引っつかむ。マリア

ローズたちはそれでもずり落ちる。なんとか止まった。大丈夫ですカ、とピンパーネルがマリアローズに訊きく。うん、ありがとごめん、それより──贄の園の住人たちが押しよせてくる。人面鳥や細長いやつが飛んでくる。その他ほかのやつらも。見上げた砂丘の上にぞくぞくとわいてくる。お、下り、下り、下りて、逃げっ。マリアローズは叫さけぶ。せっかくピンパーネルに助けてもらっておいてなんだけれど、マリアローズは自分の意思で転げ落ちはじめる。そっちのほうが速い。ウハハハッ、燃えるなァッ。飛燕が笑いながら馬ば鹿かなことを言っている。マリアローズたちは砂丘を駆かけ下りる、もしくは転がり落ちる。襲おそいかかってくる人面鳥を、ユリカが極限九手棍で叩たたき落とす。ハニーメリーが拳けん銃じゅうで撃うち落とす。ロム・フォウはトマトクンの大たい剣けんで斬きり払はらう。ピンパーネルが斬り刻む。きゅーがマリアローズを抱かかえあげる。マリアローズはきゅーにつかまる。もふ毛を頼たよりにしてきゅーの背中に移動する。きゅーはすごい速度で砂丘を下りてゆく。マリアローズは振ふり返る。みんな迎げい撃げきしながら下を、下を目指している。サフィニアだけは飛んでいる。空から稲いな妻ずまや白光を贄の園の住人たちに浴びせている。サフィニア、とマリアローズは大声を出す。足止めして、倒たおさなくていいから。サフィニアは、はい、と答えるなり両腕をいっぱいに広げてのけぞる。そして両手を振りあげると、砂が巻きあげられる。大量の砂が。砂丘がまっすぐ横に断ち切られた。そんなふうに見えた。実際、幅はば百メーテルか数百メーテル、かなり深い溝みぞが砂丘に刻まれた。溝に嵌はまる贄の園の住人が大勢いた。溝の前で立ち止まるやつもいれば、止まりきれずに落ちてしまうやつもいる。ぜんぶを足止めできたわけじゃない。でも、状じよう況きようがいくらかましになった。励はげまされて、マリアローズたちは砂丘を駆け下りる。攻せめよせる贄の園の住人を打ち払い、振りきって、下りてゆく。もうちょっとだ。あとちょっとで砂丘を下りきる。でも、下りきったところで何がどうなるわけでもない。逃げつづけないといけないという状況は変わらない。ああもう、とマリアローズは叫ぶ。目を凝こらした。あれ。何だろう。行く手の砂が、盛りあがって。息をのんだ。飛びだしてきた。砂の中からドドーンと。長い。太い。ものすごく。人間一人や二人じゃきかない、十人、ひょっとしたら二十人束にしたくらいの太さだ。ものすごくでっかい環かん形けい動物みたいなそいつは、しかも、一本じゃない。二本、三本、四本、五本……七本か、八本か。そいつらは突とつ然ぜん、地中から姿を現して、少しうねうねした。それからこっちに向かってくる。顔、ではないか。先っぽに口がある。円い口が。口の周りには毛が密生していて、内側には牙きばが生えそ

ろっている。なんか卑ひ猥わいだ。そんなものがどんどん迫せまってくる。え？　え、え、ええ？　マジ？　マジだ。きゅ、きゅー。マリアローズが切実な、切せつ迫ぱくした願いをこめて名を呼ぶと、きゅーが、くう、と応じて横っ跳びする。振り落とされそうになって、マリアローズは懸けん命めいにしがみつく。思わず目をつぶってしまった。右へ、左へ、前へ、また右へ。ズドンズドンドドンッ。後ろのほうで衝しよう撃げき。でも死んでないっぽい。おそるおそる目を開けると、きゅーは環形動物どもをかいくぐって、連中の向こうに出ていた。振り返る。みんな環形動物どもをよけて追いかけてくる。環形動物どもは砂に突っこんで、また出てきて、贄の園の住人に襲いかかった。べつに獲え物ものはマリアローズたちじゃなくてもいいらしい。環形動物どもは贄の園の住人たちを薙なぎ払い、かぶりつく。むしゃむしゃもしゃもしゃ食べている。けっこうグロいけれど、助かった。マリアローズはみんなに、このまま、と声をかける。きゅーが駆ける。楽させてもらっちゃってるなあとマリアローズは思う。そんなことを思うのは余よ裕ゆうが出てきた証しよう拠こだ。余裕は油断を呼びよせてミスに繋つながる。気をつけないといけない。マリアローズは羅針計を出す。今の進行方向はほぼ針と正反対だ。このまま逃げきれたら、遠回りしてあの盆地をよけて進むしかない。まずは逃げないと。環形動物どものおかげで、贄の園の住人たちの追つい撃げきはかなり薄うすくなっている。とくに大きいやつは環形動物どもと取っ組みあっているし、たまに追いすがってくるやつがいても、飛燕やユリカ、ピンパーネル、サフィニアがさくっと倒してしまう。マリアローズはきゅーに速度をゆるめさせた。仲間同士の間かん隔かくが狭せばまって、やがてひとかたまりになる。サフィニアも降りてきた。贄の園の住人は、少なくとも近くには見あたらない。トマトに施せ式しきせねば、とトワニングが言いだした。激しい動きをして負担がかかっているはずだから、処置しておいたほうがいいということだった。マリアローズたちは円えん陣じんを組んで、真ん中にトマトクンを寝ねかせた。トワニングとユリカが二人がかりでトマトクンに医術式を施式する間、他の者たちは周囲を警けい戒かいしつつ休んだ。いやあ、すげかったなァ、と飛燕が言って笑ったが、誰も口を開かない。マリアローズは水を飲みながら保存食を食べた。みんなに謝りたくて謝りたくてしょうがなかった。でも、我が慢まんした。ああいうこともあるんだ。もっと考えないと。慎しん重ちようにならないと。僕が馬鹿だったせいで、時間をロスした。そのせいで間に合わなかったらどうするんだ。間に合わない。考えたくない。そんなことは。サフィニアが背中を撫なでてくれた。いきなり後ろから頭を小こ突づかれて、振り向くとハニーメリーだった。何だよ、とマ

リアローズが口を尖とがらせると、ハニーメリーは、なんとなく、と答えてくすくす笑った。よくわからないけれど、泣きたくなるくらいありがたかった。涙なみだを流すのはもったいない、と思いながら、水をちょっとだけ飲んで、外がい套とうの中から出てきたクルルに炒いり豆まめを食べさせた。クルルはすぐ外套の中に戻もどった。歌声が聞こえてきた。ロム・フォウだった。響ひびきからして、暗黒大陸の歌だろうか。マリアローズたちはロム・フォウの低い歌声にじっと耳を傾かたむけた。ゆったりした、リフレインの多い歌だった。歌詞の意味はまったくわからなくても胸に染しみた。歌が終わると、ロム・フォウが、あ、と声をもらして、ごめん、と言った。どうしてか、歌いたくなったんだ。もっと聞きたい感じ、とハニーメリーが言うと、いや、もういいよ、とロム・フォウは首を振った。もう気がすんだから。そのときアルファが、うぉーん、と小さく吠ほえた。アルファは空を仰あおいでいる。そっちに目をやると、天使らしい影が三つか四つ、いや、それ以上の影が見えた。今のところ、こっちに向かっているわけではなさそうだ。遠くを飛んでいるだけらしいが、いつ見つかるかわからない。髭ひげ、治ち療りようは、とマリアローズが訊くと、トワニングは短く唸うなって、充じゆう分ぶんではないがな、というのが返事だった。トワニングがトマトクンを背負うのを、みんなで手伝った。さあ出発だ。あの砂さ丘きゆうに囲まれた盆地を迂回しつつ、天使どもから遠ざかるルートをとらないといけない。マリアローズは羅針計を確かく認にんしながら、針が示すほうを仮に北とすると、北東方向に針路をとった。歩いているうちに風が強くなってきた。吹きつけてくる砂が顔を叩いて痛いほどだ。砂が入るとまずいので、できるだけ目を細める。風は衰おとろえない。砂すな嵐あらし一歩手前だ。黒い太陽の位置がだいぶ低くなってきた。時計を見る。獄の獄に入ってから、約四十時間。まだ一度も日が暮れていない。やっと夜が訪れようとしているのか。夜は白いはずだ。たしかにあたりは白みはじめている。白く、暗くなって、見えづらい。でも、視界が悪いのは砂風のせいかもしれない。風は強まる一方だ。もう姿勢をぐっと低くしないと進めない。それに、寒くなってきた。風のせいか。それだけじゃない。気温自体、下がってきている。寒い。身体からだが震ふるえだす。歯の根があわない。寒い。白い。白くて、十メーテル先も見えない。仲間の姿も、自分の手も、足も、白く薄れて見える。これが白い闇やみの夜なのか。なんだか自分が消えてしまいそうだ。それなのに寒い。寒さはしっかりと感じる。凍こごえそうだ。もう凍えている。休んだほうがいいかもしれない。でも、自分が限界だから休もうなんて。それはそれでしょうがない、とも思う。いきなり倒れたりしたら迷めい惑わくを

かけることになる。だけどもうちょっと。もう少しがんばろう。まだがんばれる。無理をしてまでがんばることに何の意味があるのか。だけれどもうだめだから休もうなんて言えない。思考が見事に堂どう々どう巡めぐりしている。頭がまともに働いていない。休もう、とマリアローズは声を張りあげて言う。一回休もう。返事はよく聞こえなかったが、みんな足を止めた。マリアローズたちは砂を掘ほりはじめる。風を防げそうなものがないから、作るしかない。砂をどけて、穴を掘って、その中に入れば多少はましなはずだ。ところがこの作業に手こずった。風が強すぎて、掘る先から埋うまってしまう。くそッ、と飛燕が叫んで地面を蹴りつけると、砂が吹ふっ飛とばされて大穴があいた。それも物の数秒だった。大穴はあっという間にへこみくらいのものになってしまった。やむをえない。断熱素材の薄いブランケットを持ってきている。きゅーとアルファをのぞいたマリアローズたちはそれで身体をくるんで身を寄せあい、トワニングとユリカはトマトクンに医術式を施ほどこした。寒い。寒い。寒い。だめだ。寒いと思うと余計に寒い。寒くない。寒くない。寒くない。寒くなんかない。ちっとも寒くない。クルル、大丈夫かな。トマトはどう、とマリアローズが叫ぶと、なんとかしゅるわ、とユリカが叫び返した。なんとかなる、じゃなくて、なんとかする。楽観はできないということだ。とにかく肌はだを極力出さない。外套やブランケットで隠す。手を揉もみあわせる。足を動かす。自分に体温があるのかないのかわからない。なかったら死んでいる。まだ生きているのだから大丈夫だ。大丈夫。大丈夫。大丈夫。……意識が朦もう朧ろうとしてくる。眠ねむい。眠るのはまずい。ような気がする。休んでることにならないよね、これだと、ぜんぜん。不意に手があたたかくなる。ユリカだ。ほとんど見えないが、たぶんユリカが手を握にぎってくれている。そこから熱が送りこまれてくる。肌と肌がふれあっているわけじゃない。手て袋ぶくろやブランケットが間に挟はさまっているのに、けっこうな熱さだ。心ここ地ちよくて、心強い熱だ。きっと医術式か、鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の気功か何かだろう。ユリカは身を寄せてきて、マリアローズの耳みみ許もとで言う。ねちゅを、まわしゅの。熱を、回す。しょうよ。ねちゅを循じゆん環かんしゃしぇるの、身体中に。イメージして。イメージ。できるかな。やるんだ。やらないと、おそらくけっこうまずいことになる。ユリカの手が離はなれる。きっと他の仲間に同じことをするつもりなのだろう。マリアローズはイメージする。熱が──手から腕へ、胸へ。そこから身体中に広がってゆく。広がってゆく。広がれ。念じていたら、心なしかあたたかくなってきた。いや、心なしか、じゃない。本当にあたたかい。すごい、これ。でも、やがて冷めてゆく。火をつけた紙みた

いにあっさり燃えつきてしまう。寒い。また寒くなってきた。寒い。寒いよ。た、助けて。ユリカ、もう一回。頼たのみたい。だけれど頼めない。ユリカはそばにいないし。平気だ。寒くない。歯を食いしばる。なんともない。これくらい、なんてことはない。死にはしない。死なない程度のことなら耐たえられる。一、二、三。マリアローズは数をかぞえる。四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三……五十、五十一、五十二……九十三、九十四、九十五……百三十六、百三十七……三百八……六百六十二……千二百四十九……三千七百五十七、だしぬけに会いたくなる、きみに会いたい。だってさ、きみに会えばきっと、僕は弱音を吐はかずにすむと思うんだ、きみが目の前にいれば、きみにはできるだけ弱みを握られたくないから。きみの黒い髪かみを思いだす。不思議なほどなめらかで白い肌。薄青色の瞳ひとみ。凍いてついた空みたいにどこまでもつめたい色をしているのに、僕を見つめるとその空がいっぺんにとけて僕を包みこもうとして、本当に油断も隙すきもあったものじゃない。僕を抱だきしめてほしい。きつく抱いて、もう離さないで。気持ち悪い。自分が気持ち悪い。違ちがうことを考えよう。別のことを。数をかぞえよう。羊が一匹ぴき、羊が二匹、羊が三匹、羊が四匹、羊が五匹、羊が六匹……羊が三十七匹、羊が三十八匹……羊が百六十一匹、羊が百六十二匹……羊が五百四十三匹、羊が五百四十四匹……九百九十九匹目の羊の背になぜかきみが乗っている。きみは僕に手を振ってみせる。やあ、マリア。やあ、じゃないよ……。言いながら、僕は思わず笑ってしまう。さよなら、マリア。でも、きみは九百九十九匹目の羊に乗って行ってしまう。行っちゃうの？　だけど千匹目の羊の背にもきみが乗っている。やあ、マリア。さよなら、マリア。千一匹目の羊にもきみが乗っている。やあ、マリア。さよなら、マリア。千二匹目の羊にも。やあ、マリア。さよなら、マリア。僕は呆あきれる。なんでそんないい笑え顔がおでやってきて、すぐ行っちゃうんだよ。千三匹目の羊にもきみは乗っている。やあ、マリア。千四匹目の羊にも。やあ、マリア。千五匹目の羊にも。さよなら、マリア。またくるんだろうなと僕は思う。それなのに、千六匹目の羊はきみを乗せていない。僕はむしろ、虚きよを衝つかれる。そんな、乗ってないなんて。またくると思ったのに。きてくれると思ってたのに。僕は裏切られたような気分になる。ひどく傷ついている。根性なし。腰こし抜ぬけ野や郎ろう。意気地なし。腑ふ抜ぬけ。弱虫。もういいよ。もういい。きみなんかに期待した僕が馬ば鹿かだったよ。馬鹿みたいだ。胸の裏側が小さな硝子ガラスの破片

で少しずつ削けずられているみたいに痛む。ちょっとずつ削られていって、だんだん隙間が大きくなっていって、この胸がからっぽになってゆく。僕はそこに何かをそそごうとする。このままだと、がらんどうのままだと苦しくてたまらないから、何かで満たそうとする。何か。その何かが見つからない。きみの顔が浮うかぶ。この胸にあいた穴には形があるのかもしれない。その形にぴったりとはまるものじゃないと、だめなのかもしれない。……マリア。誰だれかが僕を呼んでいる。……マリア。でも、きみじゃない。……マリア。きみの声じゃない。……マリア。マリア。マリア。……サフィニアだ。サフィニアの声。マリアローズは目を開ける。すっぽり被かぶっていたブランケットをはねのけると、サフィニアと目があった。見える。白い闇がだいぶ晴れている。明るい。黒く、明るい。風は弱い。寒くない。マリア、大丈夫？　尋たずねられて、マリアローズはうなずく。うん。何度もうなずく。うん。大丈夫。ごめん、僕……寝てた？　慌あわてて時計を確かめる。七時。ということは獄の獄に入ってから四十六時間。たぶん三時間は眠っていた。うわ……と言いながらマリアローズはあたりを見まわす。遠くに黒い太陽が見える。低い位置に。もう白い夜が明けたのか。ここでは昼がすごく長くて、夜が短い。そういうことなのだろうか。ピンパーネルとハニーメリー、ロム・フォウはまだブランケットにくるまって近くに座っている。アルファはロム・フォウの隣となりで丸くなっていた。飛燕は少し離れたところできょろきょろしている。きゅーが飛燕のそばにいる。トワニングとユリカはトマトクンに医術式を施しているところだ。外套の中からクルルが出てきて、喉のどをくるるると鳴らした。マリアローズは炒り豆をとりだそうとする。指がかじかんでいて、うまく動いてくれない。それでもなんとかつまみ出して、クルルに与あたえる。クルルは引っこんだ。ブランケットを押しのける。立ちあがろうとしたら、サフィニアが手を貸してくれた。マリアローズがブランケットを畳たたみはじめると、ピンパーネルやハニーメリー、ロム・フォウも同じように片づけだす。眠っちゃってごめん、と言おうと思う。言ってもしょうがない。言わないほうがいいかなとも思う。トワニングとユリカが手を止める。施式が終わったらしい。マリアローズはトマトクンの様子を見に行く。トマトクンはマリアローズを見て、かすかに首を縦に振ふってみせる。マリアローズは笑ってみせてから、羅針計を確かめる。針が示す方向に目をやる。遥はるか彼方かなたへ。水を飲む。何か食べる。歩きだせる。さあ、行こうか。



二巡月二十二番日　城塞都市シャッコー

　鐘かねの音を聞いて跳とび起きる。「━またかよっ！」チーロ・パンカロはそのまま部屋から飛びだそうとしたが、やっべオレ全ぜん裸らじゃん。なんで？　あ、そっか。出しゆつ撃げきって激疲つかれて部屋に戻って寝ねるときになんっかもうめんどうでぜんぶ脱ぬいだんだっけ。チーロはいそいそと服を着て防寒着を羽織って外へ。ウホッ。夜じゃなさそうなのに暗い暗い暗ぁーい。天気が悪いせいか。雪降ってっし。どっか燃えてっし。「チーロ坊ぼつちゃん！」と後ろから声が飛んできて振り向くと、苦み走ったいい男カルロ・ボッシが、サハ・リドルくんとニア・リドルちゃん兄妹きようだい作の変わり刀であるところの蓮れん華げさんを引っつかんでチーロを追いかけてくる。出っ歯がセクスィーなイビツも、ただのふとっちょボボ・ファッチョもいる。他ほかの連中もぞろぞろついてくるが、みんな眠そうだ。そりゃそうだよなー。だって宿舎に戻ったのっていつだ？　チーロは時計を見ようとしてやめる。そういえばオレ時計持ってねーんだわ。うっかり忘れてた。でへっ。でもまあ、なんとなくたぶん一時間前か二時間前か三十分前ってとこだろ。その前もアレだしな。鐘がカンカンカンカン鳴ってダーッと出撃ってズバババババッと戦ってうっへー疲れたって感じでショボショボ戻ってすぐアレだったからな。出ては戻り出ては戻り出ては戻りみたいな。出戻りフラッシュバックエターナルループクラッシュソーダ割りみたいな。もうよくわからんみたいな。「まぁ、とりあえずがんばんべーっ！」ファミリーの連中に一発声をぶっかけて、チーロは加速━しようとしたら後ろから襟えり首くびをグイッと引っぱられた。「ぐえっ」「チーロ坊ちゃん！」「ななな何、何、何だよ、カルロ!?　苦しいべよ！」「何だよじゃないですよ、寒くないンですか!?」「寒ぃ……？」そういえばオレなんかすーすーするわ。何だろ、と思って自分のボデーを見てみたら「おわっ!?」と驚かざるをえなかった。オーイエイ、ノーズボーン。ノーパーンツ。カハンシーン、スッポンポーン。「……寝ぼけてたせいか。穿はくの忘れてたんかよ。つーか、さ、寒ぃっ！　き、キン●マがっ！　チ●ポがっ！　ちっちぇえ！　マジか!?　寒ぃーとこんなに縮むのかよっ!?　これって自分史上見たことねえちっちゃさだぞ!?」「……ほんとっすねえ」「って、うっせえぞ、ボボ・フトッチョ！　そーだてめえのズボン貸せ！　おら脱げ！　おらおらおらっ！」「だ、だめですよう、ボス、だめですってえ」「だめじゃねえ！　てめえはアレだろ脂肪でなんとかなんだろ！　よしよし、このズボンをだな━って、でっけえ！　このデブ、どんだけでけえズボン穿いてんだよ、マックスＬかっ！　ま、いっか。ないよりマシだろ。よし行くぞてめえら……！」

　パンカロ・ファミリーはチーロを先頭にしてシャッコーの街路を突つき進む。曇どん天てんにも程ほどがあるせいで暗いといっても朝だから、空の様子くらいは見える。邪じや竜りゆうどもがシャッコー上空を飛び交かいまくっている。あちこちで投石ドーン。遠くのほうで燃えている炎ほのおはアレか。ヤツのせいか。赤のレッド・伯爵テリオン。まーたアイツかよと舌打ちをかましながらチーロは走る。ウィリアム・タイガーボーン率いる武士団は独自の判断で動いているが、チーロ以下パンカロ・ファミリーはジョーカーの指示を仰あおがないといけない。いや、いけないってこともないのだが、闇やみ雲くもに動きまわるよりもそうしたほうがいいとチーロは思っている。なので、断だん崖がい城じよう壁へき上で指揮をとっているはずのジョーカーのもとへと急ごうとしているわけだが、そうはさせっかよ的に邪竜が急降下してきてズガゴォンと建物をぶっ潰つぶし、チーロたちの行く手に立ちふさがった。「──くそったれ……！」チーロは邪竜に躍おどりかかる。邪竜は頭を低くして突っこんできた。バーカッ。チーロは跳びあがる。邪竜の頭突きをやりすごして、つかまった。邪竜の首に。そしてハンマーパンチ壱いち號ごうでガンガンバツバツ殴なぐる。邪竜の頭を殴りまくる。「おらぁ！　死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇ……！」その間も邪竜は大暴れしている。首を振ってチーロを建物だの何だのにぶつけて振りはらおうとする。もちろんチーロだって痛いし苦しい。「ぐへっ」「ぶはぁっ」「づひっ」と呻うめくくらいのことはする。でも離さない。絶対離れないで殴る。殴る。殴る。血まみれになっても殴りつづける。殴ってグチャグシィーンという手て応ごたえを感じるたびに、チーロの心臓がダックンダックンいって脳にズキューンと響ひびいてチ●ポがビンッビンになる。ズッコンバッコンセックスセックスセックスより実際Ｅ。すばらＣ。戦いとは、戦闘とは奪うばうこと、相手の命を奪うことだ。奪ったぶんは自分の命にプラスされてギラギラ輝かがやく。邪竜の動きがどんどん鈍にぶくなってゆく。そのぶんチーロは猛たける。オウッ、オウッ、イクッ、いっちまう、ベイビー、イクッ。チーロはハンマーパンチ壱號を振りあげ、渾こん身しんの力をこめて叩たたきつける。その瞬しゆん間かん、二時間腰を振りまくってから射精するよりも遥かに強きよう烈れつなオルガスムがチーロを貫つらぬく。

　今、殺した。

　一つの命がぶっ壊こわれた。

　その実感がウッヒィー気持ちいいなんてもんじゃねえ。

邪竜がぐったりと首を倒たおして、チーロはごろりと地べたに転がった。カルロたちが駆かけよってきて「チーロ坊ちゃん！」だの「ボス！」だの「ドン！」だの「よっ、色男！」だの「最高！」だの「私を抱いて！」だのとうるせーの何の。いや、色男とか抱いてとかは本当は誰も言ってねーんだけども。チーロは「うしっ」と跳び起きて、血に染まった顔面を防寒着の袖そででぬぐった。「行くぞチ●カス野郎ども！　次！　次！　次！　次だ次、次、次ぃーっ！」「おおおおお」「わあああ」「うおおおおお」「パンカロッ！」「パンカロ万ばん歳ざい！」「万歳！」「すげえ！」「すげえぞボス！」「パンカロバンザーイ……！」チーロたちは進む。「寒いですよお」とかメソメソ泣き言を垂れるボボ・ファッチョを「走ってりゃそのうちあったまんだろ！」と叱しつ咤た激げき励れいしてやる。本当はケツを蹴けりあげてやりたいところだが、めんどっちいのでやらない。そろそろ断崖城壁だ。あの角を曲がれば。曲がった。チーロは目ん玉をひん剝むいた。「──おぉふ……っ！」

すげえすげえすげえスゲラッチョ。激戦。激戦だ。何頭もの邪竜が、それに人間型の悪あく魔まか何かが、ジョーカー軍の兵士たちと揉もみあいまくっている。ジョーカーも、クローディアも、もちろんいる。ジョーカーはクソかっくいー大刀・大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウで、クローディアは凶きよう悪あくセクシー路線のグリムサイズで敵をザンッザン斬きっているが、それでもなんつーかどういうわけか、敵が一向に減らない。なんでだっ⁉　降ってくるからだ。邪竜どもはどんどん降りてくる。その背中に悪魔が一匹二匹三匹四匹と乗っている。「チーロ坊ちゃん、やつらァ本気みてえだ！」とカルロが叫さけんだ。どうやらそのとおりみたいだ。今までは断続的に攻こう撃げきを加えて徐じよ々じよに弱らせようみたいな感もなきにしもあらずだったが、どうも肉球大王こと屍かばね玉だまちゃんの襲しゆう来らいから趣おもむきか風向きか何かそんなようなものが変わった気がする。やつらはマジクソマジでシャッコーを陥かん落らくさせにかかっている。「どどどどうしまっか、ボス！」出っ歯を飛びださせて声を震ふるわせるイビツの頭をやさしくゴッツンコしてやった。「ぐへっ」「バッカてめえ、どうするもこうするも何もやるっきゃだろ！　やるぞおおぉぉぉぉぉら……！」

我は燃えさかるゲヘナである盛さかりのついたベヘモスであるけったいなアバドンであるファックである超最低ＳＵＣＫであるチョップである。チーロは「ほおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉああ

あぁぁぁぁぁぁあああああああぁぁぁぁぁぁあああぁぁ……！」と雄お叫たけびアゲアゲ突っこみまくってなんか妙みように頭がでかい悪魔のドデカ頭をハンマーパンチ壱號で粉ふん砕さい、腕うでが四本ある悪魔の頭をやっぱり粉砕、スッと身体からだを沈しずみこませて、つまんなそうな目をした馬うま面づらの悪魔の股こ間かんを一撃で粉砕、雪、雪、雪が舞まい落ちる、血が撒まき散らされる、チーロは笑う、ギャハハハ笑う、笑いながら邪竜に突とつ貫かん、その首にしがみついて、ハンマーパンチ、ハンマーパンチだ、叩け、唸うなれ、ボコれ、ハンマーパンチ壱號、むしろオレがハンマーパンチ壱號だみたいな⁉　ガツガツいくぜ、ズンドコいくぜ、ボッコボコにしてやんぜ、ぐだぐでのめちゃぐちゃにしちゃうんだぜ、オレが、オレが、オレが、オレが噂うわさのハンマーパンチ壱號だみたいな⁉　そんな感じのフィーリングでフルボッコバーストしてやったら邪竜はおとなしくなって、チーロは地べたにゴローン、ちょっち目が回っているがそんなの知ったこっちゃないぜとばかりにピョーンと跳はね起きて、傷だらけで血がダラダラびちょびちょの禿とく頭とうをぬらぬら光らせ、ゲヘゲヘ笑う、悪魔も怯ひるむ、雪が降っている、白い雪が、ひどく無む駄だ遣づかいされた哀あわれな精子たちみたいに雪が降りしきっていて、きれいだなぁと柄がらにもないことを思いながら、チーロは手近な悪魔めがけて駆ける、悪魔ともあろうものが逃にげる、逃げる後頭部にハンマーパンチ壱號をぶちこむ、ビシャッと飛散する血液だの脳のう漿しようっぽいのだの骨片みたいなものだのを浴びて、チーロは叫ぶ、もっとだ、もっと、もっとこい、もっともっともっと、カモカモカモンッ、きてくんねーならこっちからいくぞぉら！　前へ前へ前へ前へ前へ。悪魔どもを挽ひき潰すチーロの背中をカルロが守っている。変わり刀の蓮華ちゃんを振り振り、チーロの背後をとろうとする生意気悪魔キャンディーちゃんたちを牽けん制せいしたり斬り殺したりしている。ファミリーの連中はイビツがとりまとめてくれているだろう。ボボ・ファッチョはおまけだ。まあマスコットみたいなものだ。オレは何も心配とかしねーで敵をぶっ殺してボッ殺せばいいんだとチーロは思う。思いながら邪竜に飛びついてハンマーパンチ壱號を振りあげる。うえっへっへっへっへっ。またまたまたまた殺しちゃうよー⁉　調子に乗って邪竜の脳天をバッコンと殴りつけたら、ちょちょちょちょ待っおまっちょ待っ。邪竜が羽ばたく。嘘うそ。飛ぶんかよ。飛ぶっぽいよ。おまっやめやめやめっ。ハンマーパンチ壱號で邪竜を殴る。必死で殴る。でも相手だって必死だ。邪竜が飛ぶ。飛びあがる。「──チーロ坊ちゃん……ッ！」

「バッカ、カルロおまっ……⁉」カルロが邪竜の足にすがりついた。何してんのおまえアホなんじゃねえの。つーか下ろせ下ろせ下

ろせ落ちろ。殴るたびに邪竜はふらつく、だが、高度は上がる、そうだ羽だ羽、羽をどうにかしたら──落ちるよね？　落ちちゃうよね、オレもーいつ緒しよに。それはそれでまずいよね？　だってもう十メーテルくらいは上がってるしね？　チーロは邪竜の背につかまってシャッコーを見おろした。「……ぐっへー……」ハンパじゃねえと思った。あっちでもこっちでも戦せん闘とうしてやがる。建物がぶっ壊されている。人が死んでいる。殺されている。火事も方々で起こっている。火事はきっと赤のレッド・伯爵テリオンの仕し業わざだろう。武士団が、というよりウィリアム・タイガーボーンが追いかけ回しているはずだが、あの様子では捕ほ捉そくしきれていないようだ。ジョーカーっちことジャン・ジャック・ド・ジョーカーが指揮を執とっていて、絶対女神クローディアのご加護もあるのだから、何があっても紆う余よ曲折あったとしても最終的には問題ない、大丈夫に決まっていると普ふ通つうに考えていた。でも、こんなに攻せめられまくってたら、いくらなんでも地味に微び妙みようにやばかったりしちまうんじゃねーの。いやいやそんなことねーって。シャッコーにたどりつくまでだって、微妙にどころかそうとうやばい局面は何回もあった。ピンチピンチ、ぴちぴちピンチの連続をドヤ顔でドバババーンとくぐり抜けてきたのだ。今回だって次回だって次々回だってフォーエバーなんとかなる。と思う。きっとなんとなくなるんじゃないかなと思う。そんなことより。カルロが「うおおおっ……」とわめいている。おお、つかまってるつかまってる。ちゃんとつかまってて何より何より。それはいいのだが。チーロは唇くちびるを舐なめる。高い。ずいぶん高くなってきた。「……どうすんだ、これ」

二巡月二十三番日　獄の獄ジエイルネイル

それを〝窪みピット〟と名づけた。高い砂さ丘きゅうに囲まれた盆ぼん地ちのことだ。そこには大小様々な贄にえの園の住人がうじゃうじゃいて、殺しあったり殺しあわなかったりしている。ピットの周りには巨きよ大だい環かん形けい動物（これは大ワームと呼ぶことにした）が棲せい息そくしていて、やつらはふだん地中にひそんでいるが、餌えさが近づくと姿を現す。ただし、ピットに入ってゆく生き物を大ワームが襲おそうことはないようだ。大ワームはピットから出てくる生き物だけを狙ねらって喰くらう。大ワームはたくさんいるように見えるが、もしかすると一つの生き物で、ピットはやつが作った罠わなであり餌場なのかもしれない。そこに迷いこんだ贄の園の住人たちは互たがいに争って、戦って、勝ち残った強いやつが外に出ようとする（前はどうも、マリアローズたちに触しよく発はつされて出てきたみたいだが）。その強いやつをおいしくいただく。それが大ワームの戦略なのかもしれない。まあ推測ともいえないようなふわっとした想像だし、ピットが何だろうと、大ワームの生態がどうだろうと、あまり関係ない。重要なのは、ピットらしい高い砂丘はそこかしこにあるということだ。マリアローズたちとしてはピットに近づきたくない。羅針計の針が示す方向にピットがあれば、よけて進むしかない。進行方向にピットがあるたびに、遠回りするしかない。どういうわけか、天使もピットには寄りつかないようだが、そんなことはたいして慰なぐさめにならない。とにかく余分な時間がかかって頭にくる。腹を立ててもしょうがない。わかっている。でも正直、ピットが行く手に立ちふさがるたびに苛いら々いらする。それから、昼夜。獄の獄の黒い太陽は、変へん幻げん自じ在ざいとまではいかないが変速装置を搭とう載さいしているらしいことが判明した。ようは昼や夜が一時間で終わったり十時間、それ以上つづいたりする。時計を持っていなければ、すぐに時間の感覚がめちゃくちゃになって混乱するだろう。いや、頻ひん繁ぱんに時計で時間を確かく認にんしていても、自分の中の大事な軸じくみたいなものが狂くるいはじめている、それどころか、すでに狂っている。風も脅きよう威いだ。白い夜に猛もう風ふうが重なると、強烈な寒さに苛さいなまれることになる。だけれどきっと、そのうち慣れる。慣れてしまえば平気だ。何回も、何回も、繰くりかえし自分にそう言い聞かせた。無理だった。慣れるど

ころの騒さわぎじゃない。どんどんつらくなる。疲ひ労ろうと苦痛が蓄ちく積せきして身体を、そして心を蝕むしばんでゆく。食い止めるには休むしかない。だから状じよう況きようが許せば、マリアローズたちは数時間おきに休きゆう憩けいをとる。短ければ一時間半か二時間おき、長くても四時間おきに休むようにしている。周囲を警けい戒かいしながら、水を飲んだり、何か腹に入れたり。たまに食べ物を咀そ嚼しやくするのが億おつ劫くうになる。座ると、立ちあがりたくなくなる。そのたびにマリアローズはトマトクンを見る。トワニングとユリカに医術式を施ほどこされているトマトクンを。大事な園長マスター、大好きな友だちを。トマトクンは目があうと笑えみを浮うかべようとする。口を開くことはまずない。身体もほとんど動かさない。目をつぶっていることも多い。消しよう耗もうを、疲ひ弊へいというより摩ま耗もうを、できるだけ抑おさえようとしている。そんなトマトクンを見るたびに、抱だきしめたくなる。あの大きな身体をぎゅっとしたい。弱音なんか吐はいてられない、とマリアローズは思う。この環境だ。じっくり体力の回復を図はかることはできないから、精神力で乗りきる。根性頼だのみなんて、どっかの半魚人みたいでいやだけれど、背に腹はかえられない。頼たよれるものがあるのなら、何にだって頼ってやる。マリアローズたちは歩く。黒い砂さ漠ばくを、白い砂漠を、歩く。砂すな嵐あらしにさらされて、歩く。天使どもに襲われて、返り討うちにして、歩く。贄の園の住人に出くわしたら、まず観察して把は握あくする。数は。大きさは。攻撃的か、そうじゃないか。どうするか、マリアローズが決断する。判断を下すたびに、たぶん内臓が二、三ミルメーテルくらいずつ縮んでいる。間ま違ちがうんじゃないか。また間違いを犯おかしてしまうんじゃないか。恐おそろしくてたまらない。でも、表には出さないようにする。自分を無理やり信じようとする。少なくとも、信じているふりをする。こわくて、何も決めることができなくて、立ちすくんでしまう、それだけは絶対にだめだ。マリアローズたちは歩きつづけないといけない。羅針計の針が示すほうへと進まないといけない。必ずたどりつかないといけない。だけれど、またピットだ。ピット。ピット。ピットばっかり。ため息をつこうとして、やめる。ぐっと息をのみこむ。迂う回かいしよう。マリアローズは言わずもがなのことを言う。顔を上げて、あえて向かうべき方角を指さしてみせる。まるで希望に満ちあふれているかのように。実際、希望はある。胸むね一いつ杯ぱいの希望が。なかったら歩けない。歩かない。たまに半分やけくそ気味に、よし、元気出していこう、とみんなに声をかけてみたりする。飛フエイ燕ヤンあたりは、おおッ、と応じてくれる。そうするとユリカも、おーっ、と愛らしく拳こぶしを振ふりあげる。は

い……と、サフィニアも言う。きゅーが、くう、とうなずいて、ピンパーネルが微笑ほほえんでくれる。そうだな、とトワニング。ハニーメリーが、でも一生物だよね、こんな経験、みたいな、のんきな、そうはいっても否定できないことを言う。一生物か、とロム・フォウがつぶやく。これっきりでいいね、と。アルファが吠ほえて、ロム・フォウの前を駆けまわる。おいどうした、元気を出せ、おまえらしくないぞ、とでも言わんばかりに。だいぶこたえてるんだなとマリアローズは思う。励はげましたい。慰めてあげたい。でも、何をしたって意味がないだろう。目的を達成するのだ。一刻も早く。そうしないと、ロム・フォウの気が晴れることはない。歩くしかない。マリアローズたちは歩いて、歩いた。ひたすら歩いていると、ロム・フォウが、ん……と声をもらす。天使だ。こっちにきそうだね。マリアローズはロム・フォウの視線の先に目をやる。ロム・フォウと違って平へい凡ぼんな視力しか持たないから、まだ見えない。いや、見えてきた。緑色がかった濃こい灰色の空に、白い点が一つ、二つ、三つ……十以上。マリアローズは周囲を見まわす。身を隠かくせそうなものは何もない。即そく断だんする。やろう。おっしゃッ、と飛燕が拳を打ちあわせる。なんでそんなに元気なんだか。おかげで救われている。カタリがいればと思う。これでカタリがいてくれたら、気分的にもっと楽だろう。ないものねだりだ。きっとカタリは、今いる場所で誰だれかを勇気づけているに違いない。クルチバはいい男に惚ほれられた。言わないけどね。本人には、何があっても。カタリはすっごくいいやつで、それだけじゃなくて、やるときはやる。かっこいいところもたくさんある。クルチバと会えたかな。会えているといい。僕はここで踏ふんばろう、とマリアローズは思う。次にカタリと会ったときに報告するんだ。じつはこんなことがあってさ。まあ、なんとかなったよって。さらっと言ってやる。天使どもが近づいてくる。マリアローズは、髭ひげを中心にして円えん陣じん、と声をかける。ただちにみんなそのとおりに動く。天使どもが迫せまりくる。あいつらにはロム・フォウの弓矢がきかない。マリアローズはサフィニアのほうを見る。サフィニアはうなずいて、天使どもに向かって右手を突つきだす。白しろ魔ま術じゅつ。白い光線が天使どもめがけて一直線にのびる。天使どもは散開してよけようとした。でも二人か三人、光線をかわしきれずに融とけた。残りの天使どもは二手に分かれて左右からくる。僕にできることはない、といつものようにマリアローズは腹をくくる。激げき突とつは一いつ瞬しゅん。飛燕がハリャアアッと天使の土手っ腹に飛び蹴けりをぶちかます。ユリカが極限クライマツクス九手棍ナインポールで天使を叩たたき落とす。ピンパーネルが天使に飛びついて、雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けん

で解体する。ハニーメリーは射しや撃げきで援えん護ご。怯ひるんだ天使にきゅーがワンパンをぶちこんで、ロム・フォウはトマトクンの大剣で天使を一刀両断。ロム・フォウに肉にく薄はくしかけた天使にアルファが躍おどりかかって引きずり落とす。アルファは即座にその天使から飛び離はなれて、ロム・フォウがとどめを刺さす。残りの天使をサフィニアが焼く、凍こおりつかせる、稲いな妻ずまをぶちこむ。処理、とマリアローズが叫さけぶ。ぶっ飛ばしたり斬きり倒たおしたりした天使どもを、みんなで一いっ斉せいに細切れにしたり踏み潰つぶしたりするのだ。この作業には及およばずながらマリアローズも参加する。うにゅうにゅ動く天使の破片を気持ち悪いが手づかみして遠くに投げたり、砂の中に埋うめたりすることくらいは、マリアローズにもできる。これで天使どもはすぐに復活することはできない。よし行こう、と号令をかけようとしたら、ロム・フォウが、また……とつぶやいた。え？　マリアローズは空を仰あおぐ。いやになる。すぐに思いなおす。こんなの毎度毎度のことじゃないか。ちょっと移動して。マリアローズは手を振ってみんなを誘ゆう導どうする。万が一ということもある。天使どもの残ざん骸がいの上で戦いたくない。くる。天使の新手が。今度はさっきよりも多い。やばい、と思う。やばくない、とも思う。悲観と楽観を並べて、どっちもじっくり眺ながめる。僕は無能で無力だけど、でも、できることが何もないわけじゃない。あきらめてしまいそうになるけれど、決してあきらめない。あたりまえのことをあたりまえにやる、たったそれだけのことにこんなにも苦労する。それが自分なんだ。反へ吐どが出るほど嫌きらいだし、本当に情けない、でも、自己嫌けん悪おに陥おちいっている場合じゃない。天使どもがくる。やってくる。サフィニアが飛びたって、頭上で両手を組みあわせる。振りおろした両手の先から放たれる幾いく筋もの白い光線。天使どもは、だが、散らない。なんで。マリアローズは目を瞠みはって息をのむ。どうして。光線が消えた。かき消された。防がれたのか。ロム・フォウが叫ぶ。先頭の天使、羽が十二枚ある。──十二枚。多ければいいというものでもないだろう。だけれど少ないよりは多いほうがなんとなくすごそうだし、二枚羽の天使より四枚羽の天使のほうが、四枚羽の天使より六枚羽の天使のほうが手て強ごわいことは事実だ。十二枚。六枚羽の倍。そいつがサフィニアの魔術を防ぼう御ぎよしたのか。マリアローズは目を凝こらす。いる。たしかに。十二枚羽。身体からだも他ほかの天使より一回り大きい。右手に剣、左手に盾たてを持っている。大天使というところか。サフィニアが右みぎ腕うでを振ってまた光線を放つと、大天使は盾をかざした。光線が弾はじかれるように消える。その瞬間、大天使の盾の前にもっと巨大な光輝かがやく透とう明めいな盾

が現れたように見えた。まさか、大天使には魔術がきかないのか。マリアローズはとっさに、サフィニアは他の天使を、と叫ぶ。はい……！　サフィニアは急上昇して、上から天使どもを魔術で狙い撃うちするつもりだろう。大天使がくる。そのまま突っこんでくるのか。いや。降りたった。マリアローズたちの前に。大天使。きらびやかな鎧よろいを着て、頭ず巾きん付きのたっぷりした衣ころもを身につけているのは、他の天使と変わらない。顔が少し見えた。よくできた仮面みたいな顔が。作り物めいた唇くちびるが動く。ナンジカナシミヲシレ。これは大天使の声なのか。ナンジカナシミヲシレ。鼓こ膜まくじゃなくて脳を揺ゆさぶるような、不快な音声だ。ナンジカナシミヲシレ。ナンジカナシミヲシレ。知るかよッ。飛燕が先頭を切って突進してゆく。大天使は動かない。微び動どうだにしなかった。飛燕は殴なぐりかかろうとしたのか、蹴ろうとしたのか。わからない。その前に撥はね返されてしまった。あの盾だ。光輝く盾が出現して、飛燕を撥ね飛ばしてしまった。ハニーメリーが放った銃じゅう弾だんも弾かれたし、回りこんで大天使の背後をとろうとしたピンパーネルも吹ふっ飛ばされた。前面だけじゃないのか。破……っ！　ユリカが踏みこんで極限九手棍を突きだす。ちょっと期待したが、これもきかなかった。魔術だけじゃなくて、殴ったり斬ったりもできない。そういうことなのか。大天使が音もなく歩きだす。ゆっくりと近づいてくる。むむ……とトワニングが唸うなって、トマトクンが、剣……と低い、かすれた声で言った。剣？　剣。そうか。ぴんときて、マリアローズはロム・フォウを見た。ロム・フォウ、トマトの剣で！　ロム・フォウは返事をする代わりにトマトクンの大剣を振りかざして大天使に突っこんだ。斬りつけると、あの光輝く盾が現れたが、甲かん高だかい悲鳴のような音がして砕くだけ散った。大天使は実物のほうの盾で大剣を受け止めて、下がる。ロム・フォウは追い撃ちをかける。大天使以外の天使どもはサフィニアが一人で食い止めようとしている。でも、さすがにぜんぶは無理だ。サフィニアが撃げき墜ついしそこねた天使どもが押しよせてくる。飛燕が、ユリカが、ピンパーネルが、きゅーが、アルファが、ハニーメリーが天使どもを迎むかえ撃つ。マリアローズはトマトクンを背負っているトワニングと一いつ緒しよに、みんなを邪じや魔ましないように少し後退する。ロム・フォウは大天使と斬り結んでいる。押しているように見える。そのまま押しきってほしい。もう一人……！　サフィニアが上空で声を張りあげた。もう一人？　マリアローズは四囲に視線を巡めぐらせて、思わず、超最低ＳＵＣＫ、と吐き捨てる。本当だ。本当にもう一人くる。十二枚羽の大天使。それから、緑色がかった濃い灰色の空を埋めつくすほどの黒点ならぬ白点。天使ども。天使の大群。一瞬、

思考が完全に停止した。だって、どうしようもないよ、こんなの。だけどあらがうんだ。最後の最後まであがくんだ。方法なんかなくたってもがけ。自分を奮い立たせようとする。その試みは成功しかけて、膨ふくらみかけた闘とう志しがすぐにしぼんだ。別方向だ。あの大きい天使。大天使じゃないか。大天使が二人。違う。さらに違う方向から、もう一人。三人。大天使が三人。飛燕やユリカたちも天使どもを捌さばききれなくなってきた。天使が一人、抜ぬけてくる。トワニングが黄金脚きやくでその天使を一いつ蹴しゆうして、いざというときは、と言った。拙せつ僧そうも、いざというときは。マリアローズはうなずいた。そうしてもらうしかないだろう。ただ、そうなったらマリアローズがトマトクンを守らないといけない。やるつもりだけれど正直、厳しい。ハニーメリーが天使に突き倒された。ハニー！　マリアローズは駆かけだそうとして、こらえる。ハニーメリーを槍やりで串くし刺ざしにしようとしていた天使にピンパーネルが飛びかかって、またたく間に斬り刻んだ。ハニーメリーは起きあがる前に撃つ。起きあがりながら撃つ。飛燕が天使を蹴って、天使を殴って、天使に手刀を叩きこみ、天使を蹴り上げ、天使をぶっ飛ばし、天使を殴りつけ、天使を蹴倒し、天使を殴り壊こわす。いっぺんに。同時に。飛燕が何人にも見える。ユリカは鵺ぬえノ血けつ涙るいノ裏門を開いて極限九手棍を三さん叉さ牙がと化さしめ、まっすぐのびた真ん中の刃やいばで天使どもを貫つらぬき、下向きに湾わん曲きよくした右の刃で天使どもを突き刺して、上向きに反った左の刃で天使どもを斬っている。きゅーは肉球を叩きこんで天使を破は裂れつさせる。アルファは天使の脚あしを咬かみ切る。喉のど笛ぶえに噛かみついて押し倒して首を咬みちぎる。サフィニアの魔術で焼かれたり打ち砕かれたりした天使の残骸が大おお粒つぶの、大粒すぎる雨みたいに降ってくる。みんな奮戦してくれている。それでも、三人の大天使がきてしまったら一気に崩くずれる。どうにかしないといけないのに、ロム・フォウはまだ最初の大天使と斬りあいを演じている。今のところ、トマトクンの大剣以外は大天使に通じないようだから、手立てがない。マリアローズはトマトクンを見た。トマトクンはトワニングの背で薄うす目めを開けている。空を仰いでいるのか。マリアローズは剣を抜こうとする。首を振って、手を引っこめた。僕が剣を抜くようじゃおしまいだ。そうだ。まだだ。まだ終わってない。終わらせてたまるか。何があっても終わらせない。

「ばらばらにならないで……！」マリアローズは叫んだ。腹の底から声を出した。「ユリカ、飛燕と組になって！　きゅーはピンパーネルと！　ハニーはこっち、アルファも！　髭、トマトを下ろし

て、きみも戦って！　後ろのほうは髭一人でなんとかなるだろ！　トマトは僕とハニーとアルファで守る！　なんとしても守る！　サフィニア、上はもういいから降りてきて！　ここでトマトに近づいてくるやつを手当たり次し第だいに潰すんだ、早く、急いで！　飛燕、突っこみすぎるな、ユリカにカバーさせない！　きみがユリカをカバーするくらいじゃなきゃおかしいだろ！　きゅー、危ない！　よしいいよ、それでいい！　ハニー、残弾は!?　オッケー、よしくるよ！　大丈夫、大丈夫だ！　大丈夫……！」

　三人の大天使が舞まい降りてくる。大丈夫だとマリアローズは思う。強く思って、信じる。僕は折れない。それしかできないから、せめてここに立っている。みんなを信じて、信じ抜く。心臓が破れそうだ。だから何だ。破れやしない。これくらいで。破れたっていい。大天使が十二枚の羽を羽ばたかせて、黒い砂さ漠ばくに着地しようとしている。三人のうちの一人が最初の大天使と剣を交えているロム・フォウのほうに向かおうとしている。ロム・フォウに注意をうながさないと。でも、ロム・フォウは目の前の大天使に集中している。気を散らせたらまずいかもしれない。迷うな。迷ってる暇ひまなんかない。「──ロム・フォウ、後ろ……！」「っ……！」ロム・フォウは振ふり返りながら大剣を振りまわして、背後から迫ろうとしていた大天使の盾を砕いた。最初の大天使がロム・フォウに攻せめかかる。間かん一いつ髪ぱつだった。ロム・フォウは横っ跳とびし、転がって最初の大天使の剣をよけ、起きあがりながら新手の大天使の剣を弾き返した。そしてなぜか、こっちに顔を向けた。「上だ、マリア……！」「え……」マリアローズは、それからそばにいるサフィニアも、ハニーメリーも、アルファも、上を向いた。そんな。気づかなかった。気づかなかったなんて。真上だ。完全に真上だからか。それで気づかなかったのか。大天使だ。まだいたんだ。落ちてくる。真っ逆さまに、頭から。サフィニアが「だめ……！」と絶ぜつ叫きょうして白い光線を飛ばす。盾でかき消されてしまう。やらせない、とマリアローズは思った。まっしぐらに落下してくる大天使を睨にらみつけたまま、砂に寝ねかされているトマトクンに覆おおいかぶさる。やらせない。よせ、とトマトクンが言ったような気がする。よさない。やらせない。後こう悔かいなんてしないものなんだな、と唐とう突とつに思った。不思議なほど悔くいがない。頭の中がすっきりしている。何もかもくっきり見えるし、はっきりと聞こえる。いろいろな思いがあふれてくる。この思いだけはここに残るのかな。残してゆけるのかな。でも、終わってない。まだ終わってないんだ。終わらないと信じていれば、たまにこういうことも起こったりするから、まったくわからない。

砂の中からせりだすというか飛びだしてきたそれが何かなんて、その瞬間はこれっぽっちも考えたりしなかった。ただただ呆あつ気けにとられた。とにかくそれは、膨ぼう大だいな砂を撒まき散らしながらズッドーンと打ちあげられたように太すぎる管みたいな身体をのびあがらせてガバァッと大きく口を開けた。そうして大天使にかぶりつく。もちろん大天使は盾に守られている。光輝く盾が大天使を包んで、それの牙きばを阻はばんだ。牙は盾に弾かれたが、おかまいなしだった。それは口をさらにビョーンと開いて、盾ごと大天使をのみこんでしまった。大ワーム。大ワームだ。なんでこんなところに。近くにピットはないのに。大ワームはピットの周りに棲せい息そくしているんじゃなかったのか。そうとはかぎらないのか。決めつけだったのか。「う、わっ……」マリアローズはよろめいた。地面が揺れた。次の瞬間、何匹ひきもの大ワームが一斉に顔を出した。「──退たい避ひ……！」マリアローズは声をかぎりに叫んで振り返った。「髭ひげ！　きて！　トマトを……！」「おう！」トワニングが天使を蹴飛ばして駆け戻もどってくる。大ワームたちが大暴れしはじめた。どうやら大ワームの狙ねらいは大天使らしい。大ワーム的にはうまそうなのか。そのへんはよくわからない、わかるはずもないが、天使も巻き添ぞえを食っている。トワニングが引き返してきてトマトクンを背負うまで、マリアローズたちもとばっちりを受けるんじゃないかと気が気でなかった。サフィニアとハニーメリーはもちろん、ユリカ、飛燕、ピンパーネル、きゅーもすでにマリアローズの近くにいる。アルファがいない。ロム・フォウだ。アルファはまだ大天使とやりあっているロム・フォウめがけて疾しつ駆くしていた。「わたしが……！」サフィニアが飛んでゆく。マリアローズは「走れ！」とみんなに指示を出して、サフィニアとは逆方向に駆けだした。振り向くと、ロム・フォウを攻めたてていた大天使の足あし許もとにサフィニアが何かの魔ま術じゆつを炸さく裂れつさせたところだった。大天使の体勢が崩れて、その隙すきにロム・フォウは踵きびすを返す。アルファもロム・フォウとともにこっちへくる。サフィニアも空中で百八十度旋せん回かいして、こっちへ。大ワームの群れが身をよじり、回転させて、大天使に食くらいつこうとしている。天使どもが大ワームたちに弾き飛ばされ、踏ふみ潰つぶされる。大天使の代わりに丸まる呑のみにされる天使もいる。ただ、大天使と天使どもの標的はあくまでマリアローズたちだ。それは変わらない。連中は大ワームたちにしっちゃかめっちゃかにされながらも、マリアローズたちを追つい尾びしてくる。状じよう況きようは大ワームたちの乱入でましになった。でも、障害や問題が取り除かれたわけじゃない。依い然ぜんとしてマリアローズたちは逃にげないといけないが、襲おそいく

る大ワームたちをかいくぐって、大天使が飛んでくる。天使どもが押しよせてくる。とても逃げきれるものじゃない。足を止めて、なんとか上手に大ワームを利用しつつ、大天使と天使の殲せん滅めつを狙うべきか。大ワームと大天使と天使にもみくちゃにされて何がなんだかわからなくなる前に、ある程度の犠ぎ牲せいを覚かく悟ごして、ここでやる。どうにかして被ひ害がいを最低限に抑おさえる。そうするしかないのか。決断しろ。「──っ……!?」

　とんでもないものを見て、自分が何を言おうとしたのか忘れてしまった。

　マジ？

　嘘うそだよね？

　これって幻げん覚かくでしょ？

　だけれど見なおしても、いる。前方だ。誰だれかが手を振っている。人。まさか人なのか。帽ぼう子しを被かぶってゴーグルのようなものをかけ、丈たけの長い外がい套とうを着て、大きな背負い袋ぶくろを背負っている。人みたいだ。少なくとも人に見える。大声で何か叫さけんでいる。「おおい！　おおい！　こっちだ！　こっち……！」と、共通語で、人間の言葉で、男の声で、どうやらそんなことを言っているらしい。いったいどういうつもりだろう。何者なのか。罠わなじゃないのか。罠。この獄の獄で人間らしい何者かがマリアローズたちを罠にかける。ありそうにない。さりとて、ここにマリアローズたち以外の人間がいるのも変だ。やっぱり人間じゃないのかも。みるみるうちに男が近づいてくる。男は動いていない。こっちが接近しているのだ。どうしよう。どうすれば。罠か、罠に類するものだとしたら、これ以上近づかないほうがいい。もっとも、男はマリアローズたちの進行方向にいる。真正面に。接せつ触しょくしないようにするとしたら、右か左に方向を変えないといけない。マリアローズたちは追われているのだ。それは難しい。ぐずぐずしているうちに、男が背を向けた。逃げだすのか。違ちがう。目を疑った。消えた。男がいなくなった。やっぱり幻まぼろしだったのか。そんなことはないと思うけど。ごちゃごちゃ考えている余よ裕ゆうはない。マリアローズは、マリアローズたちは走る。走る。走る。さっき男が消えたあたりを通過した。何の前ぶれもなかった。音が失うせた。たとえて言えば、水中に飛びこんだような感じだ。水に耳をふさがれているような。音だけじゃない。景色も違う。黒い光が薄うすまって、空の色はさっきよりも濃こく見

える。マリアローズは立ち止まった。消えたはずの男が、前のほう
にいる。振り返ると、トマトクンを背負ったトワニングがやってき
た。きょろきょろしながら駆けて一入った。こちら側に。トワニン
グにつづいて、ピンパーネルとハニーメリーが。飛燕とユリカ、
きゅーはすでにこちら側にいる。ロム・フォウとアルファもきた。
みんな異変に戸と惑まどっているようだ。あっちを見たりこっちを
見たり、仲間の姿を確かく認にんしたりしている。ハニーメリーが
口を開いて何か言ったみたいだけど、音らしいものが聞こえたよう
な気もする。聞こえなかったような気もする。

「あと一人か」男の声だけは聞こえた。ただ、右と左から交こう互
ごに囁ささやきかけられているような、奇き妙みような聞こえ方
だった。男は上を見た。「彼女は魔術士のようだ。すごいな。飛べ
るのか。ここからでは声が届かないから、語りかけてみよう」

　男はそれから少しの間じっとしていた。サフィニアはマリアロー
ズたちの頭上あたりを飛びまわっている。ふと、こっちを見おろし
た。降りてくる。サフィニアは上からこちら側に入ってきて、マリ
アローズたちを見つけると、何か言った。でも、聞こえない。おそ
らくマリアローズの声も届かないだろうが、マリアローズはサフィ
ニアの名前を何度も呼んだ。サフィニアがマリアローズのほうへ飛
んできた。二人は抱だきあった。「マリア、よかった……！」声が
聞こえる。サフィニアの声が。例のおかしな聞こえ方だけど。どう
やら密着するほど近づくと、聞こえるらしい。「突とつ然ぜん……
みんな、いなくなったから……どうしたのかと……」「僕にもよく
わからないんだ。あの人が」マリアローズは男を視線で示した。
「何かしたみたい」

「これで全員かな」と男はマリアローズたちを見まわして言った。
「いや、しかし、獄の獄で人間に会えるとは思ってもみなかった。
旅をしていると、いろいろなことがある。旅の醍だい醐ご味みだ」

「……あの人の声は聞こえるけど」マリアローズは首をかしげる。
「あの人はどうなんだろ。僕たちの声は聞こえてるのかな」

「ん？」男はマリアローズのほうに顔を向けた。ゴーグルは外して
いるが、庇ひさしの大きい帽子をかぶっているし、髭を生やしてい
るというよりこびりつかせているので、人相がよくわからない。で
も、少なくとも年寄りではなさそうだ。「ああ、ひょっとして私に
向かって話しているのかい。おそらく私の声はきみたちに届いてい
ると思うが、きみたちの声は私には届かないのだ。この領域ドメイ

ンはそもそも一人用なのでね。私が招かなければ誰も決して立ち入ることはできないし、私が出ることを許さなければ出られない。私以外の者が居残ることもできない。ここは私の避ひ難なん所じよで、隠かくれ家がなのだよ」そう言うと、男はマリアローズのほうに歩いてくる。領域ドメイン。一人用。避難所。隠れ家。意味がよくわからないし、警けい戒かいしないではいられない。マリアローズは身を硬かたくした。それから、「あ……」と口をあんぐり開けた。え。え？　え……？　何これ。何だよ、これ。どういうこと？　何？　どうして？　何がどうなって……？

　マリアローズたちはどうも、男の避難所で隠れ家である領域ドメインとやらの中にいるらしい。場所的には、なんとも説明しづらいが、まあ獄の獄の砂漠のど真ん中だ。マリアローズたちは大天使や天使どもに追いかけられていて、大天使は大ワームたちに付け狙われていた。この領域ドメインだか何だかに入りこまなかったら、今ごろ死し闘とうを演じる羽目になっていたかもしれない。そうだよ。

　なんでだよ。

　僕らはどこか別の場所に移動したわけじゃない、まだここにいるのに、どうしてそうなってないんだよ。おかしいじゃないか。

　だって、大天使や天使どもや大ワームたちはちゃんといる。あっちにも、そっちにも、こっちにも──ここにもいる。

　見える。今、マリアローズがいるところを、天使が通りすぎてゆこうとしている。手をのばせばさわれそうなところを。いや、それどころじゃない。

　別の天使がマリアローズを突き抜けていった。

　気味が悪いけれど、恐きよう怖ふはあまりない。やつらの姿が薄れて見えるせいだ。やつらはここにいて、同時にここにはいない。そんなふうに感じられる。ここにいるのに、ここにいない。それってつまり、どういうこと……？

　マリアローズはハッとした。男がすぐ近くにいる。いつの間に。男は「失礼」と一言断ってから、かがんでマリアローズに身を寄せてきた。サフィニアがマリアローズを守ろうとするように抱きすくめると、男は笑った。なんというか、いい笑え顔がおだった。悪い

人じゃなさそうだと思わせて、くつろがせる笑い方。男は手をのばしてきた。マリアローズの頬ほおに、そっと指先をふれさせる。
「私はきみと話をしようとしているだけだ」

「サフィニア」マリアローズはサフィニアをやさしく押しのけた。
「大丈夫。……だと思う。たぶんね」

「ちゃんときみの声が聞こえる。いいようだ」

「そう。──で？　きみは誰？」

「私はただの旅人だ。しかし、久しぶりに出くわした人間たちがどうやら危地に陥おちいっているようだったので、見過ごせなくてね。とはいえ、一いつ介かいの旅人にすぎない私には、きみたちを救う手立てといっても、この領域ドメインに招きよせるくらいしか思いつかなかった。慣れぬ者には居い心ごこ地ちがよくないかもしれないが──」男はそのへんを、というかこのへんをうろついている天使どもを目で示した。「彼らが去るまではどうか我が慢まんしてほしい」

「旅人、ね……」ただの旅人。こんなわけのわからない芸当ができてしまう一介の旅人。おもしろい冗談だ。帽子の庇の奥からマリアローズを見つめている、男の瞳ひとみ。なんて瞳だろう。きっとこの黒い太陽の下じゃなければ、美しくカットして磨みがきあげた宝石みたいな輝かがやきを発するに違いない。その瞳だけでもあからさまに普ふ通つうじゃないのに、ただの旅人だなんて。「──きみは、人間？」

「そうだ」本当か嘘か知らないけれど、男は即そく答とうした。
「私は旅を愛する人間だが、旅を愛するがゆえに、旅する場所を選ばない。行ったことのない場所に足を踏み入れるのも、かつて訪れた土地をふたたび旅するのも好きだ。見知らぬ街や山河はいつも否いや応おうなく私の胸を弾はずませる。見覚えのある酒家の灯あかりや曠こう野やの眺ながめは私の胸を締しめつける。私はただの歩きつづける足であり、見つづける目でしかない。ときには旅の道具を持ち、ときには何も持たずに、私は旅をする。旅は私に呼吸の仕方を忘れさせ、別れの言葉を思いださせる。私は出会い、別べつ離りする。ごく稀まれに再会する。私は旅すること以外、何も望まない。きみはどうかな、赤い髪かみの人よ。不意にこぼれる涙なみだのように、旅に出たくなることはないかい、橙だいだいの瞳をした人よ」

「……わかるの？」マリアローズは自分の髪の毛を引っぱって凝ぎよう視ししてみた。まったく色味がないわけじゃない。でも、ほとんど真っ黒だ。「僕の髪とか目の色が」



「獄の獄はこれでもう五度目なのでね。黒い太陽には慣れている。何度きても、ここは刺し激げき的だが」

「旅、か……」何だろう。この男の言葉を聞いていると、無む性しように旅に出たくなる。や、今も旅をしてるっていえば旅をしてるんだけど、なんかそういうのじゃなくて。いきなり、あ、どっか行きたい、と思って、そのままどっか行っちゃう、みたいな、そんな旅がしたい。あー旅っていいよね、みたいな気分になってくる。エルデンにいたころならともかく、今は旅どころじゃないのに。そうだ。マリアローズは頭を振ふる。いけない。「……旅っていいよねとか、思ってる場合じゃないし……」

「どうやら事情があるようだ」男はマリアローズの頰をさわったまま、みんなをざっと見た。それからまたマリアローズに目を戻もどした。「私はエリオット。ここで巡めぐりあったのも何かの縁えんだ。もしよければ、聞かせてほしい。きみたちの物語を」

二巡月二十五番日　北ワールオック山麓

　長なが椅い子すに腰こしかけた母親の脚あしに子がまとわりついている。母親の隣となりに座っている父親が我が子の小さな頭に手を置いて相好を崩くずした。かつて中部ミツド諸国域ランズと称しようされていた大陸中部の南に横たわるワールオックの山並みは依い然ぜんとして純白の冠かんむりをかぶっているし、麓ふもとの森で息をひそめているこの古めかしい孤こ城じようの周りにも雪が
残っているが、今日はめずらしく春の訪れを予感させるような穏おだやかな一日だった。とはいえ日暮れが近づくにつれて急速に冷えてきている。孤城には暖だん房ぼうの設備があり、元エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕの機術士たちが修しゆう繕ぜんして使えるようになっているものの、燃料を節約するため今は動かしていない。城主の居室だったと思われる奥まった場所にあるこの部屋も、厚手の上着を身につけていないと震ふるえが止まらない程度には寒いのだ。実際、母親も父親も、それから部屋の出入口に立って親子を眺めている彼もちゃんと着こんでいる。しかし母親にじゃれついている子供だけは薄着だ。少なくとも着ぶくれしてはいない。子供。いや、一歳にもなっていないのだから、まだ赤子か。赤子はさかんに笑い声を立てて母親の膝ひざによじ登ろうとしている。寒くはないのか。風か邪ぜでもひいたらどうするのか。あの親たちは少し無む頓とん着ちやくなのではないか。我が子ではないか。心配にならないのか。わからん、と彼は胸の裡うちで呟つぶやいた。俺にはわか

らん。あんな見るからにかよわい生き物をどう扱あつかえばいいのか。もっと厳重に守ってやるべきではないのか。抜き身の刀を構えた勇士二十人を常時護衛につけたとしても、まだ足りない気がする。この部屋の床ゆかは石だ。転んだらどうする。どこか打って、傷でもこしらえたらどうするのか。今すぐ毛布か毛皮でも敷しいたほうがいい。そうするべきだ。俺が考えることではなかろう、と彼は思う。この程度のことはやつらが考え、手を打っておくべきだ。そうではないか。やつらは甘いのではないか。父親も母親も、我が子かわいさに思し慮りよが足りなくなっているのではないか。ありうる。子が生まれる前からその傾けい向こうはあった。だが生まれてからはさらにひどくなった。二人とも変わった。まるで別人だ。手を抜いているわけではなかろう。責務は果たしている。とくに父親のほうは。それは認めざるをえない。しかし生ぬるくなった。それも間違いないところだ。あのように笑う男ではなかった。女の前ではどうか知らないが、少なくとも余人の━彼が見ている前では、口くち許もとをゆるめることすら稀だった。常に張りつめていた。他者に、それ以上に己おのれに厳しい、厳しすぎる男だった。それがどうだ。彼は奥歯を嚙かみしめて目をつぶった。耐たえがたい。あの男のあんな表情は見るにたえない。全身がむず痒がゆくなってくる。ふと、俺は何をやっているのだ、と彼は自問した。ここで何をやっている。何もしてない。話しあっておくことがあった。それをすませた。すぐ立ち去らずに、なぜここに突つっ立っている。彼は目を開けて踵きびすを返そうとした。赤子が歩みよってこようとしていることに気づいたのはそのときだった。「ばっ……」馬ば鹿かな、と言いそうになって口をつぐんだ。赤子は彼まであと二歩か三歩のところまで迫せまっている。彼は赤子とその両親を交互に見た。赤子の両親はのんきに目を細めている。何をしているのだ。危ないではないか。「どっ……」彼は、どうにかしろ、と怒ど鳴なりそうになり、慌あわてて口をふさいだ。いけない。大きな声を出したら、赤子が驚おどろくかもしれない。泣きだしたりしたら、大だい惨さん事じだ。逃にげるか。それもまずい。赤子はよたよたしながら、もう彼の脚に手をかけようとしている。彼が逃げだせば、赤子の手は空をつかむことになるだろう。転ぶ。転んでしまう。大惨事だ。

「まー、うー、まー」とかなんとか言いながら、赤子はついに、とうとう、彼の脚をつかんだ。彼を見上げて、満面に笑みをたたえてみせる。

　彼は「うっ……」と唸うなって歯を食いしばった。何だこれは。

この小さな生き物をどうすればいい。わからない。赤子の手が彼の膝のあたりをばしばしと叩たたく。なかなか力強い。小さいくせに。本当に小さいのだ。彼は赤子の父親を見た。「……ヨハン、こ、この赤子を、ど、どうにか……」

「いいかげん名前で呼んでやってくれ」ヨハン・サンライズは右手の中指で眼鏡めがねを押しあげた。笑っている。嘲あざ笑わらっているのか。「この子にはカレルという名がある」

「か、かっ、カレルを、ど、どうにかしろ、ヨハン。あ、危ないっ」

「平気よ」琺瑠フオールも笑っている。しかも、悠ゆう然ぜんと。母親だというのに、我が子が気がかりではないのか。「もし転んだとしても、どうということはないわ」

「いいやそんなことはない！　かっ、カレルが怪け我がでもしたらどうするつもりだ！」

「ぶつけたりすりむいたりくらいは、いつもしているのよ？」

「な、何だと……？」

「羅ラ叉サ」ヨハンは落ちつき払はらっていて、立ちあがるそぶりも見せない。「気にかけてくれるのはありがたいが、カレルはこんな時代に生まれて、今まで病気一つせずに生き抜いてきた。成長もずいぶん早いようだし、そう弱くはない。何か起こるたびに取り乱して右往左往するおれたちより、よほど強いのかもしれないとさえ、たまに思うくらいだ」

「だがっ、しかし──くっ……」羅叉は凍こおりついた。カレルがあーあー言いながら羅叉の脚にしがみついて、よじ登ろうとしている。「こ、これは……ヨハン……っ！」

「君ともあろう者が、なぜその程度のことでおれに助けを求める。抱だいてやればいい」

「だ、抱くだと？　むむ無理だそんな、こんな小さな生き物、俺がふれるだけで……」

「壊こわれたりしないわよ。割れ物じゃないんだから」

「割れ物より脆ぜい弱じゃくだ、どう考えても！　ただでさえ俺はがさつだし……」

「あら、自覚があるのね」

「う、うるさい！　むっ……」羅叉はのけぞった。カレルが羅叉の腿ももまで手をのばしてきた。その小さな足はもう床についていない。落ちる。少しでも腕うでの、手の、脚の力がゆるんだら、カレルは落ちてしまう。危険だ。あまりにも危険すぎる。これはもう抱きあげるしかないのか。だが、どうやって。いったい赤子とはどのようにして抱くものなのだ。見当もつかない。「……ヨハン！」

「死神も形なしだな」ヨハンは苦く笑しようしながら立ちあがると、後ろからカレルの脇わきの下に手を差しこむようにして持ちあげた。「毒どく蛇へびや蠍さそりのたぐいではない。そんなにこわがることもなかろうと思うがね」

「……毒蛇や蠍ならば──」そんなものならば、恐おそれるに足りない。羅叉はあとずさりをして、唇くちびるの下を手の甲こうでこすった。赤子のほうが万倍、いや、億倍恐ろしい。

「おれも最初は戸と惑まどった」ヨハンはカレルを抱いた。カレルは謎なぞめいた声を発しつつヨハンの眼鏡をさわっているが、父親は我が子の好きにさせている。「しかし、やってみればなんということもないものだ。ほら」

「うおっ……」不意打ちだった。だしぬけにカレルを押しつけられて、受け止めないわけにもいかず、落っことしてしまうわけには当然いかないから、無我夢中でしっかりとつかまえた。カレルは羅叉にとりすがった。意外に力がある。こんな形なりでも人間なのだと思った。あたりまえだ。人間に決まっている。

　カレルは嘘うそのように小さな手で羅叉の顎あごをさわり、頰をさわった。その頭とう髪はつは黒に近い。母親の血だろう。顔だちはよくわからないが、やはり母親似のような気がする。ただ、口許や鼻は父親の特とく徴ちようを受け継ついでいるのではないか。どちらにも似ている。しかし、それよりも──羅叉は愕がく然ぜんとした。なぜ今まで気づかなかったのか。カレルにはあまり近づかないようにしていた。まじまじと顔を見たりしなかった。だからそんなことは一度も思わなかったのだ。

「妹に似ているでしょう」琺瑠も長椅子から離はなれて、こちらに近づいてきた。「顔がどんどん変わるの。このごろなのよ。半巡月くらい前にヨハンが言いだして、ああそういえばそうだって。釈シヤク拿ナは童顔だったから、そのせいもあるのかもしれないけど」

「ああ……」羅叉は阿あ呆ほうのように呟いて、カレルをじっと見つめた。これが血なのかと思った。故人である父親の実父の名を与あたえられた男児が、母親の今は亡なき妹にそっくりだとは。こうして血は残ってゆくものなのか。人が人を生むとはこういうことなのか。この繰くりかえしのあげくに誰だれも彼も存在しているのか。

　この腕の中にいる小さな生き物が、やがては大きくなって、順当にいけば両親や羅叉が死んだあとも生きてゆく。そして、やはり子をなすのかもしれない。

　なんという運命の連れん鎖さだ。

　羅叉が唇をゆがめてみせると、カレルはけたたましくきゃっきゃと笑った。どうやら羅叉のお粗そ末まつな表情を笑え顔がおと認にん識しきしてくれたらしい。なぜだか胸の奥が熱くなった。

　束の間の平へい穏おんは、だが、いつも破られるべくして破られる定めだ。荒あら々あらしい足音が聞こえてきた。「総長！」とヨハンを呼ぶ声がする。羅叉はカレルを抱いたまま振り向いた。長い髪かみを振り乱して、総長直属の無名隊を率いているハインツ・クルエルフォートが廊ろう下かを駆かけてくる。クルエルフォートは羅叉を見て少し驚いたようだが、足をゆるめることなく部屋までたどりついた。

「敵てき襲しゆうです、総長。悪あく魔まの一隊がすでに第三警けい戒かい線を突とつ破ぱ、こちらへ向かっている模様。数は一千を超こえる規模と思われますが不明、現在、確認を急がせております」

「総長」羅叉はカレルを琺瑠に引き渡わたしてヨハンを見た。「俺がまず出よう。総長は拠きよ点てん防衛の指揮を」

　以前のヨハンならば、あるいは羅叉の意見を退けたかもしれない。少なくとも、丸まる呑のみすることはなかっただろうが、すぐさま軽くうなずいた。「頼たのむ、総長代理。私は防備を固めつつ

情報を収集、整理し、万一の場合にも備える。新生太陽王国軍には防備に参加してもらおう。君は各遊撃隊、突撃隊を連れていってくれ。相手の数が多そうだ。出し惜おしみはすまい。特支隊にも動いてもらう。前線での判断は君に任せる。退ひきどきだけは見誤らぬよう心がけてほしい」

「わかった」羅叉はカレルの顔に目をやった。カレルも羅叉を見て、笑った。よく笑う赤子だと思った。それとも赤子とは笑うものなのか。俺も赤子のころは始終笑っていたのか。赤子が笑うものなのだとしたら、いつでも笑っているべきだとも思った。その笑顔が曇くもるところなど見たくない。羅叉はカレルに笑い返した。自分では笑い返したつもりだが、笑みになっていないだろう。それでもカレルは笑い声を立てた。羅叉は反転して駆けだし、刀の柄つかを握にぎった。〝人ならデスヒユざる者ーマン〟ツギ・イデルの作とされる大刀「夢む天てん全ぜん一いつ」。人を斬きるためだけに鍛きたえられ、生みだされたこの刀を、守るために振るうとは。

　遊撃隊、突撃隊、特支隊への連れん絡らくは無名隊の連中が遅ち滞たいなくやってくれている。すでに篝かがり火びが焚たかれている暮れ方の城門前に至るころには隊士たちが集結しつつあった。

「総長代理！　ユキシ・庚コウ以下、三番副長直属隊そろいました！」「ラッド・ワーノン以下六番突撃隊罷まかり越こし申した！」「七番突撃隊チェス・ピードきております！」「はいはいはい、シャット・グレヒャ以下八番突撃隊もいますよ。いいからさっさと敵を斬りに行きましょう」「デートニッヒ・ボルボンゾル！　九番突撃隊、きてますぜ！」「太臺子タイダイシー以下十番遊撃撃隊只ただ今いま見参……ッ！」「十一番遊撃隊ジョービー・カラマー、参る！」「シャルロット・リンデ以下十二番遊撃隊ここにあり……！」

　隊長、隊長補は全員、もとから秩序モラルの・キ番人ーパーズに所属していた練達の士で占しめられているが、平の隊士の中にはエルデン浮ふ上じよう後に加わった者も少なからずいる。一隊が三十名から四十名、八隊で約三百名。銀の軍団ザ・シルバリイの異名に相応ふさわしい純血のピュアブラッド司祭プリーストのプロヴィデンス・シリーズを身につけている者は半数に満たないだろう。精兵ぞろいとは正直、言いがたい。精兵が中心となってはいるが、いずれの隊も三割、四割の未熟者、半はん端ぱ者を抱かかえている。かつて秩序の番人を立たせ貫つらぬいていた義は形けい骸がい化するどころか、口にする者もめったにいなくなった。彼ら、彼女らの大

半は、生きるため、生き残るため、そして愛する者たち、愛すべき者たちを守り抜ぬくために、ここにいる。それから、一部の狂きよう気きに取り憑つかれた者どもは、ただ戦うために、血湧わき肉躍おどる戦いを求めて。

「申し訳ありません、遅おくれました、総長代理！」

　隊士たちにやや遅れて、特支隊の連中が駆けつけてきた。特支隊は秩序の番人の指揮系統下に置けないか、置かないほうがいい者たちをひとまとめにした別働隊で、総勢二十人程度なので規模は大きくないが、その戦せん闘とう能力は高い。特支隊隊長〝救護剣士レスキユーナイト〟ベアトリーチェと、彼女のそばにぬっと立っている隊長補の個人的な武勇が並外れているせいだ。まあ、その隊長補のおかげで特支隊は特支隊であることを余よ儀ぎなくされているのだが、あの男を戦力として考えることができるのであれば、使える駒こまであることは間違いない。しかし、先日合流したあのやたらとやかましい魚類めいた顔の男が特支隊にちゃっかり交じっているのはなぜだ。「──うォっしゃァッ！　ウォッシャブルッ！　なんちてッ！　やるでやるでやったるでえ！　やるっちゅうたらやるんや！　羅叉……！」

　しかも半魚類の男は、どういうわけか羅叉に駆けよってきた。近い。近すぎる。

　そんなに半魚顔を近づけて、半魚類は何がしたいのか。何のつもりなのか。

　羅叉が少しだけ身体からだをのけぞらせて「……何だ」と短く尋たずねると、半魚類は表情を引き締しめて「すまん」と頭を下げた。「わしらのせいやろ。ジブンらは敵に追われとったわしらを助けてくれたわけやからな。ほんできっと、敵にここの場所ォ嗅かぎつけられてもうたんや。すまん」

「くだらぬことを」羅叉は半魚類を押しのけた。「こんな世だ。いつなんどき何が起ころうと不思議ではない。我らはただ備え、必要とあらばこの身進ませ剣けん振ふるうのみだ」

　半魚類はいったいどうしたことか目を潤うるませている。「……漢おとこやなッ！」

　たぶん人間の言葉ではなく半魚類の言語をしゃべっているのだろ

う、理解不能だが面めん倒どうなので適当にうなずいてみせてから、羅叉は夢天全一を抜いて掲かかげた。「我々のなすべきことは一つである。敵を迎むかえ撃うち、これを殲せん滅めつする。無む駄だな言葉はいらぬ。剣で語れ。たとえ屍しかばねさらすに至ろうともその身は露つゆと消えるにあらず、同志一同の血となり肉となって剣さらに振るわさん。各員奮闘せよ。死闘せよ。俺につづけ！　俺とともに死ね……！」

「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」

「進軍……！」

　羅叉が進めば、隊士たちも進む。特支隊もついてくる。城門を出ると、今にも日が沈しずみそうな空の下、山さん麓ろくの森には重い闇やみが落ちかかっている。各隊に四人か五人の灯あかり持ちがいる。その灯りが闇をかきわけ、押しのける。無名隊の隊士が入れかわり立ちかわり駆けてきて、敵状を報告する。敵勢はもう第二警戒線を破りつつあるという。接敵まで十五分といったところか。騎き馬ばの一団が近づいてきた。城の近くで野営していた龍りゅう州しゅう連合の者たちだ。首領格の荊王ジンワンが馬を寄せてきて「戦いくさになるようだな」と短く言った。「そうだ」と羅叉は応じて問うた。「貴様らはどうする。巻き添ぞえを食いたくなくば、急ぎこの場を去ることだ」「及およばずながら加勢しよう」荊王は間を置かずにそう答えた。「恩もあるが、こんな時代だ。似たような姿形している者がそばで息をしているだけで、無む縁えんを気どってはいられない」「感謝する」と羅叉が言うと、荊王は色眼鏡サングラスをかけているだけでなく、首巻きで顔の下半分を覆おおっているから表情などろくにわからないが、笑ったように見えた。赤子にかぎらず、人はこうも笑うものなのか。考えてみれば、他人の顔色などうかがったことがない。相対する者が憤いきどおっていようと喜んでいようと、己おのれには関かかわりのないことだと思っていた。味方ならば刀を納める、敵なら斬りつける、それだけのことだった。なるほど俺はがさつだ。カレルを抱く資格など俺にはない。羅叉は歩を進めながら死神の面をとりだしてつけた。俺は死神だ。死神の両腕は赤子をあやすためにあるものではない。死神の両手は死を撒まき散らすものでしかない。しかしおぞましきこの手でも赤子が笑っていられる世界を切り開くことはできようし、是ぜが非でもそれをやらねばならない。死神は血を流し尽つくし骨

の一片と成り果てようとも剣を振りつづけ、敵を滅ほろぼさねばならない。

「俺たちには足がある」荊王は馬首を叩たたいてみせた。「機動力をいかして、側面か、できれば後背から奇き襲しゅうをかける機会を狙ねらう」「任せる」と死神が返事をすると、荊王は馬腹を蹴けった。龍州連合の騎馬隊が秩序の番人と特支隊から離れてゆく。無名隊の隊士たちは相変わらず数分おきに情報をあげてくる。接敵まであと少し。前方で木々の合間に揺ゆれる影かげを死神の目がとらえる。死神が歯と歯の隙すき間まから「忌イ忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」と威い嚇かくの声を出すと、隊士たちもそれに倣ならった。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」「忌忌忌」まがまがしい声、声、声が森中に響ひびき渡って、死神が走りだす。「突撃……ッッッッッ！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」すかさず突出する部隊がある。部隊というよりも、シャット・グレヒャだ。八番突撃隊は隊長に引きずられている。三番副長直属隊隊長補のユキシ・庚がグレヒャを指さして「総長代理、またです……！」と叫さけんだ。「放っておけ」と死神は応答する。グレヒャは狂気じみている。命令に一応、従ってみせる程度の理性はどうにか保っているようだが、締めつければいつ決けつ壊かいするとも知れない。いっそ箍たがを外してやったほうが、あの男は威力を発揮するだろう。使えるものは使うまでだ。それにしても、下着を重ね着した上に甲かつ冑ちゅうを身につけ、さらに外がい套とうや毛皮のコートを羽織っている者も多いというのに、グレヒャは秩序の番人の平服しか着ていない。そのせいもあってか、速い。なんて速さだ。八番突撃隊もついてゆけない。振りきられる。置いてゆかれる。「さあ時間だ楽しい時間がやってきた時間だ時間ですよそのときがきましたよ！　今日は何人何匹びき斬れるかなたくさん斬れるといいなカウントは一万四百六十九からですねえこのごろちょっと停てい滞たい気味だからそろそろ一気に稼かせぎたいなとりあえず目指せ二万です二万二万二万！　さあ時間だ時間ですよ斬って斬って斬りまくりますよお……！」グレヒャは単独で敵軍に突つっこんだ。「さあ……！」抜く手も見えない。死神ですら。「一万四百六十九、一万四百七十、一万四百七十一、一万四百七十二、一万四百七十三……！」グレヒャが相手と刀をあわせることはない。ひ

たすら一方的に斬る。まるで敵には何も見えておらず、グレヒャにだけすべて見えているかのようだ。間もなく八番突撃隊も接敵する。その数秒後に八番突撃隊以外の諸隊も敵とぶつかることになるだろう。死神は敵をねめつける。敵軍前衛の槍やりと盾たて、鎧よろい兜かぶとで武装した悪魔どもは人間と大差なく見える。だがその後ろにはもっと大型の悪魔どもが控ひかえているようだ。遠くで揺らめく無数の青い炎ほのおはおそらく目だろう。身の丈たけ二メーテルを超え、全身鉛なまり色いろで、ごつくて金属のように硬かたい頭から二本の角が突きだしているかなり手て強ごわい悪魔どもがいて、やつらは例外なくそういう目をしている。なんでもゼオルクスギャンドとかいう種族らしいが、長たらしいのでゼオルと呼び習わしている。共通語を解する爵しやく位い持ち以外では、もっとも手強いといっても過言ではないかもしれない悪あく魔まだ。しかも、統制のとれた集団として行動するのが苦手な悪魔どもの中では例外的に、ゼオルは兵士として振る舞まい、軍隊を構成することに慣れているように見受けられる。ゼオルの軍勢が後ろに控えているということは、敵軍前衛は捨て駒か。本命はおそらくゼオルどもだ。「一揉もみ潰つぶす……！」死神は叫んで加速する。「忌忌忌」乗れ、我が意志よ、夢天全一に。吹ふき荒あれ、突き抜けろ、刃やいば。「忌忌忌忌忌忌忌忌」死神は躍やく動どうしない。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」ただ斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」無味乾かん燥そうに斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」喜びも憐あわれみもなく斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬る。きる。きル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。もはや死神に付き従う者は誰だれもいない。死神の右みぎ腕うでとなるべき若手一番生きのいい剣けん客きやくユキシ・庚も、剛ごう腕わん剛剣のワーノンも、着実にしてすばしっこいチェス・ピードも、死に花を咲さかせるために生きているかのような直情径行のボルボンゾルも、苛か烈れつ至し極ごくな太臺子も、夜の遊撃手カラマーも、雷霆婦人レデイーサンダーと渾あだ名なされるリンデも、死神には追いつけない。否いな。ただ一人彼だけは死神と肩かたを並べて刀を縦横に振るい悪魔どもを肉につ塊かい、残骸に変えつづけている。シャット・グレヒャ。グレヒャは死神を横目で見て「一万四百九十七」と数をかぞえた。「一万四百九十八、一万四百九十九、ああ調子がいいな総長代理、今日はどうも私、調子がいいみたいですよ一万五百、今ならあなたも殺せそうな気がするな総長代理、あなたにも勝てそうな気がしますよ一万五百一、それも余

よ裕ゆうでね」「ここで止まれ」死神は唐とう突とつに足を止める。前進せずに手近な悪魔を斬きる。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」寄せてくる悪魔を斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬る。きる。きル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。仲間が次し第だいに追いついてきて、死神やグレヒャが敵軍の戦列にあけた穴を埋うめ、押して、押し広げる。
「シャット・グレヒャ！」と死神は怒ど鳴なりつける。「ただ狂気に身を任せるだけでは俺に勝てぬ！　俺に勝ちたくば、狂気に振るわれる剣と化すのではなく狂気を振るう剣となってみせよ……！」
「──偉えらそうなことを！」グレヒャは止まらない。進む。突き進んでゆく。「我が剣を振るっているのはあくまで私だ！　私は正気です、狂気なんて……！」「八番突とつ撃げき隊、並びにチェス・ピード、カラマー！」死神は夢天全一の切っ先でグレヒャを示して命じた。「グレヒャ隊長を援えん護ごせよ！　あの者を死なせてはならぬ……！」「応！」「応！」「応！」「応！」「了りよう解かいです！」「応よ……！」「忌忌」死神はふたたび瞬しゅん時じに殺意のかたまりとなって悪魔どもを切り崩くずし、引き裂さく。グレヒャは危あやうい。諸もろ刃はの剣だ。よく斬れる。斬れすぎるほどに。あの剣は失うに惜おしい。うまく振るわれれば、万の赤子たちの、女たちの、皆みなの笑え顔がおを守ること能あたう良き剣となりうる。だが使いようを誤れば、かえって害にすらなるかもしれない。俺が考えることではないと以前の羅叉ならば思ったことだろう。それは俺ではなくヨハンの仕事だと。しかし今、羅叉は剣を欲ほつしているのだ。剣はあればあるほどいい。斬れ味鋭するどければ鋭いほどいい。俺の腕は所しよ詮せん、二本しかないからだ。脚あしは二本しかない。この身は一つしかない。一人では順次千人殺すことはできたとしても、千人を同時に守ることはできない。俺は剣でありながら、剣を振るわねばならぬ。「忌忌忌」

　死神に率いられた秩序の番人と特支隊がほとんど被ひ害がいを出すことなく敵軍前衛を突き崩してゆく。いよいよだと羅叉は思う。「声出し揃そろえいッ！　応……ッ！」号令をかけると、ただちに隊士たちが「応！」と唱和して、その大音声は森に木霊こだまし天地を揺るがすほどだった。敵軍前衛が完全に崩ほう壊かいする。ゼオルの本隊が押しだしてくる。「ＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ

ＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」敵の雄お叫たけびもすさまじいが、各隊長、隊長補が隊士を叱しつ咤たし激げき励れいして進ませる。「グレヒャ！」と羅叉はあえて焚たきつける。「俺より殺やってみせよ！」「くだらない！」グレヒャは放たれた矢のように跳とんだ。「──勝負にならないんだ、あなたごとき……！」そして誰よりも早くゼオルに躍おどりかかる。ゼオルが振りあげた斧おのの柄つかをぶった斬って、ゼオルの頭頂を蹴りながら首筋を斬り裂き、次のゼオルの首を鮮あざやかに斬り飛ばしたときにはもう、グレヒャは次のゼオルの片腕を叩き斬っていた。一サンチ四方の足場があれば直立できるどころか、そこから自在に跳ちよう躍やくしてしまえる、あの異常なまでのバランス感覚は疑いなく天性のものだ。俺にはないものだと羅叉は思う。そして俺には必要ない。羅叉は死神となってゼオルに詰つめよる。ゼオルに唯ゆい一いつ弱点があるとすれば、その巨きよ軀くのせいで小回りがきかないことだ。だいたいは両手斧や両手剣けんといった大振りな武器を持っているので、一撃一撃はきわめて重いが、隙はある。いや、本来なら、鉛色の皮ひ膚ふは鉄のようで、その上に鎧よろいまで着ているのだから、多少斬りつけられようと殴おう打だされようと、ゼオルにしてみれば痛くも痒かゆくもない。磐ばん石じやくなのだ。ゼオルはだから、死神めがけて振りおろした両手斧を握にぎりしめている両手、その先、両りよう肘ひじのあたりがすっぱりと夢天全一に断ち斬られたという事実を理解していない様子だった。斬れるわけがない、斬れるわけが。ゼオルはそう呟つぶやいただろうか。死神にはわからない。興味もない。斧を握ったままの両手が地に落ちる。死神はゼオルに体当たりを見舞う。ゼオルの巨体が揺らぐ。よろめいたゼオルを斬ざん首しゆして次のゼオルへと向かう。跳ばなくてもいい。跳ばずとも敵は斬れる。死神の剣は華か麗れいではない。疾しつ速そくでなくてもよい。ただ的確でありさえすればいい。グレヒャが天剣であるとすれば、死神は地剣である。夢天全一がゼオルの顔面を縦に断ち割る。ゼオルはそれでも死神めがけて斧を打ちおろそうとする。死神はゼオルの左足をすくって転てん倒とうさせ、さらに次のゼオルへ。グレヒャと死神はゼオルを圧倒しているが、全体的には拮きつ抗こうしているか、やや押されている。死神としてゼオルを斬り伏ふせながら、羅叉は情勢を見てとっている。隊士たちが死んでゆく。次々と。強い。この敵は。いずれにしても一気に決着がつくことはない。互たがいに互いを挽ひき潰し、死し骸がいを踏ふみつけ死骸の上に死骸を積み重ねて、最後にどちらが立っているか。そのような形でしか勝敗は決しないだろう。足りないのだと羅叉は痛感する。足りぬ。俺も、グレヒャも、ここにおいては局面を打開するほどの力は持たない。た

とえば、魔術士。あるいは、剣士であればあの男、たとえば先代のような、完全に人間離ばなれした爆ばく発はつ力を有する者でもいないかぎり、百と九十九がぶつかって一が残るような、たった一しか残らないような無残きわまりない戦いになってしまう。多大な被害、犠ぎ牲せいは避さけたいが、退くことはできないのだ。我々には己おのが身を盾たてとしてでも守らねばならぬものがある。しからばどうする。結局、死神として一体でも多くのゼオルを打ち倒たおすしかないのか。それだけか。それが俺の限界なのか。

　口惜しい。

「Ｗａ□Ｈｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　奇声が轟とどろく。人間離れ。まさしくそれだ。やつは完全に人間離れしている。三、四メーテルほども跳びあがり、空中で超ちょう回転しながらゼオルに突っこんでゆく。そんな芸当、人間には無理だ。ふだんは柄にもなくしおらしくしているが、本ほん性しょうは変わっていないのだろう。やつは二、三体のゼオルを一挙に撥はね飛ばすと、着地するなり独こ楽まみたいにグルグルグルグル回りながら五体か六体のゼオルをぶっ飛ばし、ピタッと静止。やつは「ＳＩＸピィィィィィィィィィイィン！　エェェェェェェン……ッ！」と、今度は両腕をまっすぐ突きあげてふたたび跳んだ。そして猛もう速度で錐きり揉もみ降下する。「――ドリィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイルゥッ……！」

　まったく馬ば鹿かげている。あんなものを見せつけられて、唖あ然ぜんとしないほうがどうかしている。やつはとても人間とは思えない人間ドリルと化してゼオルの胸に大穴をぶちあけると、地面に跳はね返されたように斜ななめ上方向に軌き道どうを変えて別のゼオルの土手っ腹をぶち抜ぬいた。それから空中でピタッと静止。ドリル状態を解除してちょうど近くにいたゼオルの角をひっつかみ、「Ｋｕ□Ｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅ……！」と振りまわす。「Ｈｙｙｙｙｙｙｙｙ□Ｈａａａａａａａａａｈｈｈｈｈ……！」振りまわして、ゼオルでゼオルをぶん殴なぐる。「Ｙａａａａａａ□Ｈｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈ……！」ゼオルがゼオルに激突して吹っ飛ばされたゼオルがゼオルを押し倒す。「Ｏｈｈｈｈｈｈｈ□Ｍｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ□Ｐｒｅｃｉｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｕｓ……！　Ｙｏｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ……！」やつはゼオルを武器にしてぶん回しまくり、大暴れする。今の今まで秩序の

番人と互ご角かくの、いや互角以上の戦いを演じていたゼオルどもが、隊たい伍ごをかき乱され、まだ崩れてはいないものの、明らかに動どう揺ようしている。やつはたった一人でそれを成し遂とげてしまったのだ。とはいえゼオルはそんじょそこらの悪魔とは違ちがう。すぐに態勢を立てなおして、二体、三体、それ以上のゼオルが束になってやつを抑おさえにかかった。四方八方から一いつ斉せいにやつを押し包むその手管はなかなかに見事なもので、さしもの化物も背中に両手剣の一撃を受けて倒れそうになった。

「ＳＩＸ……！」白い電光が走る。救護剣士の足捌さばきは疾風を思わせ、冴さえに冴えて冴え渡わたる剣捌きは迅じん雷らいに似ていた。あっという間だった。ベアトリーチェはやつに殺さつ到とうしようとしていたゼオルを二体、やすやすと斬り倒した。そうしてやつと背中合わせになり、怒鳴りつけた。「一人で飛びだしすぎだ、馬鹿！　思いあがるんじゃない……！」

「何しろ、俺は死なないものでねえ」やつは肩をすくめてみせた。「無茶をするのが習い性になっているというか、そもそも俺の辞書には無茶って言葉が載のってないのさ」

「なァァァァァァァァァァァァァアアァァァァにをッ……！」加えてついでにあの魚類めいた男が斬馬刀を担かついでやってきた。「━かっこつけとるんじゃわしにもやらせろボケェェェ……ッッッ！」男はゼオルをザバンッと叩たたき斬って、ベアトリーチェと化物の横に陣じんどった。離れ気味の目がぎょろぎょろ動いて、あれはあれで人間離れしている。しかしまあ、決してそう恵めぐまれているとは言えないあの程度の体格で、あれだけ大きな長物を使いこなしているあたりはただ者ではない。「いっくでえ、ベアトリーチェ、シィーックスッ！　ジブンが味方っちゅうのんはわしとしてはまだどォーも納なつ得とくでけへんのやけど、ソレはソレ、コレはコレやッ！　いっくでぇいてこますでぇぶちかましたるでぇッ！」

「Ｈａａａａ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」ＳＩＸが敵の真まっ直ただ中なかに突つっこんで引っかきまわし、浮うき足立ったゼオルをベアトリーチェと魚顔の男が着実に斃たおしてゆく。この戦場で死神にも、グレヒャにもできない決定的な仕事を、あの化物だけがやってのけている。死神は、いや羅叉は「突き進め！」と号令をかけながら、腹の底が焼けつくような痛みに耐たえていた。グレヒャなどはゼオルを斬り裂き、斬り回しながら「魔物が……！」と吐はき捨て、はっきりとやつに対す

る嫌けん悪お、憎ぞう悪おをあらわにしている。魔ま物もの。たしかにそうだ。やつは魔物だ。俺はあの魔物を許すことができない。なぜヨハンは平然と、少なくとも平然を装よそおってあの魔物と相対することができるのか。ベアトリーチェは平気なのか。俺にはわからぬ。あの魔物は殺したのだ。初代を卑ひ劣れつな罠わなに嵌はめて殺した。大勢の仲間を殺した。焔ホムラを殺した。釈拿を殺した。釈拿は身ごもっていた。焔と釈拿の子をあの魔物は手にかけた。赤子は笑うこともなく逝いった。あの魔物に殺されなければ、赤子の笑う顔を見ることができたはずだ。あの魔物にも子がいたらしい。何人もの子が。魔物は我が子を影かげ武む者しやに仕立てた。道具のように扱あつかっていた。人間の所業ではない。まさに魔物だ。俺は許すことができない。認められぬ。斬る。斬るべきだ。あのような魔物は退治されるべきなのだ。それでも、ああ、あの魔物がよく斬れる刃やいばであるのなら、ベアトリーチェがうまく魔物の手た綱づなを締しめているのであれば、利用するべきだと理性が断言している。彼かのごとき魔物さえ剣として振るえと。俺にそれができるのか。できるか、できないかではない、やれ。激情など、心など消してしまえ。羅叉は死神となる。今しばらく、この死神の面が必要だ。死神は声をしぼりだす。「忌イ忌忌忌」夢天全一、一刀破軍、全身全ぜん霊れい、必死必定。「忌忌忌忌忌忌忌忌」斬るべし。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬るべし。「忌忌忌忌忌忌」斬る。「忌忌忌忌忌忌忌」斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌」恐おそれも痛みも快楽もなく斬る。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」斬る。きる。きル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。キル。



二巡月二十六番日　獄の獄ジエイルネイル

　エリオット。ベストセラー『地じ獄ごく巡めぐりぶらり一人旅』の著者にして、高名な魔術士。魔術士としての知名度でいえば、閃光の魔女マチルダや超賢者モーグ、踊り羊に次ぐだろう。いや、一いつ般ぱん人にとっては、マチルダの次に有名な魔術士と言っても間違いではないかもしれない。それほど『地獄巡りぶらり一人旅』はよく知られている。たしか、地獄に関する著書が他ほかにもあって、それ以外にも旅行記を何冊か出版しているはずだ。ただ、魔術士としての力量はどうなのか。そのあたりはマリアローズにはわからない。サフィニアも、エリオットのことはもちろん知っているし、すぐれた魔術士らしいと聞き及およんではいるけれども、じつはよくわからないという。もっとも、エリオットの領域ドメインは、魔術の概がい念ねんを覆くつがえす大変な代しろ物ものだ。何しろ、それは単なるエリオットの私的なプライベート空間スペースではない。私的な異界なのだ。エリオットは異界を個人で所有してしまっている。しかも、その異界はあらゆる世界と重なりあうことができ、それでいて独立しているのだ。エリオットは旅先における緊きん急きゆう時の避ひ難なん先として領域ドメインを活用しているらしい。ただ、あまり長い時間滞たい在ざいすると領域ドメインを固定しつづけることができなくなって、遷移しはじめる。その結果、世界との重なり方が変化して、ひどい事故が起こってしまう可能性があるらしい。そんなわけで領域ドメインはあくまで緊急避難所としてしか利用できないようだが、もちろんあるとないとでは大違いだ。それからエリオットは獄の獄をこれまで四度訪れたことがあって、今回が五度目だから土と地ち鑑かんがある。そんなエリオットが同行を申し出てくれた。何かあるんじゃないかと勘かん繰ぐりたくなる気持ちは当然抑えがたいけれども、断る度胸はなかった。断れるわけがなかった。断らなくて正解だった。これまでのところは。先のことはわからない。エリオットも、トマトクンの身体からだが囚とらわれている場所には心当たりがないという。そこまで案内することはできないと、エリオットは明言した。興味はあるとのことだった。だから行ってみたい。未み踏とうの場所に自分の足で立ち、見たことのない景色を自身の目で見る。それがエリオットにとっては最大の欲求であり、生きる意味なのだという。ようはとんでもなく好こう奇き心しんの強い変わり者なのだ。でも、悪い人じゃないと思う。こちらの事情をすべて話したわけではないが、とくに突っこんでくるわけでもなく、何もかも見すかしているというか、察しているようでもある。親切で、気き遣づかいがうまい。とにかく落ちついているので、こっちも落ちつく。口数が多いわけではないが少ないわけでもなく、ふとしゃべりだすとじつに話題が豊富で、聞いているだけで飽あきない。領域ドメインは無制限に使

えるわけではないようだが、天使の大群がくるとエリオットはためらわずに避難させてくれた。エリオットが一行に加わってから、マリアローズたちの旅は格段に楽になった。白い夜と荒こう天てんには気をつけないといけないし、ピットは避けるしかないが、獄の獄に足を踏み入れてそろそろ百四十八時間、このところは危機らしい危機には直面していない。しそうにない。いや、しそうになかった、と言うべきだろう。

「やあ、これは雄ゆう大だいな眺ながめだ」エリオットが足を止めてゴーグルを外し、目を細めた。口ぶりや表情からすると感じ入っているようだ。雄大、か。たしかに雄大といえば雄大かもしれない。だけどやっぱり、この人とはわかりあえないかも。マリアローズは羅針計をとりだした。針はしっかりと進行方向を示している。行くしかないのか。行ってもいいのか。迷うところだ。というか、これはいったい何なのか。マリアローズは慎しん重ちようにそろそろと進んで、断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきからちょっとだけ身を乗りだしてみた。途と端たんに黒い砂がさらさらと崩くずれた。慌あわてて顔を引っこめ、あとずさる。底は見えない。どれだけ深いのか。見当もつかないが、転落したらまあ、十中八九どころか絶対に助からないだろう。断崖は右を向いても左を向いても、果てしなく延々とつづいている。もしかしたら迂う回かいすることも可能なのかもしれないが、トマトクンの身体の問題があって十日間、二百四十時間というタイムリミットを念頭に置かざるえないから、あと九十二時間。九十二時間もある。九十二時間しかない。どちらの考え方を採用したとしても、九十二時間は九十二時間だ。時間はできるだけ無む駄だにしたくない。それに、回り道をする必要はないのだ。道はある。幅はばは一定ではないみたいで、一メーテルから一・五メーテルといったところだろうか。とにかくおおよそ両腕を広げた程度の幅しかない、細い、細すぎるといってもいいくらい細い道が、底知れない広大な窪くぼ地ち、あるいは巨きよ大だいすぎる穴に渡された橋のようにのびている。そして嬉うれしいことに、本当に涙なみだがちょちょぎれるほどありがたいことに、道は一本じゃない。何本もあって、交わったり分かれたりしている。あの道を通れば、きっと遠回りしないで先に進むことはできるだろう。足を踏ふみ外したり道が崩れたりしなければ。

マリアローズは高所恐きよう怖ふ症しようじゃない。むしろその反対で、高いところは好きだ。だから、足がふらついて落っこちてしまったらどうしよう、みたいなことは考えないが、あの華きや奢しやな道の耐たい久きゆう性には大いに疑問がある。強い風が吹ふ

いたら崩ほう落らくしてしまいそうだ。

「……もし、落ちそうになったら」とサフィニアが遠えん慮りよ気味に言ってくれた。「わたしが、なんとかするので……」

　マリアローズは返事をしないでユリカを見た。ユリカはうなずいてくれた。もう決めているんでしょう、だったらそのとおりにしなさい、わたしはそれでいいわ、とその眼まな差ざしが語っている。ピンパーネルがそっとマリアローズの右みぎ肩かたに手を置いた。左肩には、きゅーの肉球が。僕は相変わらず意気地なしだ。だけどみんながいるから、こんな僕でも勇気を出せる。マリアローズは仲間たちを見まわした。「行こう。一列縦隊で。──充じゆう分ぶん気をつけて」

　ピンパーネル、ハニーメリー、エリオット、マリアローズ、飛フエイ燕ヤン、ユリカ、サフィニア、トマトクンを背負ったトワニング、きゅー、ロム・フォウ、アルファの順で細い道を進んだ。実際に歩いてみると、思った以上に足あし許もとがおぼつかない。道の真ん中はまだそれなりにしっかりしているが、縁へりのほうを踏んで体重をかけたらたぶんあっさり崩れるだろう。道幅は一メーテル以上ある。でも、歩ける場所はそのうちの三分の二ほどだ。それも安全かどうかはわからない。鳩尾みぞおちのあたりがきりきりする。喉のどが詰つまっているような感じがして、唾つばをのみこもうとする。だめだ。口の中が乾かわききっている。さすがに右も左も見る気にはなれない。高いところは好きなのに。振ふり返るのもおそろしい。前だけを見ている。身体のあちこちに余分な力が入っていて、この調子だとすぐ全身がちがちになってしまいそうだ。肩を軽く回す。ゆっくりと、深く息をする。急に風向きが変わって、強まった。「お、おッ、お……ッ」と飛燕が変な声を出す。こわいとかなんとか言ってられない、思いきって振り向くと、よろめく飛燕をユリカが支えていた。「飛燕……！」「うっそー。冗談だって。つかオレがこンくれェーでヨロヨロするわけなくね？」「もう！」「あッ。怒おこった？　ゴメンゴメン。なんッかよォ、空気がアレだったモンでつい、さ」──アレって何だよと思わなくもなかったが、アレといえばアレかもしれない。つまり、重苦しくて、暗い。つい小声で「……しょうがないだろ」と呟つぶやいてしまった。誰だれにも聞こえなかったみたいだ。よかった。と、突とつ然ぜん、クルルが外がい套とうの中から出てきて、マリアローズの肩の上であたりを見まわした。落ちちゃうんじゃないかと気が気でないから、やめてほしい。そう簡単に落っこちたりしないとわかって

いても、ひやひやする。エリオットが顔を振り返らせてこっちを見ていた。マリアローズじゃない。クルルを見ているのか。「……どうかした？」と尋たずねると、エリオットは微笑ほほえんだ。「めずらしい生き物だ。私はその生き物を一度も見たことがない」「え……」マリアローズは肩の上のクルルに目をやった。クルルは逃にげこむように外套の中に隠かくれてしまった。旅の達人エリオットがめずらしがるということは、クルルはよほどの珍ちん種しゅなのか。何か引っかかるが、それがどうしたという気もしないではない。だって、風が強いし。強まる一方だし。「うっ……」マリアローズは体勢を低くした。「と、飛ばされないように……！」声をかけると、みんなばらばらと返事をした。本当にしゃれにならない風だ。どの返事が誰の声かもよくわからない。「ひ、髭ひげ、大丈夫!?」「……ああ！　これしきのことで拙せつ僧そうの筋肉は……！」「筋肉はどうでもいいんだけどさ……」「むろん、トマトも無事だ……！」「それならいいんだけど……！」しゃべると、口に砂が入ってザリザリする。砂混じりの風のせいで視界はわずか数メーテルだ。ほとんど先が見えない。先があるのかどうかさえ。そうだ。唐とう突とつに思いあたる。馬ば鹿かだ。僕は。なんてことだ。先があるのかどうか。たしかに何本もの細い道が交わったり分かれたりしながら彼方かなたまでのびているように見えた。でも、本当にそうなのか。道は途切れているかもしれない。行き止まりかもしれない。彼方までなんてたどりつけないかもしれない。引き返そう。言いたくなる。言えない。今はだめだ。風がひどい。ひどすぎる。それどころじゃない。それが理由？　わからない。違ちがうかもしれない。過あやまちを認めるのが恐ろしい、ただそれだけなのかもしれない。だけど間違いだって決まったわけじゃないし。行き止まりにぶち当たったわけじゃない。このまま進めば目的地に到とう着ちゃくできるかもしれない。かもしれない。かもしれない。かもしれない。ぜんぶ不確実だ。マリアローズは羅針計をとりだした。蓋ふたを開け、顔に近づけて、針を確かめる。方向はだいたいあっている。道の上を歩いてゆくしかないので、完全に合がっ致ちしてはいないが、おおよそこの方向だ。大丈夫だ。大丈夫。大丈夫？　羅針計をしまう。何をやってるんだろう。こんなの、ただ自分を納なっ得とくさせたいだけだ。自分を落ちつかせようとしているだけで、事実は変わらない。この道を進んでいって目的地にたどりつける保証はない。いや正確に言えば、どこをどう進んだとしても、間に合うかどうかわからない。すでに何か致命的なミスを犯おかしていて、どうやっても間に合わないことが決定しているかもしれない。そもそも、ソオルを信用してもいいのか。この羅針計があてになるのか。頭を振る。今さらだ。今さらそんなことを考え

てもしょうがないじゃないか。前提を疑えば、すべて壊こわれる。意味を失う。そこはいい。いいったらいいんだ。僕らは羅針計が示す方向に進む。それでいいんだ。でも、ソオルは五日ほどでたどりつけると言った。五日といったら百二十時間。もう百五十時間くらいはたっている。三十時間すぎている。いろんなことがあったから。だからだ。そのぶん遅おくれている。そのせいだ。本当に？ わからない。わかるはずがない。ピンパーネルが何か叫さけんだ。たぶんピンパーネルの声だと思う。マリアローズは「え⁉　何⁉」と訊きき返して立ち止まった。前を行くエリオットが足を止めたからだ。マリアローズが腕うでを振って「止まって、止まって！」と怒ど鳴なっていると、ピンパーネルがまた何か叫んだ。「……チガ……て……マス……！」「どうやら、この先で道が分かれているらしい」とエリオットが教えてくれた。「……道が……」マリアローズは親指を嚙かんだ。砂の味しかない。どうしよう。道。分かれて。どっちに。どっち？　どんなふうに分かれているのか。この砂すな嵐あらしのなか、口で説明してもらうなんて無理だ。見に行くしかない。僕が見に行くしか。そして僕が判断する。僕が。くそ。僕はいやがっている。決めたくない。でも決めないと。トマト。トマトを助けないと。「ごめん、ちょっとどいて！」マリアローズは四つん這ばいに近い姿勢でエリオットの脇わきを通り抜ぬけ、ハニーメリーを、そしてピンパーネルを追い越こした。道。分かれている。左右に。また羅針計をとりだす。針の方向に近いのは、左だ。右はだいぶそれる。どっちだ。どっち。普ふ通つうに考えれば左だ。だからあえて右、とか。何だよ、あえてって。普通でいい。迷ったときは常識的な判断をする。左だ。「こっち……！」マリアローズは声を張りあげて左の道を指し示し、そのまま先頭に立って進んだ。もとの位置につくなんて考えもしなかった。だって、またあるかもしれない。また分かれ道が。やめてよ。やめて。頼たのむから。見えない。風で、砂のせいで、何も。顔が痛い。息ができない。さっきまでは前にエリオットが、その前にハニーメリーとピンパーネルがいたから、まだましだったのだ。前に誰もいないとこうなのか。足許はかろうじて見える。一メーテル前方もよくわからない。腰こしをかがめ、下を向いて歩くしかない。不意に、後ろに誰もいないんじゃないかという考えに取り憑つかれた。みんなちゃんとついてきているのかな。だって、気配を感じない。誰もいないような気がする。僕一人でこの細い道を砂嵐にさらされて歩いている。もちろん、そんなわけがない。後ろを向けば、みんなそこにいるだろう。いるはずだ。確かめればいい。でもこわい。もしいなかったら？　いるに決まっているのに。なぜこんなことで不安になっているのか。馬鹿げている。確かめる必要なんかない。

みんな、絶対にいるんだから。寒い。寒くなってきた。あたりが白んできている。白い闇やみだ。黒い太陽が沈しずもうとしているのか。風が強まる前はどうだったっけ。沈みそうだった？　そんなことはなかったと思うけれど、はっきりとは覚えていない。なんでその程度のことを覚えていないのか。白い夜が訪れたら環かん境きようはさらに過か酷こくになる。気をつけていないといけなかった。僕は何をやっていたんだ。疲つかれていた？　エリオットが加わって楽になったものだから、気が抜けていた？　どっちにしても最悪だ。「……っ……！」と、風に煽あおられて横よこ倒だおしになりかけ、踏んばってなんとかこらえた。やばかった。ああでもないこうでもないとごちゃごちゃ考えていたせいだ。進むことに集中しないとまずい。でもそれって半分現実逃とう避ひなんじゃないの？　もう一人の自分が言っている。重大な問題から目をそらそうとしてない？　逃げたいだけなんじゃないの？　うるさい、うるさい、うるさい。自分の足許を、爪つま先さきの五十サンチくらい先だけを見つめて、マリアローズは黙もく々もくと歩く。身体中、寒いというより痛い。引きちぎられそうだ。痛い。痛い。痛い。うう。ううう。うううう。ううううう。唸うなりながら歩く。歯を食いしばって、ひたすら歩く。限界だ。もう限界。無理。何度もそう思った。おそらく十回か、二十回くらい。時計を見た。嘘うそでしょ。分かれ道から一時間くらいしかたっていない。何時間も、何日も歩いたような気がするのに、たった一時間。後ろから背負い袋ぶくろを押された。振り向く。ピンパーネルだった。いた。ちゃんといた。あたりまえじゃないか。「休きゆう憩けい！」とマリアローズは何回も叫んだ。それから「トマトに医術式を……！」と付け足した。言い訳でもするみたいに。言い訳なんかじゃない。そうだ。言い訳なんかじゃ。いけない。思考力が低下している。マリアローズは水すい筒とうをとりだして、水を飲む。なまぬるく感じた。戻もどれ、と念じる。戻れ。戻れ。戻れ、僕の思考力、判断力。戻れ？　戻ったってたかが知れているのに。自じ虐ぎやくはやめろ。何の意味もない。何を考えていたっけ。何か考えないといけないことがあるような気がする。何か大事なことを忘れている。だしぬけに口の中に何か突つっこまれた。見ると、ハニーメリーが後ろから身体からだをのびあがらせて、マリアローズの口に指で何かを押しこんでいた。何か。これは何だろう。甘い。「黒砂糖！」とハニーメリーが言った。「甘いもの食べて、元気出そ！」「……うん」とうなずいて、そうだ、と思う。元気を出さないと。だけどこれ、甘いなあ。甘いよ。頭のてっぺんから指の先まで染しみ渡わたるほど、甘い。「ありがと、ハニー」「どういたしまして！」「……よし」もう一度うなずいて、ふたたび時計を見る。休憩に入ってから十五分もたって

いた。歩いているときは遅ち々ちとして進まない時間が、休んでいると飛ぶように過ぎる。施せ式しきはまだ終わっていないようだ。毎回だいたい二十分はかかっている。あと五分。舌の上で黒砂糖を少しずつ少しずつとかしながら待った。甘さを味わっているとあっという間だった。トワニングがトマトクンを背負ったようだ。マリアローズは「行こう！」と力強く宣言して歩きだした。風がいくらか弱まったように感じられる。視界もよくなった。二、三メーテル先まではどうにか見える。ただ、白い闇が降りてきている。完全に日が暮れたら、純白に閉ざされて何も見えなくなる。砂さ漠ばくでは灯あかりをつけるとそうとう目立つので避さけているが、ここなら大丈夫かもしれない。いずれにしても、白く真っ暗になったら、この足場だ。さすがに進めない。そのときは近づいている。次し第だい次第にあたりが白んできて、見えづらくなる。どうするか決める前に、また道が二手に分かれた。羅針計を見る。どちらの道も針が示す方向と一致はしない。よりにもよって、針は二つの道のちょうど真ん中あたりを指している。最初の分ぶん岐き点では左を選んだ。だから今度は右。いや、左のほうがいいか。右。左。どっちだ。こういうときは迷えば迷うほど決めきれなくなる。いっそ多数決をとるとか。そんなの単なる責任逃のがれだ。右。右にしよう。判断を下すための材料が何もないのだから、自分の直感を信じて、右だ。いったん決めてしまうと躊ちゆう躇ちよはしなかった。進むごとに風はどんどん弱まってゆく。空はかぎりなく薄うすい灰色だが、向かって左のほうが黒っぽく染まっている。黒い太陽は沈みそうでなかなか完全に沈みきらない。そうはいっても白い闇は濃のう度どを増す一方だ。遠くまでは見えないので、道をまっすぐ進むことに集中できる。足どりは軽い。このまま行けるかもしれない。窪くぼ地ちだか穴だか知らないが、突破してしまえるかもしれない。根こん拠きよはない。ただそう思う。いけそうな気がしたのだ。浮うかれると、えてしてこういう結果が待っている。

　最初はまさかと思った。すぐさま気のせいだ、見間違いだと思いなおした。かまわず進んで認めざるをえなくなった。「……行き止まり……」

　へたりこんでしまいそうになったが、右手で口をふさぎ、左手で膝ひざを押さえて持ちこたえた。何か口走ってしまいそうで口を押さえたはずだ。だけど何も出てこない。浮かんでこない。ようやく、いやだな、と思った。やだ、これ。もうやだ。吐はき気がする。心が折れちゃいそうだ。嘘、嘘。そんなことない。マリアローズは激しく頭を振ふる。折れない。これくらいで折れてたまるか。

たとえ心がへし折られたとしても、放ほうり投げるわけにはいかない。でも、どうしよう。まず謝罪したほうがいいか。僕が間違えました。ごめんなさい。マリアローズは振り返る。白く暗くて、みんなの顔があまり見えない。それが救いといえば救いだ。謝る。謝ろう。唇くちびるが、顎あごが震ふるえる。息が浅く、狭せまくなる。「──引き返そう。前の分かれ道まで」

　謝ることができなかった。仲間たちが口々に慰なぐさめてくれたような気がするけれど、マリアローズには聞こえなかった。聞こえてはいたが、言葉の意味を理解することができなかった。マリアローズたちは方向転てん換かんをして、今きた道を戻った。恐おそれていたことが起こったのだ。とりあえず今回はいい。よくはないが、もうどうしようもない。でも、前の分かれ道まで引き返して、逆方向、左の道を進んで、また行き止まりだったら？　その前の分かれ道まで戻るしかない。そこでまた逆の道を進んでも行き止まりだったら？　出発点まで戻るしかない。やっぱり時間がかかったとしても窪地だか穴だかを迂う回かいするべきだったんじゃないか。時計を見る。まだ細い道を歩きはじめてから五時間しかたっていない。五時間がふいになったとしても、別の方法を選せん択たくしたほうがいいのかもしれない。だけどそうしたほうが確実だって誰だれが言える？　わからないじゃないか。わからないんだよ。わかるわけ──なく……もない。

「……あ……」マリアローズは立ち止まって頭を抱かかえた。「どうしまシタ!?」ピンパーネルに声をかけられても、即そく座ざには返事ができなかった。僕は間抜けだ。大間抜けだ。自分は間違ってしまったかもしれない、自分の浅はかさや過失が発覚するかもしれない。そのことを恐れるあまり、思いつかなかったのか。なんにしても馬鹿すぎる。「……ごめん。サフィニア、飛んで行って道がどうなってるか見てきて。僕らが前の分かれ道まで戻るのに一時間以上──一時間半はかかるから、それまでの間に可能な範はん囲いで。とりあえず、前の分かれ道で左に行った先を見てきてくれると助かるかな」「──あ……」サフィニアは崩くずれ落ちるような勢いでうなだれた。「……ご、ご、ご、ごめんなさい、わたし……まったく思い至らなくて……」「や、僕もだから……てゆうか、まず僕がそこに考え及およばないと話にならないし……」「い、行ってきます……！」「合流地点は前の分かれ道で！　僕らはそこで待ってるから……！」「はい……！」

　サフィニアが飛びたって、マリアローズたちはふたたび歩きはじ

めた。「大勢の旅もなかなか味わい深いものだ」とエリオットがのんきなことを言ったので、ぶん殴なぐりたくなった。相手は恩人だし、殴ったってしょうがないから我が慢まんした。黒い太陽は足あし踏ぶみでもしているのか。まだ落ちきらないようだ。急いだってどうしようもない。でも、自然と足が速まる。結局、一時間十五分くらいで分かれ道に到とう着ちやくした。サフィニアはいない。
待っている間にトマトクンに医術式を施ほどこしてもらうことにして、水を飲み、食べ物を口に入れた。飛燕がため息をついて「こォーゆゥーんはジミにけっこォーきちィーなァ……」とぼやいた。ロム・フォウが「トマトはどう？」とトワニングに訊いて、トワニングは「うむ。別状はない」と短く答えた。ハニーメリーはピンパーネルと肩かたを寄せあって座り、目をつぶっている。サフィニアが向かったはずのほうをじっと見ているきゅーの横で、アルファが口をすぼめて「ほぉぅぅ……」と細く吠ほえた。何か感じていて、言いたいことでもあるのだろうか。ロム・フォウは気にしていないみたいだから、そういうわけでもないのか。これでいいのかな。黙だまっていると、そんなことばかり考えてしまう。まだ何か見落としてないかな。みんなに訊いてみたい。ねえ、僕、間ま違ちがってない？　おかしいことしてない？　本当にこれでいいのかな。他ほかにもっといい方法はない？　決めるのは僕でいい？　誰か別の人がやったほうがいいんじゃない？　口にしてしまったら最後、何もできなくなってしまいそうだ。誰かに寄りかかって体重をかけてしまったら、二度と自力では立てなくなる。そんな気がする。でもみんなさ、もっとさ、なんていうか、配はい慮りよしてくれてもいいと思うんだよね、気を遣つかってくれたってよくない？　もっと頻ひん繁ぱんに声をかけてくれてもさ、みんなのほうから手をさしのべてくれたっていいでしょ？　助けてよ、つらいよ、肩代わりしてよ、普通するでしょ、なんでしてくれないの？　わからないんだ、僕の気持ちが、僕みたいなやつが、何の取り柄えもないやつが、こんな重い責任を背負ってさ、重圧にも程ほどがあるんだよ、それがわからないんだ、みんなには、だって、みんなは僕とは違って、それぞれひとかどの人物だしね、わからないんだ、わかるわけない──マリアローズは自分の頰ほおをひっぱたこうとしてやめた。こういう負の感情も一いつ切さい合切引き受けないといけない。それが責任を果たすということだ。たとえばジョーカー。あからさまに尋じん常じようではない男だし、勝利をつかむためには平然と味方に死ねと命じることさえしてみせる。ただ、死んでいった者たちに対して、何の思いもないわけではないだろう。痛みも、悲しみも、重みも、感じているはずだ。それを見せないだけだ。迷いも苦しみものみこんで、表面には出さず、果断に行動して

みせる。僕もそうしたい。嘘でもまやかしでもいいから、そうしなきゃいけない。だって、トマトは他の誰でもない、僕に言ったんだ、頼たのむ、って。やらないと。やってやる。へこたれない、なんて言えない、でも、へこたれても起きあがってやる。何も見えなくなって、聞こえなくなって、息が止まるまでは、必ず、何度でも。

「サしやフィニア、おしょいわね……」ユリカがぽつりと言った。はっとして、マリアローズは時計を見た。分かれ道に到着してから三十分。マリアローズたちは予定より十五分早く分かれ道についた。ということは、サフィニアとは十五分前に合流できていないとおかしい。でも十五分だ。まだ十五分。マリアローズは「あと十五分待とう」と言った。「十五分したら、進む。サフィニアは道を伝って戻ってくるはずだから──」だから？　途と中ちゆうで合流できるはずだ？　だったら今、進んでも同じことじゃないか。自分が下した判断にどんどん疑問がわいてくる。きりがない。だめだ。迷っちゃいけない。心を鋼はがねにして十五分待った。サフィニアは帰ってこない。何かあったんじゃ。サフィニアにかぎって、そんな。気が急せく。一人で行かせたのがまずかった。獄の獄なんだ。どんなことが起こるかわからない。一人で行かせるべきじゃなかった。マリアローズは無理やり落ちつかせた声で「出発しよう」と言って歩きだした。息が弾はずんでいるのがわかる。抑おさえようとする。二度とサフィニアと会えなかったら。もしあれが最後だったとしたら。ない。そんなことは。ありえない。あっていいはずがない。いよいよ黒い太陽が完全に沈みそうだ。白い。白。白。白。真っ白だ。これではとても進めない。かといってサフィニアが戻らないのだから、止まるわけにはいかない。筒つつ状じようの携けい帯たい照明器具を点灯することにした。黒くない、光。あたりまえなのに、妙みような感じだ。この世界にとっては異質な光。きっとかなり遠くまで届くだろう。引きよせられて、近づいてくるものもいるかもしれない。この判断は正しいのか。いいんだ。こうするしかない。歩いていると突とつ然ぜん、道から飛びだして深しん淵えんに身を投げたくなった。それか、消えてしまいたい。冗談じゃない。追いつめられているのか。それが何だ。歩きながら羅針計を確かめた。針が示す方向からは四十度くらいずれている。舌打ちをしたくなった。いい材料がない。苛いら々いらするな。「……くう？」ときゅーが声をあげた。マリアローズは手をあげて足を止める。「……きゅー？　何？」「きゅう……」「何かくるようだ」とエリオットが言った。「空だな。飛んでくる」「サフィニア？」マリアローズはとっさにそう思って携帯照明器具を上空に向けた。

「サフィニア!?　サフィニア！　ここだよ、サフィニア……！」叫さけびつつ携帯照明器具を振ってみせたが、返事がない。おかしい。違う。サフィニアじゃない。「──敵だ。きっと。警けい戒かい……！」マリアローズはピンパーネル、ハニーメリーの後ろに下がった。その間も携帯照明器具の灯りで空を照らして敵てき影えいを探したが、見つからない。「魔ま術じゆつは得意ではないが……」エリオットがふざけたことをぬかして両手を掲かかげた。「pixa-faulux-vana.」そして呪じゆ文もんを唱えると、一抱えほどもありそうな光球がエリオットの頭上に出現し、燃焼するように発光しながらするすると上じよう昇しようしてゆく。白い闇やみを白い光が引き裂さいて剝はぎとる不思議な光景に感心している場合じゃない。いた。マリアローズたちの前方やや左、空の上だ。音もなく飛んでくる。天使。天使だ。羽が十二枚──いや、もっと多い。十四枚か。あいつ、女だ。身体からだつきが。女性みたいに胸がある。

「さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ」

　マリアローズは歯ぎしりをしながら言った。いやだ。やめて。やめ。な。なんで。ああ。くそ。なんて。ああ。サフィニア。サフィニアが。どうして。やつの、女天使が、女天使は持っている、剣けんを盾たてを、その剣の先に、サフィニアが。

　サフィニアがぶらさがっている。

　その腹部を、背中まで、剣が貫つらぬいている。

　サフィニアはぐったりしていて、動かない。

　ユリカが悲鳴をあげる。ハニーメリーも。きゅーが吼ほえる。アルファも吠える。トワニングがサフィニアの名を呼ぶ。サフィニアは答えない、ぴくりともしない。女天使がサフィニアを串くし刺ざしにしている剣を振りあげる。そして振りおろす。サフィニアの身体が、抜ぬける。ずるりと剣から抜けて、こっちに飛んでくる。「任せろォ……ッ！」と飛燕が跳とびあがってサフィニアを受け止め、二人をさらにピンパーネルが抱だきとめた。ユリカが駆かけよる。「──息はあるわ！」その言葉を聞いた瞬しゆん間かん、身体中の穴という穴が広がって何かがドババッとあふれた。生きている。死んでいない。「いかん……！」とトワニングが叫んだ。マリアローズは見上げる。ロム・フォウが矢を放ったが、女天使は例の

盾、光輝かがやく透とう明めいな盾でこれを弾はじいて、剣を振りかぶった。十四枚の羽が力強く羽ばたく。女天使は空中にいる。十メーテルか十五メーテルか。それくらい上空だ。距きょ離りがある。剣なんか当たらない。それなのに、やばい、と思った。あれはやばい。よけないと。よける？　どうやって？　マリアローズたちは細い道の上にいるのだ。逃にげ場がない。「──っ……！」マリアローズは何か言おうとした。声にならなかった。女天使が剣を振りおろす。押しよせてきた。空気のかたまりのようなものが。全身に衝しよう撃げき。マリアローズは尻しり餅もちをついた。崩れる。音を立てて道が。砂が。崩ほう壊かいする。その下の岩がん盤ばんが。落ちる。砂と一いつ緒しよに。落ちてしまう。落ちてゆく。

二巡月二十七番日　城塞都市シャッコー

　防毒マスクよし。ゴーグルよし。防護服よし。手て袋ぶくろよし。ブーツよし。義手じゃないほうの左手で密閉してあった格納箱の扉とびらを開け、慎しん重ちように、慎重に黒い瓶びんをつかむ。なかなか大おお振ぶりで密みつ栓せんしてある瓶の中身は、リチウムグリスやマグネシウムの粉末やアルミの粉末など、それからゲドゥルムと呼ばれている紫むらさき色いろがかった黒っぽい粘ねん液えきだ。チーロは正直よくわかっていないが、シャッコーの外れにある坑こう道どうの奥に湧ゆう出しゆつしているこのゲドゥルムというやつが、とんでもなくやばい物質だか物体だからしくて、有害なガスか何かをバッカバッカ出すものだから、本当にマジで危険でク●ニは茅かや葺ぶきに近寄らずらしい。違うか。とにかくそれでこの焼しよう夷い弾だんもそうとう取り扱あつかい要注意で、これを作らせたジョーカーっちも最後の最後まで使うかどうか迷っていたらしい。そもそも試作の段階で何回も事故が起こって、じつは死者まで出ちゃったもんで、やっぱ作るのやめといたほうがいいか的なことになりかけたりもしたとか。こんなご時世じゃなければ、もともと発見されたもののあまりにやばいので放置されていたゲドゥルムをなんとしても活用しようなんて、いくらジョーカーっちでも考えなかったかもしれない。だがしかし、状じよう況きようが状況だ。使えるものはみんな使う精神でゴーしないともったいねーぞオバケが出てきて殺されかねない。オバケとか出てこなくたって死ぬ。ほんとに死ぬ。人が死ぬ。つーか死んでる。市民が兵士がドッタンバッタンドンドンバタバタ死んじまってる。邪じや竜

りゆうどもや粘着質の赤のレッド・伯爵テリオンだけじゃない、冬将軍様を物ともせずにいろんな悪魔どもがひっきりなしに攻せめてきて、難なん攻こう不ふ落らくのシャッコーもひょっとしてちょっち危ないんじゃねえのみたいな情勢になりかけている。それでジョーカーっちがついに決断。使うことになった焼夷弾。オレが勇ましく志願。何しろ邪竜につかまって天高く舞まいあがっても無事地上に舞い戻もどってきた無敵のオレだし。そんなわけでチーロは焼夷弾を持って朝焼けの断だん崖がい城じよう壁へきへ。暴発したらまずいってんで、焼夷弾の格納箱は断崖城壁から少し離はなれた場所の倉庫として使われている頑がん丈じような建物の中に運びこまれていたから、いくらか距離がある。空友のカルロやイビツやボボ・ファッチョらパンカロ・ファミリーの連中も、チーロと同じ恰かつ好こうをして焼夷弾を握にぎりしめたり抱かかえたりしながら断崖城壁へ。チーロが「なんっかおとなしいな、てめえら！」とからかってみても、シーン。誰だれも答えない。「何だ何だ、だっらしねーな、びびってんじゃねーぞ、こんくらい──でぉっ!?」と、わざと焼夷弾を取り落としてキャッチしてみせたら、いつもすかしてやがるカルロの馬ば鹿か野や郎ろうが「ぼ、坊ぼつちゃん！」と血相を変えて叫んだ。「よしてくださいよ！　そういう悪戯いたずらはしゃれにならねえンですから！」「ふひひひひ」笑いながらチーロは断崖城壁へとひた走る。邪竜どもが上空をビュンビュン飛び交かい、あちこちで邪竜に運ばれてきた悪魔どもと兵士たちの間で血ち煙けむり舞う戦せん闘とうが繰くりひろげられ、遠くのほうではウィリアム・タイガーボーンに追いかけ回されながら赤の伯爵がドッカンドカーン炎ほのおをぶちあげていても、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーはクローディアを伴ともなって小こ揺ゆるぎもせず断崖城壁上に立っている。二人に近づこうとする敵はいない。敵も二人のことは恐おそれている。ジョーカーっちがこっちを見た。「きたか」「ほいさ！　きたぜきたぜきちまいましたぜやるぜやるぜやるぜぃ……っ！」チーロは断崖城壁の縁へりまで走って、おっとととと、落ちる落ちる落ちる、いや落ちねーっての。カルロがくる。イビツがくる。ボボ・ファッチョがくる。焼夷弾を持ったパンカロ・ファミリーの面々が断崖城壁の縁に整列する。見おろすと、峡きよう谷こく底は悪魔だらけだ。数千、それ以上の悪魔どもが第二門に殺さつ到とうしている。第一門は屍かばね玉だまに破られて、修理が終わる前にこいつらがわらわらやってきたわけだが、第二門も破城槌つちやら何やらの攻こう城じよう兵器でそろそろぶち破られてしまいそうな気配が濃のう厚こうだ。第二門を抜かれてしまえば、その次の正門も早晩突破される。そうなったら間もなく悪魔どもが地上からもシャッコーに侵しん入にゆうしてくるだろ

う。ジョーカーっちはたぶん、その前にシャッコーを捨てて撤てつ退たいする道を選ぶ。負けてもかっこよく華はな々ばなしく戦って死ねばまあオッケー、そういう考え方に否ノーを突つきつけるどころか愚ぐ劣れつ低能愚ぐ昧まい阿あ呆ほうめと罵ののしり倒たおすのがジョーカーっちだ。ただし、逃げる前に最善を尽つくす。できることはぜんぶやってから逃げる。そうしてこそ次の新たな道が開けるのだ。たぶん。なんとなくチーロはそんなふうに思う。

「よし、やれ」とジョーカーっちが命じた。危ないかもしんないからちょっと下がったほうがいいんじゃないっすかね。チーロはそう言いかけてやめた。下がるつもりなら下がっているだろう。ジョーカーっちは下がる気がないのだ。オレらだけを危ない目に遭あわせる気はないってことね。もしくは、自分は何があっても大丈夫だと思っているのかもしれない。まいるね。そういうとこがまた。「──いよっしゃあ！」チーロは気合いを入れて大声を張りあげた。
「いっくぞパンカロォッ！　びびんなよ、魂たましい見せろぉいっ！　カウントダーウン！　いーち！　にー！　のぉーおっ、さんっ！　投げろ……ッ！」

　チーロは掛かけ声とともに焼夷弾を投とう擲てき、カルロ以下ファミリーの男たちも次々と峡谷底めがけて焼夷弾を投げつける。途中で焼夷弾同士がぶつかって爆ばく散さん、思わずドン引きするくらいものすごい炎と紫色がかった煙を撒まき散らしたが、だいたいの焼夷弾は峡谷底にひしめく悪魔どもに降りそそいだ。そしてドドンッと爆発、爆発に次ぐ爆発、ドドドドドドンッ、音はさほどでもないが、瞬時にボァボバァーンと広がる炎のすさまじいことすさまじいこと。チーロが「うひーっ！」と歓かん声せいをあげると、ファミリーの男たちも快かい哉さいを叫んだ。やべえ。こいつはやっべえ。幅はば三十メーテルくらいの峡谷底が爆ばく炎えんに彩いろどられて、真っ赤っかに染まっている。矢を降らせても岩を落としても熱湯や煮にえたぎった油を振りかけてやっても怯ひるまなかった悪魔どもだが、さすがにこれはたまらないだろう。何しろ、じっとしていたら焼け死ぬしかない。逃げようにも、めちゃくちゃこみあっていて思うように逃げられない。押しあいへしあいしているうちに炎が迫せまる。有毒ガスをたっぷりふくんだ煙も襲おそいかかってくる。地面に転がったり岩壁に身体をこすりつけたりして火を消そうとしている悪魔もいる。だがあの火はその程度では消えそうにない。なんというか、火に粘り気がある。どろどろ、もったりしているのだ。ちょっとだけ肝きもが冷えた。

　もしかしちゃったらもしかして、あの焼夷弾、落っことしたりしちまってたら、マジクソ大変なことになってたんじゃねーの。やばかったんじゃねーの。危険すぎなんじゃねーの。いや危ないものだからジョーカーっちも迷っていたわけで、取とり扱あつかい注意の危険物だということはチーロも理解していた。わかっているつもりだったのだが、実際こうやって見ると、そのやばさがひしひしと感じられてブルルッときてうっわなんかやったらとションベンしてえっつーか。



「あれを手にしたら人はどうなる」ジョーカーっちが不意につぶやいた。「誰にでも扱えるのだ。心弱き愚者には過ぎた力ではないか」

「たしかに……」チーロはごくっと唾つばをのみこんだ。コオロギグシャグシャのスギタチカラさんだよな。よっくわかんねーけど、

ゲロやべえってことだけはわかる。「──でもでも、今は使うっきゃないんじゃないっすかね。使えるものはみんな使えわねえとさ！」

「むろんだ」ジョーカーっちはうなずいた。「焼夷弾はまだあるはずだな。もう一度だ」

「了りよう解かいっす！」チーロは回れ右をして駆けだした。「おい野郎ども！　行くぞ、もっかいだもっかい！　ぶちかまして悪魔どもを丸焼きにしてやんぞローストだロースト！　ついてこいや……！」ファミリーの男たちが「へい」だの「はい」だの「ふぉい」だのと応じて慌あわてててチーロを追いかけてくる。あーションベンしてえ。おっかねーわ焼夷弾。魔術とかもやべえけど、なんか違ちがう。ジョーカーっちが言っていた、誰にでも扱える、というあたりが関係しているのかもしれない。極きよく端たんな話、ガキでも使えるのだ。チーロは喧けん嘩かが好きだ、戦いが好きだ、強くなりたい、最強の男になりたいと思う。しかしなんだかそんな願いが野望が悲しく馬鹿らしくなるというか、ひょろひょろのガキが焼夷弾投げるだけでぜんぶ終わっちゃうんだもんねと思うとむなしくなるというか、難しいことを考えていると脳みそが茹ゆであがってつるつるのぷるんぷるんになっちゃいそうですイヤーン。とにかく今はヤルのだ。敵を燃やすのだ。悪魔を焼き払はらうのだ。焼夷弾だ。チーロは倉庫に駆けこんだ。格納箱はあと四つある。さっきの投擲で二つの格納箱が空になったので、あと二回分ということか。チーロは「……ふう！」と息をついて格納箱の扉を開け、そろそろと左手をのばして焼夷弾をつかんだ。もしここで爆発させてしまったら、他ほかの焼夷弾も誘ゆう爆ばくして大だい惨さん事じになるだろう。全員爆死して、パンカロ・ファミリーは全ぜん滅めつ。有毒ガス混じりの煙が拡散し、さらなる犠ぎ牲せい者が続出。ほんとに考えれば考えるほどこれやべえ。チーロはチーロなりに用心して倉庫から飛びだし、急停止。カルロらが追いついてくるのを待った。ハンマーパンチ壱號で下腹部をさする。「あーおしっこしてえ……」

「チーロ坊ちゃん！　あんまり急がないでください！」カルロが倉庫から出てくるなり怒ど鳴なった。「みんな、気ィつけて動いてンですから……どうしたンですか？」

「いや、じつはその、さっきから漏もれそうでさ。うん。ま、我が慢まんできっけどな。レベル的にはまだ。つーわけで行くべ行くべ。行く……うぇ？」チーロはパチパチパチパチまばたきをした。おかしい。何かおかしいのだが、何がおかしいのかすぐにわからな

かった。だいたい、チーロに見えているものといったら、シャッコーはツァール峡谷の北側斜しや面めんにあるのだが、その反対側の南側斜面、まあようするに山みたいなものだ。天変地異でも起こらなければ、変化、異変なんてありそうもない。それなのに、何かおかしい。何がおかしいのか。「……ああっ……」チーロはハンマーパンチ壱號で南側斜面を、そのてっぺんを示した。「ああ！　ああっ！　あああああれ！　あれ見てみろカルロ、あれ……！」

「はい……？」カルロはハンマーパンチ壱號の先に目をやって「――あ……」と声をもらした。「なっ……あれ――って、どういう……？」

「オレが訊ききてえよ」チーロは小こ脇わきに抱えている焼夷弾を見て、それからまた南側斜面に視線を移した。今は五時か、五時半か。たぶんそれくらいだ。空はだいぶ明るい。南側斜面はシャッコーがある北側斜面よりも勾こう配ばいが急で、そそり立つ壁かべのように見える。雪が積もっているので、まあ雪山だ。標高はどれくらいだろう。シャッコーの最上層が地表二百メーテルくらいだから、三百メーテルか。もっとか。五百メーテルか。よくわからないが、いつも自分の目で見ているから、だいたいこれくらいの高さでこういう形だということは覚えている。だから見間違いじゃない。南側斜面が高くなっている。隆りゅう起きしているのではない。南側斜面の上に、小さな山がのっかっている。どうしてそう見えるかというと、その小さな山にはあまり雪が積もっていないからだ。てっぺんのほうは白いが、岩壁が剝むきだしで黒々としているところもけっこうある。あんなものはなかった。間違いなく、前にはなかったと言いきれる。ただ、その前とはいつなのか。数時間前か。昨日か。一昨日おとといか。そこのところはわからない。はっきりしない。あれはいきなり現れたのか。小さいといっても、とんでもなく大きいはずの山がポッと出現するわけがない。そのわけがないことがわりとちょくちょく起こる今日このごろですが、いかがお過ごしでしょうか馬鹿野郎ども。どういうわけだ、こんちくしょうめ。「……ぬぅーん」禿とく頭とうをひねりまくっていると、カルロが「チーロ坊ちゃん……」と険しい声で言った。「気のせいですかね……どうもあれ、動いてるように見えるンですが」「ああん……？」チーロは南側斜面を見なおした。目をぐりんぐりん瞠みはってよくよく観察してみた。視力はきっといいほうだ。五キルメーテル先の猫ねこの毛の模様すら見分けられる。とまで言ってしまったらちょっと大おお袈げ裟さか。ちょっとじゃなくてだいぶか。とにかく目はいい。チーロは見る。見る。見る。見まくった。

動いている、とまでは言えない。ただ確実に、南側斜面全体じゃない、その上の小さな山だけが、細かく揺ゆれたり、震ふるえたりしている。だから動いているのかな、と推測できなくはない。どうも動いてるっぽい。もともとあの小さな山はあの場所にはなくて、今はあるわけだから━━近づいてきた、ということになるのか。山が近づいてくる？　アッハハハハハハ。ないない。あるわけがない。そのわけがないことが起こってしまう今日このごろなので、どうして何がどうなっていてそうなるのかさっぱりだが、ありえないとは言いきれなかったりするのだ。そしてあの山が今も動いているのなら、動きつづけているのだとしたら、もっと近づいてくる？　そうなると、どうなる？　チーロはハンマーパンチ壱號で自分の頭をぶっ叩たたいた。鼻血がブーッと出た。「……もしかして、落ちてくるんじゃねえのか、あれ」

獄の獄ジエイルネイル

「……ジアン」

　声が聞こえた。誰の声だろう。──自分だ。僕の声だ。

　慌てふためいて目を開ける。黒い。黒い太陽が目に入った。緑色がかった灰色の空。どこだ。獄の獄なのか。夢？　現実？　わからない。生きているのか。息。している。あたりまえだ。息をしていなかったら、死んでいる。夢。何か夢を見ていたような。内容はわからないけれど、何か口走ってしまったような気がする。あの声。自分の声。名前を呼んでしまったのか。誰だれかに聞かれた？　あたりを見まわす。すぐそばに庇ひさしの大きい帽ぼう子しを被かぶった男が座っていた。男は視線に気づいてこっちを見ると「目が覚めたようだな」と言って微笑ほほえんでみせた。「うん……」とうなずいて、身体からだを起こしながらさらに周囲をうかがう。砂。砂さ漠ばくだ。でも、近くに壁がある。壁といっても砂を積み重ねて固めたようなものだが、高い。そうとう高い。何だろう。どこだろう、ここは。仲間は？　いる。トワニングとユリカ、飛フエイ燕ヤンは起きていた。トマトクン、サフィニア、きゅー、ロム・フォウ、ピンパーネル、ハニーメリーは横になっている。アルファは遠くにいた。トマトクンに施せ式しきしていたらしいトワニングが顔をこちらに向けて「おお」と言い、ユリカが、それから一応、飛燕も駆かけよってきた。目の前でかがみこんだユリカに「大丈夫？」と訊かれて首しゆ肯こうしてみせたものの、正直、大丈夫なのかどうかもよくわからない。頭がぼうっとしていて、やっぱり夢なんじゃないかとか、そんなことを考えている。わけがわかっていない様子を見てとったのか、飛燕が「落っこちたんだぜ、オレら」と向こうを指さした。飛燕にとっては前方、こっちにしてみれば後ろだ。振ふり返ると、壁が一部崩ほう壊かいして、その部分は小高い丘おか程度の高さになっていた。「……落っこちた」と言ってみて、ようやく理解できた。そうか。十四枚羽の女天使が剣けんを振るい、何か衝しよう撃げき波は的なものが押しよせてきて、それで道が崩くずれた。マリアローズたちは道もろとも窪くぼ地ちだか穴だかの底まで──ここまで落ちたのだ。そういえば、すごく砂っぽい。口の中もじゃりじゃりだし、顔も、耳も、髪かみの毛も、砂に

まみれている。「正直……」とユリカが苦く笑しようした。「わたしたちを領域ドメインに入れて守ってくれたエリオットしゃんをのじょけば、わたし自身もふくめて、無事な人はひとりもいなかったわ。しゃいわいトワニングはわりと平気だったから、まじゅわたしを治ち療りようして、しょれから二人でサしやフィニアを―」
「あ、そうだ、サフィニア……！」マリアローズは跳とび起きるなりサフィニアめがけて走った。サフィニアは仰あお向むけに寝ねかされていた。魔術士衣が白く汚よごれている。血だ。天使の糞くそ野や郎ろうに剣をぶちこまれていた、あの傷は。膝ひざをついて確かめる。ない。治っている。固く目をつぶっているけれど、胸がゆっくりと上下していて、サフィニア、よかった、死んでない、生きてる、もう死んでもいいと思った。や、死なないけど。死にたくないけど。マリアローズはサフィニアの頬ほおをさわって、それから髪を指で梳すいた。瞼まぶたがぴくっと震えた。ゆっくりと目が開く。「……マリア」サフィニアの声はとても低くて、今にも消え入りそうだった。マリアローズは泣きたくなったけれど、笑ってうなずいてみせた。一人で行かせたのは判断ミスだった、僕のせいだ、ぜんぶ僕が悪い、許しを乞こいたい、でも、すべてのみこんで笑った。今は後こう悔かいしている場合じゃない。反省を次の決断に生かすだけでいい。程ほどなくきゅーが目を覚まして、ハニーメリー、ピンパーネル、ロム・フォウが起きた。トマトクンも顔に手をふれると薄うす目めを開けようとした。トワニングが「まだ保もつ、拙せつ僧そうらが保たせる」と断言した。時計を見る。獄の獄に入ってから百六十五時間。前回、時間を確かめたときから十時間もたっている。二百四十時間をタイムリミットとしたら、あと七十五時間。だいたい三日くらいだ。それから羅針計を確かく認にんした。針の方向は―あっちか。見み渡わたせる範はん囲いでは、とりあえず何の障害物もなさそうだ。「……あれ？」外がい套とうの中にクルルがいない。と思ったら、足あし許もとでマリアローズを見上げていた。かがんで手をのばすと、クルルは即そく座ざに飛びのってきて、肩かたの上まで駆けあがった。炒いり豆まめをいくつかやって、水を飲み、食べ物を腹に入れた。エリオットは膝の上に手帳を置いて、何か書き物をしている。マリアローズと目があうと、みんなうなずいてくれた。「行こう」と声をかけたのは何度目だろう。何度だって言いつづけてやる。動かなくなるまで足を動かしてやる。動けなくなっても動かしてみせる。心が壊こわれてもいいと思った。粉々に砕くだけて、欠片かけらしか残らなくても、それをすくって握にぎりしめる。マリアローズたちは歩きはじめた。ここは上よりも起き伏ふくが少ない。平らに近いと言ってもいいかもしれない。おかげで見晴らしがいい。たまに贄にえの園の住人が

遠くを歩いていたり、たたずんでいたりする。大型ならできるだけ避さける。大きいやつでなければ近づいて反応を見る。襲おそいかかってきたら撃げき破はする。壁が邪じや魔まで羅針計の針が示す方向に直進できないこともある。その場合は極力、針路を維い持じするようにして進む。少なくとも三時間に一回は必ず休きゆう憩けいをとった。トマトクンに医術式を施ほどこさないといけない。黒い太陽はまだ沈しずまない。天使の姿を見かけたらエリオットの領域ドメインに入れてもらってやり過ごした。トマトクンの様子をうかがう。皮ひ膚ふが木き肌はだみたいだ。ところどころめくれ、剝はがれ落ちて、そこからのぞく肉もかさかさに乾かわいている。胸が締しめつけられる。歯を食いしばる。歩く。ふと黒い光にすっかり目が慣れていることに気づいた。慣れると色の違いもなんとなくわかる。歩く。白い夜がやってくる。風が強まる。でも上ほどじゃない気がする。焦あせる気持ちを抑おさえて壁に寄り添そうようにして三時間休み、代わる代わる睡すい眠みんをとった。獄の獄に足を踏ふみ入れてから百八十一時間後に出発。まだ白く暗いが、真っ暗ではない。今までわからなかったが、白い空に星が出ている。黒い星が。星明かりがわずかな黒い光を地上に投げかけている。方向は羅針計が教えてくれる。あと六十時間もない。時間は無む駄だにできない。いろいろなことを考える。考えたくなくても考えてしまう。たいてい悪いことだ。よくない結果が頭に浮うかんで打ち消そうとする。打ち消しきれなくて開きなおろうとする。やがて白い夜が明けた。休憩のときエリオットに訊いてみた。ひっそりと。「きみは旅をしてて不安になったりこわくなったりすることはないの？」「ある」とエリオットはあっさり答えた。「高い山に登れば頂に至れるか不安に思うものだし、登頂したらしたで帰り道が恐おそろしくなるものだ。私は行きつけるだろうか。帰ることができるのだろうか。よくそう考えるし、旅をいくら重ねてもそうした感情や思考は消え去らない」「……そっか」エリオットほどの男でもそうなのか。少し安心した。同時に苦しくなった。エリオットはマリアローズの頭の中を見すかしたように「人は繰くりかえすものだ」と言った。「同じ過あやまちを繰りかえすまいと思い定めても、そうせずにいられる者はごく少数だ。思うに、人の道はまっすぐではないのだろう。多くの人はぐるぐると似たような場所を回りながらどこかへ向かっている。その道は螺ら旋せんなのだ。私は見知らぬ土地を求めて旅をする。命果てるまでこの旅を繰りかえす。私は私の道を進むかぎり希望に出会い、不安や恐れにも出くわすだろう。間ま違ちがいを犯おかすだろう。決して間違わないための方法も一つだけある」「それは？」「一歩も進まなければいい」「……そんなわけにはいかないだろ」「きみは過ちがこわいのかい」「あたり

まえじゃないか」「だが、過ちをさけることはできない。私はさまざまな人と━きみが思うよりも、私が人と呼んでいるものの範囲は広いだろうが、じつにさまざまな人と巡めぐりあってきた。そして、一度も過ちを犯さない者は一人もいないと言いきれる。それが現実だとしても、ときに人は過ちを恐れてためらう。私も同じだ。そんなとき私は二つのことを自らに問いかける」「教えてくれる？　その二つのこと」「もちろん。一つは、私は何がしたいのか」「それは……僕も、わかってる」「二つ目は、私にとってそれは私がなすべきことかどうか」「なすべきことか、どうか」「ただそうしたいだけのことであれば、私は思いとどまる。しかし吟ぎん味みして、是ぜ非ひともなすべきことだと、私にとってそうするだけの価値があると信じることができたなら、何があろうとやりとおす」「……価値」マリアローズはちょっとだけ笑った。「けっこう、普ふ通つう」「私は一いつ介かいの旅人だ」エリオットは微笑んでみせた。「だが、旅をつづけるためのコツは知っている。ひたすら進むことだ。向かう先はどこでもかまわない。進むだけでいい」「簡単だね」「そのとおりだ。難しくはない」「そろそろ、行こうか」マリアローズたちは歩きだす。もう苦しいとか、つらいとか、そういうことは思わなかった。不安はある。抱かかえきれないほどの恐きよう怖ふを抱えて歩かないといけない。足が止まりそうになると、マリアローズは自分に尋たずねる。じゃあ、どうしたい？　助けたい、トマトを。目的地にたどりつきたい、一刻も早く。それは僕がなすべきことかな？　うん。絶対に。何がなんでもやらないといけない。僕は僕らの園長マスターを、僕の大切な仲間を、かけがえのない友だちを救いたい、救わないといけない。自分の命と引き換かえにしてもいいくらい、僕にとってそれは価値があることだ。僕は何度も打ちのめされる。自分の弱さに。だけどそのたびに起きあがる。僕がしぶといから？　しつこいから？　そうじゃない。仲間が、友だちがいるからだ。一人だったら、僕は何もできない。する理由がない。エリオットみたいにどうしても旅をしたいとか、そんなこと僕は思わないし。わかりきったことを、僕は何回も何回も繰りかえす。同じことを、何回も。飽あくことなく、何度でも。白い夜がきて、黒い朝がやってくる。時計を見る。あと四十時間。羅針計の針が示す方向を見すえて歩く。だめだったらどうしよう。間に合わなかったらどうすればいい。そのときのことを想像してしまう。僕は泣きたくなる。何度も同じことを繰りかえす。それでも歩く。僕はだいぶすり減っている。みんなに遅おくれそうになる。注意力も落ちている。気がつくと砂だけを見つめている。それでも歩く。苦しくはない。つらくもない。よくわからない。僕らはもう話さない。誰も口を開かない。静かだ。足音と息づ

かいしか聞こえない。時計を見る。獄の獄に入ってから二百二十九時間。あと十一時間。半日もない。僕らは歩く。医術式のための休憩以外は歩く。もう時間がないからとか、急がなきゃいけないからとか、そんなことは一言も言わない。わかりきったことは言わないで歩きつづける。とっくに息があがっている。脚あしが上がらない。転んでしまいそうだ。地面が傾かたむいている。上り勾こう配ばいだ。振り返ると、たしかに登っている。前に向きなおって、歩く。何回か転んだ。何度も立ちあがって、歩く。下しか見ていない。足許しか。顔を上げて、歩く。歩かないと、進まないから。進もう。進むんだ。時計を見ようとする。やめて歩いた。しばらく歩いてから、やっぱり時計を見た。あと七時間。七時間。たった七時間。時計を捨てたくなった。そんなことをしても意味がない。歩く。歩く。歩く。果ての、果ての、その果てまで、歩く。さらにその向こうだった。

　まぶしい。

　正面方向に黒い太陽がある。

　今の今まで傾けい斜しやしていたのに、平へい坦たんだ。

　マリアローズは肩で息をしながら目を凝こらした。何かある。遥はるか遠くだ。いや、比ひ較かく対象がないので、距きょ離りはよくわからない。でも、そう近くはないと思う。何だろう。何か、としか言えない。白い、いびつな、何かのかたまりだ。羅針計を確かめた。針はあのかたまりを指している。そうとしか思えない。もしかして、あれか。あれが、あそこが目的地なのか。そうかもしれない。そうじゃないかもしれない。ただの贄の園の住人かもしれない。でも、今まで見た贄の園の住人とは違う。そんな気がする。それとも、希望的観測だろうか。否定はできないけれど、あいつは――あのかたまりの先にいる影かげ、もっと言えば人影のようなものはたぶん、まあ十中八九、贄の園の住人だろう。

　誰も、何も言わない。じっとかたまりのほうを見つめている。

　おそらくみんな、マリアローズと同じことを考えているのだと思う。きっと、あのかたまりこそが目指しているものだ。そして、その近くに贄の園の住人がいる。かたまりよりもずっと大きい、ひょっとしたらこの獄の獄で見た中で一番大きいかもしれない、そんな印象すら受ける巨きょ大だいな贄の園の住人が。

　どうする。これまでなら迂う回かいしていた。安全だけを考えればそうするべきだ。無駄に危険を冒おかすことはない。それが無駄な危険であれば。じゃあ、必要なら？　時計を見る。よく見た。見なおした。必要？　安全？　迂回？　馬ば鹿かげている。それどころじゃない。獄の獄に足を踏み入れてから二百三十八時間。あと二時間。二時間しかない。

「……わたしが、見てきましょうか」とサフィニアが言った。女天使の剣けんに串くし刺ざしにされているサフィニアの姿が脳のう裏りをよぎって、マリアローズはすぐさま首を横に振った。そうだ。だめだ。それに、時間だってない。

「行こう、みんなで」久しぶりに出した声はえらくかすれていた。マリアローズは歩きだした。もしあそこが目的地じゃなかったら、あのかたまりがそれじゃなかったら。考えたくないけれど、もしそうだったらもう終わりだ。きっと間に合わない。時間切れだ。トマトクンの様子を見る余よ裕ゆうもない。いや、余裕とか、そういう問題じゃない。見たくない。とても見られない。心臓が大暴れしていて、胸が張り裂さけそうだ。でも反面、確信してさえいる。間違いない。あそこだ。あそこが目的地だ。僕らはあの場所に行かないといけない。そのためにここまできた。絶対そうだ。それにしても。

　大きい。かたまりじゃない。その向こうにいる贄の園の住人だ。五メーテル？　十メーテル？　そんなものじゃない。近づくごとに、その大きさを否いや応おうなく実感させられる。おそらく数十メーテル、ひょっとするとそれ以上だ。しかも、どうやらやつは、膝を抱えてしゃがんでいるみたいだ。砂さ漠ばくにうずくまっていて、あの大きさなのだ。

「おお……」エリオットが立ち止まって空を振ふり仰あおいだ。マリアローズたちも足を止める。唐とう突とつに黒い光が翳かげった。太陽だ。太陽が白く欠けている。どんどん欠けてゆく。日につ蝕しよくか。それにしては変だ。黒い光はたしかにさえぎられている。それなのに暗くない。むしろ、普通に明るい。まぶしい。これは。この光は。普通の、あたりまえの光だ。エリオットはゴーグルを外して榛はしばみ色の目を細めた。「獄の獄で、これは──初めての経験だ」

　まるでそのまばゆい光を浴びて、目を覚ましたかのようだった。やつが立ちあがろうとしている。「あ……」マリアローズは口をあ

んぐりと開けた。「っ……！」サフィニアが息をのむ。アルファが、きゅーが唸うなって、ユリカが「あ、あれって……」と呟つぶやいた。ピンパーネルがめずらしく「そんナ……」と絶句し、ハニーメリーが「え？」と首をひねった。「すごいね……」ロム・フォウも呆ぼう然ぜんとしているようだ。「ンだよアレ……」飛燕もいつになく及および腰ごしになっている。「ぬぬ……」トワニングは口くち髭ひげの端はしを震ふるわせた。「だが、しかし──」「……そうだよ」マリアローズは揺ゆするように頭を振った。「どういうこと……？　だって、僕が知ってるあれは──」違う。マリアローズは知っているのに。でも、違うのだ。何が違うって、サイズが違う。もちろん、あれもでかかった。身長は十メーテル以上あったと思う。十メーテルでもとんでもない高身長だ。ただ、今そこにいる、さっきまでうずくまっていて、立ちあがったばかりのそれは、明らかにもっと大きい。にわかに、どれくらい、とは言えないほど大きすぎる。あまりにも大きくて、それから普通に明るいせいで、よく見える。

　彼女は──そう、それは、女性だ。なんてむごたらしいのだろう。彼女の全身は傷だらけだ。真っ白な皮膚がぐじゃぐじゃに、めちゃくちゃに切り裂かれて、見るも無残なその傷から血液とも膿うみとも何ともつかない液体が絶えず流れでている。彼女の身体からだのあちこちにきつく絡からみついて食いこんでいるものは縄なわなのか。そして、無数の傷とおぞましい縄だけじゃない。花だ。ものすごい数の花が彼女を飾かざり立てている。彼女の肉体には奇き怪かいな、巨大な植物が植えつけられているのだ。その植物が真っ黒い花を咲さかせている。毒々しい、禍まが々まがしい花を。彼女は傷つき、汚けがされ、辱はずかしめられている。徹てつ底てい的に。しかしながら、彼女は美しい。その面めん貌ぼうは際きわだって整っていて、魅み惑わく的で、蠱こ惑わく的ですらある。哀かなしく寂さびしく黒く潤うるんだ瞳ひとみに見入られたら、胸を打たれない者はいないだろう。もっとも、彼女には一本の頭とう髪はつもなく、それどころか頭皮を引っ剝ぱがされて、眉まゆの上から頭頂にかけて頭ず蓋がい骨こつまで切除され、ぐずぐずに腐ふ敗はいした脳みそがあらわになっている。いったい誰があの腐くさった脳に数百本の長くて太い針を刺さしたのか。わからない。わかるはずもない。理解できない。とにかく彼女は腐っている。腐った彼女に数千、数万、それより多いかもしれない数の蠅はえが群がっている。脳だけじゃない。蠅は彼女の傷にも卵を産みつけている。刻一刻と無数の卵が孵ふ化かしている。脳の襞ひだや傷から蛆うじが、蛆が、蛆が這はいだし、縄を、植物の茎くきを、葉を、真っ黒な花弁

を這いずりまわる。彼女は傷と縄と花と蛆にまみれ、ああ、彼女には蠅がたかっている。

「……蠅はえたかり姫ひめ」マリアローズはふたたび頭を振った。今度は激しく。なんてことだ。本当に信じられない。「だけど──」

「本物です」サフィニアの声は震えていた。「……わたしたちの召しよう喚かん魔ま術じゆつは、正確にいうと、異界生物フリークスそのものを呼びだすわけじゃなくて……ある異界生物フリークスに似た疑似生物を一時的に構成する……大半の術者は自覚していないけど……そういう魔術なんです。だからあれは……あれが……彼女こそが、正真正しよう銘めい、本物の蠅たかり姫なんです……！」

「本物……あれが──っ……！」マリアローズはとっさに耳をふさ厭亞亞亞厭亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞厭亞亞亞亞厭厭厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞厭亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞。びりびりする。頭が。指先まで。蠅たかり姫が叫さけんだのだ。マリアローズはいつの間にか這いつくばっていた。涙なみだがドボドボあふれ落ちて砂を濡ぬらしている。鼻水も出ている。よだれも。何これ何これ何これ。やばい。やばすぎる。周りを見る。程度の差こそあれ、みんな同じだ。へたりこんだり膝ひざをついたりして、耳や頭を押さえている。まあ顔をぐちょぐちょにしているのはマリアローズくらいだが、平気そうな者は一人もいない。アルファもきゅーも伏ふせて身体を縮めている。「……き、きやがるぞッ！」飛燕が跳とび起きた。マリアローズも外がい套とうで顔をぬぐいながら立ちあがる。まだふらつくけれど、そんなことは言っていられない。地じ響ひびきが轟とどろく。蠅たかり姫が歩きだした。こっちだ。厭亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞言いながらこっちに向かって歩いてくる。「や、やるしかない……の？」ハニーメリーはピンパーネルの背中に隠かくれている。気持ちはよくわか

る。僕だって隠れたい。蠅たかり姫は思っていたよりも遠くにいたみたいだ。まだあのかたまりのところまで到とう達たつしていないのに、接近してくるごとにどんどん大きくなる。大きい。なんてゆうか、だめだってあれは。よくない。マジでよくない。「……あんなの、どうしゅれば……」ユリカまで弱気なことを。ユリカらしくない。でも、そりゃそうだよね。だってさ。蠅たかり姫がとうとうあのかたまりをまたいだ。あのかたまりだって、たぶん小さくはないのに。何だろう。もしかして、彼女の身長って数十メーテルじゃない？　桁けたが一つ上？　数百メーテルだったりする？　まあ五百メーテルとか六百メーテルとかはないと思うけれど、二百か三百メーテルはあるかもしれない。「私の領域ドメインでやりすごす——というのは残念ながら無む駄だだろうな」エリオットの言うとおりだ。まったく残念なことに、彼女がここにいて、マリアローズたちに敵意を持っている（と思われる、状じよう況きよう的にそう考えるしかない）かぎりは、領域ドメインに避ひ難なんしたところでたぶん何の解決にもならない。エリオット一人ならけっこう長い時間、領域ドメインの固着を維い持じしたまま入っていられるようだが、この人数だと重すぎて三十分ほどが限度のようだ。その間に蠅たかり姫がどこかに行ってくれることを期待するというのは、そうなってくれたらどんなにいいかと思いはするものの、ちょっと楽天的すぎる。マリアローズたちは、あと二時間足らずのうちに、あのかたまりまでたどりつかないといけないのだ。もう遠回りはできない。逃にげるわけにはいかない。方法は二つだ。一つは蠅たかり姫をやっつける。可能なら、それが一番手っ取り早い。できるのなら。それからもう一つは、蠅たかり姫の足あし許もとを駆かけ抜ぬけて、あのかたまりのところまで行く。あれだけの巨体だ。足許はどうしてもお留守になるはずなので、あながち無茶な方策とも言いきれない。たとえば、トマトクンを背負っているトワニング以外がばらばらに逃げまわって囮おとりになり、なんとか蠅たかり姫をおびきよせる。その隙すきに、トワニングがあのかたまりを目指す。いや、それじゃだめだ。トマトクンの肉体は魔導王たちが設計して〝鍛冶鬼マツドスミス〟シニ・イデルが製造した大殲滅刀カタストロフアーに拘こう束そくされている。トマトクンを救うにはそれを破は壊かいしないといけない。たぶんそれはサフィニアの仕事ということになる。だから、トワニングとサフィニアをあのかたまりに向かわせて、あとの全員で——とまとめかけた考えが呆あつ気けなく砕くだけ散った。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。蠅たかり姫が蠅をうるさがるように手を振ふった。ものすごい数の蠅がブワァッと散って、入り乱れて飛ぶ。こっちにも飛んでくる。蠅が。蠅どもが。蠅？　あれが？　本当に蠅なのか。「……大き

い！」ロム・フォウが弓に矢をつがえて放った。矢は当たった。蠅の複眼と複眼の間にちゃんと命中した。でも、蠅はそのまま飛んでくる。でかい。怪虫のガンズ坩堝ゲイルの怪虫ガウンドよりもおそらく一回りか二回りでかい。ゆうに一メーテル以上ある。まあ人間大だ。でかいだけに羽音もすさまじい。不快どころの騒さわぎじゃない。こわい。あと、臭くさい。酸っぱくてどろっとしていてべったりこびりつく臭においだ。胸が悪くなる。腐ふ臭しゆうだ。「──ウオラァッ……！」飛燕が高々と跳ちよう躍やくして飛び蹴げりをぶちかまし、ロム・フォウが矢を当てた一いつ匹ぴきを吹ふっ飛とばしたが、巨大蠅はぞくぞくと押しよせてくる。「か、各自迎げい撃げきっ……！」マリアローズはあとずさった。迎撃するのはいい。しないわけにはいかない。するしかない。だけどそれだけじゃ足りない。蠅たかり姫だ。あれをどうにかしなきゃいけない。「──サフィニアは蠅たかり姫を……！」「……はい……！」サフィニアが飛びたった。襲おそいくる巨大蠅をヒュイヒュイよけながら、蠅たかり姫めがけてかっ飛んでゆく。空中で放った。白光。光の帯が直進して蠅たかり姫の胸を貫つらぬく。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。蠅たかり姫は悲鳴をあげたが、それだけだった。どうってことないみたいだ。いくらサフィニアでも、あれは。相手があれだけでかいと。「破はぁっ！　離りゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃぁ……！」ユリカが極限九手棍で巨きよ大だい蠅を叩たたき落としまくっている。飛燕もユリカの周りを駆けずりまわったり飛んだり跳はねたりしながら「ウラウラウラウラウラウラララララララララァ……ッ！」と間断なく巨大蠅を撃げき墜ついしている。ピンパーネルも、きゅーも、それからロム・フォウもトマトクンの大剣で、それぞれ巨大蠅を斬きり刻んだり殴なぐり飛ばしたり蹴飛ばしたりしている。ハニーメリーは拳けん銃じゆうで巨大蠅の翅はねを狙ねらい撃うちしているようだ。アルファは巨大蠅が迫せまってくると飛びかかって引きずり落とし、獰どう猛もうな牙きばと爪つめであっという間にばらばらにしてしまう。エリオットが何かの魔術を使って、何匹かの巨大蠅をいっぺんに撥はねのけた。「むん……！」トワニングは近づいてきた巨大蠅を一蹴りで片づけ、一歩下がった。「──図ずう体たいが大きいだけのたかが虫にすぎぬが、これは……！」これはまずい。マリアローズだってそんなことはわかっている。わかっているから、みんなの陰かげにこそこそ隠れながら頭を絞しぼっている。サフィニアが急きゆう上じよう昇しようして、蠅たかり姫の脳を炎えん上じようさせた。藍あい色いろの炎ほのお。藍色炎上だ。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。蠅たかり姫はわめきまくって身をよじっているが、燃え

ている脳はごく一部だ。身体のサイズが大きすぎるので、脳も馬ば鹿か馬鹿しいほどでかすぎる。それから蠅たかり姫が暴れると、何かこう腐ふ敗はい汁じる的なものがぶちょぶちょぶっちょぶちょ飛んできて、悪臭が何倍にも増ぞう幅ふくされた。この世から今すぐ逃げだしたいほど臭い。それと、腐敗汁と一いつ緒しよに、蛆も飛んでくる。腐敗汁と蛆のシャワーだ。こんなのってあんまりだ。どうか助けてほしい。もうこっちが厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞と叫びたいくらいだ。サフィニアが引きつけてくれているので、蠅たかり姫の前進は今のところ止まっているが、このままではどうしようもない。どうしようもなくたって、どうにかしないと。どうにかしようがあるのか。何も思いつかないんだけど。「あああ……！」マリアローズは目をつぶって頭を掻かきむしった。目を開けると、巨大蠅の複眼と見つめあう恰かつ好こうになった。肉にく薄はくしている。巨大蠅が。「──わっ……!?」慌あわててしゃがむと、マリアローズの頭上を後ろから巨きよ漢かんが跳び越こえた。トワニングだ。トワニングは巨大蠅の上に着地して踏ふみ潰つぶした。「──筋肉マツソォォォォウ……ッ！」もちろん、トマトクンを背負ったままだ。マリアローズはユリカ、飛燕、ピンパーネルを見る。やっぱり破壊力だけでいったらトワニングだ。大きな屍かばね玉だまを撃ち滅ほろぼしたあの技わざ。何ていったっけ。そう、たしか絶紹黄金権化だ。あんな異常で変態的でとんでもない芸当をやってのけられるのはトワニングしかいない。決めた。「──前進！」マリアローズは前方の蠅たかり姫を指さした。「全員、蠅を駆く逐ちくしつつ前進して！　エリオット、きみとトマトだけなら、どれくらい領域ドメインに入ってられる!?」「ああ、それならばたぶん三、四時間は大丈夫だろう」「よし、じゃあ、僕が合図したら領域ドメインを固着、トマトを収容、そうしたら髭ひげも蠅たかり姫に当たって！　いい!?　いいね!?　行こう、前進……！」「はいっ！」「っしゃッ！」「わかった！」「うぉん！」「くう！」「はイ！」「了りよう解かい！」「承知！　ならば……！」トワニングが加速した。繰くりかえしになってしまうが、もちろんトマトクンを背負ったままだ。トワニングの筋肉筋肉した肉体が黄金色にキラキラピカピカ輝かがやきだす。「ムハハハッ！　ヌハハハハハハッ！　ドゥワハハハハハァーッ……！」「……あー」そっか、とマリアローズは思った。そっか、そうだよね。トワニングは文句一つ言わなかったけれど、トマトクンを運ぶ以外に筋肉の使い途みちがほとんどなくて、きっとだいぶストレスが溜たまっていたはずだ。その鬱うつ憤ぷんが今ぜんぶ、黄金色の闘気オーラとなってトワニングの筋肉から噴ふきだしている。「拙せつ僧そうのォォォォォ筋肉のォォォォォォォォ叫びを聞けェェェェェィィィイイイ

イィィィィャヤァァァァッ！　筋肉万歳ハイパー・マッソオォォォォォォォオウウウウウウウウ……ッ！」トワニングは突つき進む。巨大蠅が襲いかかってきても無視だ。虫だけに、と半魚人なら付け足すだろうが、マリアローズはそんなくだらないことはしない。とにかくトワニングは巨大蠅なんか問題にしないし、問題にならない。黄金色の闘気オーラにふれただけで、巨大蠅はブバッと爆散したり、ジョオンッと溶とけてしまう。それなのに、もしかして飛んで火に入る夏の虫的なアレなのか、巨大蠅どもはトワニングに殺さつ到とうしてブバッと死ぬ。ジョオンッと死ぬ。ブバッジョオンッブバババッと死んでゆく。「━髭につづいて……！」マリアローズは叫びながら走った。多くの巨大蠅がトワニングに引きよせられている。障害は少ない。蠅たかり姫は厭亞亞亞厭亞亞亞厭亞亞亞厭亞亞亞両手を振りまわしてサフィニアをつかまえようとしている。サフィニアは蠅たかり姫の手をかいくぐりながらときおり白しろ魔ま術じゆつを浴びせているが、はかばかしくはないみたいだ。でも、そのおかげで、蠅たかり姫はトワニングやマリアローズたちに注意を払はらっていない。いける━かどうかはわからないが、とりあえず目もく論ろ見みどおりの形には持ちこめそうだ。臭いけど。どうかしてるんじゃないか、どうかしちゃうんじゃないかっていうくらい臭いけど。バシャバシャグシャグシャ降ってくる腐敗汁の量が半はん端ぱじゃないし。ビョンビョンビュンビュン落ちてくる蛆うじにぶち当たったら即そく死ししちゃいそうだし。だけど不思議だ。臭いは蠅はえたかり姫ひめに接近すればするほど強まるはずなのに、そんな感じもしない。慣れてきているのか。こんな鼻が曲がりそうな、曲がりすぎてもげてしまいそうな悪臭にも慣れることができるなんて、人間ってすごい。慣れたくないけど。それにしても、あらためて思う。でかい。でかい相手とはいろいろやりあってきた。でも文句なしで蠅たかり姫は最大だ。人間の百倍、いや二百倍くらいあるのか。物事には限度というものがあって、何事にも限界というものがあるわけで、だから正直、無理だと思う。どんなにがんばっても、何を犠ぎ牲せいにしても、できないことはできない。これはそういうたぐいのことだ。絶望することすらできない。心が平板になって、気力がわいてこない。それでもやるんだ。何もできない僕がやるんだやるんだと無理やり思う。馬鹿らしい。本当に。馬鹿らしくても負けない。無力な自分に負けない。僕は特別じゃない、何の力もない、弱い、脆もろい、何もできない、だからといって逃げたりしない。逃げない。針の一ひと刺さしさえできない自分でも、立っている。立っていられるかぎりは立ちつづける。そうしたいからだ。そうするだけの価値があることだからだ。
「髭！　エリオット……！」「む！」「わかった」エリオットが足

を止めて、組みあわせた両手で空を打つ。目には見えない領域ドメインの扉とびらが開かれた。トワニングが駆け戻もどってきて、エリオットと一緒に領域ドメインに入って消えた。蠅たかり姫の右足の爪つま先さきまで、四十メーテルくらいか。トワニングが姿を現した。トマトクンは領域ドメインの中だ。マリアローズはうなずいた。「──僕はみんなを信じる！　どこまでも、何があっても、どうなろうと、絶対、絶対、信じてるから！　みんなで倒たおそう、蠅たかり姫を……！」「ムハァァッ！」トワニングが着衣を脱ぬぎ捨て、半はん裸らになった。「ゆくぞ、ユリカァッ！　今こそッ！　鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の極ごく意い中の極意を授さずける……ッ！」「はいっ！」「オレも行っくずゥゥゥゥェェェエエエェェェァァァァアアッ……！」トワニングが、ユリカが、飛燕が、ひとかたまりになって駆けてゆく。ピンパーネルがハニーメリーの背中をそっと撫なでて「アナタのおかげデス」と言って静かに微笑ほほえんだ。どういう意味なのか、マリアローズにはよくわからなかった。なんとなくしか。でも、ハニーメリーは蛍光緑色ルミナスグリーンの瞳ひとみをきらきらさせて即そく座ざに「うん！」と笑い返した。なんてすてきな笑え顔がおだろう。二人もトワニングたちを追いかけてゆく。「きゅうぅぅ……！」きゅーも。「ばぉんうぉん……！」アルファも。ロム・フォウはマリアローズのほうに目をやった。マリアローズはロム・フォウの視線を受け止めて、見つめあい、どちらからともなく駆けだした。僕はまず、死なないように。みんなの足を引っぱらないように。領域ドメインに隠かくれていたほうが邪じゃ魔まにならないかもしれない。でも、ここにいる。最前線に。僕はそうすることを選んだ。ここにいる以上は、僕なんか役に立てるわけがないけど、ひょっとしたら何かあるかもしれない。そう思いつづける。一いつ瞬しゅんも気を抜かない。見ろ。見み渡わたせ。戦場を。いきなり光った。ものすごい光だ。頭上。サフィニアだ。白魔術。焼きつく。視界が。マリアローズは手で庇ひさしをつくって目を細める。それは長さ五十メーテルほどもありそうな巨大な光の剣けんだった。サフィニアが光の剣を振りおろす。蠅たかり姫は身体からだをひねりながら飛びのいた。よけられる。いや。腕うでだ。左腕。肘ひじの少し上あたり。厭亞亞。光の剣が蠅たかり姫の左腕を斬り落とした。揺ゆれる。砂に覆おおわれた大地が。左腕が地面に落ちた。サフィニア。サフィニア。サフィニア。よし。よし。よし。さすがサフィニアだ。ところが、蠅たかり姫はすぐさま左腕を拾いあげて、それをブォンブォン振ふりまわしはじめた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。サ

フィニアは高速で飛んで逃にげる。蠅たかり姫の左腕が空を切り、あるいは巨大蠅を叩き潰し、地面をバッシンバッシン叩く。やばい。やばいって。「──っっ……！」マリアローズは回れ右をした。あんなの、かすっただけでおしまいだ。かすらなくたって、余よ裕ゆうで死ねる。マリアローズだけじゃない。トワニングとユリカ以外は散り散りになった。あの二人だけは脇わき目めも振らずに蠅たかり姫めがけて突っこんでゆく。二人ともキンキラキンだ。黄金の闘気オーラをまとっている。何をするつもりなのか。なんにしても、何かやってくれる。何しろ、常識がまったく通用しない筋肉破は戒かい僧そうと、それからその弟で子しは最強伝説の持ち主なのだ。

「フウウウウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥヌン……ッ！　輝き燃えよ拙僧の筋肉ッッッ！　シャァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァイニンッ……！」

　トワニングの闘気オーラがいっそう強まった。もはや小型の太陽だ。蠅たかり姫が右手で握にぎりしめている自らの左腕を振りかぶったところで動きを止めた。見おろして、トワニングに気づいたようだ。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。そして振りおろす。左腕を、トワニングに。それなのに、なんで。どうしてよけないんだよ。ユリカが絶ぜつ叫きょうする。「トワニング……!?」「──そばで見ておれ、ユリカッ！　これこそが攻こう防ぼう一体、天地無む双そう、鶫流古式戦闘術究極奥おう義ぎ……ッッッ！」トワニングは内うち股またになって膝ひざをぐっと曲げ、胸の前で両腕を交こう叉ささせた。手は握らず、開いている。筋肉が。盛りあがっているなんてものじゃない。膨ふくれあがって、筋張りまくって、血管が浮うきでている。網あみ目めみたいに、びっしりと。こわい。きもい。おぞましい。いや、でも。いくらなんでも、それは。だけど、どうしようもない。見守るしか。蠅たかり姫の左腕が、ちょうど左手の部分が、トワニングに襲おそいかかる。厭亞亞亞……！

「黄金不動……ツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ

　トワニングは動かない。微び動どうだにしなかった。動くまでもなかったのだ。黄金の闘気オーラにふれるだけで、蠅たかり姫の左

手は黄金色に光輝く粒りゅう子しと化して飛散した。しかし、それだけにとどまらない。その粒子がトワニングのもとへと集まってゆく。粒子が闘気オーラをさらに強化する。トワニングは傍はた目めにもやばいくらい光っている。こんなに光ってもいいのか、こんなに光るわけがないじゃないかというくらい光りすぎている。ここに至ってトワニングがついに動いた。
「コォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……！」と息を吐はきながら両腕を広げてゆったりと回す。光がかきまわされ、渦うずをなし、トワニングの胸先に練りあげられようとしている。きている。これはきている。きまくっている。きた。きた。きた。黄金色の光が圧縮されて、黄金球となった。トワニングはそれを押しだすようにして放った。「──食くらうがよい、黄金昇しよう天てん砲ほうォォッ！　ブゥゥルウウゥゥァァアアアアアアァァァァァァァァアアアァァァァァァァァアアァァァァァア
アァァァァァァァアァァァァァァァァッッッ……！」

　黄金球がシュオオオオォォォァァァアアアアァァァァァァと唸うなりをあげ、蠅たかり姫の顔面めがけて飛んでゆく。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。蠅たかり姫はのけぞった。半分とけてなくなっている左腕を投げ捨てて、右手で顔をかばおうとする。黄金球が迫せまる。蠅たかり姫の右手に迫る。受け止めることはできない。蠅たかり姫の右手が消え失せてゆく。黄金球が昇しよう華かさせる。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。もう蠅たかり姫の顔を守るものは何もない。行け。行ってしまえ。行っちゃえ。もちろん蠅たかり姫も必死だ。厭亞亞亞亞亞亞。反る。厭亞亞亞亞亞亞亞亞。身体を反り返らせる。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。首を傾かたむける。でも、間に合わない。厭亞亞。黄金球が蠅たかり姫の顔を削る。直撃じゃなかった……？　少しずれた。外されたのだ。そうはいっても、蠅たかり姫の頭部の、半分まではいかないかもしれないが、三分の一から五分の二くらいは吹ふっ飛とばして、黄金球はそのまま彼方かなたへと消えた。マリアローズは、やった、と声をあげかけて、息をのんだ。トワニングの目から、鼻から、耳から、そして身体中の血管がブツンッ……と切れて、血液が噴ふん出しゆつした。「ぐ、はっ……っ…………」「──トワニング……！」ユリカがトワニングに駆かけよってゆく。トワニングは倒れなかった。血まみれで片かた膝ひざをついて、なんとか持ちこたえた。蠅たかり姫もまだ立っている。かろうじてだ。左腕につづいて右手まで、そして右目をふくむ頭頂から右みぎ頬ほおの下あた

りまでを失って、蠅たかり姫はよろめき、倒れかかっている。こっちに倒れてきたら、まずい。潰つぶされる。いや、その心配はなさそうだ。蠅たかり姫は後ろのほうに倒れようとしている。

　すんでのところで、右足を後ろに出して踏ふんばった。厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞亞亞亞亞厭亞厭亞厭亞亞厭亞亞亞厭亞厭亞厭亞亞亞厭亞厭亞厭亞亞厭亞亞亞亞亞厭亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。

「……嘘うそ……」マリアローズはむしろ、ぽかんとしてしまった。蠅たかり姫の、黄金球によって消失した部分、頭部の約五分の二と右手、あとは左腕だ。傷口、断面から植物がうねうねとあふれるように出てきて、瞬しゆん時じにたくさんの黒い花を咲さかせた。どうやら、失われた箇か所しよを黒い花が補ってしまったようだ。そんなふうに見える。「チィッ……！」飛燕がすっ飛んでいって、トワニングに肩かたを貸した。「いったん退くぞ、ユリィ、筋肉のオッサン……！」「ぬ……むう……」「トワニング、わたしにもちゅかまって……！」ユリカと飛燕に両りよう脇わきを固められるような恰かつ好こうで、トワニングが後退しようとしている。散開していたピンパーネル、ハニーメリー、ロム・フォウ、アルファ、きゅーが戻ってこようとしているが、焼け石に水じゃないのか。「っ……！」サフィニアが蠅たかり姫の頭の半分近くを覆っている黒い花に火をつけた。花は燃えやすいのか。藍あい色いろの炎ほのおが見る間に燃え広がってゆく。そこまではよかったのだが、炎が、花が、茎くきが、ギュルンギュルンのびてサフィニアに躍おどりかかる。「くっ！　はっ……！」サフィニアは白魔術で切り払はらいながら、それでも追ってくる燃え花たちを引き離はなそうとする。でも、だめだ。しつこい。燃え花は飽あくことを知らずどこまでものびる。しかも悪いことに、悪すぎる、最悪な、超最低ＳＵＣＫきわまりないことに、空の高いところから垂直に降下してきて、サフィニアの行く手に立ちふさがるものがあった。マリアローズは「くっ……！」と歯を食いしばって、砂を蹴けった。なんでよりにもよってこんなときに。派手にドンドンバチバチやっていたせいで、見つかってしまったのか。天使だ。十四枚羽の女天使。
「━っっ……！」サフィニアは九十度方向転てん換かんして急きゆう上じよう昇しようする。燃え花が女天使に殺さつ到とうする恰好になって、例の輝かがやく盾たてに弾はじき返された。女天使はサフィニアに向かって剣を振る。衝しよう撃げき波は。サフィニアはとっさに猛もう風ふうを巻き起こす魔術を繰くりだして衝撃波を弱めつつ、なんとかよけた。そのときにはもう、女天使がサフィニア

に肉にく薄はくしようとしている。危ない。剣が。斬きりつける。女天使の剣が。サフィニアはかわせない。かわせるタイミングじゃない。受け止めた。魔術で何か防ぼう護ご壁へきみたいなものを張りめぐらせたのだと思う。そうじゃなかったら、真っ二つにされるか木こっ端ぱ微み塵じんにされていたはずだ。ただ、防ぎきることはできなかった。サフィニアは女天使の剣圧で叩たたき落とされた。墜つい落らくする。大量の砂が飛び散って、巻きあげられた。心臓が縮まって止まりかけた。大丈夫なのか。大丈夫だ。サフィニアはすぐに飛びあがった。それを見み越こしていたかのように、女天使がサフィニアを追う。猛もう然ぜんと追いすがる。サフィニア。くそ。サフィニア。どうしよう。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。ああ、蠅はえたかり姫ひめが。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。身体を折って、何をやっているのか。え？　何？　え？　もしかして、吐く？　吐きそう？　吐いちゃう？　愚亞亞。吐いた。吐き散らした。「──ちょっ、なっ……！」マリアローズは逃げ惑まどった。白っぽい吐と瀉しゃ物が雨あめ霰あられと降ってくる。液体じゃない。かなり粘ねん度どが高い。吐瀉物はべたっと砂に落ちて──むくっと起きあがった。起きあがった？　そう、起きあがったのだ。次々と。それは起きあがりながら、うねうねと動きながら、急速に形をなしてゆく。女だ。裸はだかの女。そいつらは似ている。蠅たかり姫に。そっくりだ。大きさは人間くらいか、人間よりも少し小さいか。一様じゃない。ばらばらだ。厭亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞。女たちが襲いかかってくる。動作はぎこちない。よたよた、よろよろしている。それでいて、遅おそくはない。けっこう速い。女が一人、つかみかかってくる。「もう、なんで……！」マリアローズは剣を抜ぬき放はなって、女の右腕を斬り落とした。奇き妙みょうな手て応ごたえだった。まるで粘ねん土どみたいな。女の右腕は切断された直後から変形しはじめて、地面に落ちるころには小さな女になっていた。「──そんな気がしてたけどさ……！」マリアローズは小さな女を遠くに蹴け飛とばして、右腕を失った女に体当たりを見み舞まって押しのける。踵きびすを返して逃げようとしたら、そっちに別の女がいた。だめだ。止まれない。なんとでもなれ。マリアローズは女の顔面に頭ず突つきをぶちかました。でも、女は怯ひるまない。抱だきすくめられた。さらに別の女が、何人もの女たちが、ぞくぞくと群がってくる。髪かみを引っぱられて、腕を、脚あしをつかまれ、ぎゅうぎゅう握られて、首を絞しめられる。マリ

アローズをがっちりと抱きしめて放そうとしない女の肩に、小さな女がよじ登ってきた。黒々と濡ぬれた瞳ひとみがマリアローズを見つめている。近づいてくる。ちっちゃな手で、マリアローズの口をこじ開けようとする。入ってこようとしている。口の中に。「ああが！　あああがあがががあがあがががああぁぁぁぁ━っ……!?」突とつ然ぜん、楽になった。マリアローズを抱きしめていた女が一瞬でバラッバラのバランバランになったのだ。それから、首を絞めていた腕も。ピンパーネルだ。雌し雄ゆう一対ついの短剣で細切れにしてくれた。「マリアローズ……！」ピンパーネルはつづけざまに他の女たちもどんどん斬り刻んでいった。「━早ク……！」「おご……！」マリアローズは口の中に半分入りこんでいた小さい女を引っこ抜いて投げ捨て、おびただしい数の小さい女たちを蹴ったり踏みつけたりしながら駆ける。「爆轟デトネータ……！」ハニーメリーが応用機術で何人かの女をいっぺんに吹き飛ばした。だけど結局、女たちは小さくなって増えるだけだ。アルファは嫌いや気けがさしたのか逃にげまわっているし、きゅーも突き飛ばしたり払いのけたりするだけになっている。「━ユリィ！　筋肉のオッサン頼たのんだッ！」飛燕がトワニングをユリカに任せて、女に掌しよう打だを浴びせた。いや違ちがう、女の胸の真ん中に掌てのひらを押しつけて何かを送りこむと、女はぼろぼろ崩くずれだした。「━八十四散乱打奥義〝天位テイエンウエ無法イウーフア〟！　どうやら、コイツはきくみてェーだな……ッ！」「……そうか」マリアローズは女を蹴りのけて、走る。あの技は屍かばね玉だまにもきいた。贄にえの園産の化物に効果的な技なのか。鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の黄金系の技も同様だから、何か共通点があるのかもしれない。見れば、ロム・フォウがトマトクンの大たい剣けんで斬った女も分ぶん裂れつ増ぞう殖しよくしていないようだ。でも、敵の数が多すぎる。それに━なんだか、ロム・フォウの様子がおかしい。
「……っ！　くあ……！　ふぅっ……！」かなり呼吸が乱れているし、足あし許もとがおぼつかなくて、あれでは大剣を振りまわしているというよりも大剣に振りまわされているかのようだ。そして、蠅はえ。巨きよ大だい蠅も飛んでくる。ほら。きた。正面から突っこんでくる。「━ぐっ……！」マリアローズは頭から砂に突っこむようにして巨大蠅の突とつ撃げきを紙一ひと重えの差でよけた。すぐさま起きあがろうとしたら、暗い。影かげだ。頭上に、蠅たかり姫の足が。「って、嘘ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……!?」マリアローズはズサササ這はうようにして逃げる。起きあがって逃げる。必死で逃げる。振しん動どう。大振動。「うっ、わっ……」弾はずんで、転んで、死んでない、生きてる、だから逃げる、逃げるだけじゃだめだ、わかってる、やっぱり蠅たかり姫をどうにかしな

いと、わかってる、そんなことはわかってるけど──マリアローズは絶ぜつ叫きようする。「ソオル……！　出てきて、出てこい、今すぐお願いだから急いで出てこいったら……！」

「やあ」とすぐ隣となりで声がした。頭から白い布を被かぶっている。右みぎ腕うでは左腕のようで、左腕は右腕のようだ。ソオル。ソオルだ。ソオルがマリアローズと並走している。「ついに君たちはたどりついたらしい。でも、なかなかに難しい状じよう況きよう──」「ご託たくはいらないから、あれをやって！」マリアローズはロム・フォウを指さした。瞬しゆん間かん的に思いついたアイディアだ。妥だ当とうなのかどうか。よくわからないけれど、これしかない。「──ロシュを倒たおしたときのやつ！　力を貸してくれただろ！　トマトの剣っていうかきみの剣だったんだっけ、とにかくあの剣から七色の炎みたいなのがバァーッて──」「無理だ」「無理!?　なんでだよ!?　神だって殺しちゃったくらいなんだし、あれなら……」「僕は限定的な存在だ。僕自身が聖断罪の剣を振ふるうことはもうできない」「じゃあ、ロム・フォウに」「彼女には耐たえられまい。本来の肉体から離れ、僕がつくった肉体の中にいても、彼は無限の心臓と分かちがたく結びついている。だからこそ、例外的に聖断罪の剣を扱あつかえるのだよ。人間にはとうてい不可能だ。聖断罪の剣の力を解き放てば、その者は死ぬ。跡あと形かたもなく消しよう滅めつしてしまうだろう」「消……──」マリアローズは言葉を失った。消滅する。死ぬ。次の瞬間、笑った。何だ、そんなことか。マリアローズは蠅たかり姫似の女を蹴飛ばして、その反動で行き先を変えた。ロム・フォウめがけて駆ける。「じゃあ、僕がやる！　ついてきて、ソオル……！」「なっ──」堕おちた神でも神は神だろう、神を絶句させるなんてたぶんそうそうできることじゃないから、ちょっと気分がいい。ちょっとじゃなくて、けっこういい気分かもしれない。マリアローズは飛びかかってくる巨大蠅どもをすいすいかわし、女たちの間をするする駆け抜けてゆく。心も、足どりも軽快だ。ロム・フォウが大剣を振るう手を止めて、こっちを見た。明らかに疲つかれきっている。「……マリア？」「僕にその剣を貸して、ロム・フォウ……！」「え……？」困こん惑わく顔のロム・フォウから大剣を引ったくった。何回か持たせてもらったことがあるので初めてではないけれど、こんなにも大きいのに気味が悪いほど軽い。それなのに、どうしてロム・フォウは疲ひ労ろう困こん憊ぱいしているのか。まあ、もともとは神の持ち物だった、そうとう特とく殊しゆな武器なわけだから、人間の武器では斬れないものを斬ったり滅ほろぼしたりすることで、生命力的なものを吸いとられたりするのかもしれない。「──マリア!?」ロム・

フォウは自分の刀を抜いて、巨大蠅を一匹ぴき、二匹と叩き斬った。「いったい何を……!?」「えい……！」マリアローズは近づいてきた女を一人、ぶった斬ってみた。両手持ちする剣なんて使ったことがないから、変な感じだ。だけどとにかく軽いので、思ったより扱いやすい。女は右みぎ肩かたから左腰こしまできれいに斬り裂さかれ、干ひからびてしまったかのようにぽろぽろ崩れた。ちょうどいいい。蠅たかり姫がこっちに向かって足を踏みだした。「──よしっ！　ソオル、やって！」「マリア!?　やるって何を……!?」ロム・フォウは叫さけびながら女を突き飛ばして、巨大蠅を斬り捨てた。「いいのかい」ソオルはマリアローズの後ろにいる。肩に手が添そえられた。右肩には左手のような右手が、それから左肩には右手のような左手が。「剣の力を解き放つことができる可能性は決して高くない。そして、成功しても失敗しても、君は消え失せる。完全に」「いいよ」あまりにもためらいがなさすぎて、自分でも呆あきれた。でも、しょうがないよね。実際、迷いとか、ないし。ない袖そでは振れないってやつ？　しいて言えば、モリーとリーチェに会いたかったかな。カタリにも会っておきたかった。あとは──あとはまあ、いいかな。あいつのことは、いいや。会いたいとか、そういうのでもないし。会って、それで気がすむわけでもきっとない。それならいっそ、会わないほうがいい。このまま会わないほうが。心配だけどね。もしいつか、僕がもういないって知ったら、きみはそのときどう思うのかなって。それだけが心配っていえば心配かな。だって、僕もさ。僕だって、考えたくないし。きみがもういないとか、考えたくないから。それは、いやだから。僕はずるいのかな。ごめんね。ごめん。

　マリアローズは息を吐はいた。「──早く、ソオル……！」

「わかった」ソオルは後ろから左手のような右手をのばして、その

指先を大剣の刃やいばにふれさせた。「　　　　　　　　　　　　hTe

akereBr yHlo vorinCicenot lasusta emdo□□」

　マリアローズは目をつぶった。

　さすがに、少しだけこわい。

　少しだけだ。

　━鳥とり肌はだが立った。

「待て、ソオル……！」

　思わず目を開けてしまった。聞こえるはずのない声が聞こえたからだ。

　振り向くと、トマトクンが立っていた。エリオットに支えられている。出てきたのか。領域ドメインから。なんで。歩いてくる。トマトクンが。歩けるわけがないのに。起きあがることさえできないはずなのに。どうして。何だろう。何なんだよ、この感覚は。重い。空気が。それに、細かく震ふるえている。耳鳴りがする。鼻の奥のほうが、頭の中心あたりが疼うずく。女たちが静止している。巨大蠅は逃げ散ってゆく。蠅たかり姫もぴたりと動きを止めていた。サフィニアを追いかけ回していた女天使までもが、十四枚の羽をゆっくりと羽ばたかせて空中で停止し、こっちに顔を向けている。仲間たちも。息苦しい。マリアローズは目を凝こらした。ゆがんでいる。空間が。感じるし、なんとなく見える。波のようなものが。どこからだ。この波。どこからきているのか。あそこか。あのかたまり。黒い。普通の光の下では、黒々としている。たぶん、あのかたまりがこの波の発生源だ。その波が空間をゆがませて━トマトクンに、流れてこんでいる……？

「待て、ソオル」

　トマトクンが歩いてくる。エリオットの手を振りはらって、一人で。倒れそうになりながら、一歩ずつ。でも、顔はひび割れだらけ

だ。回復している様子は微み塵じんもない。歩くごとにひび割れが深まり、広がって、皮ひ膚ふが剝はがれ落ちる。トマトクンは壊こわれそうだ。壊れかけている。壊れつつある。だめだよ、トマト。動いちゃだめだ。言いたいのに、声が出ない。トマト。ああ、トマト。もうすぐそばにいる。表情なんてよくわからない。だけれどトマトクンは唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせた。それくらいはなんとかわかった。

「すまんな、マリア」

　大剣の柄つかを握にぎりしめているマリアローズの手を、トマトクンの大きな手が包んだ。指から勝手に力が抜けた。トマトクンは大剣をとりあげると、振りかぶって一度、ゆったりと旋せん回かいさせた。軋きしむ音が聞こえてきそうだった。トマトクンの骨が、筋肉が悲鳴をあげている。腱けんは古くなったゴムのようで、血管は収縮し、ほとんど血が流れていない。もちろん見えるわけじゃないけれど、わかるのだ。たしかにあの黒いかたまりから発せられている波がトマトクンに力を与あたえているのかもしれない。でも、トマトクンの肉体は朽くちかけている。無茶だ。じっとしていないと。止めたい。腕ずくでも。マリアローズは頭を振る。できない。トマトクンの指が、左手の指、中指が、抜け落ちた。右手の薬指も。さわれない。さわったらきっと崩れる。ようやく「……トマト」と名前を呼ぶことができた。それしかできなかった。トマトクンは大剣の切っ先を地面につけた。下段に構えているというより、腕が剣の重みに耐えかねているように見えた。「やれ、ソオル」

「いいだろう、友よ」ソオルは大剣に指をふれさせた。「

hTe akereBr　　　　yHlo

vorinCicenot lasusta emdo ETALIHINNA

・」

「──うっ……！」大剣から虹にじみたいな七色の炎ほのおが噴ふきだして、マリアローズは尻しり餅もちをついた。炎の長さは七、八メーテルくらい。幅はばは二メーテルほどだろうか。いや、もっとだ。虹色の炎はどんどん膨ふくれあがってゆく。最初に動いたのは女天使だった。くる。十四枚の羽で空を叩たたいて、まっしぐらに飛んでくる。とてつもない速度だ。トマトクンが大剣を振るい、女天使は盾たてを前に突きだす。光輝かがやく盾が出現して、虹色の炎を防ごうとしたが、簡単に破られた。光輝く盾だけじゃない、実物の盾まで、パァァアァァッ──と弾はじけて消えてしまった。女天使は、しかし、止まらない。ぐっと高度を落として身体からだを傾かたむけ、地表すれすれを飛行してトマトクンに迫せまる。トマトクンは大剣を引き戻もどそうとしている。だけど遅おそい。反応が。鈍にぶい。間に合わない。「──ウラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァ……ッ！」飛燕。飛燕だ。かっ飛んできて、女天使の横っ面に飛び蹴けりをぶちかました。吹ふっ飛ばされてザザザザッと砂上を滑すべり、体勢を立てなおそうとした女天使に、飛燕が、そしてピンパーネルが、きゅーが、アルファが躍おどりかかる。「クォラァッ！」「ッ……！」「ＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！」「うぉん……！」女天使は飛び下がった。ハニーメリーが放った拳けん銃じゅうの銃じゅう弾だんもロム・フォウが射た矢も届かない。十四枚の羽が力強く羽ばたいて、矢や弾だまとともに飛燕たちまで吹っ飛ばしてしまう。でも、一人だけ。「疾しっ……！」ユリカだけは極限九手棍をぐるぐる回して黄金色の闘気オーラをまとい、振りまいて、女天使を追いかけてゆく。つかまえた。「離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ

離ゃ離ゃ離ゃ離ゃぁ……！」ユリカは極限九手棍を繰くりだす。目にもとまらぬ速度で突いて払はらって打って突く。女天使は剣で弾く。受け流す。ユリカが不意に消え失せる。いや──上だ。女天使の頭上。闘気オーラが輝きを増して、熱く、熱くたぎる。ユリカは直上から女天使の脳天めがけて足刀蹴りを放つ。「──超ちよう絶じえつ紹しよう！　黄おう金ごん権ごん化げ……！」「なんっ……」マリアローズは歯は噛がみした。黄金色の闘気オーラがせき止められている。光輝く盾に。なんで。破は壊かいされたはずなのに、どうして女天使の手にまた盾が。そんなわけがないのに、女天使は間ま違ちがいなく剣けんと盾を持っている。その盾をかざして、光輝く盾でユリカの闘気オーラを撥はね返し、ユリカ自身まで弾き飛ばされてしまった。「──ゃっ……！」「ユリィ……！」間かん一いつ髪ぱつ、飛燕が滑りこんで受け止めてくれたから、ユリカは無事だ。でも、女天使が追つい撃げきしようとしている。「っ……！」サフィニアが飛んできて、立てつづけに白しろ魔ま術じゆつを叩きこんだけれど、女天使の光輝く盾を突とつ破ぱできない。「ぬうううあああああああああ……！」トマトクンが斬きりかかって女天使を追い払っても、一時しのぎだ。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。それに加えて、蠅はえたかり姫ひめが動きだした。トマトクンは蠅たかり姫を見上げて叫ぶ。「──サフィニア！　天使はお前に任せる！　お前の魔術はそんなものじゃない！　不可能を可能にしてみせろ……！」「……不可能を、可能に……」サフィニアの髪かみの毛が逆立って、渦うず巻まいた。瞳ひとみに宿る百億の星が一いつ斉せいにまたたいて躍りだす。「はい……！　好きです、トマトクン！　ごめんなさい、わたし！　あなたのことが、大好きです……！」「……サフィニア……」こんなときに何を言っちゃってるんだろう。てゆうか、服が。マチルダとおそろいの魔術士衣が。光こう沢たくを帯びた薄うすい緑色だったのに、変わってゆく。黒と、そして鮮あざやかな緑色に彩いろどられて。サフィニアは女天使に掌てのひらをさしむけた。「──はあぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁ……！」途と端たんに女天使が押さえつけられる。まるで女天使の周りの空気だけが何千倍にも、何万倍にも重くなったかのようだ。十四枚の羽が縮んでゆく。握り潰つぶされようとしているみたいだ。トマトクンが蠅たかり姫に向きなおる。「待たせたな」



　厭亞亞。蝿たかり姫は右みぎ脚あしを後ろに振ふりあげた。蹴るつもりなのか。トマトクンを。トマトクンは動かない。待ち受けて、大剣を突つきだす。数十メーテルに及およぶ虹色の炎が百メーテル以上ある蝿たかり姫の右脚を迎むかえ撃うつ。七色の炎が吹き荒あれ、炸さく裂れつして、右脚

が半ば焼失し、蠅たかり姫の身体が傾かしいだ。直後、濁だく流りゅうのごとく植物が噴きだして黒い花を咲さかせまくり、脚の代わりに体重を支えようとする。トマトクンは虹色の炎を振りまわして、その黒花を斬り燃やした。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。だけどきりがない。黒花はあとからあとから出てくる。際限なく。トマトクンは手を止めた。大剣を、虹色の炎を担かつぐように構える。「―むうううううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」そして斜なななめに跳とび、振りおろす。左脚だ。蠅たかり姫の左脚が、膝ひざのあたりが焼き払われる。乱れ咲く黒花を、トマトクンは斬り燃やす。斬り燃やしつづける。蠅たかり姫はそれでも立っている。あふれる黒花を支えにして。でも、身の丈たけが低くなってゆく。厭亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞。徐じよ々じよに。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。少しずつ。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。「くうううううううあああああああああああああああああああああああああああああっ……！」トマトクンが大剣を、聖断罪の剣、七色の炎を、高々と持ちあげた。天を衝つくように。炎の先せん端たんは蠅たかり姫の胸まで達した。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞厭亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。しかしそこから、というよりもそこらじゅうから奔ほん出しゆつした植物の量は、それから勢いも、これまでの比ではなかった。濁流。激流だ。とめどもない。黒い花が咲き乱れる。咲き誇ほこる。トマトクンがいくら聖断罪の剣で斬り払い燃やしてもだめだ。とうてい追っつかない。全周囲から、とくに足許からトマトクンめがけて黒花が押しよせる。「トマト……！」マリアローズは名を呼びながら下がる。下がるしかない。黒花はトマトクンだけじゃない。こっちにまで這はい広がってきて、砂さ漠ばくを侵おかそうとしている。触しよく手しゆのような黒花の茎くきが次々とトマトクンの皮膚を突き破って体内に入りこんでいる。トマトクンの身体に黒い花を咲かせる。トマトクンの左ひだり腕うでが弾け飛ぶ。そこから黒い花が顔を出す。何輪も、何輪も。右脚が何倍にも膨ぼう張ちようして、ぐちゃぐちゃになる。口から黒い花が飛びだす。眼球を押しのけて、黒い花が出てくる。マリアローズはもう名を呼ぶこともできない。悲鳴をあげる。ただただ、切れ切れの悲鳴を。トマトクンは違ちがった。そんな有様になっても聖断罪の剣をいったん振りおろし、右腕一本で突きあげた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞拡がる亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞炎が亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞七色の、

虹のような炎が亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞膨張し亞亞亞亞亞亞亞うねっ
て亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞貫つらぬき焼いて亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞焼き尽つくし亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞天を亞亞亞亞亞亞亞亞
地を亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞染め抜く亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞
亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞…………—気がつく
とマリアローズは伏ふせていた。目をつぶっているのに、虹色の炎が見える。意識的に呼吸をしてみた。息。している。大丈夫なのか。よくわからない。起きあがる。まばたきをする。見えない。まだ見えない。目をこする。何回も何回も。「トマト……！」呼ぶ。「トマト！　トマト!?　トマト……!?」繰りかえし呼びながら、歩きまわる。だんだん見えるようになってきた。ぼやけているけれど、なんとか。「トマト……！」あれか。あれだ。たぶん。いる。トマト。地面に身を横たえて。ちゃんとは見えない、でも、トマトだ。駆かけよろうとする。「—マリア……！」サフィニア。サフィニアの声がした。足を止めて、あたりを見まわす。右上。右上のほうから何かくる。天使。女天使か。マリアローズは身体がこわばって何もできなかった。女天使も一いつ緒しよだった。マリアローズに向かって剣を振りおろそうとしたところで、ぴたりと止まった。「くぅぅぅぅぅぅあぁぁぁっ……！」サフィニアが雄お叫たけびをあげる。女天使は身をよじる。腕が、脚が、首が、あらぬ方向に曲がる。全身が震ふるえている。砕くだける音がする。盾が、剣が、砕け散る。「覇はぁっ……！」ユリカが駆けてきて、跳んだ。黄金色の闘気オーラに包まれたユリカが、頭から女天使の土手っ腹に突っこんでぶち抜いた。女天使は崩くずれてゆく。ぼろぼろと。さらさらと。砂漠に降りそそいで、わからなくなってしまう。見れば、蠅たかり姫も、小さな蠅たかり姫たちも、巨きよ大だい蠅ばえも、どこにもいない。太陽が欠けだした。いや、そうじゃない。黒い太陽が居場所をとりもどそうとしているのだ。黒い光が射さしこみはじめた獄の獄の砂漠には、まだ黒々としているあのかたまりがあって、マリアローズたちが立っていて、そしてトマトクンが横たわっている。マリアローズはトマトクンのもとへと急ぐ。急いでいるつもりなのに、身体が思うように進んでくれない。砂に足をとられて転んでしまった。サフィニアに追い越こされた。ロム・フォウが駆けてゆく。それからきゅーが、アルファが。ピンパーネルが助け起こしてくれた。ユリカと飛燕がトワニングに肩かたを貸しながら

走ってくる。行かないと。僕も、行かないと。気持ちだけが空回りしている。ハニーメリーが手を引いてくれた。トマト。ああ。トマト。もう。ああ。ひどい。頭を振る。「……そんな……」嘘うそだ。そんな。こんなに。これが？　これがトマト？　これが？　やめてよ。誰だれか。頼たのむから。こんな。嘘に決まってる。だって、トマトじゃない。上半身らしきものしか。しかも、右腕しか。顔。顔も。わからない。何も。これじゃあ、何も。誰も手をふれようとしない。遠巻きにして、近づくことができずにいる。それでも一番トマトクンのそばにいるサフィニアが、崩れ落ちるように膝をついた。ロム・フォウも糸が切れた操あやつり人形みたいにへたりこんで、空を見上げた。目を見開いて、口を開けている。マリアローズは振り向いた。ユリカと飛燕、トワニングの後ろから、エリオットが歩いてくる。それから、ソオル。ソオルは頭から被かぶっていた布をとった。トマトクンのほうを見ている。でも、唇くちびるを引き結んで、何も言わない。頭に血がのぼった。ぜんぶ、何もかも、ソオル、きみのせいだ。そんなことない。わかってる。だけど抑おさえようがないんだ。とりあえず誰かのせいにしてしまいたい。誰かが悪いんだって、思いたいんだ。この気持ちをぶつけたい。意味がない。そんなことをしたって、何の意味も。今となっては、すべての意味は失われてしまった。世界から意味が消え去った。そして、僕らだけが取り残された。僕はロム・フォウみたいに空を見る。黒い太陽はもう半円に近い。灰色とも青とも緑色ともつかない空に、黒点が染しみだしている。たくさんの黒点が。黒点は移動する。あるいは大きくなってゆく。天使だ、と思う。天使どもがやってくるんだ。いいか、もう、と思う。いいや。どうでもいい。どうなったってかまいやしない。同じことだ。意味なんかないんだ。

「……壊こわします」

　サフィニアが立ちあがって、あのかたまりに向きなおった。壊す。壊す？　何を？　そうか。壊す。大殲滅刀カタストロフアーを。マリアローズはうなずいた。そうだね。そうだ。きつく唇を嚙かむ。きつく、きつく、嚙みしめた。サフィニアは飛びたたずに、歩いてゆく。マリアローズは追いかけた。天使どもが迫っている。知ったことじゃない。僕はなんだか抜ぬけ殻がらみたいだ。自分が何を考えて、何をしているのか、いまいちよくわからない。でも、サフィニアについてゆく。「はぁ……っ！」サフィニアが歩きながらあのかたまりに向かって魔術を放つ。「っ……！」炎ほのおを。「くぅ……！」稲いな妻ずまを。「っっ……！」凍こおりつかせ、

猛もう風ふうを浴びせる。かたまりはびくともしない。かたまり。それは、群がって互たがいに絡からみつきあう数えきれないほどの巨おお蛇へびを数百本の太い槍やりが刺さし貫いているかのような、直径十メーテルを超える奇き怪かいな物体だ。「……わたしは、何があっても……！」サフィニアは右手を突きだし、左手で右手首を握にぎりしめた。「……何が、あっても……必ず、絶対に……！」揺ゆれる。揺れている。大地が。大気も。あのかたまりも。マリアローズはすぐに立っていられなくなった。声も出せない。肺が潰れそうだ。潰れたっていい。サフィニアは歩いてゆく。「……わたしは……わたしの、魔術は……！　不可能を……可能にする……！」そうだ。サフィニア。そうだよ。全身の皮ひ膚ふが剝はがれそうだ。内臓が裏返ってしまいそうだ。気が遠くなる。でも、繫つなぎ止める。意識を。僕は見たいんだ。見届けるんだ。次の瞬しゅん間かん、息絶えるとしても、見つづけたい。サフィニアは左手で持ちあげるようにして右腕を掲かかげる。意味がないなんて、失われてしまったなんて、誰が決めた？　僕だ。僕が自分で決めようとした。だけどサフィニアは違った。かたまりのすぐ上で、真っ白い火花が散りはじめる。火花と火花が激しく衝しよう突とつする。ぶつかりあいながら増ぞう幅ふくして、どんどん成長してゆく。そしてある時点で、一転して収縮しだす。小さく、小さく、もっと小さく。拳こぶしよりも小さくなる。それは小さいけれども、小さいだけに、とてつもない威い力りよくを秘めている。サフィニアの魔術が凝ぎよう縮しゆくされている。かつて閃せん光こうの魔ま女じよマチルダは、自らの弟で子しであるサフィニアを〝世界をザ・デス滅ぼすトロイ者ヤー〟と呼んだという。サフィニアは魔術士として飛ひ躍やく的な進歩を遂とげ、とうとうその名に値あたいする真の魔術士に、〝恐怖のドレツド操り手スター〟になったのかもしれない。サフィニアの力のすべてがこの魔術にこめられている。サフィニアは右手を振りおろす。想おもいを、願いをこめて、叫さけびながら。「──戻もどってきて、トマトクン……！」

　小さな白光球があのかたまりを直ちよく撃げきする。

　その瞬間は何も起こらない。

　白光球はかたまりの中へと沈しずみこんでゆく。

　一秒。

　二秒。

三秒。

かたまりに幾いく百、幾千もの光の筋が走った。光の筋は刻一刻と自分たちの領土を拡大してゆく。数百本の槍が押し返される。抜けようとしている。抜けた。次から次へと。かたまりの主要部分が内側から押し広げられる。光によって。音はしない。無音だ。すべては静かに、どこまでも静かに進行する。大懺滅刀カタストロファー。そうか。あれが。巨蛇の群れみたいな、あれが大懺滅刀カタストロファーなんだ。おそらく可変する武器。断末魔デスクライの剣ソードを巨きょ大だい化させたような。それが巻きついて、覆おおいつくしていたのだ。彼の肉体を。今、押し剝がそうとしている。サフィニアの魔術が。大懺滅刀カタストロファーは抵てい抗こうしている。なんとか魔術の力を押さえこもうとしている。でも、無む駄だだ。あと少し。もうすぐ限界に達する。勝つ。サフィニアの魔術が。そのときが訪れる。マリアローズはまったく疑わなかった。そのとおりになった。

大懺滅刀カタストロファーの敗北が決定づけられて、一気に解きほどかれ、光があたりを白一色で塗ぬりつぶしたときだけは、かなり大きな音が轟とどろき渡わたった。

「トマトクンが……!?」ユリカの声がした。

振ふり返ると、トマトクンだったものが塵ちりと化して舞まいあがっていた。

なくなった。なくなってしまった。トマトクンが。いない。いなくなった。そんなわけ。そんなわけがない。そんなわけが。前を向いた。光の中に、誰かいる。うつむいて、吊つるされているかのように立っている。髪かみが長い。長いだけじゃない。茫ぼう々ぼうとして渦うず巻まいている。彼が身につけている赤黒い鎧よろいは両りよう腕うでと腰こしから下を覆っているだけだ。胸も、腹も、浅黒い肌はだが剝むきだしになっている。どこもかしこも傷だらけだ。ありとあらゆる傷が、見る間にふさがってゆく。彼は下を向いているので、顔が見えない。だから確信を持つことはできなかった。確信してしまいたくない。確信して、もし違ったら？　だけど彼だと思う。彼に違いない、そう思う、でも、こわい。顔を見せてよ。声を聞かせてほしい。頭が動いた。少し揺すって、それから、顔を上げる。髪の合間から黄玉トパーズの瞳ひとみがのぞいた。身み震ぶるいがした。違う、けど、一緒だ。その輝かがやき、輪りん郭かくの鮮あざやかさ、奥深さ、同じようで明らかに違うのに、

やっぱり同じだと感じる。彼だ。

　光が衰おとろえる。薄うすらいでゆく。

　彼は右手をのばして大懺滅刀カタストロフアーを引っつかんだ。あっという間だった。絡みあう蛇のようだった大懺滅刀カタストロフアーが、彼の手の中で剣の形をなした。剣と呼ぶには分厚すぎるし、かなり幅はば広ひろだし、彼の身の丈たけに近いほどの長さもあるが、なんとか剣に見える。

「きわどかったね、友よ」

　ソオルが琥こ珀はく色の剣けん身しん波打つ大剣、聖断罪の剣を拾いあげて、彼に向かって放った。彼は左手で聖断罪の剣を受け止め、握りなおした。

　右手に大懺滅刀カタストロフアー。

　左手には聖断罪の剣。

　彼は振り仰あおぐ。二枚羽の天使が、四枚羽の天使が、六枚羽の天使が、八枚羽の天使が、十枚羽の天使が、十二枚羽の大天使が、そして十四枚羽の女天使が、途と方ほうもない数の天使どもが、満天を埋うめつくそうとしている。

　彼の髪が逆巻きはじめた。彼は口を開けた。それは声なのか。音というよりも爆ばく風ふうのようだった。とにかく彼がそれを発すると、彼の頭上を舞まっていた天使どもが一挙に押しのけられた。

「こいよ、神の下げ僕ぼくども。根絶やしにしてやる」

　彼は唇をゆがめてみせた。天使どもが降下してくる。十枚羽、十二枚羽、十四枚羽の天使は武器の他ほかに盾たてを持っている。あの光輝く盾を展開して彼に殺さつ到とうする。彼は無造作に右腕を振るう。大懺滅刀カタストロフアーが一いつ瞬しゆんで十倍以上に伸しん長ちようし、のたうつように身を躍おどらせる。光輝く盾だろうと実物の盾だろうと剣だろうと槍だろうと天使の身体からだだろうと関係ない。見境なく切断する。粉こな微み塵じんにする。天使の羽が撒まき散らされる。花びらのように。

「俺は止められんぞ」

　彼は腰を沈めて、跳ちよう躍やくする。十メーテル、いや、それ以上も。聖断罪の剣で天使を斬きる。何人もの天使をまとめてぶった斬る。そして大懺滅刀カタストロフアーを振りまわす。天使どもはかき混ぜられる。めちゃくちゃに斬りまくられて、舞い散る羽だけを残し、消え失せる。彼はようやく落下しはじめる。落ちながら、聖断罪の剣と大懺滅刀カタストロフアーで天使を斬りまわす。砂すな煙けむりをあげて着地すると、彼は首を左右に曲げて、片方の眉まゆをつりあげてみせた。

「どうも調子がいまいちだな。久しぶりだからか」

「……それでいまいち、とか……」

　マリアローズは笑ってしまった。トマト。どこからどう見てもトマトだ。

「……トマトクン」

　サフィニアの声が、細い肩が、小刻みに震えている。

　トマトクンはサフィニアを見て、目め許もとをゆるめた。

「ああ」

「トマトクン……！」

　サフィニアがトマトクンの胸に飛びこんでゆく。すがりついて、頭を、顔を、厚い胸板にこすりつける。マリアローズはため息をついた。「……や、待って」

　よかったけど。たしかに、これ以上ないくらいほっとしたけど。それどころじゃなくない？　だって、ほら。天使が。いくらか倒たおしたけど。かなりの数を斬り伏ふせたと思うんだけど、まだいるよ？　てゆうか、減ったぶん以上に増えてるように見えるんだけど？　どんどんくるような気がするんだけど？　どうするの、あれ？　やっつけるの？

「……うおッ」と飛燕が声をもらした。「何だアレ……」「あれも……」空を仰ぐユリカの顔が引きつっている。「あれも、天使なの……？」

「違ちがうな」エリオットが帽ぼう子しを持ちあげて低く唸うなっ

た。「天使ではないと思う」

　黒い太陽だ。その周りには天使がいない。それはそこから、黒い太陽から出てきて、降りてくる。まるで黒い太陽に産み落とされたかのように。サフィニアの魔術の光も失うせて、すでに獄の獄は黒い光に満たされているというのに、それは自ら発光しているのか、色も形も不自然に感じるほど鮮やかで明めい瞭りようだ。そもそも、まだそれはかなり遠くにいるはずだ。それにもかかわらず、どうしてこんなにはっきり見えるのか。それは女のようだ。肌は褐かつ色しよくで、毛もう髪はつは白い。ふくよかな唇くちびるは蠱こ惑わく的だが、どろどろとよどんだ切れ長の双そう眼がんに加えて、額にも瞳がある。三つ目の顔も一つじゃない。八つもあって、さらに腕うでが六本もある。八はち面めん六ろつ臂ぴだ。それは億兆の星ほし屑くずを身にまとっていて、とてつもなくきらびやかだが、乳ち房ぶさも陰いん部ぶも隠かくしていない。その陰部からは今まさに何かが生まれでようとしている。何かはわからない、わかるはずもないが、たぶんひどく恐おそろしいものが。

「そのとおり、天使ではない」ソオルは事もなげに言った。「あれは悪徳のイヴ・ヴイヴイシヤス。管理者の一人で、生命を嘲ちよう弄ろうする者、正す者、駆く除じよ係。彼女は神だよ」

「厄やつ介かいなやつがしゃしゃり出てきたな」トマトクンも平然としている。「面めん倒どうだが、やむをえん」

「いや、友よ」ソオルは微笑ほほえんで、ゆっくりと首を左右に振った。「ここは僕が引き受けよう。そして、名残なごり惜おしいけれど、これでお別れだ」

「……何？」

「彼女は生半可な相手ではない。手の内を知っている僕にとってもね。それに、友よ、君にはなすべきことがあり、今は神などにかかずらってはいられないはずだ」

「ソオル、お前は――」

「僕が君のためにできることはこれが最後で、すべてだ」ソオルの人差し指が空中に線を引く。水平の直線を、その直線の両りよう端たんから垂直の線を、それからまた水平の線を。ソオルは四角く切りとられた空間を掌てのひらで押した。向こう側に倒れて、そこか

ら白っぽい光が射しこんでくる。ソオルは肩かたにかけていた布を頭に被かぶった。「さあ、行くといい、友よ」

　トマトクンは瞼まぶたを閉じて、うなずいた。そして目を開け、叫んだ。「帰るぞ……！　俺たちの世場界所に……！」

　逃にがすまいとするかのように、天使どもがどっと押しよせてくる。ピンパーネルとハニーメリーが駆かけてきて、まず扉とびらをくぐった。きゅーがトマトクンに「くう！」と声をかけてから、二人につづいた。飛燕とユリカが二人がかりでトワニングを担いできた。飛燕はニヤリと笑ってみせただけで、ユリカは「おかえりなしゃい、園長マしゆター！」と笑顔を弾はじけさせた。トワニングが血ち反へ吐どを吐はきながら「この馬ば鹿か者が……！」と怒ど鳴なると、トマトクンは「お互たがい様だろう」と短く応じた。三人が扉の向こうに姿を消して、ロム・フォウとアルファがやってきた。抗こう議ぎするように吠ほえたてるアルファの傍かたわらで、ロム・フォウは子供みたいにもじもじしている。トマトクンにしがみついていたサフィニアが、慌あわてて飛び離はなれた。ロム・フォウはぽつりと、「……ごめん」と言って、扉に飛びこんだ。アルファが追いかけて、サフィニアもトマトクンを何度も振り返りながら扉に駆けこんだ。トマトクンが大懺滅刀カタストロフアーを一いつ閃せんさせて、肉にく薄はくしようとしていた天使どもを撃げき滅めつする。マリアローズはとっさにしゃがんで、その姿勢のままトマトクンとうなずきかわした。「──あ、そうだ、エリオットは⁉」「私はここに残る」エリオットは帽子の庇ひさしを引っぱり下げて、口許をほころばせた。「この目で見たいものがまだあるのでね。縁えんがあれば、旅の途と中ちゆうでまた会おう」「……生きてる間に会える気はちょっとしないけど、いろいろありがと！」「どういたしまして」「行こう、トマト！」マリアローズは返事を聞かずにトマトクンの長すぎる髪の毛けをつかんで扉へと向かった。トマトクンはあらがわずについてきてくれた。扉に入る直前に後ろを見ると、ソオルと目があった。布を目ま深ぶかに被っているせいで、ソオルがどこを見ているのかなんてよくわからなかったけれど、そんな気がした。獄の獄へとマリアローズたちを導く前に、ソオルは言っていた。僕ほど君に便べん宜ぎを図はかってきた者はいないはずだよ。そしておそらく、これが最後の機会となる、と。あのときからソオルは知っていた。こうなることを覚かく悟ごしていたのだ。堕おちた神だというソオルが、本当にトマトクンのことを友だちだと思っているのか。マリアローズごときにはとても判断がつかない。でも、これが最後なんだ。二度と会うことはない。

「さよなら、ソオル……！」マリアローズはせめて別れを告げて、扉の向こう側へと身を投げた。

二巡月三十番日　城塞都市シャッコー

「──無様……！」吐き捨すてて、疾しつ駆くする。ウィリアム・タイガーボーンらにさんざん追いまわされ、ついに尻しつ尾ぽを巻いて逃げだした赤のレッド・伯爵テリオンが、断だん崖がい城じよう壁へきから飛び降りようとしている。そうはさせぬ。間もなく追いつく。それより早く赤の伯爵が振り向いて足を止めた。焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟を振る。「ぬぇい！　大Ｇ級極熱バーニン地獄グヘル……！」くる。劫火が巨きよ大だいな火柱を立たせる。かまうものか。そのまま突つっこむ。だが、猪ちよ突とつ猛もう進しんはしない。重心を宙に浮うかせる。ここにいて、ここにいない。進みながら進まず、止まることもない。片時も。常時変へん幻げんの足あし捌さばき、体捌き。東方芙フ煉レン山ザン歴レキ武ブ法ホウの開祖仙セン眩ゲン泰タイ師シはこれを、幽ユウ歩ホ、と称しようした。彼は爆ばく炎えんを渡る。それでも猛然と彼を焼こうとする炎は、魔ま導どう王おう〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーが遺のこした〝摩訶マハー鴉クロウー式スーツ〟が防いでくれる。彼はもう赤の伯爵の目と鼻の先に立っている。赤の伯爵が出来損ないの犬のような醜みにくい面つらをゆがめる。彼は「ふん……」と鼻で笑い、霊れい刀とう〝大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウ〟で斬りあげる。斬りおろす。薙ないで、斜ななめに斬りおろし、返す刀でやはり斜めに斬りあげる。「──〝散華サンゲ〟」「ぬ、お……」身体をバラバラにされ、頭を縦に両断されていながらもなお、辞世の詩うたくらいは詠よみかねない。しぶとさだけは褒ほめてやってもいいが、もう飽あいた。彼は大懺悔嘯を舞まわせて、赤の伯爵の頭部を細切れにした。彼の従者が駆けてくる。「主様マスター……！　ご無理を！　ああ、御お髪ぐしが……」先のほうが焦こげた髪をさわろうとする従者の手を「よせ」と払はらいのけ、彼は劫火に向かって手をのばした。大懺悔嘯を鞘さやに収めて、握にぎってみる。「感じるな。力を。この雑ざ魚こごときに猛もう威いをふるわせるのだから、たいした魔力だ。が──」彼は劫火を断崖城壁の下へと投げ捨てたい衝しよう動どうに駆られた。こらえて、赤の伯爵の死し骸がいから劫火の鞘をむしりとる。「持っておけ」と従者に劫火を押しつけ、彼の領ま地ちを見

まわした。

　シャッコーは荒あれ果てている。連日の空くう襲しゆうで建物の過半が破は壊かいされ、あちこちから煙けむりが立ちのぼり、火の手もあがっている。火災は今の今まで暴れまわっていた赤の伯爵だけの仕し業わざではない。ゲドゥルムを利用した焼しよう夷い弾だんの誤ご爆ばくも何件か起こった。断崖城壁上も、断崖城壁から南側斜しや面めんへと架かけられた橋の上も、橋上の各哨しよう戒かい塔とうも、死し屍し累るい々だ。兵士だけではない。女、子供、老人。非戦せん闘とう員の遺体も目につく。パンカロ・ファミリーを中心にして現在も非戦闘員を避ひ難なんさせているが、何しろ戦闘が一向にやまず、激戦地が刻一刻と移り変わる。この状じよう況きようでは順調に進むはずもない。正門はまだなんとか持ちこたえているが、時間の問題というよりも死守する意義がもはや失われつつある。

「無様な……」と彼は呟つぶやく。

　己おれは彼奴あやつらが帰ってくるまでこの場所を守り抜ぬくことすらできぬ無能者なのか。

　だとしても、だ。

　仮にそうだとしても、保もたせねばならん。

　彼は南側斜面に目をやる。山が、動いている。小さな山が、うごめき、わずかずつ移動して、いつ南側斜面から転げ落ちてくるか知れない。測量させてみたところ、幅はば八百五十メーテルほど。奥行きは不明。高さはもっとも高いところが約二百十メーテル。あれが滑かつ落らくしてきたら、超ちよう特大規模の山やま崩くずれだ。ツァール峡きよう谷こくは埋まい没ぼつする。シャッコーも同じだ。何もかも下した敷じきになって、押し潰つぶされる。跡あと形かたもなくなってしまう。

　それでも己おれは守らねばならんのだ。幾いく千人、幾万人殺されても、生き残っている者が一人でもいるかぎり、己おれは断じて捨てぬ。あの馬鹿者どもが戻もどってくる場所をなくすわけにはいかぬ。

　だが、どうすればいい、とは言わなかった。彼はただ奥歯を噛かみしめ、胸を張って踵きびすを返した。

「征ゆくぞ、クローディア」

「はい、主様マスター」

　どこへとも問わずに命果てるまで彼に従う者がいる。

　己おれは歩みを止めぬ。

　そのときまで、決して。

『薔ば薇らのマリア18．光の中できみが笑う今は遠くて』了

　あとがき

「ジーザス……」と僕は呟つぶやいた。そうとしか言いようがない。

　僕の足あし許もとには人間が転がっている。いや、かつて人間だったもの、と言ったほうがいいだろうか。つまり、死体だ。僕の足許で人が死んでいる。

　誤解しないでもらいたいので断っておくが、もちろん僕が殺したわけじゃない。僕が見つけたとき、彼女はすでに死んでいた。ちなみに言っておくが、僕は彼女を知らない。僕と彼女の間には何の関係もない。

　いったい、なんでこんなことに？

　誰だれでも思いそうなことを、僕は考える。それから、次にこう疑う。彼女は死体のように見えるが、じつは死んでいないのではないか？

　僕はしゃがんで、じっくり彼女を観察する。年のころは、二十代の半ばか、せいぜい三十歳といったところだろうか。目をつぶっているのでなんとも言えないが、鼻筋が通っていて、なかなか美人だ。美人だった、と言うべきか。顔色が悪い。生きている者の顔色じゃない。ぴくりともしないし、鼻のところに手を持っていってみると、呼気を感じないので、やっぱり死んでいるのだろう。

　そもそも、彼女の背中はひどいことになっている。おそらく、何度も刺されたのだろう。凶きよう器きは彼女の背中に突つき立てられている。

「オー、シット……」僕は自分の靴くつが彼女の血で濡ぬれていることに気づいて、しゃがんだまま少しあとずさった。床ゆかに敷しかれた絨じゆう毯たんに、血の池が広がっているのだ。おびただしい量の血が流れるような傷を、彼女は負わされた。自分でこんなことはできないだろうから、誰かの手によって。彼女は殺害されたのだ。でも、彼女は誰なのだろう？

　僕は部屋の中を見まわす。ベッドがあって、ライティングデスク

が設しつらえてあって、椅い子すが置いてある。大きくはない薄うす型がたテレビ。あれは冷蔵庫か。どうやら、どこかのホテルの一室のようだ。──どこかの。

　僕はライティングデスクの上の壁かべに塡はめこまれている鏡に目をやった。そこに誰かの姿が映っていた。誰だろう？　僕はまばたきをする。すると、鏡に映っている誰かもまばたきをした。あれは、もしかして、僕……？　これが、僕……？

　というわけで、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、たくさんの感謝と愛をこめて、今日のところは筆を置きます。またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

薔ば薇らのマリア

18．光ひかりの中なかできみが笑わらう今いまは遠とおくて

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア 18．光の中できみが笑う今は遠くて』平成25年4月1日初版発行

BOOK☆WALKER